

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第112集

八王子遺跡

2003

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター

序

八王子遺跡は、やきものの産地として知られる瀬戸市の北東部丘陵地帯に立地します。現在でも自然豊かな山あいの緩斜面に、縄文時代早期に遡る集落跡が確認されました。県内の主な早期の遺跡はこれまで海岸部の貝塚遺跡に集中しており、今回の調査で得られた多くの縄文土器、石鏃を中心とした石器類等は、立地の異なる山間部遺跡を代表する早期後葉の貴重な資料となりました。今後の縄文時代研究の益々の進展が期待されます。

また、瀬戸市は全国でも早くから施釉陶器生産が開始された地域であり、中世には唯一の施釉陶器生産地となり、室町から戦国期さらに江戸時代へと生産技術や生産体制を変化させ各時代の需要に応える多様な製品を生み出してきました。調査成果をみても中世、近世の陶磁器生産と人々との深い関わりに思いを致さずにはられません。

この度の発掘調査にご尽力いただきました関係者の皆様方にはここに厚く御礼を申し上げます。

埋蔵文化財の保存と愛護において、これまでの調査研究の成果を共有し、是非ともご活用くださるようお願い申し上げます。

財団法人 愛知県教育サービスセンター
理事長 井上銀治

例 言

1. 本書は愛知県瀬戸市八王子町に所在する八王子（はちおうじ）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は東海環状自動車道建設に伴う事前調査として国土交通省愛知国道工事事務所より愛知県教育委員会を通して委託を受けた（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査は1998年10月～2002年8月までの期間中、5次の調査を実施した。調査面積は試掘・本調査を併せた計5,700 + 20 m²である。
4. 発掘調査は以下の職員が担当し、調査補助員の協力を得た。
北村和宏（課長補佐・現豊田高等学校）、服部信博（課長補佐・現一宮興道高等学校）、小澤一弘（主任）、黒田哲生（主査・現五条高等学校）、浅井厚視（調査研究員・現海部教育事務所）、魚住英史（調査研究員・現瀬戸市立品野台小学校）、宇佐見 守（調査研究員・現春日井西高等学校）、織部匡久（調査研究員・現尾西高等学校）、鈴木 裕（調査研究員・現碧南市立西端小学校）、永井宏幸（調査研究員）、武部真木（同）
調査補助員 瀬戸かな子（現（株）イビソク）、町田義哉（現（株）国際航業）
5. 調査にあたっては、国土交通省愛知国道工事事務所、瀬戸市教育委員会、（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、瀬戸市歴史民俗資料館、愛知県教育委員会の各関係諸機関の協力を得た。
6. 調査記録および遺物整理等の作業は、山口典子（研究補助員）、中村たかみ、山田有美子、斉藤佳美、後藤恵里、木下ひろみ、三浦里美、伊藤ますみ（以上整理補助員）、中島 京（調査補助員）の協力を得た。
7. 出土遺物の写真撮影には名古屋市美術館 福岡 栄氏に依頼した。
8. 本書の執筆分担は目次および文末に記す通りであり、編集は武部が行った。
9. 本書をまとめるにあたり、次の諸氏に御指導、御助言をいただいた。記して感謝したい。
青木 修、伊藤正人、井上喜久男、上原真昭、江崎 守、奥 義次、遠部 慎、金子健一、金子直行、斎藤基生、榑崎彰一、藤澤良祐、増子康真、宮崎朝雄、山下勝年、矢野健一、渡辺 誠
10. 平成10,11,12年度遺構の空中撮影、測量および図化は（株）玉野コンサルタントが行った。また平成13,14年度の測量は（株）大增コンサルタントが行った。
11. 今回の調査に使用した方位・座標は国土交通省の定めた平面直角座標第Ⅶ系に基づくものであり、海拔座標はT.P.（東京湾平均海面高度）による。ただし、表記は旧測地系（日本測地系）とした。
12. 本書に関する出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターが、調査記録等は（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが管理・保管している。

本書で使用した遺構略記号

SD…溝 SK…土坑 ST…耕作地 SX…不明遺構 SE…井戸 P…柱穴 SB…住居

目 次

第1章 調査の概要	1
1. 調査の経緯・経過	1 (武部真木)
2. 地理的環境	3 (鬼頭剛)
3. 歴史的環境	6 (武部)
第2章 遺 構	10
1. 遺跡の立地と基本層序	10 (武部)
2. 縄文時代	15 (武部)
3. 平安・鎌倉・室町時代	20 (武部)
第3章 遺 物	33
1. 縄文時代土器	33 (武部)
2. 縄文時代石器	43 (川添和暁)
3. 古代～近世	52 (武部)
第4章 自然科学分析	61
1. 出土石器の理化学分析	61 ((株) 第四紀地質研究所)
2. 縄文土器の胎土分析	65 ((株) パリノ・サーヴェイ)
3. 縄文土器付着物の放射性炭素年代測定	71 ((株) パレオ・ラボ)
第5章 まとめ	73

◆遺構・遺物図版 図版 1～76

◆遺構・遺物写真 写真図版 1～31

*CD-ROM 収録データ

*報告書 PDF 版

*一覧表類 (遺構および掲載遺物)

*土器重鉍物分析サンプル (画像)

*近世陶磁器カウント集計表

挿図目次

第1図	調査範囲周辺図 (S=1/2,500)	第23図	98区SB14 (S=1/50)
第2図	調査区位置図 (S=1/1,250)	第24図	遺構出土縄文土器の時期別割合
第3図	遺跡周辺地質図	第25図	出土石器の組成
第4図	瀬戸市域の縄文遺跡の分布 (S=1/50,000)	第26図	剥片石器の石材利用率
第5図	周辺窯跡分布図 (S=1/2,500)	第27図	SK17出土遺物時期別割合
第6図	99A区西壁断面図 (縦S=1/50,横S=1/300)	第28図	中世出土遺物時期別破片数
第7図	98区北壁断面図 (縦S=1/50,横S=1/300)	第29図	重鉍物分析ダイアグラム
第8図	98区東壁断面図 (縦S=1/50,横S=1/300)	第30図	胎土中に含まれる重鉍物
第9図	00区西壁断面図 (縦S=1/50,横S=1/300)	第31図	出土石器(全体)の平面・垂直分布
第10図	98・99B区SB01 (S=1/30)	第32図	出土石器(打製石斧・磨製石斧)の平面・垂直分布
第11図	99A区SX03断面図 (S=1/30)	第33図	出土石器(台石・磨石・敲石)の平面・垂直分布
第12図	99A区茅山下層式土器出土状態図SU01 (S=1/10)・99A区炉跡検出状態SK10 (S=1/20)	第34図	出土石器(剥片石器)の平面・垂直分布
第13図	下層主要遺構平面図 (S=1/600)	第35図	縄文土器の平面・垂直分布(押型文・沈線文系土器)
第14図	古代以降の主要遺構平面図 (S=1/600)	第36図	縄文土器の平面・垂直分布(繊維土器)
第15図	98区古代以降の主要遺構平面図 (S=1/200)	第37図	縄文土器の平面・垂直分布(入海Ⅰ・Ⅱ式)
第16図	98区SK17上層出土状態図 (S=1/20)	第38図	縄文土器の平面・垂直分布(石山式～塩屋式)
第17図	98区SK17下層出土状態図 (S=1/20)	第39図	縄文土器の平面・垂直分布(前期・中期)
第18図	98区SK10・SK19平面・断面図 (S=1/20)	第40図	八王子遺跡周辺地籍図 (S=1/4,000)
第19図	98区SK40・SK45平面・断面図 (S=1/20)		
第20図	98区SB11 (S=1/50)		
第21図	98区SB12平面・断面図 (S=1/50)		
第22図	98区SB13 (S=1/50)		

表 目次

表1	工程表	表9	常滑産陶器総破片数
表2	底部形態分類表	表10	古瀬戸総破片数
表3	石器分類表	表11	須恵器・灰釉陶器総破片数
表4	主要石器石材一覧	表12	土師器類総破片数
表5	SK17出土遺物総破片数 (古瀬戸/山茶碗・小皿)	表13	科学分析表
表6	山茶碗総破片数	表14	試料重鉍物
表7	小皿総破片数	表15	放射性炭素年代測定結果
表8	片口鉢・片口小鉢総破片数	表16	時期別破片数

第1章 調査の概要

1. 調査の経緯・経過

瀬戸市八王子町は、瀬戸市街の北東部、矢田川の支流赤津川と木下川が流れる細長い盆地状の地形に位置する（第1図）。

遺跡は窯業地瀬戸の中でも特に近世段階の生産拠点として著名な赤津地区の東方にあたる。ここに愛知・岐阜・三重を結ぶ東海環状自動車道（通称 MAG ロード）建設が計画されるにあたり当該地域の試掘調査を行ったところ、縄文時代早期の土器や石器を含む包含層および中世の陶磁器片等多数の散布が確認された。遺跡を包蔵する範囲として本調査が決定し、国土交通省愛知国道工事事務所から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが、平成10,11,12,13,14年度の間に断続的に5次の調査を行った。調査面積は計5,700 m²である（表1）。

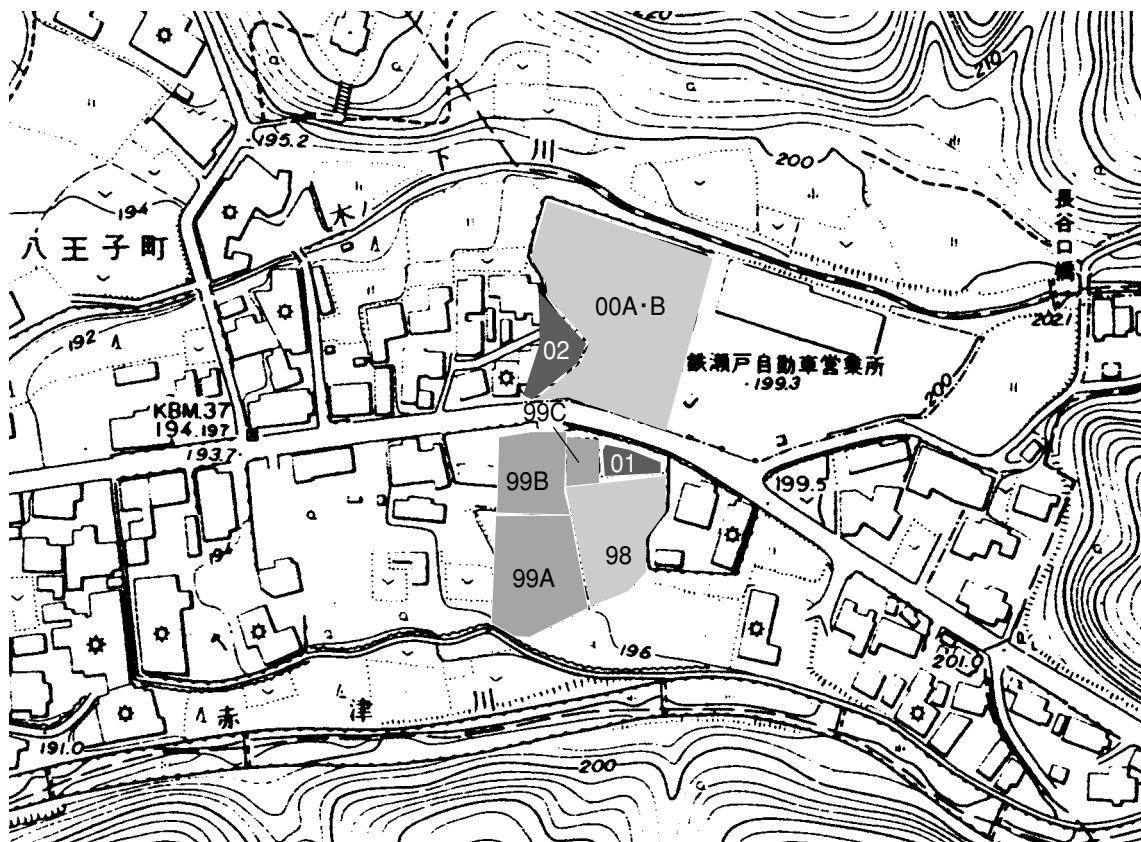
調査区現況は（株）名鉄バスの従業員寮および駐車場、宅地、耕作地等であった。調査範囲は主要地方道瀬戸・設楽線の南北両側にまたがる形となり、98年度は1調査区、99年度はA・B・Cの3調査区、00年度はA・Bの2調査区、01年度と02年度はそれぞれ1調査区を設定して調査を行った。（第2図）



第1図 調査範囲周辺図（S=1/2,500）

表1 調査工程表

調査区	面積 (㎡)	調査期間	担当者
IISHT 98	1,400 (+範囲確認20)	98.11～99.3	黒田・浅井・武部
IISHT 99A IISHT 99B IISHT 99C	1,500	00.1～00.3	北村・小澤・魚住
IISHT 00A IISHT 00B	2,400	00.5～00.8 00.11～00.12	北村・小澤・織部
IISHT 01	300	01.8	服部・鈴木裕・武部
IISHT 02	100	02.8	藤岡・宇佐見・永井宏
	5,700 (+20)		



第2図 調査区位置図 (S=1/1,250)

2. 瀬戸市八王子遺跡周辺の地形・地質

瀬戸市八王子遺跡は愛知県の北部、瀬戸市八王子町に位置する（第3・4図）。本地域は濃尾平野を取り囲む丘陵地と山地の東端にあたり、木曽山脈の隆起帯の南西延長部に相当し、第四紀にも隆起運動が継続していたところである。調査地点の南東約3.8kmには標高629mの猿投山が、北東約6.0kmの愛知県と岐阜県との県境には標高701mの三国山が連なる。猿投山と三国山との間には、北東-南西方向に愛知県内では最も大きい活断層である延長24kmの猿投山北断層が走り、三国山と猿投山とを分けている（岡田, 1979）。

三国山と猿投山とを結ぶ南北の山陵は、名古屋市を流れる主要河川である庄内川・矢田川の分水嶺で、さらに南西側の知多半島までのびている。この猿投山から知多半島とを結ぶ北東-南西方向の隆起帯は猿投-知多上昇帯（桑原, 1968）とよばれる。特に三国山-猿投山は周辺に広がる三河高原、あるいは標高数10mから100m前後の尾張丘陵よりも孤立した高まりを形成している。この上昇帯の南東端は猿投-境川断層系（桑原, 1968）で、さらに南東側は岡崎平野をふくむ猿投-碧海盆地へとつづく（桑原, 1968）。

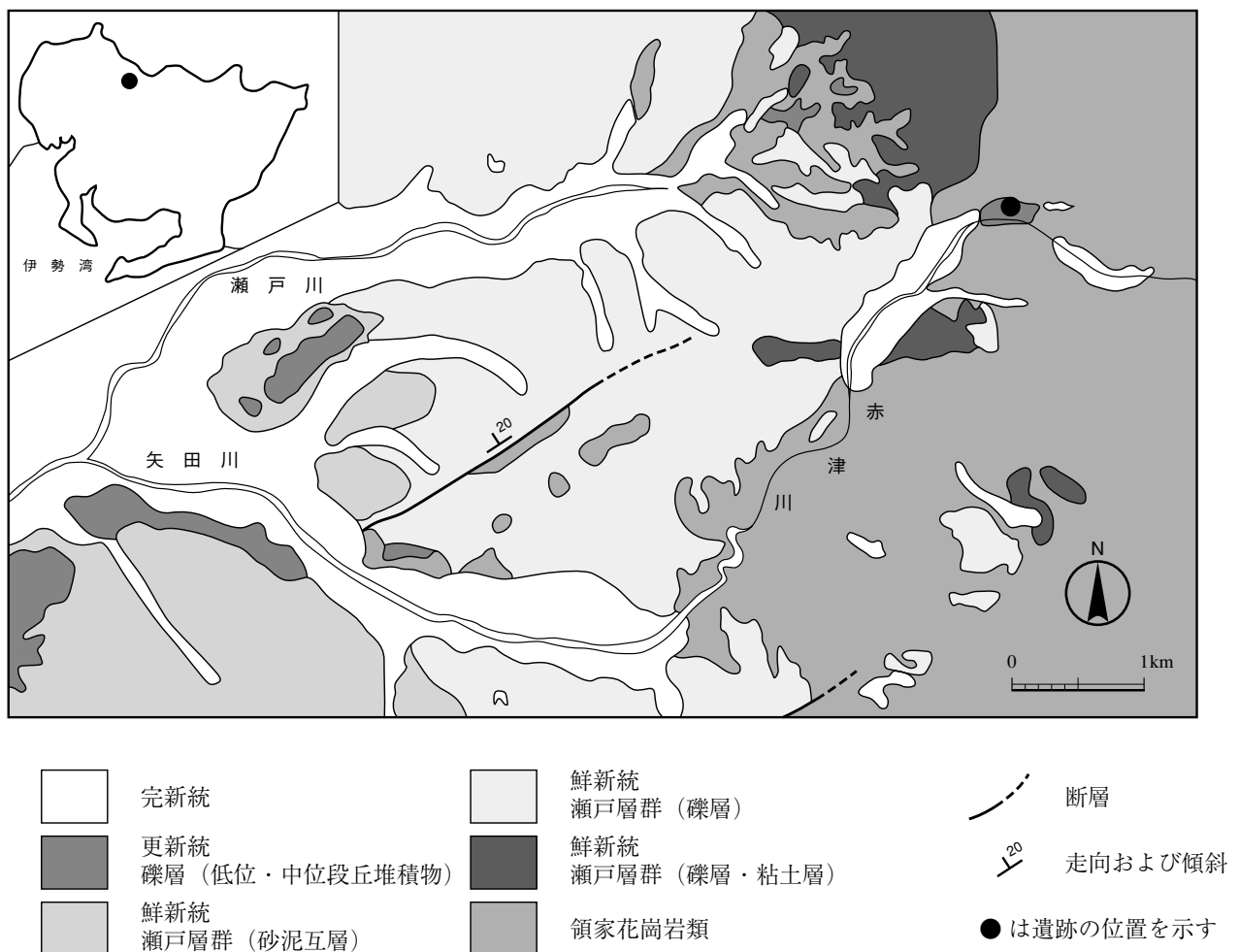
調査地の南約100mには矢田川の最上流部である赤津川が流れる（第3図）。赤津川の北側には瀬戸市八王子町を通る小河川（木下川）が東から西へ流下する。調査地点はこの小河川の左岸、標高約200mに位置する。小河川は西側約800mで赤津川と合流する。赤津川ではマサ化した花崗岩類を侵食し、谷頭部に近い谷底が堆積範囲の狭長な谷底平野となっている場合が多い。赤津川は約3.8km西方で矢田川に合流する。合流地点の約5.0km西方では瀬戸川と、さらに約16km西方では庄内川と収束し、約11km南方で伊勢湾へと注ぐ。

ところで、濃尾平野から猿投山にいたる濃尾平野の東側地域は濃尾傾動地塊（松沢・桑原, 1964）ともよばれ、第四紀以後、西に傾動している。傾動地塊は岐阜県と三重県を北西-南東方向に走る養老-伊勢湾断層によって南西縁を、名古屋港南の天白河口断層およびその北東延長の断層によって南東縁をそれぞれ画される。傾動地塊の地形は西から沖積低地、台地（段丘など）、丘陵地、山地と配列しており、西から東へ向かって高くなる。この中で沖積低地は濃尾平野、丘陵は尾張丘陵あるいは名古屋東部丘陵などとよばれる。特に、調査地点を含めた東側を三国山・猿投山で限られ、北側を庄内川低地、南側は矢田川低地で挟まれた丘陵地を瀬戸丘陵とよぶ。調査地点はちょうど三国山-猿投山と瀬戸丘陵との境界にあたる。傾動地塊全体は中生代白亜紀～新生代古第三紀の花崗岩類と美濃帯の中・古生層を基盤とし、新生代第三紀中新世～鮮新世の東海層群および第四系で構成される。第四系は年代の古いものから丘陵～高位段丘を構成する中部更新統、おもに中・低位段丘を構成する上部更新統、おもに沖積平野を構成する上部更新統最上部～完新統に分けられる。

調査地周辺の地質を概観すると、東側の広範囲を中生代白亜紀～新生代古第三紀花崗岩類が占める（仲井, 1970; Nakai, 1976; 仲井, 1982）。これと同じ花崗岩類は中部地方から瀬戸内海および中国地方までの広い範囲で見られる。中生代ジュラ紀の付加帯をつらぬく花崗岩類の分布は、日本列島における白亜紀のマグマ活動の激しさをもの語る。中央構造線で分けられる太平洋側を外帯、大陸側を内帯とよぶが、調査地の東側で見られる花崗岩類は内帯の最も外側を構成する領家帯の花崗岩類である。調査地の西側の広い範囲で、新

生代第三紀中新世後期から第四紀更新世前期にかけて陸水域に堆積した未固結の礫・砂・シルトなどからなる地層群が広く分布している。これらは東海湖（竹原ほか，1961）とよばれる堆積盆地に堆積した一連の地層と考えられ，まとめて東海層群（石田・横山，1969；中山・陶土団体研究グループ，1989）とよばれている。このうち、名古屋市東部から瀬戸市、岐阜県の東濃地方にかけて分布しているものは瀬戸層群（横山，1950）、知多半島では常滑層群（小瀬，1929）、伊勢湾西岸では庵芸層群（小川，1919，1920）と地域ごとに分けて異なる地層名でよばれることもある。愛知県瀬戸市および岐阜県東濃地域は、世界的にも類をみないほどの高い可塑性をもつ窯業原料用の耐火粘土を産する非金属鉱床として有名である。この耐火粘土は瀬戸層群中に含まれ、周囲に広く分布する花崗岩類などが風化してできた粘土が堆積したものである。第四系更新統は丘陵地の端部などにわずかにみられる。第四系完新統はおもに矢田川および瀬戸川の河川沿いに分布し、赤津川にもわずかな分布がみられる。瀬戸市八王子遺跡では、領家帯の花崗岩類に囲まれた低位・中位段丘堆積物である礫層が局所的に分布している（第3図）。

（鬼頭 剛）



第3図 遺跡周辺の地質

文献

- 石田志郎・横山卓雄, 1969, 近畿・東海地方の鮮新・更新統火山灰層序および古地理・構造発達史を中心とした諸問題 - 近畿地方の新生代層の研究その 10-, 第四紀研究, 8, 31-43.
- 糸魚川淳二, 1983, 「表層地質」, 愛知県土地分類基本調査 - 岐阜・美濃加茂・瀬戸 -, 愛知県企画部土地利用調整課, 44-61.
- 小牧団研グループ, 1971, 小牧市周辺の矢田川累層・瀬戸層群の研究その 1, 中部地方の鮮新統および最新統 (竹原平一教授記念論文集), 69-82.
- 桑原 徹, 1968, 濃尾盆地と傾動運動地塊, 第四紀研究, 7, 235-247.
- 横山次郎, 1950, 中部地方, 朝倉書店.
- 松沢 勲・桑原 徹, 1964, 濃尾平野における地盤沈下の地質学的研究, 伊勢湾台風災害の調査研究報告, 名古屋大学災害科学調査会, 40-59.
- 仲井 豊, 1970, 愛知県三河地方の花崗岩類, 地球科学, 24, 139-145.
- Nakai, Y., 1976, Petrographical and petrochemical studies of the Ryoke granites in the Mikawa-Tono district, central Japan, Bull. Aichi Univ. Educ., (Nat. Sci.), 25, 97-112.
- 仲井 豊, 1982, 中部地方領家帯の武節花崗岩, 日本地質学会第 89 年学術大会講演要旨, 404.
- 中山勝博・陶土団体研究グループ, 1989, 瀬戸層群の堆積盆地, 地球科学, 43, 392-401.
- 小川琢治, 1919, 1920, 伊勢の第三紀層に就いて, 島津標本時報, 6-7.
- 岡田篤正, 1979, 愛知県と周辺地域における活断層と歴史地震 - 愛知県の地形・地質 (その 4) 「活断層」, 愛知県防災会議地震部会, 122p.
- 小瀬知常, 1929, 知多半島の地形及地質, 地質雑, 41, 338-345.
- 竹原平一・森下 晶・糸魚川淳二, 1961, 名古屋港の地盤, 名古屋港管理組合, 名古屋.

3. 歴史的環境—周辺遺跡の分布—

瀬戸市域の縄文遺跡

八王子遺跡の所在する瀬戸市域の縄文時代の遺跡は、確認されたもので約30ヶ所を数える（第4図）。瀬戸市域周辺の地形は矢田川水系の支流が丘陵を開析する標高100～300mの谷や盆地地形を含む丘陵地帯となっており、縄文時代の遺跡は主に東部山地に近い河川上流域、すなわち水野川と矢田川流域に集中して分布する。

水野川流域では品野台丘陵周辺および支流の鳥原川右岸の一带にかけて、旧石器時代から縄文晩期まで断続的に分布がみられる。また、矢田川中流域の左岸に立地する遺跡群は、後期中葉以降に活動を開始するようである。矢田川の支流である赤津川、木下川が近接して流れる辺りが八王子遺跡の立地する地域であるが、南側に丘陵が迫る地形にあり遺跡は主に右岸の段丘上に立地している。

岩屋堂遺跡（瀬戸市岩屋町）

約2km先で水野川に合流する鳥原川の右岸に立地する。標高は210m前後、鳥原川との比高差は約3.5mを測る。昭和32年の豪雨被害による川岸改修の際に、故水野収氏によって丘陵斜面で土器および石器が採集された。押型文土器は23点（山形文、格子目文、菱形格子目文）、捺糸文・回転縄文4点がある。石器は、石鏃2点（黒曜石または水晶）、石匙1点（チャート）、剥片2点など。

* 青木 修 1998「瀬戸市域の縄文遺跡」瀬戸市埋蔵文化財センター紀要6

境遺跡（瀬戸市品野町7丁目）

鳥原遺跡から北西900m、鳥原川右岸の段丘縁辺部に立地する。標高175m前後。現在は品野中部遺跡内に含まれ遺跡台帳に登録されている。昭和33年に考土サークルにより試掘調査が行われた。土器は中期中葉の時期に限定され、その他石鏃3点が採取されている。

* 青木 1998

鳥原遺跡（瀬戸市鳥原町）

岩屋堂遺跡から北西約350m、標高は195m前後。中期最末期の深鉢形土器3個体分と石匙1点が採集されている。

* 青木 1998

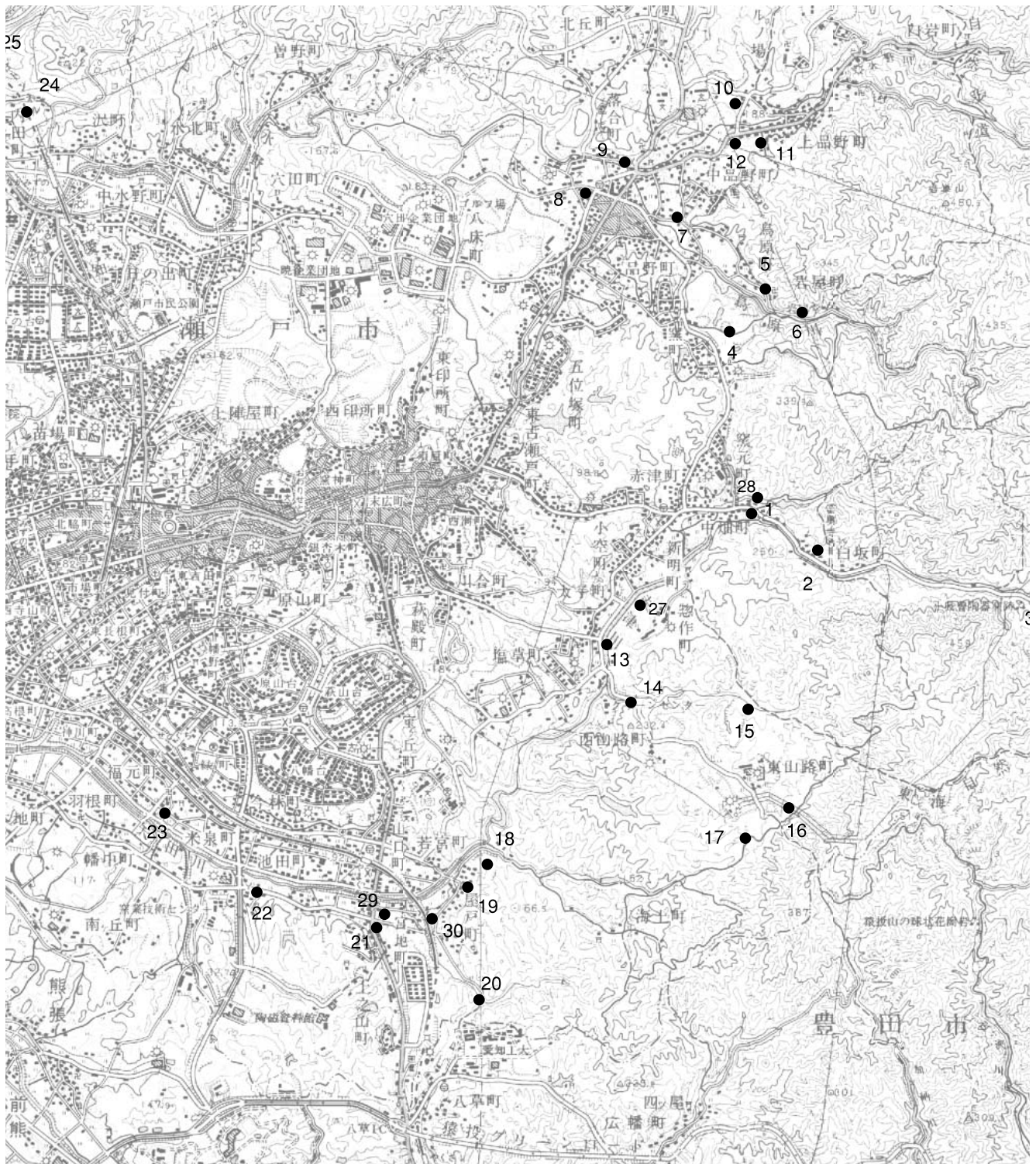
針原遺跡（瀬戸市針原町）

鳥原川と南鳥原川の合流地点から約1.2kmの丘陵中腹の傾斜地、標高は230m。土砂採掘工事のため遺跡は滅失。昭和37年考土サークルによる調査が行われた。縄文土器は早期前葉押型文（神宮寺式）、早期中葉～後葉条痕文系土器群では茅山下層式（1点）、粕畑式（2点）、塩屋上層式（4点）。前期前葉では清水ノ上Ⅰ式（1点）・Ⅱ式（10点）、前期中葉清水ノ上Ⅲ式に並行するものが遺跡の主体をなす。中期後葉、後期、晩期も僅かに存在する。石器では石鏃が全体の87%を占め、スクレーパー、石匙、磨石がある（弥生土器に伴うものも含まれる）。

* 青木 1998

品野西遺跡（品野町4丁目・6丁目）

水野川左岸の沖積地および河岸段丘上に展開する。平成4・5年度の（財）瀬戸市埋蔵文化財センターによる調査地点では、標高160m前後の段丘縁辺部で草創期石器群と中期



- | | | | | | |
|-----------|------------|-----------|-----------|----------|------------|
| 1.八王子遺跡 | 6.岩屋堂遺跡 | 11.中洞遺跡 | 16.山路縄文遺跡 | 21.大坪遺跡 | 26.上半田川遺跡 |
| 2.白坂雲興寺遺跡 | 7.境井遺跡 | 12.上品野遺跡 | 17.大平縄文遺跡 | 22.大六遺跡 | 27.惣作・鐘場遺跡 |
| 3.東大演習林遺跡 | 8.品野西遺跡 | 13.太子縄文遺跡 | 18.屋戸遺跡 | 23.西米泉遺跡 | 28.長谷口遺跡 |
| 4.針原遺跡 | 9.落合橋南遺跡 | 14.太子遺跡 | 19.屋戸遺跡 2 | 24.四ッ谷遺跡 | 29.大坪西遺跡 |
| 5.鳥原遺跡 | 10.上品野蟹川遺跡 | 15.山路遺跡 | 20.吉田奥遺跡 | 25.岩割瀬遺跡 | 30.吉野遺跡 |

第4図 瀬戸市域の縄文遺跡の分布 (S=1/50,000)

末葉から晩期前半の集石遺構等が地点を接して確認されている。草創期石器群は散布状況と小剥片の有無などから、製作跡ではなく石器保管場所としての性格が想定された。出土土器は縄文早期後葉の粕畑式、前期前葉北白川下層Ⅱa式併行、中期末葉の咲畑式、後期前半中津式、後期末葉の宮滝式の影響を受けたもの、晩期初頭寺津式などが出土している。

* 岡本直久ほか 1997『品野西遺跡』瀬戸市埋蔵文化財センター

白坂雲興寺遺跡（瀬戸市白坂町地内）

八王子遺跡の東方約500mの地点が調査された。遺跡は南北から丘陵がせまりその間を流れる赤津川上流の右岸に立地する。上層は中世の土坑、ピット、溝が検出され、地山直上では縄文時代の土坑、ピット、溝、集石遺構が確認された。縄文土器は包含層中から早期後半、中期初頭と末葉、後期初頭、晩期前半が出土している。

* 金子健一ほか 1993『白坂雲興寺遺跡』瀬戸市埋蔵文化財センター

長谷口遺跡（瀬戸市長谷口町地内）

八王子遺跡とはちょうど北側、木下川を隔てた対岸に位置する、南向きの緩斜面に立地している。平成13,14年度に当埋蔵文化財センターが調査を行った。縄文時代早期後葉、中期後葉、弥生時代、平安時代、近世の複合遺跡である。縄文早期後葉～末葉では入海Ⅰ・Ⅱ式が主体となり、若干の断絶のあと中期末、弥生時代中期後葉～後期前半の遺構・遺物が検出されている。早期後半～中期の土坑、中期末の竪穴住居2棟のほか中期後半の集石炉（1基）は径1.25mの円形状の掘込みであり、底面に被熱した多数の礫が検出された。

* 愛知県埋蔵文化財センター年報2001,2003

惣作・鐘場遺跡（瀬戸市惣作町・鐘場町地内）

八王子遺跡の南側を流れる赤津川を下った左岸域にあたり、標高165～180mの丘陵からやや離れた比較的広い段丘平坦地上に立地している。平成12年度より当埋蔵文化財センターが調査を行っている。後期旧石器時代終末～縄文時代草創期、縄文時代中期、弥生時代末～古墳時代前期、飛鳥時代、平安時代前期、中世、近世の複合遺跡である。調査範囲は270m×約1kmにも及び、各時期の複数の集落遺跡を含むものと思われる。調査範囲西方では縄文時代中期を主体とした竪穴住居跡8棟の他、有舌尖頭器、木葉形尖頭器、搔器などが出土している。

* 愛知県埋蔵文化財センター年報2001,2002,2003

吉野遺跡（瀬戸市屋戸町地内）

矢田川左岸の沖積地で、矢田川にそそぐ吉田川の右岸にあたる。平成12,13,14年度県埋蔵文化財センターが、平成14年度（財）瀬戸市埋蔵文化財センターが調査を行い、自然流路では堰と思われる構築物を検出した。自然流路をさけた微高地上に縄文時代中期後葉～後期前葉を中心とする遺構が展開する。土坑では土器が埋設されたもの、石皿など大型の石製品が集積したものが確認された。

* 愛知県埋蔵文化財センター年報2001,2002,2003

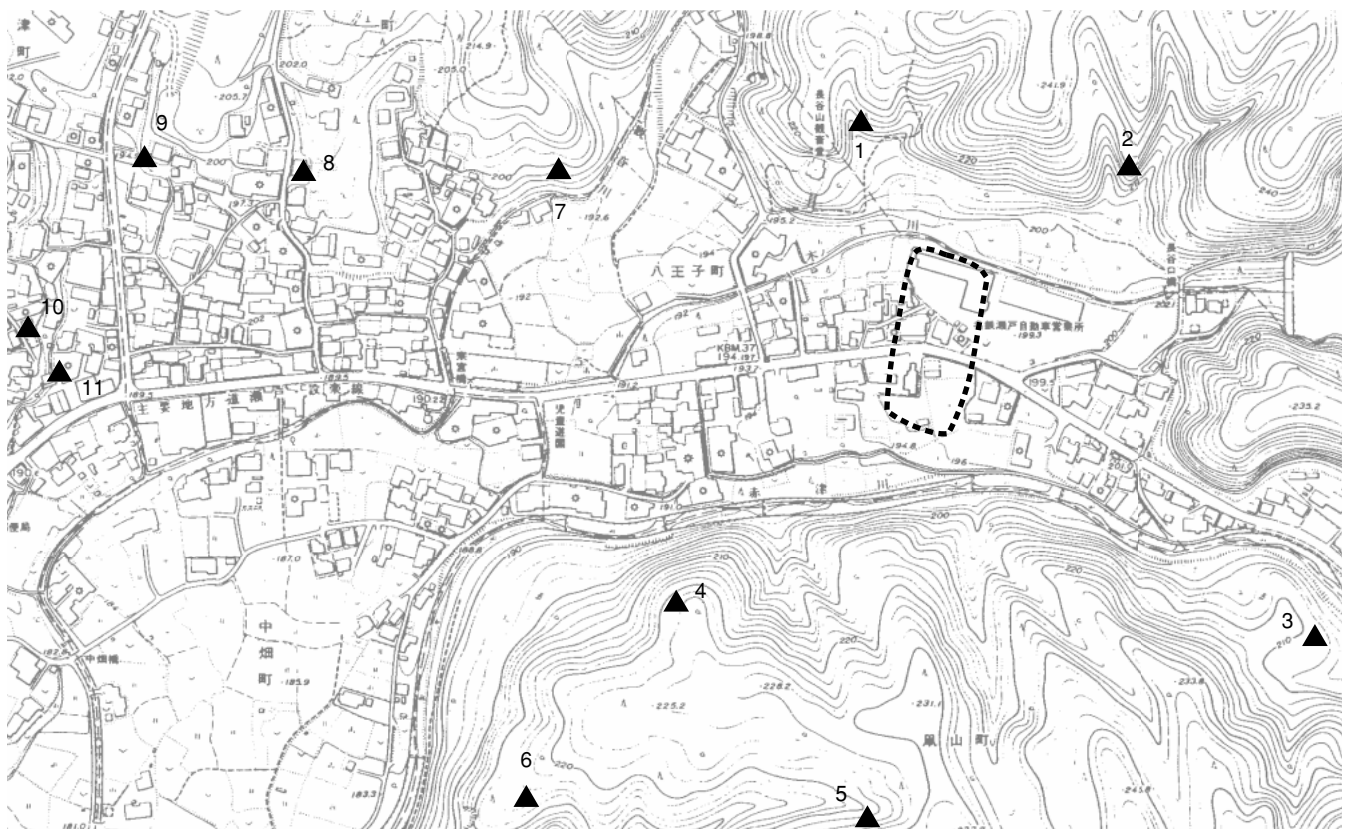
大坪西遺跡（瀬戸市大坪町地内）

矢田川左岸の沖積地で、吉田川と薬師川に挟まれた部分に立地し、縄文時代後期竪穴住居が見つかった大坪遺跡の北側にあたる。平成12,13年度に当埋蔵文化財センターが調査を行い、縄文時代後期の土器集積遺構4基、土坑2基、古墳時代の水田畦畔、自然流路などが検出された。

* 愛知県埋蔵文化財センター年報2001,2002

周辺の古窯址 遺跡の西方には近世の代表的な窯業地のひとつであった「赤津」の集落がある。集落の近辺には、主に15世紀末葉以降の大窯と近世連房式登窯が分布しており、例外的に瓶子窯跡のような集落を離れた山間部に立地する窯跡も存在する（第5図）。また、遺跡より北側と東側の一帯、集落の疎らな山間部には、古瀬戸中期～後期前半段階、14世紀代の施釉陶器・山茶碗を焼成した窯跡が多数分布している。遺跡北東の木下川沿いの丘陵には神事池窯跡、赤津長根遺跡、木下川窯跡や、15世紀代の長谷口A窯跡などがあり、また遺跡東方赤津川沿いの丘陵には神田東窯跡、城ヶ根口窯跡、城ヶ根口東窯跡、呉窯跡ほか多数が分布している。

絵図等にみられる近世段階の道は、赤津集落から赤津川に沿って八王子遺跡のあたりを通り、東方の雲興寺を経るルートが表現されている。これが三州足助、小原へと抜ける道で主要な交通路となっていたと推定される。現在でも遺跡のすぐ東側から曹洞宗の寺院、白坂雲興寺の境内地となっているが、創建が応永10（1403）年に遡るこの古刹は、かつて近在に限らず広く信仰の拠点としてあり、少なくとも15世紀代には活発な往来があったものと思われる。



- | | | |
|----------------|------------------|-------------------|
| 1 長谷口B窯跡（19世紀） | 5 鳳山窯跡（山茶碗・古瀬戸） | 9 窯元B窯跡（19世紀） |
| 2 長谷口C窯跡（19世紀） | 6 瓶子窯跡（大窯・連房式登窯） | 10 由九郎窯跡（17～19世紀） |
| 3 鳳山B窯跡（古瀬戸） | 7 白山社窯跡（大窯） | 11 赤津B窯跡（大窯） |
| 4 鳳山A窯跡（大窯） | 8 窯元A窯跡（連房式登窯） | |

第5図 周辺窯跡分布図（S=1/2,500）

第2章 遺構

1. 遺跡の立地と基本層序

調査範囲の中央にあたる最も標高の高い部分を東西方向の県道が通るため、これを境に北側の木下川にかけての範囲（00A・B区、02区）と県道以南の赤津川側の緩斜面（98区、99A・B・C区、01区）に大きく分けられる（第2図）。それぞれについてまず概要を示す。

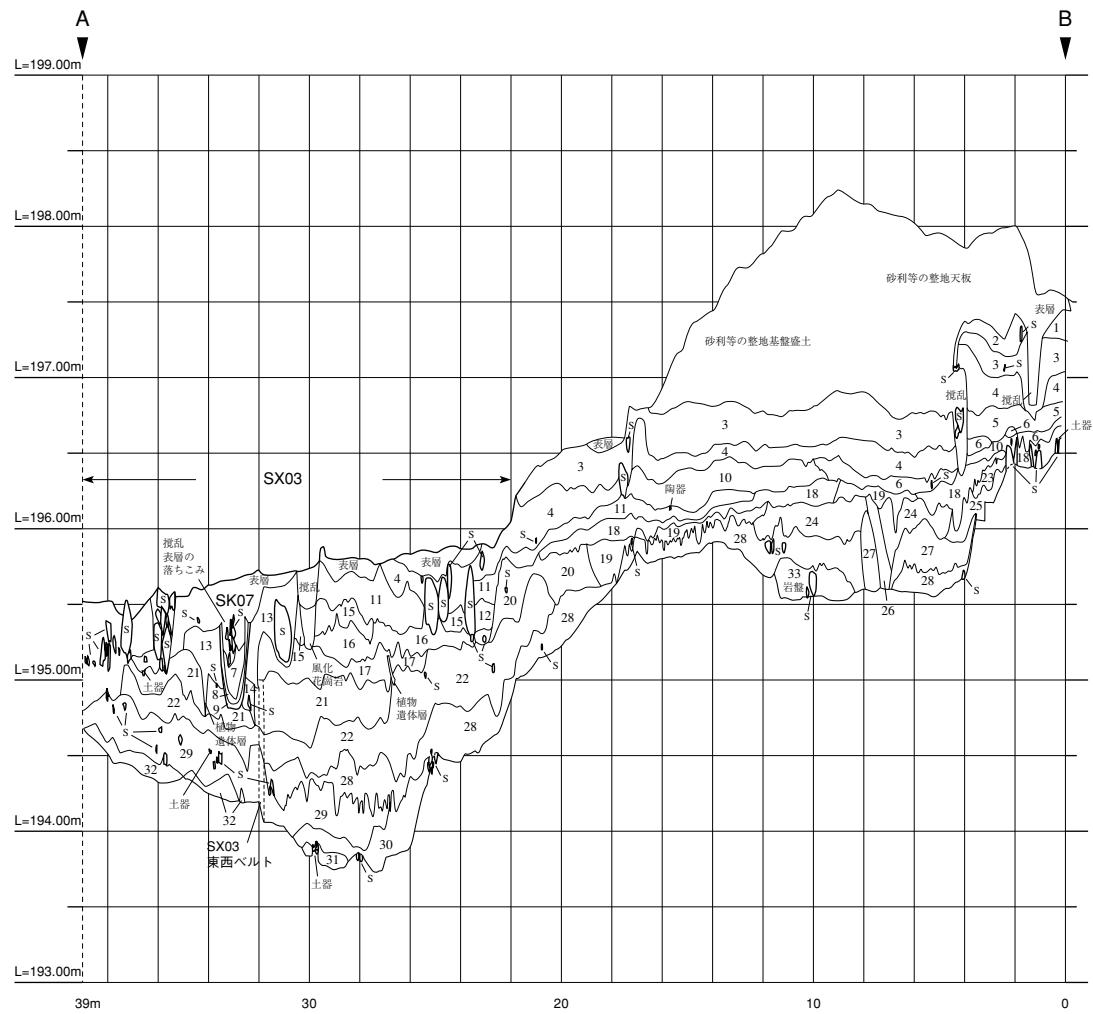
県道以南の調査区、99区北半（99B・99C）～99A区北側にかけての現況地形は平坦であったが、実際には約1.2mの比高差をもって西側に落ち込む地形であった部分を客土により埋立て造成したものであった。この地点の包含層は比較的薄く層厚20cm程度であり、大小の花崗岩礫が大量に含まれる。99区南半にあたる99Aは98区から連続する緩斜面が伸び、98区と同様に水田として利用されていたために大きく削平を受けている。平坦面の包含層は20～40cm程度であったが、南西端の谷状の落込み（第11図 99A区SX03）の下層は大きな改変を免れ、ここで一括性の高い良好な資料を得ることができた。

99C区東側の01区は県道に面する一角であり宅地に利用されていた。建物周囲の擁壁部分は自然地形の高まりを利用して造成していたため、擁壁内側では地山が比較的高く残存していた。検出面では近世陶磁器を含む大型の廃棄土坑、小土坑などを確認した。

01区南側に接する98区は、調査区全体が南西方向に下る緩斜面であり、調査前現況では3段の水田区画に利用されていた。包含層は暗灰色～黒色の砂混じりシルト層であり、北東隅で層厚約30cmと最も厚く北壁中央付近では20cmあるが、水田最下段の調査区南端付近では残存しておらず、水田耕作土および床土層直下が砂質の地山面に達する（第7図、第8図）。

県道以北の道路に近接した範囲は、（株）名鉄瀬戸自動車営業所および社員寮、駐車場、宅地となっており、客土および表土を除去すると花崗岩礫が混じる黄灰色シルトの地山面に達した。00A区では県道に面した部分に150m²程度の平坦面が形成されていたが、大きく削平を受けており、近代以前の遺構は確認されなかった。01区と同様、県道付近の元々の標高は高く、北東側の丘陵部分に連続していたと予想される。00A区平坦面から北は約1.5mの比高差をもって木下川方向に落込み、谷状の地形となる（第9図 00A区・02区）。谷底部分に上水道管が通っており、これらは戦前に埋設されたという。

00B区谷底付近から現木下川にかけては河川流路による侵食と堆積が顕著にみられ、地山面には狭いテラス状の段差がみられる。縄文時代遺物包含層は谷底に堆積した暗褐色の粘質土層および河川堆積層である暗灰色細粒砂層であり、層厚は10～30cmを測る。試掘調査の際にここで前期の石匙（チャート）1点（182）を検出している。



表層、碎石、砂利等の整地天板及び攪乱

1. 2.5Y4/2 暗灰黄色土 砂質細粒砂
しまりなし 径1～3mmの石を含む : 水田耕作土 (北壁第1層)
2. 2.5Y3/2 黒褐色土 細粒砂
少々粘性あり 径1～3mmの石を含む : 水田耕作土
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土 細粒砂
しまりあり 径1～3mmの石を含む : 水田耕作土 (北壁第2層)
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 細粒砂
しまりあり 径1～3mmの石を含む : 水田耕作土 (北壁第3層)
5. 10YR4/2 灰黄褐色土 細粒砂
しまりあり 径1～3mmの石を含む : (北壁第5層)
6. 10YR2/3 黒褐色土～10YR3/4 暗褐色土 細粒砂
沈鉄屑を含む : (北壁第6層)
7. 10YR5/8 黄褐色土 中粒砂
しまりなし 少々粘性あり 径2～5mmの石を含む : SK07への落ちこみ土
8. 10YR5/8 黄褐色土に10YR4/4 褐色土が混じる 中粒砂
しまりなし 少々粘性あり 径2～5mmの石を含む : SK07の上層面
9. 2.5Y4/4 オリーブ褐色土に10YR4/4 褐色土が混じる 中粒砂
しまりなし 少々粘性あり 径2～5mmの石を含む : SK07の下層面
10. 7.5YR3/2 黒褐色土 細粒砂
しまりあり 径2～3mmの石を含む
11. 7.5YR2/2 黒褐色土 細粒砂
ややしまりあり
12. 7.5YR2/2 黒褐色土～10YR2/2 黒褐色土 細粒砂
径3～5mmの石を含む
13. 10YR3/1 黒褐色土に10YR4/4 褐色土が混じる 細粒砂
表層からの攪乱土混じる
14. 7.5YR3/1 黒褐色土、10YR2/2 黒褐色土が混じる 細粒砂
径2～5mmの石を含む
15. 10YR5/3 におい黄褐色土 中粒砂
砂質でしまりなし 径2～5mmの石を含む
長15～20cm・幅3～5cm程の植物遺体層 (第27層の風倒木と同様) を含む
16. 10YR5/4 におい黄褐色土に10YR3/2 黒褐色土がブロック状に混じる
砂質細粒砂 しまりなし
17. 10YR5/6 黄褐色土に10YR2/1 黒色土が混じる 砂質細粒砂
しまりなし

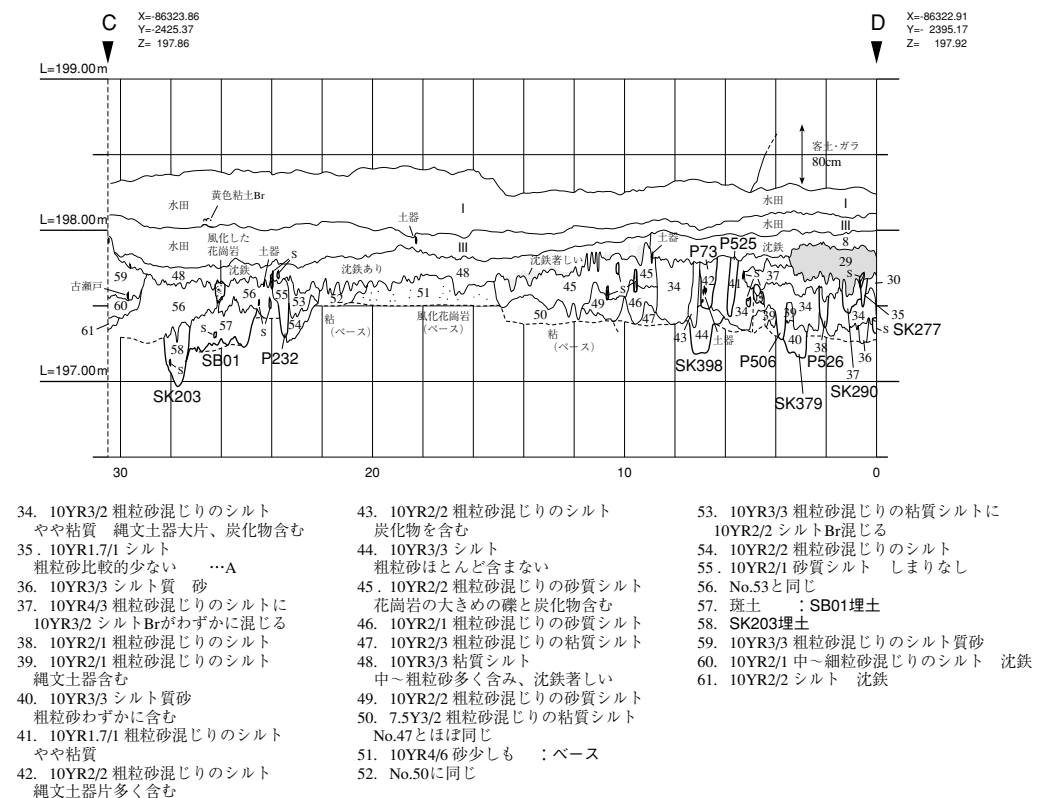
18. 7.5YR2/1 黒色土 細粒砂
しまりあり 少々粘性あり 径1～3mmの石を含む : (北壁第8層)
19. 10YR2/3 黒褐色土に10YR5/6 黄褐色土が混じる 砂質細粒砂
径1～3mmの石を含む
20. 10YR2/2 黒褐色土に10YR3/3 暗褐色土が混じる 砂質細粒砂
径1～3mm・2～5mmの石を含む
21. 10YR2/1 黒色土 砂質細粒砂
細い根を含む
22. 10YR2/1 黒色土～10YR1.7/1 黒色土 砂質細粒砂
径1～2mmの石を含む 西壁中最も黒い土
23. 10YR3/3 暗褐色土に10YR2/2 黒褐色土が混じる 砂質細粒砂
しまりなし 径1～3mmの石を含む
24. 10YR5/6 黄褐色土と10YR2/2 黒褐色土の斑土 砂質細粒砂
しまりなし 径2～3mmの石を多く含む
25. 10YR4/6 褐色土に10YR2/2 黒褐色土が混じる 砂質細粒砂
しまりなし 径1～3mmの石を含む
26. 10YR5/4 におい黄褐色土に10YR4/4 褐色土が斑土状に入る 砂質細粒砂
しまりなし 径1～3mmの石を含む
27. 10YR2/3 黒褐色土に10YR3/3 暗褐色土が混じる
10YR5/6 黄褐色土も一部斑土状に入る 砂質細粒砂
径1～2mmの石を含む 風倒木
28. 10YR5/4 におい黄褐色土～10YR5/6 黄褐色土 砂質細粒砂
しまりなし
29. 10YR4/4 褐色土と10YR5/6 黄褐色土の斑土に10YR2/2 黒褐色土が混じる
砂質細粒砂
30. 10YR4/4 褐色土に10YR3/2 黒褐色土が混じる 砂質細粒砂
径2～5mmの石を含む
31. 10YR3/3 暗褐色土に10YR3/1 黒褐色土が混じる 細粒砂
径2～5mmの石を含む
32. 10YR5/3 におい黄褐色土に10YR4/4 褐色土が混じる 砂質細粒砂
しまりなし
33. 風化花崗岩の岩盤層

第 6 図 99A 区西壁断面図 (縦 S=1/50、横 S=1/300)

基本層序は 98,99 区の堆積状況を元に概ね以下のように分けられる。

- 第 1 層 灰褐色シルト層、沈鉄集積層
(水田耕作土および床土)
- 第 2 層 暗灰色砂質シルト層 (炭化物・焼土含む)
(98 区検出 II 中世以降の包含層 / 第 7・8 図 18,22,29 層)
- 第 3 層 暗灰褐色～黒色のシルト～細粒砂層
(98 区検出 III・IV・V 縄文時代の包含層)
- 第 4 層 黄灰色シルト～砂質シルト層 (細礫混じる)
(基盤層)

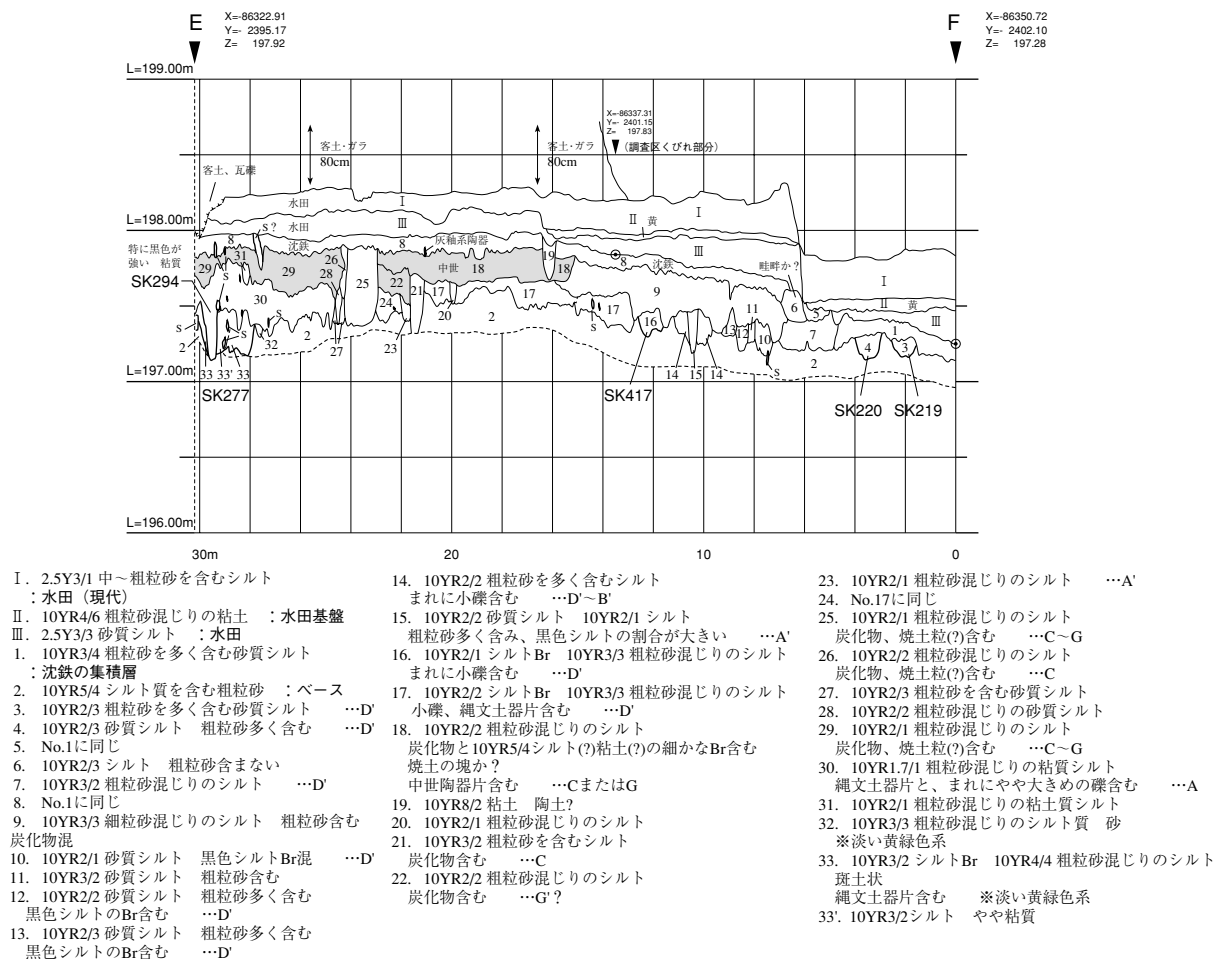
このうち第 2 層の堆積は 98 区の北東端から灰釉瓶子を伴う土坑 (SK17) 周辺にかけての範囲に部分的に確認できたのみであり、最も厚いところで 30cm である。これを埋土に含む遺構は黒色土にあって明瞭に判別でき、多くは中世の施釉陶器が多く出土した。第 3 層は 98・99 区ほぼ全体に安定してみられた黒色土層 (シルト～細粒砂) をさす。第 IV 層は花崗岩礫を多く含む通称サバ土と呼ばれる風化花崗岩の砂層からなり、標高の高い県道付



第 7 図 98 区北壁断面図 (縦 S=1/50、横 S=1/300)

近ではシルト層となる。なお、部分的であるが第3層と第4層の間に黒色土～地山の漸移層が認められた。

なお、98区では基盤のシルトまたは砂層に達するまで包含層である黒色土層をほぼ水平に掘り下げる作業を「検出Ⅲ」とし、自然地形の凹みに埋積した黒色土の掘削を「検出Ⅳ」とし、その下の黒色土～地山の漸移層を「検出Ⅴ」として出土遺物を取上げた。このうち、「検出Ⅲ」は黒色土層の厚さにより調査区中央より北側では計3回に分けて掘削を行っている（一覧表表記 検Ⅲ- 1, 検Ⅲ- 2, 検Ⅲ- 3）。また、「検出Ⅳ」として扱った部分は調査区中央より北側に限られており、これより南側は削平が激しく平坦となっており、包含層はごく薄く一部では表土を除去するとすぐに基盤層に達した。

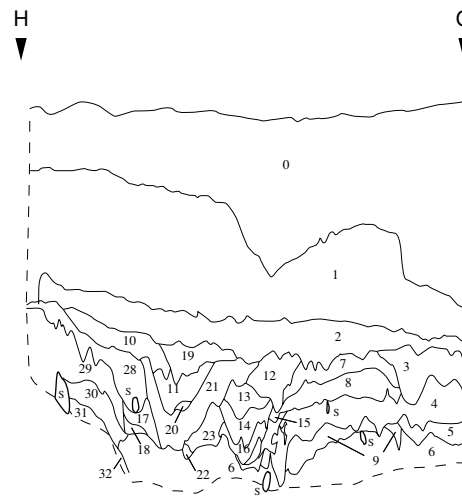
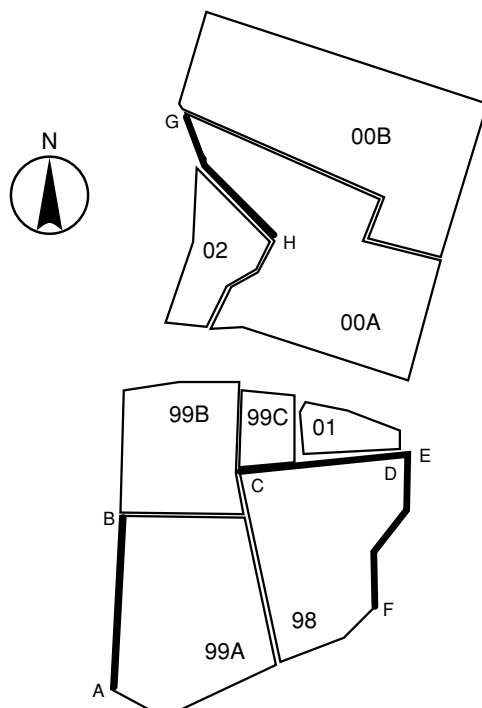


第8図 98区東壁断面図（縦S=1/50、横S=1/300）



上 00A 区東壁

下 00A 区北壁 SD03 付近



0. 整地層
1. 2.5Y4/2暗灰黄色土（粗粒砂混じる）しまりあり 固い
2. 7.5YR3/1黒褐色粘質土 沈鉄含む
3. 2.5Y5/3黄褐色粗粒砂（極細粒砂混じる）
4. 2.5Y3/2黒褐色細粒砂（極粗粒砂混じる）
5. 2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂（極粗粒砂と互層）
6. 2.5Y7/3浅黄色粗粒砂に親指〜コブシ大の礫がかむ礫層
7. 2.5Y5/4黄褐色土（粗粒砂混じる）
8. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細粒砂（極細粒砂混じる）
9. 2.5Y3/2黒褐色粘質土（細礫を少量含む）
10. 10YR2/1黒色粘質土
11. 10YR3/2黒褐色粘質土
12. 2.5Y5/4黄褐色粗粒砂（中粒砂混じる）と2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂混じる
13. 2.5Y3/2黒褐色粘質土と2.5Y6/4にぶい黄色土（極粗粒砂と細礫混じる）
14. 2.5Y2/1黒色粘質土と2.5Y3/2黒褐色粘質土が混じる 極粗粒砂と細礫混じる
15. 2.5Y2/1黒色粘質土と2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土が混じる 極粗粒砂と細礫混じる
16. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 極粗粒砂と細礫混じる
17. 2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
18. 2.5Y7/3浅黄色細粒砂と2.5Y3/1黒褐色細粒砂の互層
19. 2.5Y5/1黄灰色土と2.5Y3/1黒褐色粘質土が混じる、沈鉄含むしまりあり
20. 2.5Y4/1黄灰色粘質土、沈鉄混じる
21. 2.5Y3/1黒褐色粘質土
22. 2.5Y2/1黒色粘質土
23. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土
24. 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土（極粗粒砂混じる）
25. 2.5Y2/1黒色粘質土と2.5Y3/1黒褐色粘質土が混じる、極粗粒砂、細礫含む
26. 10YR2/1黒色粘質土と10YR3/2黒褐色粘質土が混じる
27. 10YR3/2黒色粘質土と2.5Y7/3浅黄色粗粒砂が混じる、細礫含む
28. 10YR3/1黒色粘質土
29. 2.5Y5/4にぶい黄褐色粘質土
30. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土
31. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土に5Y4/1灰色細粒砂が混じる
32. 5Y4/2灰オリーブ細粒砂

第9図 00 区西壁断面図（縦 S=1/50、横 S=1/300）

2. 縄文時代の遺構

黒色土上面で検出された遺構は竪穴状土坑（1基）、土坑、ピット状の小土坑などがある。出土遺物または埋土等より中世段階の遺構として抽出できたもの（溝、掘立柱建物柱穴、大型の廃棄土坑）を除き、縄文時代の遺構として取り扱う。

*ただし特に98区においては、小土坑のうち断面観察でも掘込の境界が明瞭に判別できないタイプが多数認められ、人為的なものでなく自然地形と考えられる場合もあったが、平面図ではすべて遺構として含め表現している。

調査区全体に広がる縄文土器片は、98区と99A区SX03で特徴的な分布が認められる。比較的平坦な98区では包含層上位から下位まで全体にくまなく混入し、土坑、ピット等の埋土にも必ず含まれている。またそのほとんどが細片であったのは、包含層が様々な要因によって激しく攪拌されたためと思われる。したがって、遺構の時期を認定できる確実な資料はごく少数にとどまり、人為的な遺構そのものの認定を困難にしている。一方99A区SX03は自然地形の谷状の落込みであり、下層に含まれる多数の縄文土器、石器により、時期幅が限定される人為的な廃棄状況を示す良好な資料となっている。

a.98区

98区 SB01 SB01（第10図） 98区北西部に位置し、シルト質の強い基盤層が広がる比較的平坦な面に掘削されている。包含層（黒色土層）と埋土の区別は明瞭ではなく、98年度・99年度（99B）で分割して調査した結果、南半部分の東側堀形は当初の検出ラインより若干狭くなることが判った。修正した規模は平面形態はほぼ正円形を呈する径2.6～2.8m、深さ8～15cmの竪穴状土坑であり、壁面は緩やかに立ち上る。床面で検出された複数の土坑・ピットのうち確実に住居に伴うと認定できるものは検出できず不明である。床面と想定されるレベルで台石に利用されたと思われる石材（花崗岩礫）を検出している。縄文土器片は破片数で219点を検出したが、すべて小破片であり遺構内で分布の偏りは認められない。縄文土器の時期別の割合では、胎土に繊維を含み早期後葉の時期に収まると考えられるものが77%を占め、有文土器片では粕畑式が最も多く、次いで入海式、ごく少量ながら天神山式や楕円押型文、沈線文系の土器片が混入する。（第3章-1）

98区 SK268 SK268は径46cmの円形を呈し、深さ64cm、断面では堀形の境界が不明瞭であるが下層でやや膨らむ形状となる。埋土はしまりのない暗灰色シルトであり、縄文土器小片と花崗岩礫を含む。

風倒木痕 98区において検出したやや大型の土坑は、平面プランが不定形でありかつ断面の形状と埋積の状況が不自然であったため風倒木痕と認定した。SK275は2.94m×1.62m、深さ75cm、長軸はN-65°-Eの方向で南西側が深くなっている。SK343は36×36cm、深さ38cm、長軸は南北方向をとり東側が深くなっている。SK355は1.92m×1.22m、深さ75cm、南側が深くなっている。SK353は1.58m×1.18m、深さ70cm、南西側が深くなっている。

98区において、包含層中に含まれる花崗岩礫に赤色化が認められる場合が多く見られた。被熱の痕跡と推定して炉跡など人為的な配置等留意して調査を行ったが、赤色化した小礫

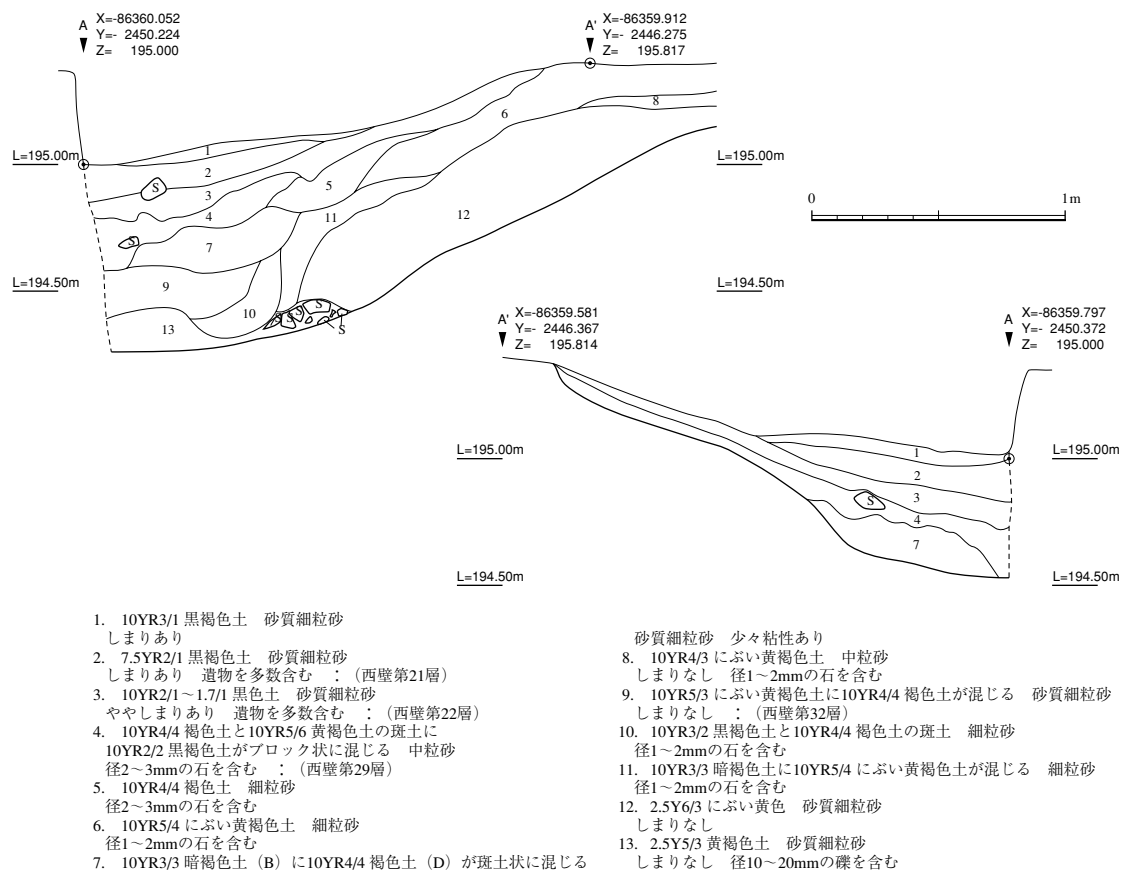


の分布は広く散在した状況にあり、遺構としては確認できなかった。

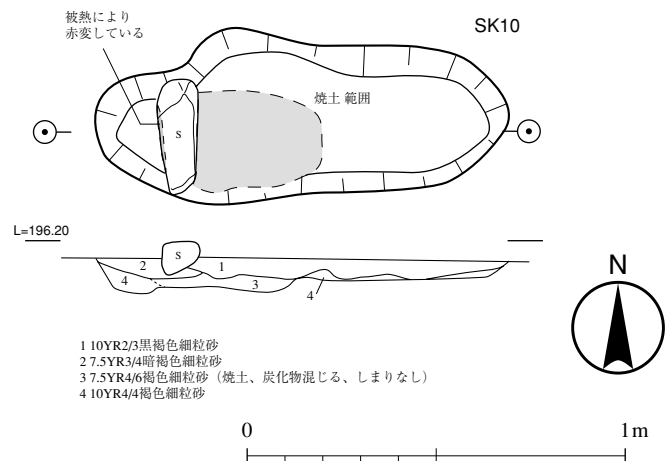
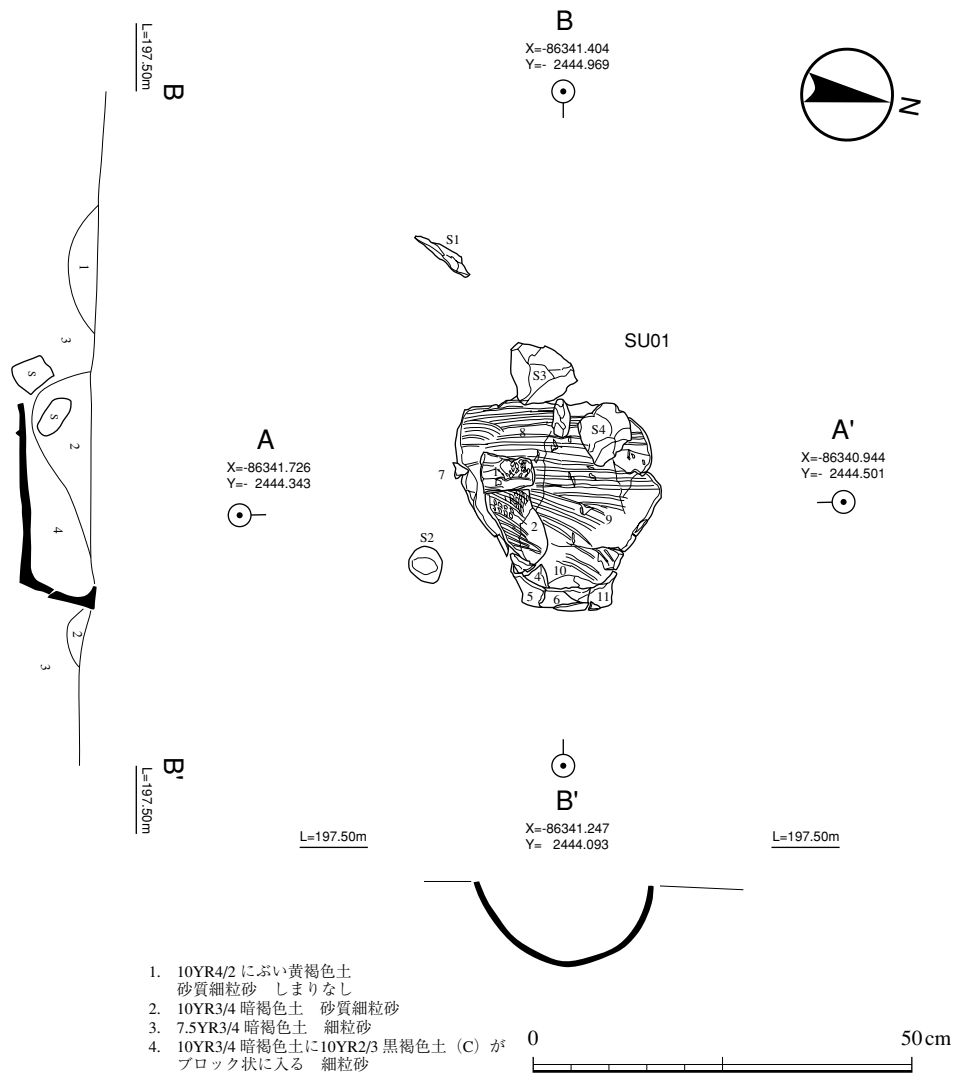
b.99A・B・C区

99A区 SX03 99A区 SX03（第6図、第11図） 99区は現代の水路を挟んで98区の西側および北側に隣接する調査区であり、A区SX03は99区の西南端に位置する。谷状地形の上部は標高196.2mあり、そこから西側へ落込み調査範囲内で最も低い部分は標高193.7m、比高差は約2.5mを測る。谷地形は一部が調査区端にかかっており長さ約21m、幅約3mの三角形の範囲で確認した。概ね上層には黒褐色細粒砂層、中層は褐色細粒砂層、最下層には基盤との混土層である黄褐色砂質土層の堆積が認められ、遺物は上層～中層にかけて多く含まれている。出土した石器は85点、縄文土器は総破片数1644点があり、また土器破片は比較的大きく僅かながら接合も可能であった。時期別の内訳は、胎土に繊維を大量に含むものが92%と大半を占め、稀に入海式、石山式、天神山式、前期以降の資料が散見される。谷の埋積の時期幅が早期後葉に限定される極めて良好な資料となっている。なお、詳しくは後述するが、この地点出土のNo.57,59の土器外面に付着した炭化物の年代測定では、それぞれcal BC 5745-5705, cal BC 5725-5665の結果が得られている。

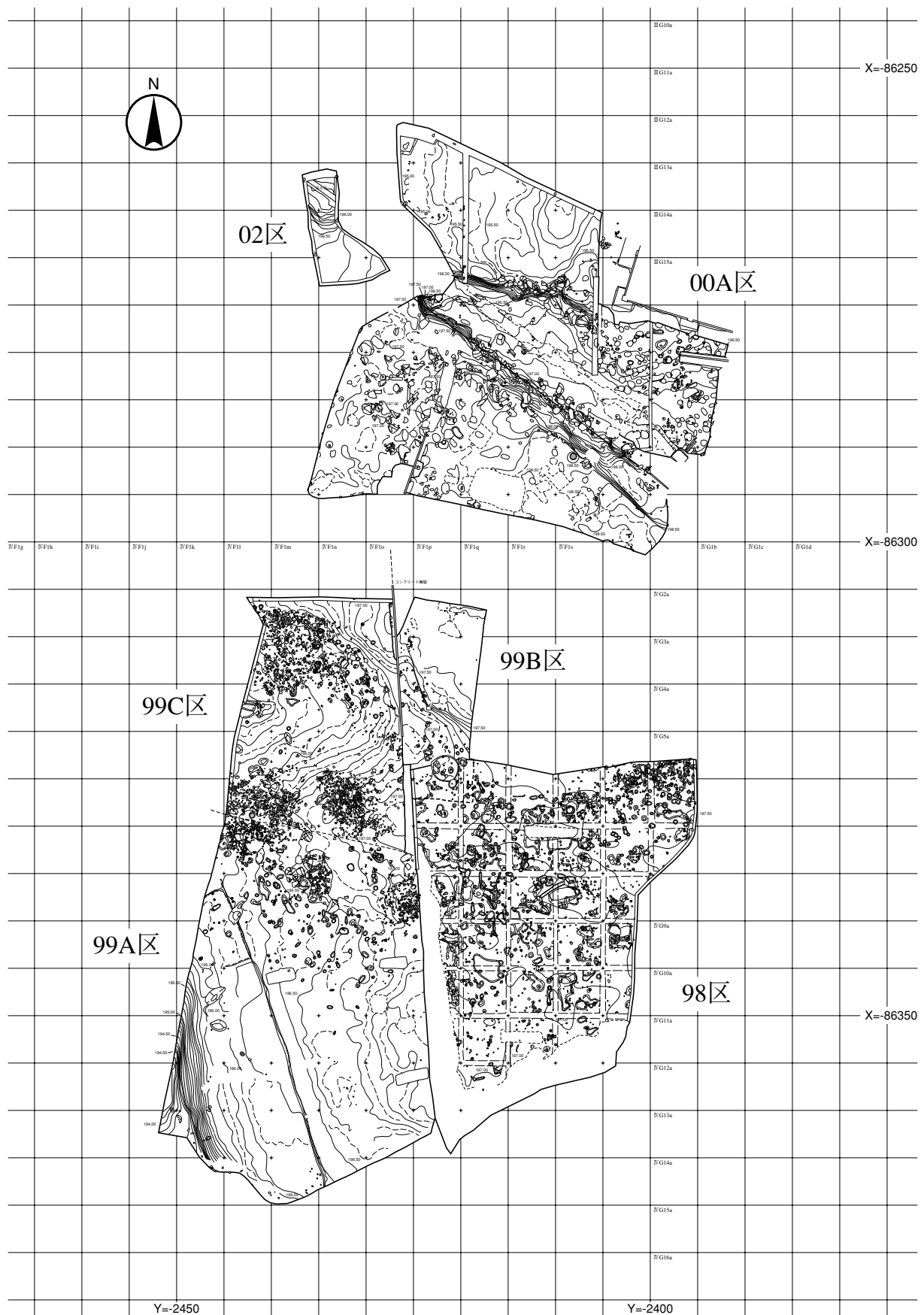
99ASU01 99A区 SU01（第12図上、旧SK04） 調査区北西寄りの緩斜面で早期後葉茅山下層式段階の深鉢（149）が、口縁部を東方にむけて横位に倒れた状態で検出された。当初土坑（SK04）に土器が埋設されたものと考え調査を進めたが、精査の結果断面と平面の両方で掘込みが



第11図 99A区 SX03断面図 (S=1/30)



第12図 99A区 SU01 (S=1/10) ・99A区 SK10 (S=1/20)



第 13 図 下層主要遺構平面図 (S=1/600)

極めて不明瞭であったため、包含層出土遺物として扱うことにした。遺構に伴う確実な根拠は得られなかったが、土器自体は上部を除いて大きな破損を免れており、片面が残る接合・復元可能な比較的残存状況の良い個体であった。したがって、破損の少ない状態で埋没し、その後ほぼ原位置にあったと考えられる。

99A 区 SU02 (旧 SX05) 99A 区 SU02 (旧 SX05) 調査区北東寄りで 30cm 前後の低い段差の下、緩斜面包含層中より土器 1 個体を検出した。およそ 50 × 45cm 程度の範囲に分布する。早期後葉粕畑式の深鉢が横位でつぶれた状態にあり、底部片は確認できていないものの 1 個体分の復元が可能であった。(図版 20 207)

99A 区 SK18 99A 区 SK18 84cm × 52cm の楕円形の土坑であり、深さ 19cm で断面は緩やかな皿状を呈する。埋土は花崗岩小礫をふくむ黒褐色の砂質土で上下 2 層に分層が可能であり、下層に早期後葉の土器を伴う。

99A 区 SK10 99A 区 SK10 (第 12 図下) 99A 区北西端近くの緩斜面で検出された地床炉と思われる長径 107cm、短径 48cm の船底形の浅い土坑で、土坑内には被熱を受けた花崗岩礫と、焼土、炭化物の堆積が認められる。石材上端から土坑底部まで約 15cm を測る。内部の焼土の範囲に対し石材被熱部分が外側に向いており、石材も 1 点が残存するのみである。周辺包含層中の遺物より弥生時代中期と推定される。

3. 古代以降の遺構

平安時代・中世・近世の時期の遺構が確認された。

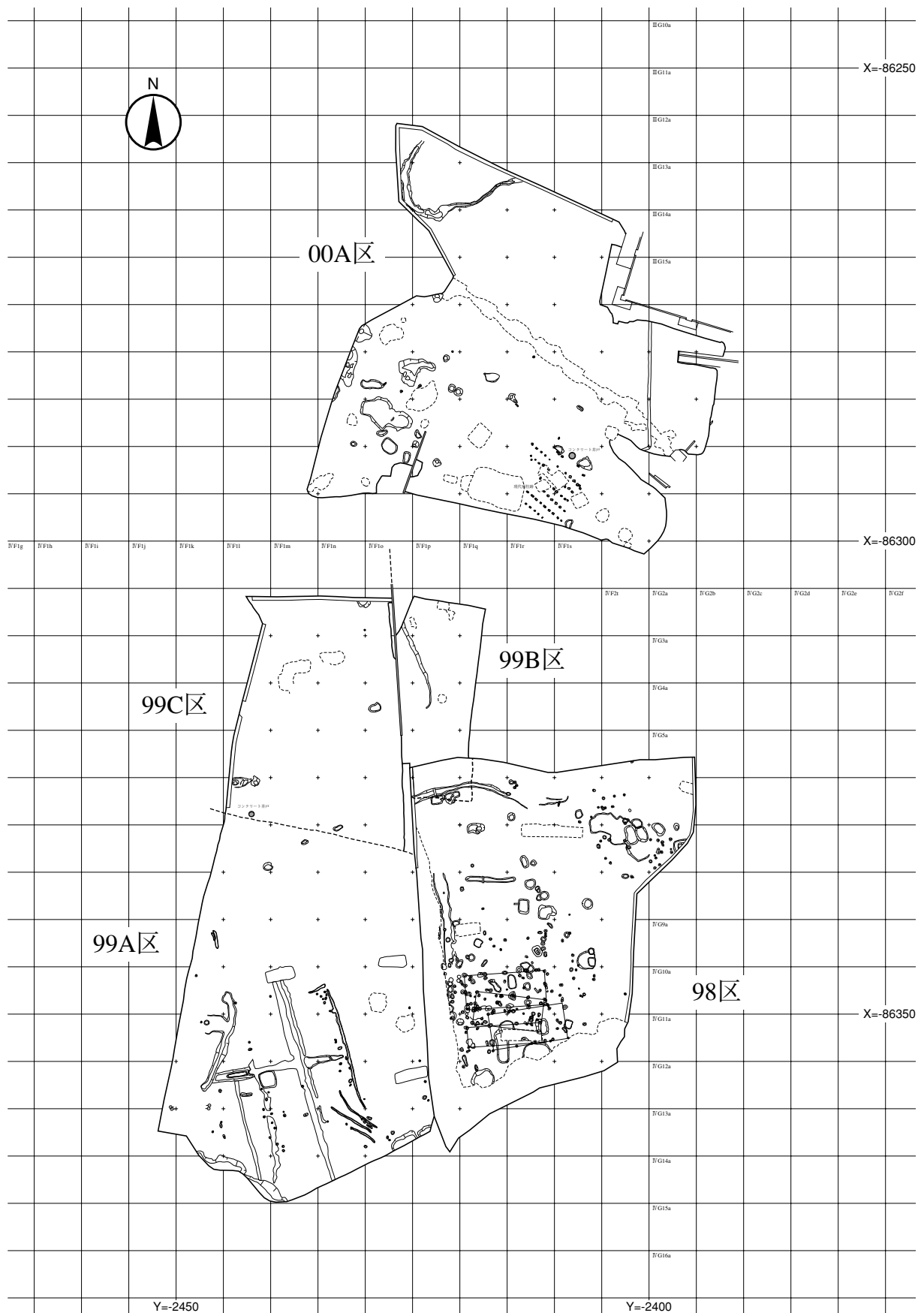
古代に属する遺物として 00A・B 区の一部で灰釉陶器碗・皿類の散漫な分布が認められたが、遺構に伴うものは希少であり、遺構の展開は捉えられなかった。灰釉陶器碗皿類を伴う遺構として 00A 区北西の SX01 (旧 SD04) および SX02 (旧 SD05) がある。

SX01 は幅 1.5 ～ 2.8m、深さ 5 cm の東西方向に伸びる溝であり、SX02 は幅 0.3 ～ 1.1m、深さ 27cm の溝であり、埋土に腐植質層を含む。SD03 の下層に相当する。

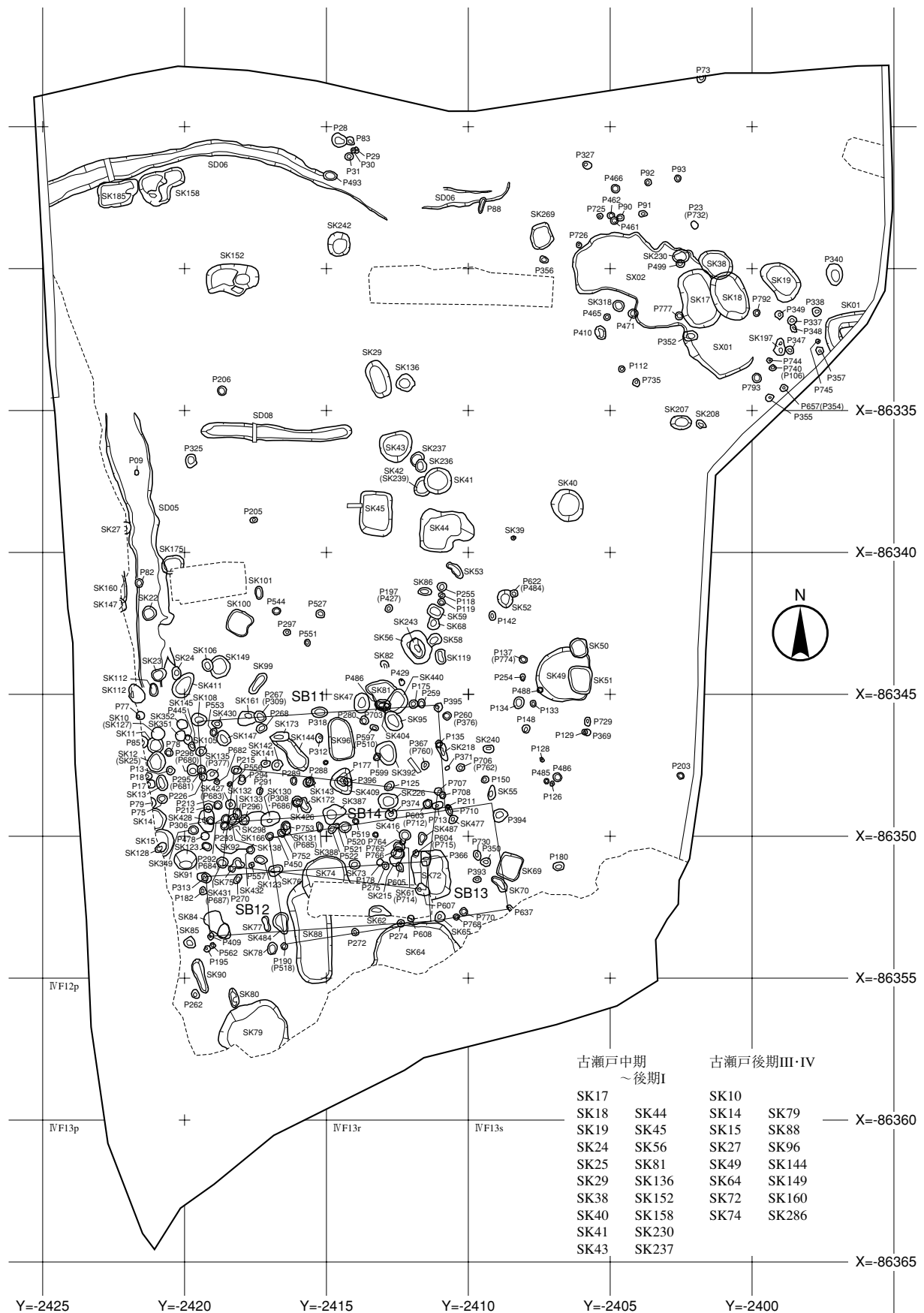
中世の遺構の分布は、調査範囲内でも部分的であり、主に 98 区に集中してみられる。98 区で出土遺物および埋土等から中世以降と判断した遺構は、溝、土坑、ピットなどである。中世包含層の堆積は調査区北東部～中程にかけての範囲にみられ、古瀬戸を中心とした時期の土坑が散漫な広がりを見せ、中央よりやや南側では古瀬戸後期を中心とした時期の掘立柱建物のピットおよび土坑が多数分布する。また、調査区南端に近いところでは不定形の廃棄土坑などが散在する。99 区では遺構は希薄であり、僅かに土坑 5 基、溝 3 条、不明土坑 2 基を確認するにとどまった。00A 区の県道に近い南半では、近世の建物跡、土坑数基などが確認された。

98 区 SK17 98 区 SK17 (第 16・17 図)

調査区北東寄りで検出した 208 × 106m 規模の楕円形、深さ 16cm の土坑である。検出時のプランは不明瞭であり、壁面の立上りの認定も困難であった。土坑の周囲には細かな焼



第 14 図 古代以降の主要遺構平面図 (S=1/600)



第 15 図 98 区 古代以降の主要遺構平面図 (S=1/200)

土と炭化物を含む中世の包含層が西側と南側にかけての広い範囲に認められた（SX01・02）。土坑内部には複数の大型の花崗岩礫が集められており、そのほぼ中央で頸部を打ち欠いた古瀬戸後期の灰釉瓶子が横位の状態で見つかった。花崗岩の大型礫は瓶子を取り囲むような位置にあったが、礫の下から多くの灰釉系陶器碗（山茶碗）が検出され、検出の時点ではこれらが意図的に配置された状況は認められなかった。いずれの花崗岩礫も加工痕は認められない。

大型の礫をすべてとり除いた土坑最下層はほぼ平坦であり、残存状況のよい多数の山茶碗が検出された。これら山茶碗片の分布範囲は土坑南西寄りに中心があり、上層の大型礫の分布範囲と若干ズレた位置にあたる。下層と上層との位置関係に見られる微妙なズレは、埋没時期の差というより埋没後から今日までの間に上層の大型礫群の周辺に改変が加えられたとみるのが自然であろう。出土した山茶碗の年代観は尾張型第10形式にほぼ収まる限定された時期である。

98区 SK18 98区 SK18

SK17の東側に接する178×120m、深さ20cmの楕円形土坑である。埋土には縄文土器および山茶碗、古瀬戸中期の盤類などの小片がわずかに混じる。花崗岩小礫を多く含むが大型の礫はない。検出時にはSK17の東側に接して一部を壊していると判断したが、古瀬戸後期段階の資料はここでは確認されておらず、新旧関係が逆転する可能性がある。

98区 SK19 98区 SK19

SK18の約1m東側に位置する152×102m、深さ29cmの土坑であり、不整形な楕円形状を呈する。埋土には炭化物、焼土の細片と花崗岩小礫を含む。出土遺物は山茶碗、片口鉢、古瀬戸中期の灰釉四耳壺片、盤類、水滴など小片が多い。

98区 SK40 98区 SK40

調査区中央西寄りに位置する径約113cm、深さ36cmの円形の土坑である。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトで、炭化物を含み花崗岩小礫と縄文土器小片が混じる。しまりはない。土坑内の西側に段を有し底部は平坦となる。出土遺物は山茶碗と古瀬戸中期の灰釉折縁深皿などがある。

98区 SK41 98区 SK41

調査区中央に位置する径約95cm、深さ18cmの円形で（SK40）と平面ではほぼ同規模の土坑である。遺物は少なく鉄釉の壺片がある。

98区 SK43 98区 SK43

径110cm、深さ29cmの不整円形の土坑である。出土遺物は山茶碗、片口鉢、古瀬戸中期灰釉梅瓶などがある。

98区 SK44 98区 SK44

長さ188cm、幅100cm、深さ16cm規模の不整形の土坑である。方形に近い土坑2基が重複しているものと思われる。遺物は少なく、古瀬戸中期段階の鉄釉茶壺、東濃産山茶碗（生

田窯段階) などがある。

98区 SK45 98区 SK45

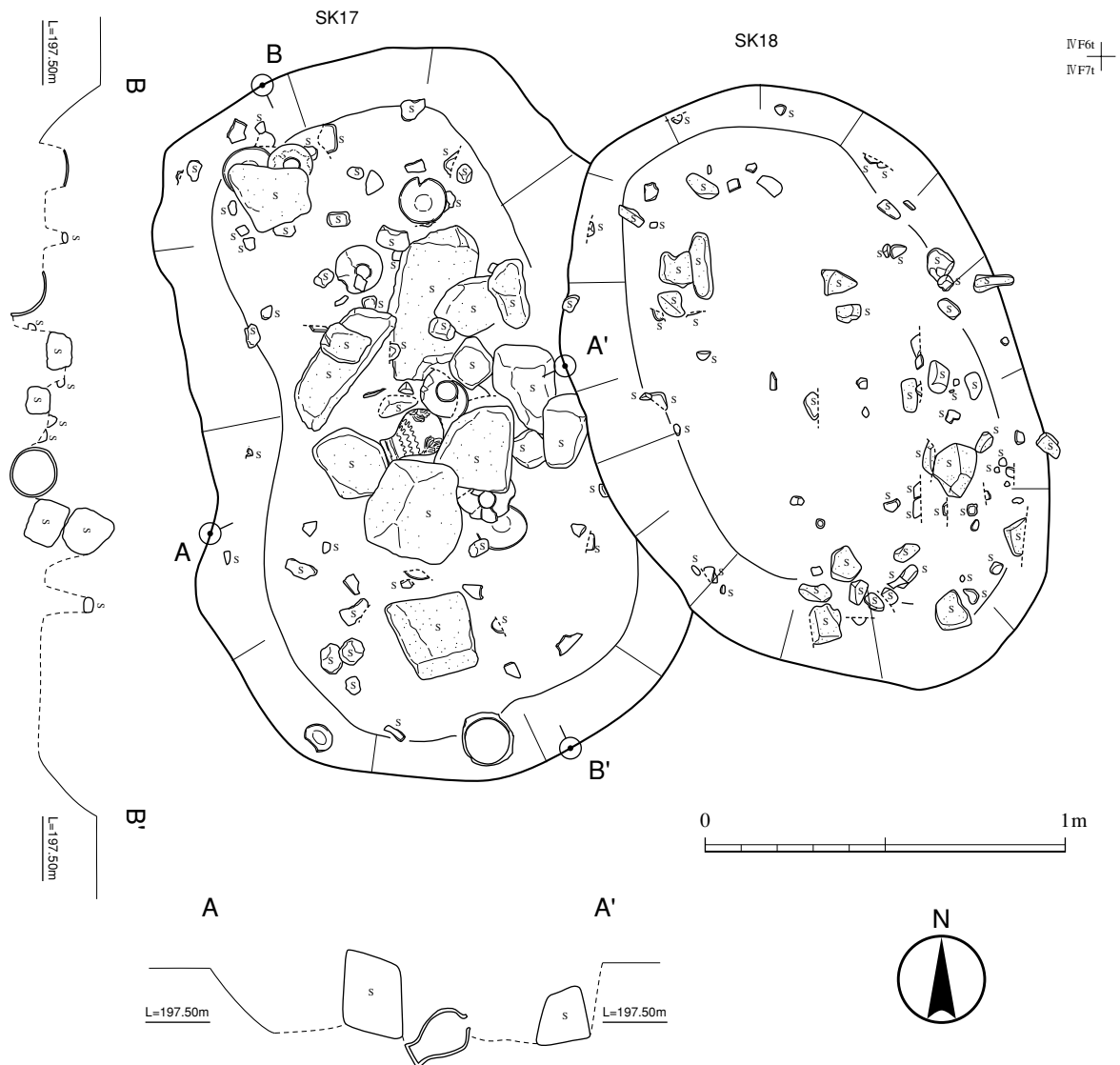
SK44の約1m西側に位置する。156×112cm、深さ22cm規模の隅丸方形の土坑である。土坑底部はほぼ平坦となる。山茶碗は瀬戸窯産の他に東濃産(大洞東、脇之島段階)、錆釉内耳鍋、古瀬戸では画花を付す陶片がある。

98区 SK56 98区 SK56

118×86cm、深さ34cm規模の不整円形の土坑である。埋土は黒褐色シルトに黄褐色シルトが細かく斑土状に混じる。炭化物や焼土を含む出土遺物は、小皿のほか古瀬戸灰釉四耳壺底部片、盤類、碗類などがある。

98区 SK72 98区 SK72

掘立柱建物の南東角付近に位置する。172×128cm、深さ20cm規模の隅丸方形の土坑で



第16図 98区 SK17 上層出土状態図 (S=1/20)

ある。黒褐色シルトに基盤層の黄褐色土が斑土状に混じる。炭化物・焼土は含まない。

98区 SK74 98区 SK74

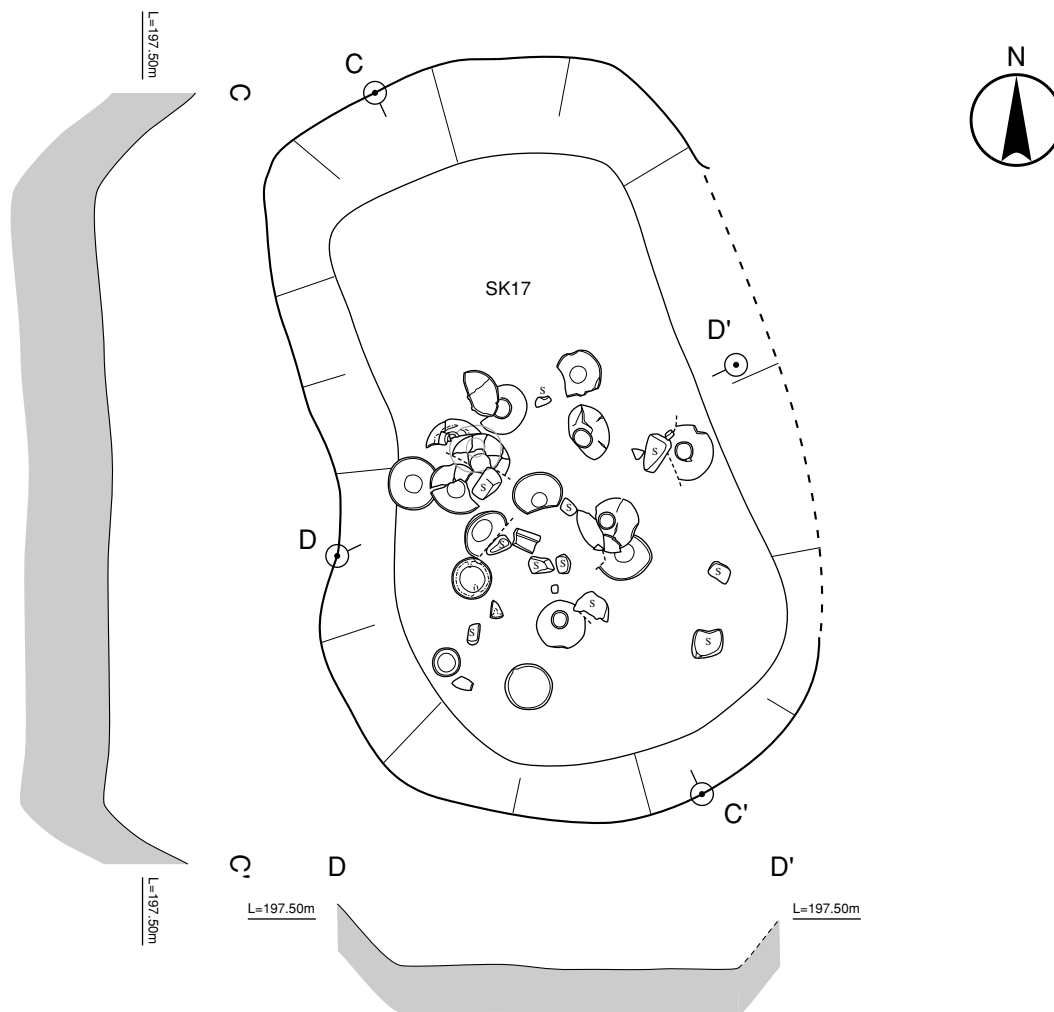
調査区南端に近く掘立柱建物の真南に位置する。164×92m規模の不整形の土坑であり、南側はトレンチにより壊されて全体の形状は不明である。埋土は水田耕作土に類似する。古瀬戸後期の天目茶碗、播鉢等が出土しているが、混入の可能性も考えられる。

98区 SK79 98区 SK79

調査区南西端に位置する長径 240cm、短径 160cm、深さ 59cm 規模の不整形の土坑である。埋土は水田耕作土を多く含むにぶい黄褐色土砂質シルトで、炭化物が混じる。多器種の近世の陶磁器片を含み廃棄土坑と思われる。

98区 SK10 98区 SK10

98・99A 区の境付近はU字溝埋設によって包含層は削平されており、削平を免れた西端に近いところ、掘立柱建物の北西角付近に位置する。径約 50cm、深さ 10cm 規模の円形土坑である。土坑内には径 17cm、高さ 23.5cm の匣鉢が口を斜め上にして収まり、その上に



第 17 図 98 区 SK17 下層出土状態図 (S=1/20)

古瀬戸後期の灰釉平碗の破片、花崗岩礫などが重なった状態で出土した。

98区 SK49 98区 SK49

218 × 200cm、深さ 18cm 規模の不整円形を呈する浅い凹みである。

98区 SK29 98区 SK29

SK136 の西に隣接し、132 × 68cm、深さ 32cm 規模の長楕円形を呈する。黒色シルトを埋土とする。出土遺物は片口鉢、古瀬戸中期の柄付片口などがある。

98区 SK136 98区 SK136

SK29 の東に隣接する 60 × 58cm、深さ 16cm 規模の円形の土坑である。出土遺物は焼成不良の古瀬戸中期の三耳壺のみ。

98区 SK64 98区 SK64

削平を受け全体の規模は不明であるが。残存部分で 304 × 170cm、深さ 36cm を測る。黒色土層（包含層）の堆積がみられない範囲にあり、地山の粗粒砂層を掘り込んだ土坑である。埋土には水田耕作土に類似する土壌を含む。出土遺物は古瀬戸後期の碗類、盤類がある。

00A区 Pit76・77 00A区 Pit76・77

Pit77 は 84 × 82cm、深さ 22cm 規模の円形の土坑である。遺物は図化していないが、連房式登窯第 9 ～ 11 小期の時期に収まる一括資料を含む。埋土は風化花崗岩を含む地山に暗灰黄色～暗褐色の粘質土が斑土状に混じる。隣接するほぼ同規模の Pit76 と同様に底面に漆喰が施されている。肥溜に使用されたものであろうか。

掘立柱建物跡 掘立柱建物跡

主に 98 区南半を中心に展開するピット、小土坑の配置から 4 棟を復元した。遺物を伴う遺構は少なく時期を示す遺物に乏しいため、炭化物と焼土を含む暗灰褐色砂質土を中世遺構の埋土として抽出したのち、軸線上に適合したピットと小土坑を含めて想定している。床面は残存していない。

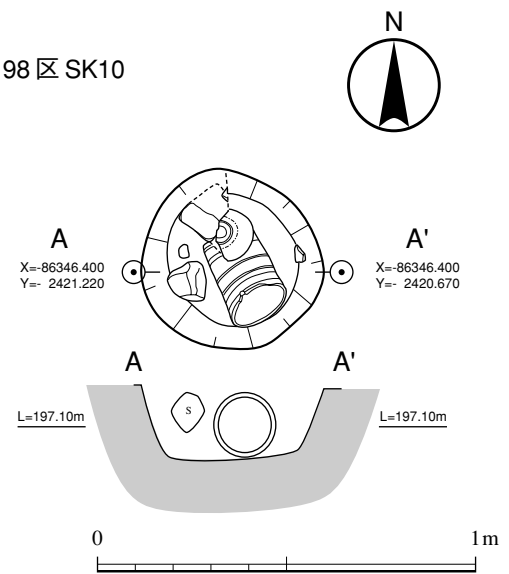
98区 SB11 桁行 4 間 × 梁行 2 間で規模は約 8.5m × 約 3.7m、東西に長軸方向をとり方位は N-85° -E を測る。柱間隔は桁行方向 2.0 ～ 2.2m、梁行方向 1.7 ～ 1.8m を測る。一部でピットの重複が認められ、同一地点での建替えが想定される。

98区 SB12 桁行 3 間 × 梁行 1 間で東西に長く、規模は約 7.8m × 約 2.2m、方位は N-85° -E を測る。柱間隔は桁行方向 2.5 ～ 2.8m、梁行方向 2.2 m を測り、ただし北辺に対し南辺が不明瞭である。

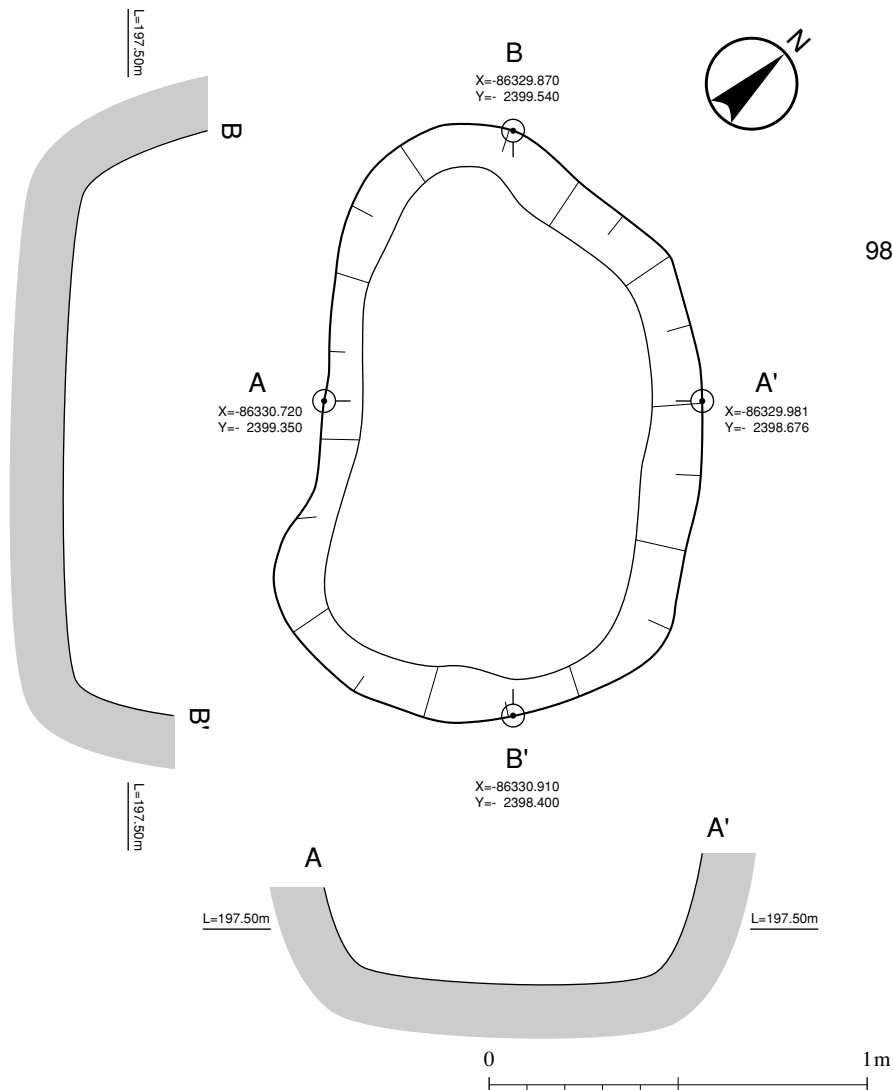
98区 SB13 桁行 4 間 × 梁行 2 間で東西に長く、規模は約 8 m × 約 4 m、方位は N-80° -E を測る。ただし、北辺と南辺ではピットの形状および底レベルは一定していない。

98区 SB14 桁行 4 間 × 梁行 2 間で東西に長く、規模は約 7.2m × 約 3.5m、方位は N-82° -E を測る。柱間隔は桁行方向 1.6 ～ 1.9m、梁行方向 1.8m を測る。4 ヶ所でピットの重複が認められる。

98区 SK10



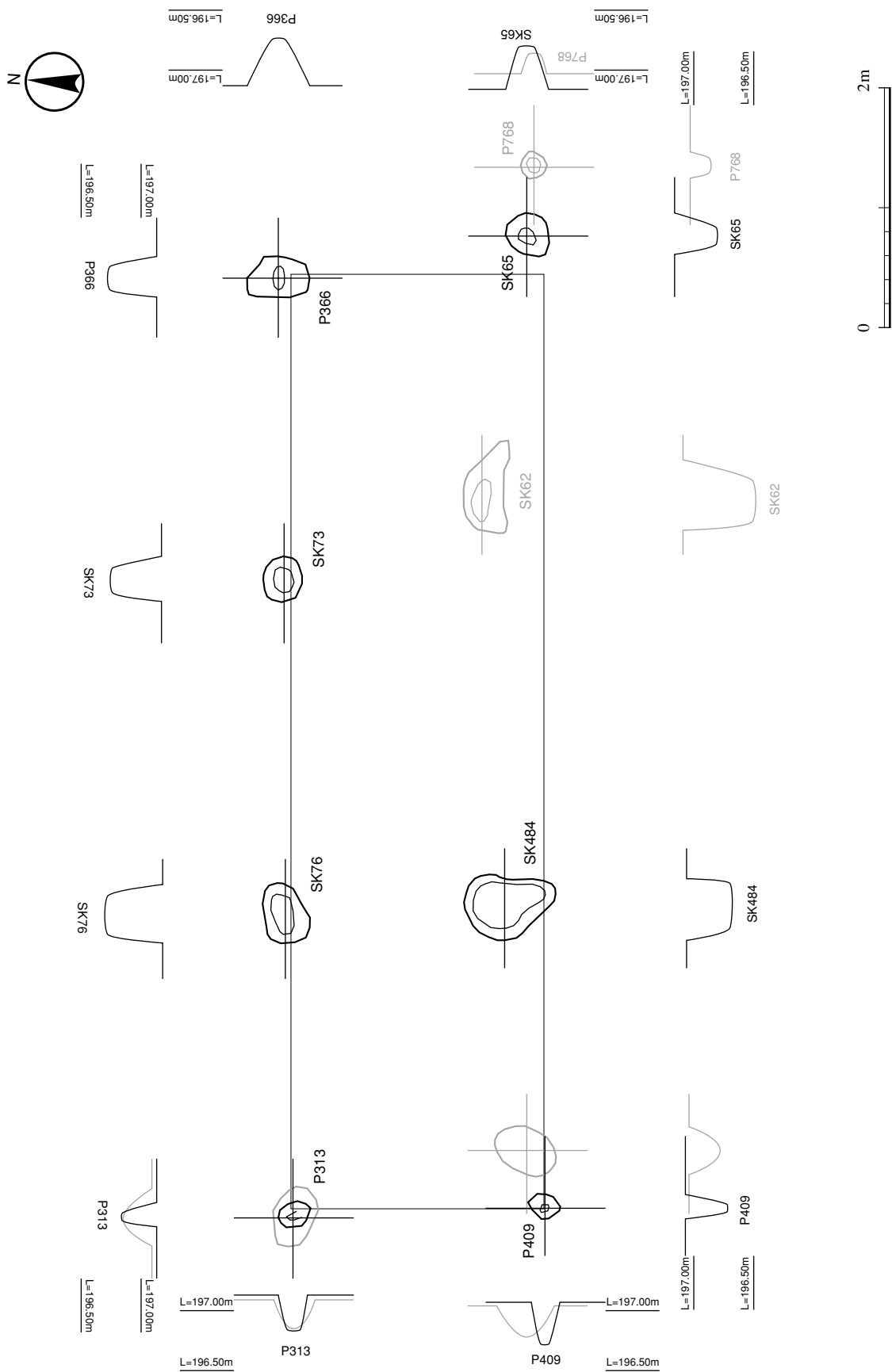
98区 SK19



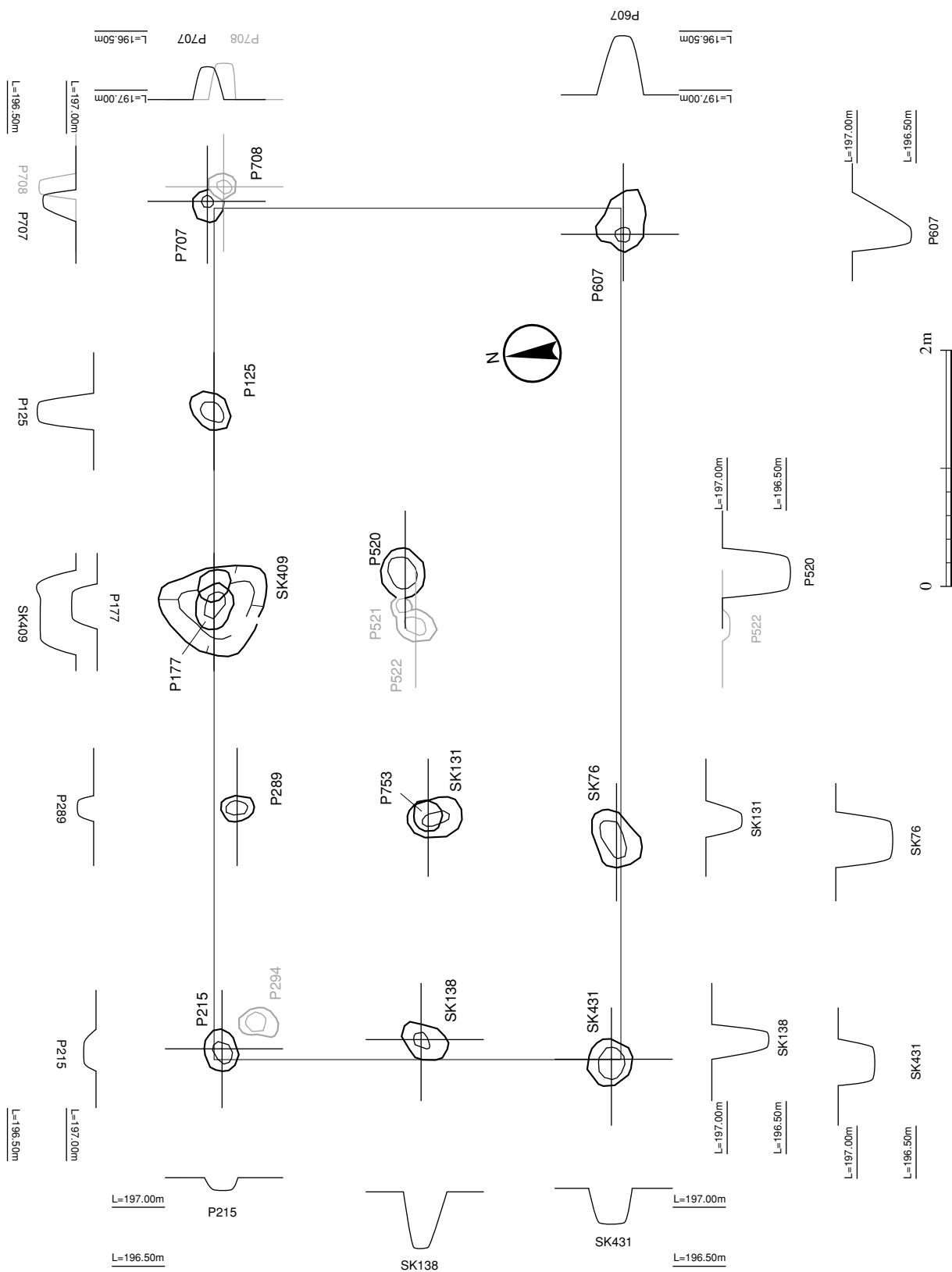
第 18 図 98区 SK10・SK19平面・断面図 (S=1/20)



第 19 図 98 区 SK40・SK45 平面・断面図 (S=1/20)



第 21 図 98 区 SB12 平面・断面図 (S=1/50)



第 23 図 98 区 SB14 平面・断面図 (S=1/50)

第3章 遺物

第1節 縄文土器、土製品

出土した縄文土器の総量（整理後）はコンテナ76箱に及び、また縄文（～弥生）時代にかけての石器もコンテナ45箱が出土している。第35～39図の出土分布図に示す通り、出土地点には数ヶ所のまとまりが看取され、特に98区の平坦面および99A区SX03（谷状落込み）で顕著な集中がみられる。また県道以北00A・00B区は北向きの緩斜面となっており、木下川旧流路の影響を受けなかった標高の高い部分で若干量が認められる。

これらは縄文早期（Ⅰ期）と縄文前期（Ⅱ期）、縄文中期（Ⅲ期）に大別でき、表16に示すように早期後葉の胎土に繊維を含む一群の占める割合が極めて高く、これらが八王子遺跡の主体となっている。「Ⅰ期」としたのものには早期（中葉～）後葉の押型文・沈線文系土器群、早期後葉の土器群、早期末～前期初頭の繊維が少ない含まない土器群が含まれ、各々さらに細別される。「Ⅱ期」では前期前葉と中葉の資料があり、「Ⅲ期」では中期前葉、中葉、後葉の資料が認められるもののいずれも微量で安定した出土量ではない。

以下に、3期6群の分類を設定し、遺構・遺構外包含層に分け記述を進める。なお、登録遺物のデータは付属CD-ROMに一覧表を収録した。

Ⅰ期 第1群 押型文系の土器群

- 1-a類 山形文を有するもの。波長の長いもの（1-a-1）、短く密集するもの（1-a-3）、それらの中間の形態のもの（1-a-2）に細分できる。
- 1-b類 ポジティブな楕円文を有するもの。1単位が大型のもの（1-b-1）と、小型のもの（1-b-2）に細分できる。
- 1-c類 楕円文と山形文以外のその他の文様を有するもの。菱形の斜格子目文（1-c-1）、凹部が棒状に扁平となる斜格子目文（1-c-2）などがある。
- 1-d類 複数の異なる原体を用いた複合型。

第2群 早期後葉の繊維を含まない土器群

- 2-a類 直線的な沈線により区画を構成し、区画内を沈線で充填するもの。
- 2-b類 器壁が比較的厚く、表面に回転縄文を施すもの。

第3群 早期後葉の胎土に繊維を含み、条痕による器面調整を地文とする条痕文系の土器群である。出土量は突出して多く、この遺跡の主体となる資料群である。

- 3-a類 胎土に繊維を多く含む。器形は平底の深鉢形を呈し、口縁部と頸部の境に隆帯を伴う屈曲部をもつ。文様帯は隆帯と沈線で区画され、区画内部を縄文および刺突文で充填する。
- 3-b類 胎土に繊維を多く含む。口縁部と頸部の境に文様帯の痕跡程度の屈曲部をもつ。指頭による浅い凹線で文様帯を区画し、その間を爪形あるいは米粒形の連続刺突文で平行文、波状文、三角形などを描く。

- 3-c類 胎土に繊維を多く含み、表裏を条痕調整する。上位に文様帯の痕跡程度の屈曲部をもつ。主文様は爪形あるいは米粒形の連続刺突列で並行、波状、三角形を描く。
- 3-d類 胎土に繊維を多く含み、表裏を条痕調整する。底部は尖底あるいは小平底の砲弾形となる深鉢形を呈し、体部の屈曲のない深鉢形を呈する。主文様は爪形、米粒形あるいは貝殻腹縁を利用した連続刺突列で並行、波状、三角形などを描く。口縁部付近に貼付ける形で筒状、酒杯状、円柱状、台状と形容される多様な装飾把手や側面に円形、半月形、三角形の突起を伴う場合がある。さらに3つに分けられる。
 - 3-d-1類 焼成は硬質。表裏の条痕文が深く明瞭で、内外面の刺突が比較的細かく、等間隔に整然と施されるもの。口縁端部、装飾把手周縁も同様に施文されるもの。
 - 3-d-2類 焼成は硬質～普通で表裏の条痕文は明瞭である。内面に刺突されるものは少なく、外面刺突は3-d-1類よりはやや雑となる。
 - 3-d-3類 焼成はやや軟質で明るい色調のことが多い。表裏の条痕は薄いかまたはナデ消されている。外面の刺突は、部分的であったり疎らに省略されさらに雑となる。口縁端部に単方向から押圧刺突が連続して施される。
- 3-e類 胎土に繊維を含む。器面調整の条痕は浅く不明瞭となり、口縁端部に前後2方向から交互指頭刺突を加える。さらに2つに分けられる。
 - 3-e-1類 口縁部付近に横位に不連続の隆帯を貼付け、隆帯上には単方向から押圧文を加える。
 - 3-e-2類 隆帯に上下から交互押圧刺突を施す。
- 3-f類 胎土にわずかであるが繊維を含む。口縁部に横位の貼付隆帯を1段～数段に施し、隆帯上は押圧文もしくは刺突文を刻む。数条の隆帯は平行または波状にめぐり、隆帯に沿って1～2段の連続刺突を施す。さらに2つに分けられる。
 - 3-f-1類 隆帯断面が凸状または中央が高い三角形を呈するもの。
 - 3-f-2類 隆帯断面が低く、全体が扁平または下方をナデつけ低い三角形を呈するもの。

第4群 胎土に繊維を含まず、薄く硬質の焼成である早期末の一群である。

- 4-a類 爪形の連続刺突が平行または波状に数条がめぐるもの。
- 4-b類 押引き気味に連続刺突を加えるもの。
- 4-c類 櫛状の工具による平行沈線で波状文や鋸歯状文を描くもの。
- 4-d類 器壁は薄く、外面口縁部直下に幅の狭い隆帯を貼付け、隆帯上に刺突を加えるもの。
- 4-e類 器壁は薄く、外面口縁部直下に幅の狭い隆帯を貼付け、隆帯上に回転押圧して縄文を施文するもの。

Ⅱ期 第5群 前期に属する資料

- 5-a類 薄手で焼成は硬質。無文で表裏全体に指頭圧痕がみられるもの。
- 5-b類 胎土は精選されたものを使用し薄手で焼成は硬質。器表面は内外ともヘラ状器具による丁寧な調整のあと、口縁部周辺を除き羽状縄文を施す。

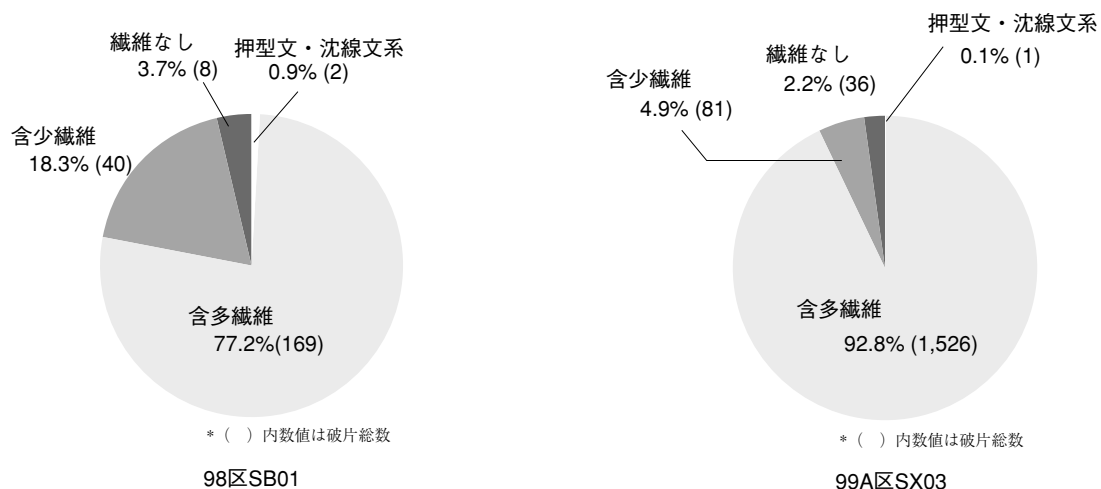
III 期 第6群 中期に属する資料

- 6-a類 薄手、硬質で口縁部に半割竹管状の施文原体を用いるもの。器面に平行線を描き、文様帯の一部に縄文を施すもの、連続爪形文を加えた複数の隆帯を巡らすものなどがある。
- 6-2類 薄手、硬質で口縁部に角状の突起をもつもの。
- 6-3類 竹管様工具による細い沈線を施すもの。
- 6-4類 口縁部内面が肥厚し、この部分に縄文を施すもの。
- 6-5類 沈線と密な連続刺突を特徴とするもの。
- 6-6類 縦位の集合沈線を施すもの。

98・99B区 SB01 (図版7)

第22図に示すようにSB01出土土器片219点のうち、胎土に繊維を含むものが70%以上を占める。早期後葉の粕畑式と上ノ山式を主体として、繊維を少量含む入海I・II式と想定されるものが2割弱あり、SB01の最も新しい時期として早期末の石山式、天神山式が少量含まれる。

1は楕円押型文(1-b-1類)である。焼成はやや軟質で摩耗が激しく不明瞭となっている。器壁の厚さは11mmと比較的厚く、砂粒を多く含む灰白色を呈し繊維の混入はみられない。高山寺式か。2は明褐色の色調を呈する沈線文系の土器片であり、外面には幅約2mmの深い沈線でまず区画をなし、区画内を平行沈線で充填する関東の野島式に類する施文法がみられるが、器壁の厚さは約9mmと薄い。繊維の混入はみられない(2-a類)。3～5は胎土に多量の繊維を含み、外面に爪形文あるいは米粒状の刺突列を有する粕畑式の範疇に含まれるもので(3-d,3-e類)、4は条痕地に2条の刺突列が波状に施される。5は表裏の条痕がナデ消され平滑になっている。器壁の厚さは9～11mm。6～9は外面に隆帯を有するものであり、胎土に少量の繊維が混入する。6は3条のほぼ平行する隆帯上に上下の2方向から刺突を加える(3-e-2類)。「上ノ山II式」あるいは「入海0式」とされる型式の中間的な特徴を有する形態である。7は口縁部に大きく連続刺突を加えて細かい波状をなし、外面に平行する断面カマボコ形の高い隆帯を有するもので(3-f-1類)、隆帯にも斜傾する刺突を加える。入海I式が想定される。8,9は低く断面も扁平な隆帯を有するもので隆帯



第24図 遺構出土土器の時期別割合

上を細かく刻む（3-f-2類）。入海Ⅱ式が想定される。10は繊維を含まない堅く焼締まった土器で外面に篋条工具による波状文が施される（4-c類）。ここでは最も新しい段階の土器であり早期末の天神山式と考えられる。

99A区 SX03 99A区 SX03（図版7～13）

調査区南西端にあたる谷状の落込みの出土資料である。無文の胴部片も含む出土遺物の時期別破片数を第24図に示す。総破片数1,644点のうち胎土に大量の繊維を含むものが全体の90%以上を占め、これには茅山下層式、元野式、ハッ崎Ⅰ式、粕畑式、上ノ山式の早期後葉の条痕文系土器を想定している。有文土器片での分類では粕畑式が大半を占め、次いで上ノ山式が多い。また少量の繊維混入が確認できたものは約5%あり、入海Ⅰ・入海Ⅱ式がこれに相当すると考えられる。繊維が含まれないものには早期末の石山式・天神山式が含まれる。

11は1点のみ検出された押型文土器で器壁の厚さは約4.5mmを測り、表面横位方向に浅く細密な山形文を密に施す（1-a-3類）。12～79はすべて胎土に繊維が混入し、粕畑式の範疇に含まれる一群（3-d類）である。12～20は比較的堅く焼き締まり、調整・施文ともに丁寧なつくりで粕畑式でも古い様相を示すものと思われる（3-d-1類）。表面に複数条の連続刺突列が認められるもの（12,13,15,16,17）、裏面にも刺突を施すもの（15,27）がある。表裏には貝殻条痕が明瞭であり、口縁部付近では横位、胴部下半では斜方向となる。口縁端部の一部が肥厚した台状の突起部（13,17）に羽状あるいは内外縁に交互に刻目を密に加えるほか、装飾部以外の口縁端部にも同様の刺突を施す。なかでも14,18はやや特殊で角柱状の工具が想定される。20は細く精密な連続刺突文を施す。

22,23,26は平縁で口縁端部に水平または内傾する面を形成する。無文で表裏とも貝殻条痕が明瞭である。29～31は山形縁をなし口縁部に面をもたず丸く終息し、その頂部に刻みを加える。30,31は外面と口縁端部に貝殻腹縁による刺突が施される。

33～44は粕畑式の特徴として挙げられる口縁部付近の貼付装飾突起類である。頂部が大きく凹み酒杯状を呈するもの（33～36）は長径6～7cm、短径3.5～4.5cm前後であり、端部は面を形成して周囲に刻みを施す。皿状を呈するもの（39,40）は径約3cmを測り、周縁に刻みを加える。また頂部の凹みが浅く皿状と円柱状の中間的なもの（41～44）は口縁端部に刻みを加えるが突起頂部は無文である。37は口縁直下に半月形の把手を貼付するので、突起頂部を疎らに刻む。口縁端部は疎らに浅く押圧する。38の口縁端部は棒状の工具による円形の刺突を密に加え、同様の工具で外面にも刺突列を施す。

47,48は平縁で口縁端部と外面に同じ貝殻腹縁による刺突列を施す。表裏の条痕は浅く、やや不明瞭である。刺突1単位の傾きが小さく、連続して縦に近い刺突が施される。

49～55は無文の口縁部、胴部片である。これらは口縁端部に刻みを加えず、表裏の条痕が浅く不明瞭である（3-d-3類）。

45,46,51など穿孔のある資料は多数認められる。いずれも焼成後に内外面から穿孔しており、口縁周辺の部位が多い。外面に残る孔径は約8～13mm、内面では4～7mm程度に集中するようである。

56,57,59は平縁で口縁端部は指頭連続刺突により浅く細かい波状となる。器壁の厚さは7～9mm程度、表裏の条痕はナデにより不明瞭である（3-d-3類）。59は口縁部を挟み込

むように垂直方向に円板状の粘土を貼付するもので、いわば鶏冠状に取りつく装飾突起である。同様の突起は58,60,61,62,63など大小あり多様であるが、突起周辺の口縁部付近は条痕がナデ消され不明瞭となる場合が多い。この57,59の外面には炭化物の付着が認められたため、一部を採取し放射性炭素年代測定の分析を行った。(第4章第3節参照) なお、これらは同一個体の可能性がある。

64～68は口縁端部に対し指頭刺突するものであるが、64は上方からの単方向のもの(3-d-3類)、上方と外面または内面の2方向から押すもの(65～68)がある。66は外面口縁下に不連続に局所的な隆帯を付す(3-e-1類)。67,68の内面には円形に近い刺突が鋸歯状あるいは波状に施される。口縁部と刺突の施文方法など粕畑式～上ノ山式のそれぞれの特徴が複合した中間的な様相をみせる。

70は器壁内外面に貼付文を施すもので器種・土器型式は不明。外面の一部に横位方向の条痕がみられる。繊維は混入しない。茅山下層式に併行するものであろうか。

69は口縁端の内面に1列、外面には2段の刺突列を施し、扁平な隆帯が波状にめぐり、隆帯上を細かく刻む。胎土に少量の繊維が混じる。(3-f-2類)。

71～79の深鉢形土器底部はいずれも内外面に条痕がみられ、胎土に繊維を含む。乳房状、あるいは小平底と形容される形態であり、ほとんどは胴部が緩やかに連続するが、76は底部から急角度で広がるやや特殊な形態をとる。平底は検出されていない。底部端は平であることは少なく、僅かに突出するか浅い凹みを有するもの(73)がみられる。

包含層出土土器 (図版 14～39)

80～134は押型文土器である。すべて小片であり器形全体が復元できるものはない。80は1単位の幅が4mm程度のネガティブの小楕円文に類似する凹みをもつが格子目文の範疇に含まれるものであろう。81,82は扁平につぶれた格子目文、83,84は斜格子目文が施される。器壁の厚さは約8mmを測り、焼成は良好で比較的堅く焼締まっている。85～103,109は外面に山形文が施される。85は幅7.5mm、高さ4mmの特に細密な山形文であり(1-a-3類)、その他は平均して幅7mm、高さ9mm程度であり、103,109はやや幅広の12mm、高さ6mm、器壁の厚さは約7mmを測る。92は丸みを有する胴部片であり、外面上位は山形文、下位は楕円文があり、異なる原体で施文されている。104～108、110～127は外面に楕円押型文が施される。104～108は1単位がタテ・ヨコ5×2mm程度の網目状となる細密な楕円文であり(1-b-2類)、器壁の厚さは約7～11mmを測る。土器型式は不明である。110～127のタイプが最も多い(1-b-1類)。楕円文は1単位の幅約8～10mmあり、器壁の厚さは平均12mm、砂粒を多く含み灰白色を呈するものが多い。114は内面に斜交沈線が認められる。いずれにも繊維の混入は認められない。これらは高山寺式と考えられる資料で、県内では南知多町先苺貝塚、小牧市織田井戸遺跡等にまとまった出土がみられる。

128,129は(1-d類)。口縁の平面形態が丸方形で波状口縁となる砲弾形の深鉢形土器である。外反する口縁端部み刻みを加え、口縁内側の上位には横位に山形文が施される。外面は頸部と胴部の境を幅約5mmの浅い凹線によって区画し、凹線の間に2条の突帯を形成し、突帯上に角柱状の工具を横方向に転がして施文する。胴部上位の文様帯は4分割され、それぞれ竹管状工具を横方向に押引きして幅約6mmの4条の結節沈線を描き、沈線間に幅約2mmの隆帯を形成する。胴部下位は、同じく竹管状工具により縦方向に押引きして

結節沈線を施文する。器壁の厚さは8～厚いところで12mm、内外面ともに暗褐色の色調を呈しわずかに繊維を含む。130～134の胴部片の外面には横方向に平行する数条の結節沈線が施される。これらは押型文の終末期に位置づけられ、中部高地で盛行した相木式に類するものと考えられる。県内の出土事例は知られておらず、東海地方では静岡県富士宮市石敷遺跡でまとまった出土がみられる。

135は外面上位を原体条痕を施文し、やや外反する口縁端部に刻みを加える。田戸上層式に類するものかと思われる。

136～140は胎土に繊維を含まず、沈線によって直線を組合せ幾何学的な文様をあらわす一群で関東の野島式に類するものとおもわれる(2-a類)。141～148は胎土中に角閃石砂粒が目立って多く、内外面ともに暗褐色を呈する。外面には斜方向に原体を転がす、あるいは原体の一方を固定して回転方向に縄文が施される。器壁は比較的厚く、胴部下方と思われる厚いところで13mm、口縁部で6mmを測る。(2-b類) 土器形式は不明。

149は99A区包含層から出土した(図版16)茅山下層式に相当する平底の深鉢形土器である。器壁の厚さは約10mmを測り、胎土に大量の繊維が混入する。平底の底部には敷物の縄文圧痕がほぼ全体に認められ、底部から直線的に立ちあがりながら開く。胴部中位に突帯がタガ状にめぐり文様帯を画しているが、ほとんど屈曲しない。口縁部を欠損しており、上位に2段の文様帯があったものと推定される。隆帯より上の文様帯はまず区画内に縄文(RL)を充填し、その上を指頭による凹線文で円文やS字文、平行沈線が施され、沈線上に半円形の刺突を配する。

150～167も同じく茅山下層式と思われる一群である。口縁部または、胴部上位に屈曲する段をもち胎土に繊維を多く含む。屈曲部段上には刺突が施される。150口縁部は面をなし、外面上部文様帯は指頭による凹線が平行し、その間に縄文(RL)を充填する。151内面は条痕文、外面は指頭による浅い凹線で三角の区画をつくり、凹線上または平行する凹線間に半円形の刺突を施す。164,166胴部も同様の施文方法である。152口縁部は内傾する面をつくり、縄文(RL)を地文に刺突で三角形を描く。154,155は段を有するがほとんど屈曲しない。159は屈曲部段を境に器壁の厚さが異なる。段上には刺突を施し、縄文(RL)と指頭による凹線で構成される。161～163は屈曲部をつくるが突帯を形成しない(3-a類)。県内では豊田市坂上町高樋遺跡等で出土している。

168～170,172は内面条痕文、外面は三角文または鋸歯状文の刺突列を施しその間を指頭ナデにより浅い凹みを形成する。屈曲部は緩く段を形成しない。胎土に繊維を含む。静岡県沼津市元野遺跡を標識とする元野式に相当するものと思われる(3-b類)。

173～185の屈曲部は痕跡程度となり、内外面条痕文、外面に細かな刺突を施す。183は口縁部に指頭連続刺突を加える点やや特異であるが、外面は貝殻腹縁による刺突で鋸歯状文を描く。ハツ崎I式に相当するものと思われる(3-c類)。県内では蒲郡市形原遺跡、東加茂郡旭町坂口遺跡等で出土事例がみられる。

186～338は胎土に繊維を含み、内外面を条痕文で調整し、外面に刺突列を施す。口縁部に装飾突起を貼付する一群である。粕畑貝塚(名古屋市南区)を標識遺跡とする粕畑式の範疇に含まれると思われ、これらは八王子遺跡縄文土器の主体となる資料である(3-d類)。粕畑式はさらに増子康真氏により細分が試みられており、八王子資料においても実際幾つかの特徴が突出してみえる。なお、今回は上ノ山式の特徴ととの中間形態も一部この中に含

めている。

まず、186～195,197,198は表裏の条痕文が明瞭で、爪形や円形（194）の刺突が整然と細かく施される一群である。外面刺突は複数条が認められる場合が多く、内面は同様な形状の刺突列1条を施す。口縁部はおそらく4つの突起部を有する波状を呈すると思われる、内外面から羽状に刻みを加えるもの（188,190）、台状の頂部を肥厚させ刺突を施すもの（187,191,193）、周縁に細かな刻みを加えた酒杯状の装飾突起を貼付するもの（186,189,192）などがみられる。189,192は筒状の形態をとる。これらのセット関係は小片のため確認できていない。以上は粕畑式の中でも古い様相を示すものと考えられる（3-d-1類）。

196,199～355も粕畑式の範疇に含まれる一群である。胎土に繊維を含み、表裏は条痕文、口縁端部に刻みを加える。1条または2条の爪形、貝殻腹縁による刺突列が施されるが、間隔は広くなり、やや雑なつくりとなる。199～207の口縁端部は波状頂部を除いて細くなり、先端に刻みを加える。台状の突起部は若干肥厚し、刻みを加える。207（図版20）は横位に潰れた状況で包含層より検出された。底部と口縁の一部を除いて全体が復元できた数少ない資料である。推定で口径33cm、高さ43cmを測り、口縁部には刻みを加える。2ヶ所の台状の突起がみられるが、口縁端部との厚みの差は小さい。208～234は口縁端部に面をもち、刻みを加える。表裏の爪形の刺突は口縁部断面の先端が細くなるタイプとほぼ同様であるが、貝殻腹縁の刺突は端部に面をもつ個体に多いという傾向が認められる。また、219,222,223,224などは表裏の条痕が不明瞭である。225は小型品で、口縁部の一部を除いて復元できた。口径9.3cm、底部径3cm、高さ11cm、器壁の厚さは14mm前後を測る。表裏は条痕文、口縁端部は刻みを施し、波状口縁の山部の先端をやや肥厚させ、2つの小さな突起部を形成する。外面には全周ではなく部分的に限定して1条の爪形刺突文が施される。234～242は外面に刺突を施す胴部片である。爪形文が多くを占めるが、等間隔に整然と連続するもの、まばらで不連続のものがある。

243～305は口縁部、外面の装飾突起を集めたものである。253～259突起部は酒杯状を呈し、端部周囲に刻みを加える。平面形は正円に近いもの、楕円形のものがある。261～268は茸状あるいは皿状と表現される、装飾突起頂部中央がほとんど凹まず円板状に肥大した形状をなす。突起部に刻みを加えるものは稀で（262）、多くは表裏と同様の条痕調整する。平面形では酒杯状タイプよりやや小さく、径5～6cm前後の円形、楕円形を呈する。270～281は波状口縁頂部の一部を肥厚させ、刻みを加える。比較的小型の台状の突起部を形成する。頂部平面形は楕円、または長楕円形を呈する。282は外面の口縁部に近い位置に半円形から三角形の突起が把手状に貼付される。突起先端は口縁部より高くなり、表面にはほとんど条痕はない。283,284は口縁部外側に張出すように肥厚する突起部である。突起頂部周縁に刻みを加えるもの、無文のものがある。285,286,288,289突起部は小円柱状をなし、まばらに条痕がみられる。287は小円形の肥厚した突起部頂部周縁に刻みを加え、その内面には密接して2段単位の刺突が施される。291～294は表裏条痕文がほとんど認められないもので、突起には刻みが無く、断面形状はわずかに凹むもの、平坦なものがある。295は頂部の長さ1.8cmの小型の台状突起をなすもので、器壁の厚さは先端までほとんど変化しない。表裏にまばらな条痕文がみられる。296～305突起は口縁に対して直角方向に円盤状の粘土塊を貼付し、鶏冠状を呈するものであり、表面はナデ調整の無文のものが多いが、突起周縁に刻みを加えるもの（296,302）もある。

306,307は外面に把手状の突起が貼付されたものである。306突起の平面形は不整楕円形で部分的な刺突と条痕文がみられる。307は水平方向におそらく部分的な1条の突帯を貼付するもので、突帯部分は無文、ナデ調整する。

308～332は表裏の条痕が浅く不鮮明なものであり、傾向として刺突1単位がやや大きく、間隔も一律でないものが多い。333～334も表裏の条痕調整が不明瞭であり、口縁端部に指頭刺突を連続して加える。335も表裏の条痕調整が不明瞭であり、波状につくる口縁の端部を押圧して刺突を加える。336は表裏は条痕調整で、口縁端部刺突は押圧気味で間隔も一律でない。(3-d-3類)

337は貝殻腹縁による連続刺突、338は丸みのある刺突が施された胴部片である。

339,340は口縁部付近外面に突帯を貼付するものであり、399突起は下方に開いた三日月形を呈し、突起上には連続刺突を施す。340は下方に開く円環状に紐状粘土を貼付けたもので、突起上は施文しない。口縁端部は上方から指頭刺突を施す。(3-d-3類)

341～355は端部に対して垂直に単方向からの指頭刺突を施す口縁部である(3-d-3類)。341はやや特殊で、端部に浅い指頭刺突を施し、内面口縁部付近に爪形刺突、外面口縁部付近には指頭刺突、その下には爪形刺突を2条が施される。342の条痕調整は表面は縦方向、裏面は不明瞭である。口縁端部にむかうにつれて器壁が5mm程度と薄くなる。端部の指頭刺突は浅いものが多いが、347のように深く刺突するもの、密接して連続するもの(345,347)などがある。表裏両面とも条痕調整が明瞭なものは少数であり、表面の条痕がナデ消される場合がやや多い。

356～371は表裏条痕が不鮮明となる一群のうち特徴的な口縁部突起、装飾把手、突帯を貼付するものを集めた。356は平面形が細長い楕円となる深い酒杯状の突起をもち、突起周縁に刻みを加える。内面は口縁に沿って2段の刺突列が密に施される。357は平面形が楕円となる無文の酒杯状突起である。358は楕円形の酒杯状突起中央を表裏から押して接合し、二又状につくるもの。359は円柱状の突起上に丸い刺突を連続して施す。360は円柱状に肥厚した突起の周囲に刻みを加え、内面は口縁に沿って1～2段の刺突、外面は口縁部からやや下った位置、水平方向に2段の刺突を施す。361～363は口縁部に対し垂直に粘土塊を貼付し鶏冠状を呈するもので、突起部分は無文、361は隣接して2個が並ぶ。表裏の条痕はほとんどみられない。365～367は外面口縁部やや下った位置に円板状または三角形の粘土塊を把手状に貼付するもので、366は口縁端部に指頭刺突、外面には大型の爪形刺突が不揃いの間隔で施される。366把手は無文で、内面のみ条痕文が明瞭である。367把手は低い円柱状を呈し、その周囲上位に刻みを加える。口縁端部は平坦で無文。369～371は外面に不連続な突帯1条がつくもので、口縁端部と突帯上に刻みを加える。粕畑式～上ノ山式の間間的な様相を示す資料と思われる。

372～425は無文の口縁部片である。口縁端部を平坦につくるもの、先端が細く収まるものがあり、それぞれ端部に刻みを加えるもの、無文のものがある。端部無文のタイプは表裏の条痕が明瞭でなく、縦方向の条痕が比較的多く認められる。なお、焼成後の穿孔は口縁部付近に集中している。すべて粕畑式の範疇に含まれると思われる。

426～443は口縁端部は表裏または上位と表面の2方向から指頭刺突が施されるものである(3-e類)。外面に大型の爪形刺突が施されるもの(437,438,439,442,445)や口縁部に沿って内面にも刺突を施すもの(441)などがある。

444,446,447外面刺突は、丸みのあるやや幅広の爪形で2段または羽状に施す。表裏の条痕文はほとんどみられない。

448は外面口縁部よりやや下に低い凸帯を貼付するもので、凸帯上には貝殻の放射肋を用いて連続刺突される。449は外面口縁部やや下に粘土紐を弧状に貼付する。凸帯上は無文である。

450～527は口縁部外面に複数段の隆帯をめぐらす一群である。隆帯の断面形状と施文方法により大きく分類が可能であり、隆帯断面が半円形で比較的高く、隆帯上に上下交互方向から連続して押圧を加えるもの（3-e-2類,450,451,453,455～459,461）、隆帯が比較的高く、隆帯正面の単方向から連続刺突を加えるもの（3-f-1類,460,462～479,482）、低く扁平で下位が器面にナデつけられた隆帯上に単方向から連続刺突を加えるもの（3-f-2類,483～490,497～527）がある。それぞれに複数条の隆帯が横位に並行するもの、波状または鋸歯状にめぐらすもの（470,472,473,477,497,499,503,504,506,507,509,517）がある。隆帯上の刺突には、やや間隔をもち連続押圧するもの、工具を斜傾させて用いるもの、縦位に用いるものがあり、隆帯形状とは完全に対応しないものの、低く扁平な隆帯には縦位の刺突が密に加えられる傾向がみられる。また、隆帯の刺突と同様の工具によって口縁部付近の内外両面に1～2段の刺突が施され、羽状刺突列（486,487,498,501,502,518）となる場合が多い。

528～563は胎土に繊維を含まない、早期末の資料群である。528～549は器壁の厚さ5mm前後と薄く表裏は平滑で堅く焼締まっている。口縁部付近、外面上位には連続刺突が数条が並行あるいは波状や三角形を描くようにめぐる。刺突は爪形、米粒状や535,536などC字状の浅い刺突が密接して連続するものがある（4-a類）。石山式に相当すると思われる。また、548,549などは連続刺突が押引き気味に施され、550は短い単位で施文具を停止する滞った平行沈線が施される（4-b類）。これらは石山式から天神山式への施文方法の連続的な変化を示すとされる「塩屋中層B式」に相当すると思われる。551～563も器壁の厚さ3～5mmと薄く、表裏は全体に平滑で堅く焼締まっている。異なるのは口縁部付近、外面上位に平行沈線で波状あるいは鋸歯状文がめぐる（4-c類）。沈線は極めて細く浅い。

早期末～前期初頭の資料もごく僅かであるが確認できる。564は口縁に沿って凹線をめぐらし口縁端部を凸帯状につくる。その下には鋸歯状に凸帯を貼付け、凸帯上に工具を転がし縄文を施す（4-e類）。塩屋上層式に相当すると思われる。565,566は口縁端部を折り返して断面三角形に近い横走する隆帯を形成するもので、隆帯上に施文する（4-d類）。565は口縁下にも隆帯が付く。早期末葉神ノ木台式に類するものであろうか。567,568はやや軟質の焼成で色調は赤褐色を呈する。小円棒状の工具を垂直に用い刺突を加えるもので、凸帯状に肥厚する口縁部付近に横位に連続刺突される。前期に属する資料と思われる。569～587は器壁の厚さ3～4mmと薄手で堅く焼締まっている。灰色～黄灰色の白っぽい色調を呈し、外面には口縁部付近を除き、横位に羽状縄文が施される。縄文施文後、横位に平行沈線が施される。574口縁部は内面に角柱状工具による刺突が加えられる。前期中葉北白川下層式（IIa～IIb）に相当すると思われる。（5-b類）

中期以降の資料もごく僅かであるが確認できる。592,593（6-1類）は中期初頭五領ヶ台式。594は半截竹管による半隆起線を描く。山田平式に類するものであろうか。588,589口

縁部と、590,591（6-2類）は中期前半北屋敷式に相当すると思われる。596（6-4類）は中期中葉船元Ⅲ式に相当すると思われる。597（6-3類）はクサビ形の上下交互刺突により鋸歯状文をつくる。里木式に類するものであろう。598,599（6-5類）は中期後葉中富式に類するもの、601～603（6-6類）は外面に縦位の沈線を施す中期後葉～末、山の神式かその直前の形式かと思われる。604は内彎する口縁部をもち、円棒状の工具を用いて口縁に平行する2条の沈線をめぐらし、その間を同じ工具で等間隔に刺突を加える。中期末か。

底部 早期押型文土器の底部は抽出できず不明である。底部片は胎土に含まれる繊維の有無により、早期後葉～前期初頭・前期前葉以降に大別される。形態では表2のように底径の大きい平底（A類）、径3～5cm程度の小平底（B類）、径3cm以下で先端付近がやや括れる乳房状のもの（C類）、底部付近の括れがほとんど無く、底部に若干の面をもつもの（D類）、底部付近が括れがほとんど無い尖底となるもの（E類）などに分類できる。

A類（606,607/658～661）606,607はそれぞれ復元径12.3cm、9.0cmであり、底部からあまり開かず体部が立ち上る。胎土に繊維を多く含む。胎土・形状ともに底部～文様帯まで復元できた149と類似しており、茅山下層式深鉢の底部と思われる。658～661は繊維を全く含まず粗粒砂を多く含む。661外面には木葉痕が残る。これらは前期以降の資料と思われる。

B類（606～625）は径3cm以上で底部付近がわずかに括れるものである。底部は厚さ2.0cm程度あり、接地面はすべて平ではなく若干膨らむもの、逆に凹むものがある。体部への立上りから大型の深鉢が推定される。すべて繊維を多く含み、内面に条痕がみられる。早期後葉粕畑式～上ノ山式段階と思われる。

C類（626～637）は括れ部下が筒状に長いもの、完全な尖底ではなくて若干括れて小さな底部がつくものがある。これらの胎土は一様ではなく繊維を多く含むもの、繊維が少なく砂粒を多く含むもの、繊維を全く含まないものがある。

D類（649～652,654～657）は底部と体部の器壁の厚さの差が小さく、小平底からほとんど括れずにすぐ体部が開く。

E類（638～647）も底部と体部の器壁の厚さの差が小さくB類に比較して薄くなっている。

土製品 662は中央付近で径2.9cm、663は同1.3cmの円柱状を呈し一方が太くなるスタンプ形の土製品である。太い方の面には粘土を貼付する、または細かい不規則な刺突を加えるなどして装飾を施す。胎土には僅かに繊維が確認でき、石英、長石砂粒を多く含む。知多市二股貝塚で入海式段階の「耳栓」と報告される資料に類するもので、県内では二股貝塚で6点、東浦町入海貝塚で3点が出土している。

表2 底部形態分類表

A類	B類	C類	D類	E類

第2節 石器類

八王子遺跡からは、総数3,200点にもおよぶ石器類が出土した。このうち、剥片・石核を除いた製品は869点である。形態的に特徴的な石器を除き、石器自体からの時期比定は難しい。土器類の所属時期により考えるならば、縄文時代早期後半期の表裏条痕文期に属するものが主体であると想定される。以下の報告では、明らかにそれ以外の時期が想定される場合にのみ、特に時期を明記する。今回報告する石器の分類は、表3のように行った。なお、各石器の分類基準については、「2. その他調査区出土の石器」の中で個々に提示していく。

表3 石器分類表

器 種	点 数	点数比率(%)
石鏃	319	36.96
石錐	19	2.20
石匙	21	2.43
スクレイパー類	66	7.65
使用痕剥片	53	6.14
調整のある剥片	117	13.56
階段状剥離のある剥片	51	5.91
楔形石器 1	56	6.49
楔形石器 2	1	0.12
微細剥離の見られる大型剥片	4	0.46
礫器様石器	23	2.67
打製石斧	6	0.70
磨製石斧	3	0.35
礫石錘	3	0.35
切目石錘	2	0.23
磨石・敲石	49	5.68
石皿・台石類	70	8.11
計	863	100.01
石核	17	
剥片	2317	

1 .SX03 出土石器 (図版 40・41)

この落ち込みからは、早期後半の粕畑式期の土器片がまとまって出土している。共伴して出土した石器類もこの時期の所産である可能性が高く、時期的一括性を提示しうる資料として注目できる。

石鏃（1～6）

SX03から出土しているものはすべて無茎鏃である。石材はチャート製と下呂石製とがある。形態的には、先端部角度が開き気味で、全体的に五角形状になるもの(1～3)と三角形状のもの(4～6)とがある。2は中央剥離面に若干磨られたような痕跡が見られる。

石錐（7）

軸部が欠損し、頭部のみになったものと考えられる。両面から丁寧な調整が施されている。

石匙(8・9)

8は縦長剥片を素材とした縦長石匙である。摘部側の端部には、風化面の残存が見られる。表側には全面にわたって調整が見られる。9は横長剥片を素材とした横長石匙である。摘部の作りだすための調整が両面に見られる。刃部周辺の調整は表面からのみで、裏面からは行われていない。

スクレイパー(10・11・13・14)

10は両面から調整が施されている。刃部と考えられる縁辺部は、さらに細かい調整が施されており、その上に使用によると考えられる階段状剥離が若干見られる。11は一部礫風化面の残存する剥片で、縁辺には表側から細かい調整が施されている。13は剥片の両面から調整を施している。14は刃部調整は剥片表面からである。

使用痕剥片(12・15)

12は表面に礫風化面を残す剥片で、鋭くなった一縁辺に微細剥離が見られる。15も打点側の端部に礫風化面を残す縦長剥片で、その側辺に微細剥離が連続する。

楔形石器?(16)

対向する辺に階段状剥離が見られるため、その可能性を示しておく。

調整剥片(17～25)

調整の加えられた剥片が数辺出土している。22・23・24以外は礫風化面の残存が見られる。23は縁辺に裏面からの調整がみられ、22は周囲が剥離されており、石核の可能性もある。25は形状では尖頭器の未成品に見えるものの、薄手で断面形状に違和感がある。

磨製石斧(26)

SX03より1点のみ出土した。側面に面のみられるもので、最終調整として全面研磨がなされている。研磨調整により稜が立っている。刃部には、使用のためか、若干の潰れたような剥離痕が見られる。

石皿・台石類(27)

27は平坦な部分があり、その部分で作業をした可能性のあるものである。扁平な礫に目立った加工を加えず、そのまま使用している。花崗岩製で、後述する石皿・台石類と同様の石材である。

2. その他調査区出土の石器

石鏃(図版42～45, 28～151)

刺突具としての形状を有し、かつ矢の先端に装着が想定されうものである。総計319点が出土し、第1節での6点以外に124点を図化した。出土した石鏃の基部形態別では、凹基鏃267点、平基鏃29点、柳葉形1、有茎鏃5点、不明が17点で、凹基と平基とで合わせて92.8%を占める。調整により著しく鋸歯縁にしているものは認められない。

凹基鏃は93点図化した(28～120)。先端部の形状が三角形状のもの(28～75)もあれば五角形状を呈するもの(76～120)もある。大きさも長さが1 cm前後のものから3 cmを越えるものまで、さまざまである。調整は両面同様に行っているものや、39・40のように「剥片鏃」といわれる、片面のみの調整のもの、90のように両面側辺のみの調整のものともさまざまである。平面形状で、左右非対称のものがいくつか見られるのも、特徴として挙げることができる。

平基鏃はすべて図化した(121～149)。平面形状に三角形と五角形とがあるのは、凹基鏃と共通する。製作技法なども凹基鏃と共通していると考えられる。138の様な形態のものは、早期前半押型文土器に伴うものであろう。

150は柳葉形としたものである。基部の形状が左右非対称になってる。107～111のような形状の石鏃の基部が欠損し、再調整を施された可能性も考えれる。

有茎石鏃は1点のみ図化した(151)。平面形状は、五角形を呈するものである。八王子遺跡出土石鏃のなかでは異質であり、時期が下るものと考えられる。

石錐(図版 46, 152～169)

刺突具状の形態を呈するもので、先端部に微細剥離痕および摩滅痕の見られ、回転運動が行われたと推定されるものを、この名称で報告する。計18点出土し、「1. SX03出土石器」で1点図化した以外をすべて図化した。平面形状として、三角形を呈し先端部を作りだしているもの(152～163)と、全体に細身・棒状であるもの(164～169)とが見られ、摘部が軸部から明確に作りだされているものは、SX03から出土した7のみである。作業した部分が1箇所であるものが多いものの、中には160のように使用部分が2箇所見られるものもある。先端部の反対側および軸部の一部に、石材の風化面が残存しているものも見られる。159は形態的および作られ方などで、石鏃との共通性が見られる。使用石材は、チャート・下呂石・石英(水晶)と、石鏃と共通している。中でも下呂石に関しては、156のように角礫出自のものが含まれているのは、注目されよう。

石匙(図版 47～48, 170～187)

摘部を有するスクレイパー類をまとめる。計21点出土し、「1. SX03出土石器」での2点を除き18点を図化した。素材剥片の種類や摘部の付け方、刃部の付け方などから、以下のように分類できる。

1. 縦長の素材剥片を使用し、縦長石匙にしているもの(173・174・176・180)。その中でも、173と174・176・180とは区別できる。前者は断面形状がかまぼこ形を呈し、全体に調整が施され風化面の残存が見られない。一方後者は断面形状が扁平で、摘部に石材の風化面の残存が見られる。また、173の表側の一部には風化の度合いの異なる剥離が見られ、再調整の可能性も考えられる。

2. 横長の素材剥片を使用し、横長石匙にしているもの(181・182・185・186)。断面形状が扁平で、刃部調整は片側からのみである。182は、形態的な特徴より、前期北白川下層式に伴うものとして知られているものであろう。185は、横長剥片に、いわば斜めに摘部を作りだしているものである。

3. 横長の素材剥片を使用し、縦長石匙にしているもの(170・171・177～179)。これは先端部が尖るという共通性が見られ、刃部調整の範囲も一辺と先端部を越えて反対辺の一部まで見られるのが特徴的である。刃部調整は片側からのものと両側から行っているものと両者が見られる。178の刃部調整剥離面には他の剥離面に比べ光沢が見られる。

4. 縦長の素材剥片を使用し、縦長石匙にしているもの(183・184)。扁平であるが厚みがあり、摘部の幅が広めであることが特徴的である。刃部調整は片側からのみである。

5. その他(172・175・187)。以上以外のものをまとめた。172は、欠損した縦長の素材剥

片を使用した縦長石匙を再調整して、横長石匙にしていたものと考えられる。175は小型の石匙である。横長の素材剥片を使用し、縦長石匙にしている。187も小型の石匙の可能性があるので、調整などを見ると石鏃との共通性が高い。石鏃の欠損品の可能性も考えられる。

使用されている石材は、チャート・下呂石・熔結凝灰岩が主体であり、サヌカイトと思われる灰色の安山岩や珪化木・ホルンフェルスも見られる。

スクレイパー類(図版 48～51, 188～230)

ここでは刃部調整のみられるものをまとめた。計65点の出土を見、第1節で報告した4点以外に43点を図化した。これらも素材剥片と刃部の位置から、さらに次のように分類できる。

1. 縦長剥片の側辺に刃部調整の見られるもの(188～193・195～200)。平面形状が長楕円形および長方形を呈するものが多い。刃部調整は片側から行っているものと両側から行っているものの両者がある。表面や側面の一部に、石材の風化面の残存が見られるものもある。

2. 縦長剥片の斜辺部の一部に刃部調整の見られるもの(194・201～211・216)。平面形状が三角形を呈するものが多い。鋭角気味の斜辺に刃部調整が見られるが、尖った先端部を越えた斜辺にも調整が加えられているものもある。これも刃部調整は片側から行っているものと両側から行っているものの両者がある。

3. 横長剥片の斜辺部に刃部調整の見られるもの(212～215・224)。これらも平面形状が三角形を呈する。刃部調整は片側から行っているもののみである。

4. 横長剥片の端辺に刃部調整の見られるもの(217～222)。これらは横長剥片としたものの、長方形もしくは長楕円形を呈する剥片に対して斜行した方向で剥されたもので、実際は縦長剥片の側辺に刃部調整の見られるものと同質かもしれない。刃部調整は片側から行っているものと両側から行っているものの両者がある。

5. 縦長剥片の端辺に刃部調整の見られるもの(230)。該当するものはこの一点のみである。刃部調整は片側からのみ行っている。

6. 横長剥片の側辺に刃部調整の見られるもの(223・225・228・229)。223は一方が摘部のように作りだされており、ここでの「石匙」の部類かもしれない。225は両側から刃部調整が施されているものである。

7. その他(226・227)。226は縁全周にわたり調整の見られるもので、227は横長剥片の打面側に調整が見られるものである。使用の際の明確な微細剥離が認められないことから、調整のみられる剥片の部類かもしれない。

使用されている石材は、チャート・下呂石・石英(水晶)・熔結凝灰岩・黒曜石・サヌカイトと思われる灰色の安山岩が見られる。

使用痕剥片(図版 52～54, 231～270・272・273)

刃部と考えられる鋭利な辺に、微細剥離の見られるものをまとめた。計54が出土し、ここでは「1. SX03 出土石器」で報告した2点以外に40点を図化した。これも素材剥片の種類と、微細剥離の見られる部分により、以下のように分類される。

1. 縦長剥片の側辺および斜辺に微細剥離の見られるもの(231～267)。
2. 横長剥片の側辺に微細剥離の見られるもの(268～270)。
3. 縦長剥片の端辺に微細剥離の見られるもの(272・273)。

以上、素材剥片の使われ方や微細剥離からみる刃部とする使用部位は、スクレイパーと同様である。使用されている石材は、チャート・下呂石・石英(水晶)・サヌカイトと思われる灰色の安山岩などが見られる。

調整のみられる剥片(図版 54・55, 271・274～288)

今まで挙げた以外の、調整の施されている剥片をまとめる。この中には、製品としての石器と、石器製作途中のいわゆる「未成品」という想定のできるものも含まれている。その中でも、275・276・279～281は、平面形状三角形を呈し、定型化しているものかもしれない。

階段状剥離のみられる剥片(図版 55・56, 289～302)

石鏃などに代表されるいわば「小型」の剥片石器の中で、現存で一辺のみに階段状剥離が顕著に見られるものである。一部、「スクレイパー類」での調整や、「スクレイパー類」・「使用痕剥片」で使用痕として階段状剥離化したものや、後述する「楔形石器」の断片も含まれている可能性がある。計51点を数え、そのうち14点を図化した。平面形状が方形を呈してるものが多い。

楔形石器 1 (図版 56・57, 303～326)

対向する二辺に階段状剥離のみられるものを集めた。計57点出土し、24点を図化した。扁平な方形を呈するものと、柱状のものに二分される。二辺のみならず、四辺全周にわたり階段状剥離の見られるものもある(322など)。柱状のものは、階段状剥離が短辺のみに見られる。

楔形石器 2 (図版 57, 327)

対向する二辺に階段状剥離が見られるものだが、大型で肉厚があるため、上記とは別にした。石英(水晶)の結晶の向かい合う両端辺に、階段状剥離が見られる。図面上端の方に細かい剥離が多く見られる。

石核類(図版 58・59, 328～339)

石鏃を中心とする「小型」の剥片石器に対する残核と想定されうるものである。計17点のうち、12点を図化した。亀の甲状に残されているもの(328～330・332)と船底状に残されているもの(336～339)などが見られる。石材は、チャート・下呂石・石英(水晶)・熔結凝灰岩・黒曜石である。

微細剥離のみられる大型剥片(図版 60, 340 ~ 343)

いわば「大型」の剥片石器で、上記の「スクレイパー類」・「使用痕剥片」と同様の使用法が想定されるものである。計4点見られ、すべてを図化した。縦長剥片を素材剥片とし、側辺に使用部位の見られるもの(340)と横長剥片の端部に使用部位の見られるもの(341 ~ 343)がある。石材はすべてホルンフェルスである。

礫器様石器(図版 60・61, 344 ~ 348)

礫素材の一部に刃部を作りだしたいわゆる「礫器」のみならず、剥片素材か礫素材かは不明であるものの、肉厚な同様の石器もこのなかに含めた。計23点出土し、5点を図化した。一部、石核である可能性も考えられるか。一面には礫風化面が残されているものが多い。石材はすべてホルンフェルスである。

打製石斧(図版 61, 349 ~ 351)

打製の製作技法による、斧状の形状を呈しているものにこの名称をあてる。計6点出土し、うち3点を図化した。出土したものはすべて基部断片のみで、全形を伺い知るものは見られなかった。349は表裏とも同方向からのみの調整が見られ、この中では比較的大型のものになると考えられる。350・351とは区別できよう。すべてホルンフェルス製である。

磨製石斧(図版 61, 352・353)

最終調整が磨製技法による、斧状の形状を呈しているものにこの名称をあてる。計3点出土し、「1. SX03 出土石器」で報告したもの以外をすべて図化した。352は細身の両刃石斧である。刃部は使用のためか、刃こぼれ状の剥離が見られる。353は扁平な両刃石斧で、表面には敲打調整の痕跡が残る。側面観・断面形状で見られるように、左右は非対称を示している。再調整の結果かもしれない。352は玄武岩製、353は蛇紋岩製。

切目石錘(図版 61, 354・355)

2点出土し、すべてを図化した。354・355とも扁平な長楕円形の礫素材の両端部に、切目が施されている。これらは縄文後期以降など、時期的に下る遺物である可能性が高い。両者ともホルンフェルス製。

礫石錘(図版 61, 356 ~ 358)

3点出土し、すべてを図化した。これらも扁平な長楕円形の礫素材の両端部に、剥離および階段状剥離が施されている。ホルンフェルス製。

磨石・敲石(図版 62 ~ 64, 359 ~ 385)

磨石・敲石は本来作業動作が異なるため区別すべきであるが、敲打痕と磨り痕が両者見られるものが多いため、ここでは一括して報告する。49点出土、27点を図化した。さらに以下のように分類できる。

1. 径5 cm 前後の小型の円礫状のもので、主として磨り痕の多く見られるもの(359 ~ 367)。磨る行為により、作業面に複数の平坦面が形成されたものもある(360・361・363・367)。

2. 細長い柱状の形態を呈し、端部に磨り痕の見られるもの(368)。一点のみである。両端に磨り痕が見られた。

3. 径10cm前後の円礫状のもので、主として磨り痕と敲打痕の両者が見られるもの(369～385)。敲打痕・磨り痕は礫の表面・側面・端面とそれぞれに見られ、一石器で各面を使用しているものもある。形状は、方柱状のものと扁平な楕円形状のものが見られる。

石材は、花崗岩が多く、濃飛流紋岩や安山岩も見られる。

石皿・台石(図版 65～67, 386～393)

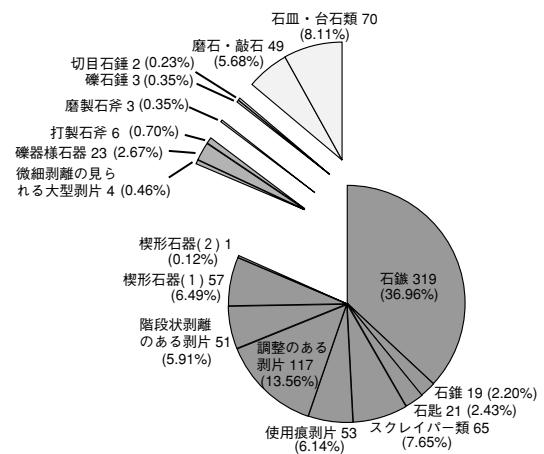
扁平な石材の一面もしくは複数面が、作業により使用されたと想定されうるものを集めた。この石器に関する認定は八王子遺跡埋没の状況からでは非常に難しく、土石流による自然石であるものの平坦面が磨れているものとの峻別が困難であった。そうした状況ではあったものの、石皿・台石として使用された比較的可能性の高いものを中心に8点図化した。石材は、すべて花崗岩である。

3. 出土石器について

製品とした863点について、組成を示したのが第25図である。上記したように、今回報告する石器群には、一部形態などより縄文早期後半とするには難しいものも含まれている。しかし、それらは数量的には主体を占めないと考えられることから、ここでは一括した組成比を示す。

出土量が多いのは、石鏃に代表される比較的「小型」の剥片石器で、全体の4分の3を占める。八王子遺跡では、これらが石器群の主体を占めていると言える。さらにその中でも、石鏃の出土量が最も多く、点数比では全体の4割弱を占める。

一方、磨石・敲石も49点と、まとまった数量存在することも注目される。特に、磨石・敲石の1とした一群の存在は、岐阜県関市神野遺跡(篠原ほか1985)などでも出土しており、使用痕として磨り痕が主体として顕著に見られる点も合わせて、意義付けなど更なる検討が必要であろう。石皿・台石類もまとまった数量になっているが、上で述べた事情により、実際には数量的には少なくなるであろう。



第25図 出土石器の組成

4. 石材利用について

上でも石材について若干触れたが、ここで石材利用の在り方について整理する。

まずは、石器の器種ごとの利用石材についてまとめてみる。表4は、主な石器に使われている石材一覧である。石鏃・石錐・石匙・スクレイパー類・使用痕剥片・調整のある剥片・階段状剥離のある剥片・楔形石器は共通した石材を使用している。剥片・石核も上記の石材と共通しており、これらに対する剥片であり石核であったものと考えられる。サヌ

カイトと思われる灰色の安山岩は製品に若干みられるのみで、剥片・石核には見られない。また、微細剥離の見られる大型剥片・礫器様石器・打製石器・磨製石斧・礫石錘・切目石錘では、ホルンフェルスの利用が広く見られる。磨製石斧では、その他に玄武岩・蛇紋岩も見られる。磨石・敲石では、凝灰質砂岩・砂岩・安山岩・花崗岩・濃飛流紋岩と、上記の石器とは石材利用の差が明瞭である。また、ここで石皿・台石としたものは、すべて花崗岩である。

次に、石鏃に代表される比較的「小型」の剥片石器について、石材利用率をみる(第26図)。上7本が石器の個体別石材利用率で、下の1本が出土剥片の重量比である。上7本を見ると、主体はチャート・下呂石であることが明らかであり、そのなかでもチャートの利用が優位である。一方、剥片重量別出土比率を見ると、石英(水晶)が大多数となっている。これは、八王子遺跡の立地する地点では付近に元来から石英(水晶)が多く散布していることが関係していると考えられる。八王子遺跡では、剥片石器の石材として石英(水晶)の利用率が高いが、これは付近で採取可能であったという特殊事情によると考えられる。

下呂石には石器・剥片・石核で、礫風化面が残存しているものが散見される。多くは、表面が白色に風化した、いわゆる「円礫」出自のものが多い。しかし、156などいわゆる「角礫」といわれるものも若干見られることから、複数ルートによる下呂石流通を想定することができるであろう。

(川添和暁)

参考文献

青木 修ほか,1991『二股貝塚』知多市教育委員会。

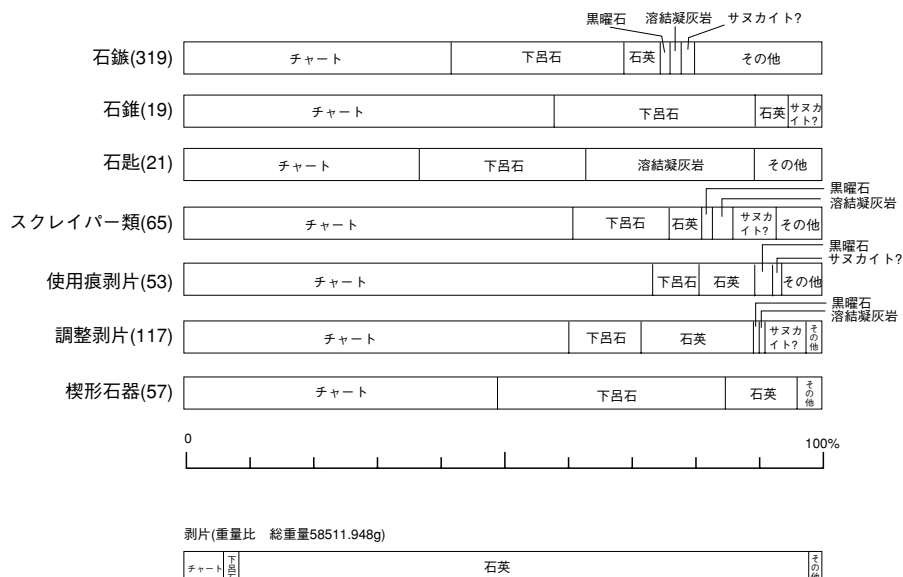
篠原英政ほか,1985『神野遺跡』関市教育委員会。

谷口和人編,1997『西田遺跡』財団法人 岐阜県文化財保護センター。

渡辺博人編,1999『蘇原東山遺跡群発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財調査センター。

表 4 主要石器石材一覧

器種 \ 石材	チャート	下呂石	石英(水晶)	黒曜石	サヌカイト?	溶結凝灰岩	安山岩 1	珪化木	泥 岩	ホルンフェルス	凝灰質砂岩	砂 岩	結晶片岩	玄武岩	蛇紋岩	安山岩 2	花崗岩	濃緑流紋岩
石鏃	●	●	●	●	●	●	●											
石錐	●	●																
石匙	●	●	●			●		●		●								
スクレイパー類	●	●	●	●	●	●	●		●									
使用痕剥片	●	●	●			●				●								
調整のある剥片	●	●	●	●	●	●				●								
階段状剥離のある剥片	●	●	●		●	●			●									
楔形石器 1	●	●	●			●												
微細剥離の見られる大型剥片										●								
礫器様石器							●			●	●							
打製石斧										●			●					
磨製石斧										●				●	●			
礫石錘										●								
切目石錘										●								
磨石・敲石											●	●				●	●	●
石皿・台石類																	●	
剥片	●	●	●	●		●	●		●	●								
石核	●	●	●	●		●												



第 26 図 剥片石器の石材利用比率

第3節 古代～近世の遺物

古代 古代の遺構は全体に希薄である。調査範囲北端の00A区SD03、SD04で遺構に伴って10世紀代の遺物が検出されたのみであり、分布域は木下川側に限定されるようである。

(1182)は98区SK45中世土坑の混入資料。3ヶ所に透しが入る須恵器高坏の脚部。00A区SD04およびSD03からは灰釉陶器碗皿類(1179,1178,1175,1177)が出土している。底部(1179,1178)は、直線的に細く高い高台が付き、内面には使用による摩滅が認められる。H-72号窯段階の深碗。(1177)は断面三日月形の高台が付く深碗。O-53号窯段階。また皿(1180)は径11.8cm、器高1.6cmで、断面方形に近い低い高台が付く。内面の口縁部周囲のみ施釉される。H-72号窯段階。

(1176)00B区包含層の灰釉陶器碗は釉薬は見込と高台部分を除いた範囲を漬け掛け。内面見込部分と高台接地面に摩滅が認められる。O-53号窯段階。

中世～近世陶器は各調査区全体に散漫な分布がみられるが、特に県道以南の98区は土坑、建物柱穴など多数の遺構が展開しており、包含層に含まれる遺物量も調査範囲内では突出して多い。

98区SK17 98区SK17 意図的に埋納あるいは廃棄されたと思われる比較的良好な土坑一括資料である。(図版68、表5)

土坑中央で横位の状態で検出された(1032)灰釉瓶子は頸部を打ち欠き、欠損部は検出されていない。肩部に貼花を施し、牡丹文が3ヶ所に配される。その下腰部には3本1単位の波状文3段が櫛状工具で描かれ、さらに波状文の下にも沈線2条がめぐる。締腰の形状となる瓶子でありやや高い脚がつく形態が一般的であるが、これは厚い平底となり糸切痕を残す。釉薬は淡い緑色を呈す透明釉であり、肩部には厚くかかり底部付近は露胎となる。古瀬戸後期I段階に比定される。

同遺構では瓶子の周辺に古瀬戸中期段階の灰釉丸皿(1029,中期Ⅱ・Ⅲ)、灰釉折縁深皿(1021,中Ⅳ)、古瀬戸後期前半段階の灰釉平碗(1028,後Ⅱ)、縁釉小皿(1030,1031,後Ⅱ)、灰釉卸皿(1027,後Ⅱ)、錆釉内耳鍋(1026,後)、灰釉折縁深皿(1024,1022,後Ⅰ)、匣鉢蓋(1023,後)などがある。古瀬戸前期段階の資料もあり、灰釉四耳壺の口頸部(1025,前Ⅲ-Ⅳ)が検出されている。また、以上の施釉陶器では、焼成時の破損品あるいは釉薬が発色しなかった不良品ともいえる製品が多くを占める。

土坑内に置かれた複数の花崗岩礫周辺外側と礫を取り除いた下層で、多数の灰釉系陶器(山茶碗)と小皿を検出した。完形に近く遺存状況の良い資料が多く、碗2個体が合わせ口で置かれたやや特殊な出土状況をもみられた。(1001～1018)の山茶碗はすべて第10型式とされる形態である。平均して口径13.7cm、器高4.8cm、底部径は5.3cm、軟質に焼成されるものが多く全体がやや白っぽい色調を呈す。見込中央の指圧痕は無い、または痕跡程度である。軟質の焼成であるにもかかわらず、内面と底部に使用による摩滅は認められない。小皿は瀬戸窯の製品はなく、(1019,1020)は東濃産大洞東窯式段階。内面周囲はコテナデの跡が明瞭で見込中央には指圧痕がみられない。

98区SK19 98区SK19 古瀬戸中期を中心とした資料であり、細片が多い。天目茶碗(1033,中Ⅲ)は

口径12cm、口縁端部付近の折れは緩い。灰釉平底末広碗（1034, 中 I-II）は口径13.6cm、底径5.2cm、底部を除いて施釉し底部に回転糸切り痕が残る。灰釉の壺か瓶の肩部（1038, 中 I-II）は横位に5条1単位の沈線がめぐる。匣鉢蓋（1037, 後期か）は外面には自然釉がかかる。片口鉢はやや時期幅があり（1036）の口縁端部には浅い凹みがめぐる。（1035）は10型式段階。山茶碗（1039）は内面見込に指圧痕があり、第9型式段階。山茶碗（1181）は第4型式段階と遺構資料中では最も古く混入と思われる。内面口縁部付近に一部ススが付着する。灰釉折縁深皿（1040, 中 III）の体部は丸みをもち、口縁部は短く折れ、口端部は厚みを増して丸く収まる。

- 98 区 SK18 98 区 SK18 灰釉折縁深皿（1041, 中 III-IV）は灰釉が発色していない焼成不良品。
- 98 区 SK152 98 区 SK152 灰釉卸皿（1043, 中 III）の体部は緩やかに内彎し、口端部は面をなし内側がやや突出する。内外面底部を除き施釉。匣鉢蓋（1042, 中期後半～後期）は比較的口径の小さいタイプ、外面に自然釉かかる。
- 98 区 SK40 98 区 SK40 山茶碗は第8型式（1044,1046）～第9型式（1051,1050,1045）に収まる。いずれも使用による摩滅は認められない。灰釉折縁深皿（1048,1049, 中 IV）は釉薬刷毛塗り。（1048）は（1040）に比較して口縁部の折れの幅がやや広く、端部はわずかに内側へ折り返す。灰釉平底末広碗（1052, 中 III か）は底部を除いて施釉。底部に回転糸切り痕が残る。鉄釉合子蓋（1053, 中 I-II）上部には貼付文により3分割して装飾が施される。中央部のつまみは剥落している。灰釉柄付片口（1047, 中 II-III）の底部。
- 98 区 SK79 98 区 SK79 灰釉小壺（1057, 中 I-II）の胴部下半分には鋭利なヘラで格子状の彫文が施される。
- 98 区 SK44 98 区 SK44 鉄釉茶壺（1059, 中 III）は口径10cm。頸部下が屈曲して稜をつくる。胎土は祖母懷茶壺に比べると緻密でなく鉄分も少ない。鉄釉が厚く掛かる。
- 98 区 SK43 98 区 SK43 灰釉梅瓶の肩部（1060, 中 I-II）には2条の沈線がめぐる。山茶碗（1061）は第9型式。灰釉水滴（1062, 中 I-II）は口縁部直下に剣菱文の印花文をめぐらす。片口鉢（1063, 9 型式）の下半部はケズリの単位が明瞭に残り、底部方向にヘラケズリ、のちヨコ方向にも軽くヘラケズリする。断面逆三角形の高台が付き、高台内は未調整。内面の摩耗が顕著であり、内面の一部にススが付着する。
- 98 区 SK45 98 区 SK45 山茶碗は瀬戸窯の製品（1064, 8 型式、1065, 9 型式）と東濃産（1066, 大洞東、1067, 脇之島）がある。使用による摩滅は認められない。鉄釉の壺または瓶の胴部（1068, 中 I-II）は画花文の一部がみえる。胴部でも上位部分と思われる。
- 98 区 SK237 98 区 SK237 灰釉折縁深皿（1069, 中 II）は折縁部分の幅は1.9cmあり、ほぼ水平となる方向に折れ、端部は短く折り返し丸く肥厚する。体部下半と底部にヘラケズリの痕跡が明瞭

である。口径 29.2cm、底径 15.6cm、釉薬はほとんどが剥離している。

- 98 区 Pit09 98 区 Pit09 灰釉小壺（1070, 中期か）は口縁部を欠損しており、底径 5.8cm。外面胴部下半と底部を除き施釉する。底部には回転糸切り痕を残す。
- 99C 区 SK29 99C 区 SK29 山茶碗（1071）は第 8 型式。小皿（1072）は第 6 型式。両者とも見込に指圧痕を残す。灰釉小壺（1073, 中 I-II）は口径 5.2cm、底径 5.4cm。胴部外面にはロクロ目が明瞭に残る。胴部下半と底部を除き施釉する。
- 98 区 SK29 98 区 SK29 灰釉柄付片口（1074, 中 III）は、口径 16.4cm。片口鉢（1078, 第 9 型式）は口径 27.6cm、底径 10.6cm、器高 13.4cm。開き気味に断面逆三角形の高台が付く。下半部は回しながら底部に向かってヘラケズリしたのちヨコ方向にも軽くヘラケズリし（1063）と同様の調整方法がみられる。口縁端部には浅い凹みがめぐり、高台内は未調整。内面、見込に使用痕は認められない。
- 98 区 Pit18 98 区 Pit18 灰釉縁釉小皿（1075, 後 III）は口径 10.0cm、底径 4.8cm、器高 2.5cm。見込に鉄釉が、底部にはトチが溶着している。
- 98 区 Pit195 98 区 Pit195 鉄釉双耳小壺（1076, 後 IV か）は耳部分を欠損している。口径 3.2cm、底径 4.8cm、残存高 4.9cm。底部を除いて施釉する。内面にも広範囲に釉がかかる。
- 98 区 SK144 98 区 SK144 鉄釉燭台（1077, 後 IV 新）は脚部の胎土に気泡を多く含む。暗緑褐色の釉が厚く掛かる。
- 98 区 SK136 98 区 SK136 灰釉三耳壺 2 点（1079, 1080, 中 II）。これらの釉薬は焼成不良で発色していないか剥離している。（1079）は肩部に 5 条を 1 単位とした沈線が 2 段めぐり、耳に櫛描文を施す。（1080）は肩部に 3 条を 1 単位とした沈線がめぐり、菊の印花文をめぐらす。耳は小さく無文。山茶碗（1086）は見込の指圧痕が比較的明瞭であり、第 9 型式。
- 98 区 SK56 98 区 SK56 灰釉丸皿（1081, 中 II）は口径 8.2cm、底径 5.0cm、器高 2.8cm、底部を除いて施釉する。底部付近に焼成段階のヒビ割れがみられる。灰釉平底末広碗（1082, 中 I-II）は底部を除き施釉する。見込に長石砂粒が多く付着する。灰釉四耳壺底部（1084, 中 IV）は高台内も含めて全面に釉薬が掛かり、底部には溶着が認められる。灰釉折縁深皿の底部（1085, 中 III-IV）は焼成不良品で釉薬が剥離している。尾張型小皿（1083, 8-9 型式）。
- 98 区 SK15 98 区 SK15 天目茶碗（1087, 後 II）は口径 12.3cm、底径 4.6cm、器高 6.2cm。体部はやや直線的に開き口縁部は緩やかに屈曲し、下半から高台部分に錆釉が掛かる。浅い内反高台か。鉄釉小壺底部（1088, 後 IV か）は底部を除き施釉する。底部は回転糸切りし、一部に釉が垂下して付着する。

- 98区SK49 98区SK49 天目茶碗（1089,後I）は口径12.3cm、底径4.6cm、器高6.2cm。体部は丸みをもち口縁部屈曲も緩い。削り出し輪高台。灰釉平碗（1091,後I-II）。灰釉折縁深皿（1092,中IV）。錆釉内耳鍋（1090,後IV新）。
- 98区SK160 98区SK160 天目茶碗（1093,後IV古）は口径10.8cm、底径4.0cm、器高6.3cm。厚く鉄釉がかかる。高台部分は露胎で、内反高台。胎土は比較的精良で緻密である。
- 98区SK27 98区SK27 灰釉平碗（1094,後IV古）は口径16.1cm、底径4.8cm、器高6.0cmで削出輪高台。灰釉天目茶碗（1095,中I）は底径3.7cmであり、付高台。
- 98区SK112 98区SK112 灰釉平碗（1096,後IV古）は口径14.8cm、体部は直線的に開き口縁部付近はやや肥厚する。錆釉羽付釜（1097,後IVか）の鐔の面取は弱く、断面は三角形に近い。外面下半部に薄くススが付着する。
- 98区SK10 98区SK10 径約50cmの土坑（第18図）一括資料である。灰釉平碗底部（1101,中IIIか）は断面が方形に近い付高台、高台内に糸切痕が残る。灰釉平碗（1098,後IV古）は口径16.0cm、底径5.2cm、器高5.9cm。体部は直線的に伸び、口縁端部は内側に緩い稜をもち細くすばまる。低い削出高台が付く。鉄釉壺底部（1099,中IIIか）は内面に釉が掛かり、外面底部にも垂下した釉が付着する。灰釉盤類底部（1100,後I-II）は底径10.5cm、釉ハケ塗り。匣鉢（1102,後期）は口径17.3cm、底部径17.6cm、高さ23.5cmあり、一般的な形態よりかなり器高が高い。瓶のような器種を焼成したものであろうか。上部口縁部から約1cm下、対角線上に2ヶ所の穿孔がみられる。錆釉内耳鍋（1108,後IV新）は内耳を欠損しており、同位置に穿孔を施している。底部に被熱の痕跡あり。
- 98区SK64 98区SK64 古瀬戸後期段階の土坑一括資料である。鉄釉平碗（1103,後IV古）。天目茶碗（1104,後IV古）は内反高台で露胎。灰釉直縁大皿（1107,後IV）は端部に面を持つ。土師器皿（1105,1106）はロクロ成形で底部は回転糸切り。底部径はそれぞれ4.4cmと5.0cm。
- 98区SK14 98区SK14 錆釉内耳鍋（1110,後IV新）は使用痕なし。東濃産小皿（1109,生田）。
- 98区SK74 98区SK74 灰釉天目茶碗（1111,後IV古）は体部のみ。高台付近は露胎。灰釉盤類（1112,後III）は釉薬ハケ塗りで、底部に三足が付く。擂鉢（1113,後IV古）は底部から直線的に開き、口縁部はやや外反しながら端部を内側へ折返す。全面に錆釉を施し、擂り目は4条1単位で見込部分には無い。底部に糸切痕を残す。擂鉢底部（1114,後III-IV）擂り目は5条1単位で見込部分には無い。いずれも未使用である。
- 98区SK286 98区SK286 灰釉平碗（1115,後期IV古(新)）は口径15.8cm。体部はやや丸みをもって立ち上る。灰釉縁釉小皿（1116,後IV(古)）底部は回転糸切り痕を残す。内面の一部にススが付着する。

遺構外出土遺物

中世～近世の遺物が比較的多かった98区の土坑および包含層出土遺物と99区、00区の遺構出土遺物について器種・時期別破片数のカウントを行った。(表6～12)

◎山茶碗・小皿

遺構出土および包含層出土遺物の破片数では、山茶碗は尾張型第9・10型式を主体として、わずかに第5・6・7・8型式段階のものが散見される。(1117)は第7型式。(1118～1120)は尾張型第9型式、(1123)は第7・8型式、小皿は(1124)が第9型式、(1125)は口径9.2cm、底径5.6cm、器高2.1cmの第11型式。東濃産山茶碗は大畑大洞～生田窯段階まで各時期のものが少量ずつ確認される。碗(1121)、小皿(1122)はは大畑大洞(古)窯段階。碗の見込に指圧痕をとどめる。

◎片口鉢

(1126,10型式)は復元径29.6cm、体部外面下半の調整は底部方向のケズリ、のち特に体部下方をヨコ方向に軽くヘラケズリする。口縁端部には大きく幅約7mmの凹みがめぐる。

◎折縁小皿

(1127,中Ⅱか)は内面にトチが溶着する。(1128,中Ⅲ-Ⅳ)は前者より口縁部の折れがやや強い。どちらも口径8.5cm、底径5.0cm、器高2.3cm。

◎天目茶碗

(1129,後Ⅰ-Ⅱ)は口径13.0cm、内外面一部に灰釉が垂下する。(1130,後Ⅱ)は口径10.8cm、高台付近は露胎。(1131,大窯1か)は口径11.2cm、高台付近は錆釉が掛かる。

◎灰釉平碗

(1134,中Ⅱ)は付高台であり高台付近まで釉が掛かる。(1132,後Ⅲか)は口径15.2cm、底径4.4cm、器高6.4cm、削出し輪高台。(1133,後Ⅲ)は口径15.4cm。

◎縁釉小皿

灰釉縁釉小皿(1135,後Ⅰ)は口径13.3cm、底径7.8cm、器高3.5cm。底部の器壁はやや厚く、見込にトチ跡が残る。(1137,後Ⅲ-Ⅳ)は口径10.0cm、底径5.0cm、器高3.0cm。(1139,後Ⅳ古)は口径10.4cm、底径3.7cm、器高2.1cm。施釉範囲は狭く、口縁端部付近のみ。内面にススが付着する。鉄釉縁釉小皿(1136,後Ⅲ)は口径10.8cm、底径5.2cm、器高2.8cm。(1138,後Ⅳ古)は口径10.0cm、底径4.2cm、器高2.6cm。以上のすべて底部は回転糸切り。

◎底卸目皿

(1143,中Ⅱ)は底径8.8cm。見込に3条1単位の圈線がめぐり、断面台形の高台が付く。高台内には格子目状にやや深い卸目が刻まれる。高台内を除き全面施釉する。

◎灰釉卸皿

(1144,中Ⅲ-Ⅳ)は底径8.6cm。(1145,中Ⅳ)は口径12.1cm、底径5.9cm、器高2.6cm。両者とも底部器壁が厚く、体部は薄くなる。(1142,後Ⅰ-Ⅱ)は体部と底部の厚さはほぼ同様であり、底径は8.0cm。

◎小鉢類

灰釉片口小鉢(1141,中Ⅰ-Ⅱ)は底部は円形でありながら口縁部の平面形は隅丸の方形の形状を呈する。口縁端部は短く内側へ折れ、面をつくる。底部付近を除いて施釉し、見込にトチ跡が残る。

◎灰釉折縁深皿

古瀬戸中期の各時期のものがある。(1146,中Ⅰ)の体部は丸みをもって立上り、口縁部は緩

く折れて端部は肥厚する。口径 23.6cm。(1147,1148,1149, 中 II) の体部はやや直線的となり、口縁部は短く折れて端部は若干肥厚する。(1152, 中 III) は灰釉の折縁中皿。口径 15.6cm、底径 8.6cm、器高 3.7cm。口縁部は強く折れ、端部は内側に折返して肥厚する。(1153, 中 III) は口径 22.0cm。(1154,1155, 中 IV) は口径 19.0cm、26.0cm。口縁部は強く折れ、屈曲部内面が若干隆起して稜をなす。端部は折返して若干肥厚する。

◎陶製内耳鍋、土瓶・釜類

(1156, 後 IV 新、1158, 後) は錆釉内耳鍋。内外面にススが付着する。(1157, 後) は錆釉土瓶・釜類の底部。外面にススが付着する。

◎卸目付大皿

全体量が少なく、図化できる資料も少ない。(1173, 後 IV 古) は口径 34.0cm、底径 17.0cm、器高 8.4cm。口縁端部を内側へ折り返し、低い突起をつくる。卸目部分は欠損しており不明。底部に三足が付く。灰釉は胴部中位まで内外面に漬け掛けされる。

◎壺・瓶類

鉄釉壺(1163, 中 III か) は口径 10.0cm。頸部下が屈曲し稜によって胴部と区分される。灰釉梅瓶の底部(1164, 中 I・II) は底径 9.0cm。底部と胴部の器壁の厚さはほぼ同じであり、内面はヨコナデ、外面は横方向にヘラケズリする。灰釉仏花瓶(1165, 中) は胴部径 5.4cm、脚部底径 5.6cm、底部は回転糸切り。鉄釉仏花瓶(1166, 中 I-II) は肩部に画花文が施される。大型の鉄釉花瓶頸部(1169, 中 I-II) は欠損しているが、環状の耳が付くものと思われる。灰釉四耳壺(1170,1171, 中 I-II) 前者は幅広の耳が付く。後者は高台径 11.0cm、断面長方形の高台が開き気味に付く。鉄釉広口壺蓋(1151, 中 I-II) は擬宝珠形の摘みを有し、表面には印花文をちりばめる。釉薬は暗緑褐色を呈する。側縁破損部分にも釉薬が付着しており、焼成不良品であったと思われる。

◎その他

窯道具では匣鉢の他に匣鉢蓋が散見される。(1150, 中 III-IV) は口径 16.2cm、外面には自然釉が掛かる。陶丸(1184～1199) は径 1.9～2.7cm。一部に自然釉がかかるものが多い。灰釉筒形香炉(1159, 中 III-IV) は口径 12.0cm。端部は面をつくり、胴部外面は装飾的に数段の稜がめぐる。内面の大半と底部を除いて施釉する。土師質羽付釜(1160) の鐔部分は面取して断面方形を呈する。瓦質の羽釜(1161) は断面三角形の鐔が付く。鐔直下には櫛描の装飾がみえる。時期不明。灰釉合子(1167,1168, 中 I-II) はそれぞれ底径 3.0cm、4.9cm。後者は肩～胴部に菊の印花文が施される。灰釉花盆(1172, 中 I-II) は大型の香炉形の形状をなす。口径 21.4cm、口縁部は少し外反して輪花状となる。体部中央やや下方に段があり、その上は真直ぐ立上り、胴部は膨らみをもつ。内面は胴部上まで釉がかかる。鉄釉桶(1174, 後 IV 新)。

◎近世

白釉秉燭(1162, 19 世紀) は内部に粘土塊が半周する芯押えが付く。口径 5.4cm、底部径 3.8cm。底部は回転糸切り。

表5 SK17出土遺物総破片数（古瀬戸・山茶碗・小皿）

器種\時期	前期Ⅰ	前期Ⅱ	前期Ⅲ	前期Ⅲ・Ⅳ	前期Ⅳ	前期	中期Ⅰ	中期Ⅱ	中期Ⅲ	中期Ⅲ・Ⅳ	中期Ⅳ	中期	後期Ⅰ	後期Ⅱ	後期Ⅲ	後期Ⅲ・Ⅳ	後期Ⅳ	不明	合計
鉄釉縁釉小皿														1					1
灰釉縁釉小皿														1					1
灰釉折縁深皿									1		1		3	2					7
灰釉折縁中皿														1		1			2
灰釉卸目皿														1					1
匣鉢																	1		1
匣鉢蓋																	1		1
灰釉四耳壺				1															1
鎗釉内耳鍋													2		2		1		5
灰釉瓶子													1						1
灰釉盤類														1					1
灰釉平底末広碗										1									1
灰釉平碗															7				7
灰釉丸皿										1									1
灰釉壺・瓶類							2												2
灰釉不明																	1		1
鉄釉不明																		1	1
合計	0	0	0	1	0	0	0	2	0	1	2	1	0	6	4	12	0	1	35

尾張型	5型式	6型式	7型式	7・8型式	8型式	8・9型式	9型式	10型式	合計
総破片数				1		9	19	109	138
接合後破片数				1		9	19	44	73
東濃型			大畑大洞古	大畑大洞新	大洞東	大洞東	脇之島	生田	合計
総破片数				1	2	1	2		6
接合後破片数				1	2	1	2		6

表6 山茶碗総破片数

尾張型	3型式	3・4型式	4型式	4・5型式	5型式	5・6型式	6型式	7型式		7・8型式	8型式		5・9型式	7・9型式	8・9型式	9型式	9・10型式	10型式	10型式以降	12型式	不明	合計
総破片数	2	2	1	1	26	4	8	12		81	48		1	189	293	479	42	361	10	1	2	1563
接合後破片数	2	2	1	1	23	4	8	12		77	39		1	187	284	449	41	284	10	1	2	1428
東濃型			日土原		壱洞		明和	大畑大洞古	明和 大畑大洞	大畑大洞	大畑大洞新	大洞東	大畑大洞古 大洞東	大畑大洞新 大洞東	大畑大洞新 脇之島	大洞東 脇之島	脇之島 生田	脇之島 生田	生田			
総破片数					6		2	8	9	6	14	14	3	7	2	44	41	19	30		33	238
接合後破片数					5		2	8	9	5	12	13	3	7	2	44	41	19	30		32	232

表7 小皿総破片数

尾張型小皿	3型式	4型式	5型式	5・6型式	6型式	7型式		7・8型式	8型式		7・9型式	8・9型式	9型式	9・10型式	10型式	10型式以降	12型式	不明	計
総破片数			6	1	3			10	4		1	13	27	1	1	1		1	68
接合後破片数			6	1	1			10	4		1	13	26	1	1	1		1	65
東濃型小皿		日土原	壱洞		明和	大畑大洞古	明和 大畑大洞	大畑大洞	大畑大洞新	大畑大洞古 大洞東	大畑大洞新 大洞東	大畑大洞古 脇之島	大洞東 脇之島	脇之島 生田	生田				計
総破片数	2				1	1		2		4		2	19	3	1			4	39
接合後破片数	2				1	1		2		4		2	19	3	1			4	39

表8 片口鉢・片口小鉢総破片数

尾張型片口鉢	5・6 型式	6・7 型式	7 型式	7・8 型式	8 型式	7・9 型式	8・9 型式	9 型式	8・10 型式	9・10 型式	10 型式	不明	合計
総破片数	2	2	1	1	7	1	18	20	8	15	15	1	91
接合後破片数	2	2	1	1	7	1	16	11	7	15	15	1	79

尾張型片口小鉢	6・7 型式	7 型式	7・8 型式	8 型式	7・9 型式	8・9 型式	9 型式	9・10 型式	10 型式		合計
総破片数			1			1	1		1		4
接合後破片数			1			1	1		1		4

表9 常滑産陶器総破片数

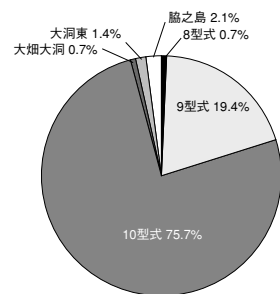
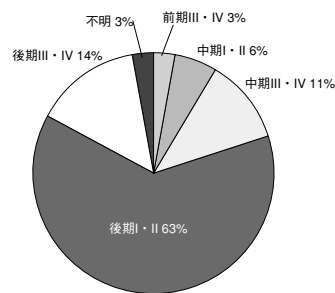
		中世	12・13世紀	15・16世紀	不明	計
常滑産三筋壺	総破片数				2	2
	接合後破片数				2	2
常滑産羽釜	総破片数				1	1
	接合後破片数				1	1
常滑産片口鉢	総破片数	1				1
	接合後破片数	1				1
常滑産壺・甕類	総破片数	1	1	1	20	23
	接合後破片数	1	1	1	18	21

表 10 古瀬戸総破片数

[illegible]

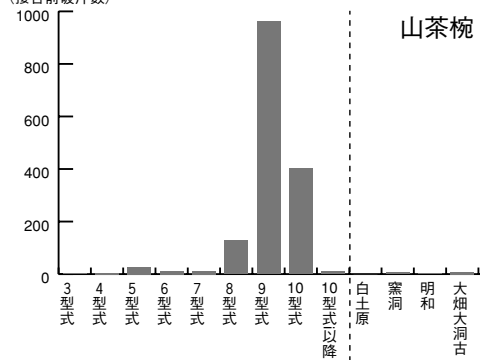
表 11 須恵器・灰釉陶器総破片数

器種\時期	8世紀	K-90	O-53	O-53-H-72	O-53-百代寺	H-72	H-72-百代寺	百代寺	10世紀	不明	合計
灰釉碗		20	11	1	1	11	1	3	6		54
灰釉深碗						3					3
灰釉輪花碗											
灰釉皿			3			3			3		9
灰釉段皿											
灰釉壺・瓶類			2							2	4
灰釉碗か皿										1	1
灰釉不明										1	1
須恵器不明										7	7
須恵器 杯										1	1
須恵器提瓶	1										1
須恵器高坏										1	1
須恵器短頸壺	2										2
須恵器平瓶										1	1
合計	3	20	16	1	1	17	1	3	9	14	85

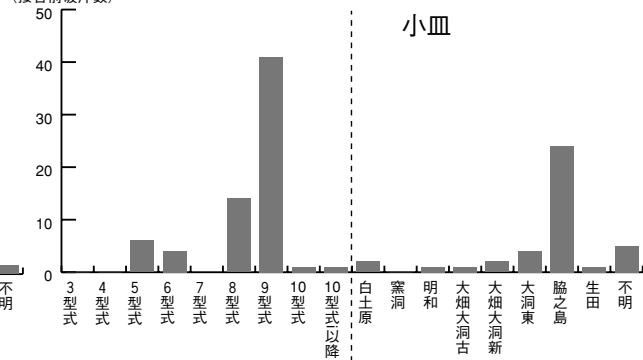


第 27 図 SK17 出土遺物時期別割合

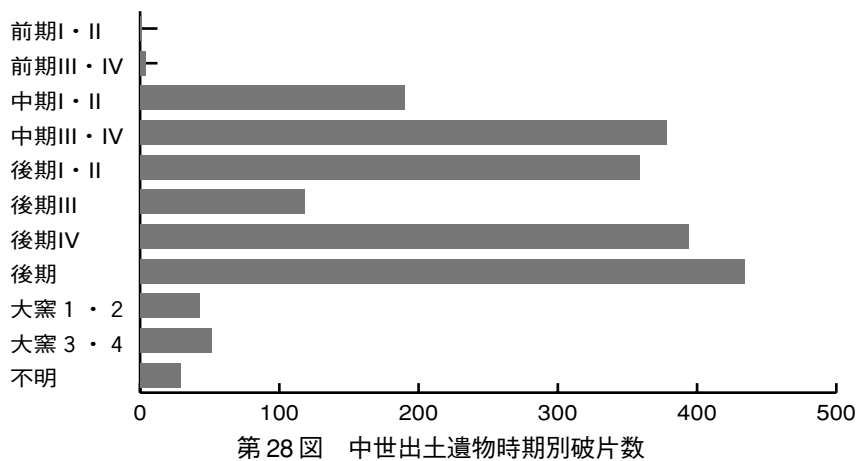
(接合前破片数)



(接合前破片数)



古瀬戸



第 28 図 中世出土遺物時期別破片数

第4章 自然科学分析

第1節 八王子遺跡出土石器の理化学分析

株式会社 第四紀 地質研究所

1 はじめに

黒曜石はガラス光沢を有する石英安山岩質～流紋岩質のガラス質火山岩である(平凡社, 1979)。火山岩の主要元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, Kなどであり、分析値はこれらの酸化物濃度で表示することは地質学分野では慣例である。

従来、考古学分野での分析の多くは少量～微量元素を対象とする分析が主流であり、分析結果もFe/Zr, Ca/Kなど(藁科・東村, 1973)、あるいはRb/(Rb + Sr + Y + Zr)など(望月ら, 1994)の比でだし、この比に基づいた分類で産地同定をおこなっていた。また、ガラス質黒色安山岩の石器石材の分析でも、分析結果をK/Ti, Ca/Ti, Ti/Yなどの比で出し、偏光顕微鏡で鉱物鑑定し、安山岩の分類を行っていた(山本ほか, 1997)。

これに対して、筆者は地質学的・岩石学的方法である火山岩の主要元素の酸化物濃度による岩石分類と産地同定を試みた。地質学分野における岩石分類ではSiO₂が52～66%を安山岩、66%以上を流紋岩と規定している(斎藤ほか, 1998)。この方法によると、試料の黒曜石のSiO₂量が66%以上の流紋岩質マグマに由来するか、SiO₂量が52～66%の安山岩質マグマに由来するのかについての検討が可能になり、産地同定をするうえでの岩石学的前提が成立する。

筆者は考古試料の非破壊分析の可能性と短期間における大量分析の可能性に基づいて、分析領域の広いエネルギー分散型蛍光X線装置(XRF)を使って原産地試料の黒曜石とガラス質安山岩を同じ分析法で分析した。なお、分析対象元素をSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, Rb, Sr, Y, Zrの13元素とした。その結果、主要～微量元素は酸化物濃度、微量元素は積分強度で分類をおこない有意な分析結果を得た(井上ほか, 2000)。なお、遺跡出土試料についても、一部の極度に風化が進んでいるものを除いて非破壊による分析方法を進めている(井上, 2000; 能登, 2000)。

2 分析法と分析試料

分析は日本電子製エネルギー分散型蛍光X線分析装置J SX-3200で行なった。遺跡出土の黒曜石遺物は非破壊で、非コウティングで、直接試料台に載せ分析した。

実験条件はバルクFP法(スタンダードレス方式)、分析雰囲気=真空、X線管ターゲット素材=Rh、加速電圧=30 kV、管電流=自動制御、分析時間=200秒(有効分析時間)である。

分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, Rb, Sr, Y, Zrの13元素、分析値は試料の含水量=0と仮定し、100%にノーマライズされた形式での酸化物の重量%で表示した。Rb, Srについてはさらに積分強度も表示した。(Rb-Sr, Zr-Yなどは積分強度での分類であり、分析試料の大きさによる影響を受ける)。

3 原産地黒曜石の分類

3-1 関東・中部・東海・東北・北陸北部地方の原産地黒曜石の分析結果

A SiO₂-Al₂O₃ 対比

黒曜石全体は SiO₂ が 73.50 ～ 79.00% の領域にあり、SiO₂ が低い領域から高い領域に向かって月山系、信州系・伊豆箱根系と 3 領域に地域ごとに分布する。深浦は Al₂O₃ が 12% 以下で、他の黒曜石とは異なる領域にある。湯ノ倉は Al₂O₃ が 1% ほど小さく、異なる領域に分布する。

B Fe₂O₃-TiO₂ 対比

Fe₂O₃ が低い領域から高い領域に向かって原産地ごとに分布する。Fe₂O₃ が 1.50% 以下で、TiO₂ が 0.00 ～ 2.50% の領域では TiO₂ が低い領域から高い領域に向かって和田峠系-1、板山系、月山系和田峠系-2、神津島、蓼科系が連続して領域ごとに分布している。

新潟県の上三光と上石川は 1.00 ～ 1.50% の領域に分布し、異質である。Fe₂O₃ が 1.50% より高い領域には伊豆箱根系と湯ノ倉、深浦、小赤沢の黒曜石が各々の領域に集中して分布する。

C K₂O-CaO 対比

CaO が 1.00% 以上の領域にあって、K₂O が 1.00 ～ 4.00% の領域には K₂O が低い領域から高い領域に向かって、伊豆箱根系の畑宿、鍛冶屋、上多賀、柏峠、栃木県の高原山が各々異なる領域に分布する。宮城県の上三光と上石川はこれらの中では CaO がいくぶん高い。CaO が 0.50 ～ 1.50%、K₂O が 3.00 ～ 4.00% の領域には CaO が低い領域に出来島・神津島、高い領域に小赤沢が共存して同じ領域に分布する。K₂O が 3.50 ～ 6.00% の領域には CaO が低い領域から高い領域に向かって、深浦、和田峠系-1・星ヶ塔、月山系が各々異なる領域に分布し、CaO が高い領域には板山系が狭い領域で各々異なる領域に分布する。

D TiO₂-MnO 対比

TiO₂ が 0.15% 以上の領域には、蓼科系、湯ノ倉、鍛冶屋、柏峠、畑宿が各々異なる領域に分布する。

MnO が 0.50% 以上の領域で、MnO が低い領域から高い領域に向かって、和田峠系-2・神津島、板山系、和田峠系-1、月山系、出来島、男鹿系が各々異なる領域に分布する。

E Rb₂O-SrO 対比

Rb₂O が 0.000 ～ 0.008%、SrO が 0.010 ～ 0.025% の領域には伊豆箱根系と湯ノ倉、Rb₂O が 0.003 ～ 0.009%、SrO が 0.006 ～ 0.012% の領域には神津島、Rb₂O が 0.007 ～ 0.018%、SrO が 0.007 ～ 0.020% の領域には蓼科系・高原山・出来島が混在する。Rb₂O が 0.013 ～ 0.027%、SrO が 0.002 ～ 0.08% の領域には和田峠系-2・板山系、Rb₂O が 0.028 ～ 0.036%、SrO が 0 ～ 0.0052% の領域には和田峠系-1 が集中し、領域によって原産地の地域がおおむね分類できる。Rb₂O が 0.015 ～ 0.027%、SrO が 0.008 ～ 0.018% の領域には男鹿系と上石川が混在する。

4 遺跡出土遺物の分析結果

4-1 黒曜石遺物の原産地について

黒曜石遺物のほとんどは和田峠系-2の男女倉5の原石と近い化学組成をしている。不明とした7個は組成的に近いもので原石は同じものである可能性がある。この不明の遺物は図から明らかなように東北日本のどの原産地黒曜石との組成があわない。しかし、全体の組成は和田峠系に類似しており、和田峠系に近い所にあるまだ確認されない原石の可能性はある。隠岐島の黒曜石とも対比して検討したが組成は異なる。

4-2 ガラス質安山岩の遺物について(編者註1)

106はSiO₂が72%+と高く、安山岩ではなく流紋岩である。下呂石も同様に、SiO₂が75%と高く、流紋岩であり、明らかガラス質安山岩であるサヌカイトとは異なる。組成的には106の石鏃は下呂石に近い。

288の調整剥片はSiO₂が57%と低く、安山岩領域にあり、ガラス質安山岩である。この遺物と金山と二上山のサヌカイトの原石を対比したが、領域が異なり、対比されない。別の原石であると推察される。

引用文献

- 井上 巖・田中耕作(2000)東北・北陸北部における原産地黒曜石の蛍光X線分析(XRF),「北越考古学」,第11号,23~38.
- 井上 巖(2000)三ツ木皿沼遺跡出土黒曜石の理化学分析、三ツ木皿沼遺跡報告書,(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団,412~418.
- 斎藤正徳・富田晋高(1994)基礎からよくわかる地学I B,(株)旺文社.
- 能登 健(2000)三ツ木皿沼遺跡出土黒曜石の理化学分析,三ツ木皿沼遺跡報告書,(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団,512.
- 望月明彦・池谷信之・小林克次・武藤由里(1994)遺跡内における黒曜石 製石器の原産地別分布についてー沼津市土手上遺跡B B層の原産地推定からー静岡県考古学研究,26,1~24.
- 山本 薫・柴田 徹・高松武次郎(1997)ガラス質黒色安山岩製石器の石材産地推定方法に関する研究ー蛍光X線分析法とプレバート法による石材産地推定結果の比較と評価ー縄文時代文化研究会,縄文時代,第8号,1~30.
- 藁科哲男・東村武信(1973)蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定,考古学と自然科学,6,33~42.

(編者註1) 分析に使用する比較原石について、二上山産サヌカイトに関しては久保禎子氏(一宮市博物館)、金山産サヌカイトに関しては田部剛士氏(山添村教育委員会)のご協力を得た。

表 13 科学分析表

試料名	登録番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	FeO _x	Rb ₂ O	SiO ₂	Y ₂ O	ZrO ₂	Total	Rb(l)	Si(l)	器種	原産地	石材
No.01	993	3.9826	0.0000	12.8744	74.3939	0.0000	6.9446	0.4963	0.2147	0.1465	1.0478	0.0460	0.0017	0.0096	0.0199	100.0000	3195	111	石鑑	不明	黒曜石
No.02	137	3.4579	0.0000	12.8222	75.4284	0.0000	6.3855	0.5418	0.1226	0.1331	1.0418	0.0393	0.0017	0.0102	0.0156	100.0001	2667	118	石鑑	不明	黒曜石
No.03	394	3.5246	0.0000	12.0614	77.3905	0.0000	5.4760	0.5424	0.1261	0.0975	0.8266	0.0215	0.0023	0.0057	0.0153	99.9999	1572	167	石鑑	和田峠系-2	黒曜石
No.04	947	1.9639	0.0000	11.9775	75.5519	0.0000	8.7241	0.6118	0.1573	0.0984	0.8660	0.0203	0.0075	0.0055	0.0159	100.0001	1374	497	石鑑	和田峠系-2	黒曜石
No.05	942	3.3246	0.0000	12.6165	75.8338	0.0000	6.2264	0.5941	0.13428	0.1161	0.8995	0.0226	0.0074	0.0004	0.0157	99.9999	1665	535	石鑑	和田峠系-2	黒曜石
No.06	994	3.7423	0.0000	12.2713	76.5882	0.0000	5.5676	0.5782	0.2483	0.1067	0.8774	0.0217	0.0091	0.0057	0.0133	99.9998	1622	667	石鑑	和田峠系-2	黒曜石
No.07	203	4.2676	0.0000	11.9998	76.4191	0.0000	5.4338	0.6668	0.1048	0.1439	0.8704	0.0403	0.0028	0.0147	0.0161	100.0001	2917	202	スクレイパー	不明	黒曜石
No.08	255	3.8941	0.0000	12.0838	76.3995	0.0000	5.7849	0.6546	0.1379	0.0963	0.8943	0.0234	0.0075	0.0079	0.0159	100.0001	1716	539	使用後剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.09	395	3.2011	0.0000	12.1436	77.8720	0.0000	5.2243	0.5381	0.1207	0.0992	0.7625	0.0227	0.0020	0.0069	0.0147	100.0000	1620	142	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.10	396	3.3926	0.0000	12.5061	76.9744	0.0000	5.3989	0.5771	0.1548	0.0920	0.8592	0.0205	0.0055	0.0037	0.0153	100.0001	1484	393	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.11	286	3.5044	0.0699	13.5580	75.1824	0.0000	5.7690	0.6281	0.1762	0.1117	0.9451	0.0267	0.0083	0.0020	0.0180	99.9998	1874	571	使用後剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.12	397	4.0005	0.0000	11.6831	77.2162	0.0000	5.4703	0.5693	0.1390	0.1019	0.7738	0.0218	0.0101	0.0039	0.0100	99.9999	1669	519	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.13	398	3.4296	0.0000	11.9921	77.2441	0.0000	5.6695	0.5784	0.1387	0.1134	0.7872	0.0195	0.0074	0.0057	0.0145	100.0001	1396	518	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.14	399	3.5246	0.0000	12.6591	76.3553	0.0000	5.6113	0.6200	0.1603	0.1108	0.9136	0.0198	0.0069	0.0029	0.0152	99.9998	1436	490	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.15	400	3.6779	0.0000	12.5941	76.2267	0.0000	5.4984	0.6401	0.1469	0.1014	1.0607	0.0205	0.0093	0.0068	0.0170	99.9998	1486	659	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.16	401	3.2386	0.0000	12.0441	77.8478	0.0000	5.2389	0.5736	0.1199	0.0971	0.7950	0.0200	0.0060	0.0033	0.0147	100.0000	1488	436	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.17	402	4.6893	0.0000	12.1838	74.7299	0.2691	6.1178	0.6892	0.1676	0.1228	0.9766	0.0247	0.0044	0.0050	0.0198	100.0000	1615	283	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.18	403	3.5021	0.0000	12.1361	76.7434	0.4326	5.5240	0.5926	0.1364	0.0957	0.7899	0.0195	0.0068	0.0070	0.0139	100.0000	1408	479	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.19	404	3.8128	0.0000	12.4910	76.3421	0.0000	5.5743	0.6416	0.1478	0.0948	0.8535	0.0233	0.0084	0.0018	0.0086	100.0000	1668	585	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.20	405	4.8033	0.0000	12.5008	74.9515	0.0000	5.3677	0.6154	0.1521	0.1127	0.7971	0.0227	0.0036	0.0039	0.0182	100.0000	1627	249	剥片	チャート	黒曜石
No.21	406	1.1469	0.0000	0.6580	99.0486	0.0000	0.9863	0.0000	0.0000	0.0005	0.9502	0.0011	0.0077	0.0000	0.0007	100.0000	93	638	剥片	不明	黒曜石
No.22	407	3.5477	0.0000	13.2994	76.9328	0.0000	5.9653	0.5422	0.1229	0.0370	0.7895	0.0186	0.0052	0.0063	0.0131	100.0000	1458	399	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.23	408	3.0473	0.0000	13.2298	76.2337	0.0000	5.3371	0.6071	0.1601	0.1212	1.1574	0.0448	0.0168	0.0069	0.0375	100.0000	1970	723	剥片	不明	黒曜石
No.24	409	3.7280	0.0000	12.9537	75.8076	0.0000	5.8813	0.6377	0.1501	0.1067	0.8923	0.0167	0.0037	0.0040	0.0182	100.0000	1243	272	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.25	410	3.7238	0.0000	13.1567	76.1867	0.0000	5.2975	0.4905	0.1482	0.0956	0.8496	0.0202	0.0085	0.0054	0.0174	100.0001	1481	611	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.26	411	2.7437	0.0000	12.2319	76.6663	0.0000	6.7485	0.5189	0.1281	0.1020	0.8133	0.0189	0.0086	0.0033	0.0156	100.0001	1414	693	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.27	412	3.7374	0.0000	13.1378	76.1026	0.0000	5.2178	0.5449	0.0648	0.1511	0.9597	0.0476	0.0023	0.0120	0.0220	100.0000	3435	159	剥片	不明	黒曜石
No.28	413	4.1292	0.0000	13.9137	73.7896	0.0000	5.9045	0.7209	0.1117	0.1546	1.2233	0.0448	0.0000	0.0073	0.0205	100.0001	3011	3	剥片	不明	黒曜石
No.29	414	3.8670	0.0000	12.2376	77.0760	0.0000	5.1862	0.5547	0.1385	0.0977	0.7908	0.0242	0.0072	0.0043	0.0155	99.9997	1680	490	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.30	415	4.1012	0.0000	12.7397	75.4600	0.0000	5.8493	0.6555	0.1227	0.1239	0.9024	0.0218	0.0057	0.0017	0.0161	100.0000	1634	420	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.31	416	3.7278	0.0000	12.5865	76.7640	0.0000	5.3247	0.5292	0.1348	0.1034	0.7883	0.0173	0.0021	0.0039	0.0181	100.0001	1276	150	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.32	417	4.2115	0.0000	12.6818	75.9390	0.0000	5.4848	0.5796	0.1205	0.0975	0.8401	0.0173	0.0047	0.0063	0.0148	99.9999	1290	341	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.33	418	3.8134	0.0000	13.3328	74.7854	0.0000	5.7661	0.7358	0.1762	0.1423	1.1536	0.0496	0.0093	0.0115	0.0241	100.0001	2898	534	剥片	不明	黒曜石
No.34	419	3.2656	0.0000	12.9966	76.7942	0.0000	5.2975	0.5081	0.1388	0.0958	0.8527	0.0203	0.0067	0.0071	0.0167	100.0001	1456	469	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.35	420	3.9887	0.0000	12.6421	76.2597	0.0000	5.4886	0.5348	0.1422	0.0938	0.8068	0.0211	0.0084	0.0037	0.0099	99.9998	1622	632	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.36	421	3.7695	0.0000	12.7576	76.4131	0.0000	5.3832	0.5441	0.1461	0.0947	0.8453	0.0200	0.0090	0.0029	0.0145	100.0000	1470	645	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.37	422	3.9547	0.0000	12.4669	76.2447	0.0000	5.8516	0.5978	0.1135	0.1005	0.8256	0.0197	0.0025	0.0037	0.0189	100.0001	1438	171	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.38	423	3.6795	0.0000	12.3881	76.7492	0.0000	5.6326	0.5148	0.1189	0.0962	0.7701	0.0217	0.0087	0.0054	0.0148	100.0000	1652	647	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.39	424	3.8577	0.0000	12.9710	75.9786	0.0000	5.4570	0.5511	0.1442	0.1020	0.8945	0.0200	0.0046	0.0021	0.0172	100.0000	1436	326	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.40	425	3.7487	0.0000	12.3742	76.5952	0.0000	5.5679	0.5825	0.1252	0.1008	0.8495	0.0244	0.0082	0.0063	0.0152	100.0001	1769	579	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.41	426	3.7553	0.0000	12.6826	76.3902	0.0000	5.4903	0.5625	0.1388	0.1014	0.8358	0.0202	0.0042	0.0045	0.0142	100.0000	1475	299	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.42	427	4.0155	0.0000	12.3613	76.5978	0.0000	5.3837	0.5340	0.1448	0.1024	0.8154	0.0154	0.0077	0.0067	0.0153	100.0000	1109	539	調整剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.43	331	3.6261	0.0000	12.8870	76.1561	0.0000	5.6359	0.5587	0.1452	0.0922	0.8548	0.0218	0.0040	0.0000	0.0182	100.0000	1594	285	石様	和田峠系-2	黒曜石
No.44	428	4.1608	0.0000	12.6317	75.5471	0.0000	5.8415	0.6379	0.1359	0.1187	0.8779	0.0240	0.0073	0.0017	0.0155	100.0000	1674	497	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.45	429	3.8978	0.0000	12.1703	76.3330	0.0000	5.8905	0.5961	0.1253	0.0996	0.8365	0.0236	0.0060	0.0053	0.0161	100.0001	1768	443	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.46	430	3.9780	0.0000	12.4418	76.6606	0.0000	5.3137	0.5343	0.1343	0.0958	0.8109	0.0203	0.0037	0.0042	0.0125	100.0001	1577	281	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.47	431	4.0358	0.0000	12.7158	76.1744	0.0000	5.3668	0.5621	0.1424	0.1034	0.8508	0.0212	0.0089	0.0046	0.0137	99.9999	1547	633	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.48	432	3.7609	0.0000	12.7693	76.6129	0.0000	5.2351	0.5626	0.1282	0.0904	0.7963	0.0196	0.0053	0.0066	0.0127	99.9999	1525	401	剥片	和田峠系-2	黒曜石
No.49	106	2.9331	0.7339	14.1100	72.1960	0.0000	4.8775	1.6895	1.3990	0.1371	1.7963	0.0287	0.0668	0.0038	0.0282	99.9999	1660	3780	石鑑	下呂石？	下呂石？
No.50	288	3.7300	0.7810	20.1490	56.9254	0.3027	3.8672	4.8494	0.8356	0.2014	8.2193	0.0194	0.0566	0.0101	0.0530	100.0001	748	2244	調整剥片	ガラス質安山岩	サマカイト？
下呂-1		4.1567	0.0000	13.0389	75.1014	0.0000	4.3169	1.7162	0.1805	0.0998	1.2976	0.0190	0.0449	0.0036	0.0225	100.0000	1417	3277	下呂石		
下呂-2		3.8122	0.0844	13.3600	75.0640	0.0000	4.1542	1.8147	0.1933	0.1111	1.3197	0.0163	0.0473	0.0046	0.0184	100.0002	1148	3260	下呂石		
二上山-1		3.3259	0.5108	17.5136	61.7																

第2節 八王子遺跡出土縄文土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

瀬戸市東部の八王子町に所在する八王子遺跡は、愛知県東部を流れる矢田川支流の赤津川が形成した狭小な沖積低地上に位置する。発掘調査では縄文土器が多量に出土し、縄文時代早期後葉から早期末の時期を中心とし、前期や中期のものも混在するという状況が確認された。特に早期の型式では、近畿地方東部から東海地方に分布の中心がある粕畑式、上ノ山式、入海式が多く認められている。これらの型式は、東海地方以東の地域例えば伊那谷や遠く関東地方南部まで認められるとされている。このような広範な分布を示す土器型式に対しては、胎土の特徴とそこから推定される地質が示す地域性を捉えることにより、その土器の移動形態（ものが動くか人のみが動くかなど）を考えることができる。

本報告では、八王子遺跡から出土した縄文土器について胎土分析を行い、広範な分布を示す土器型式の胎土の特徴を把握する。

1. 試料

試料は、八王子遺跡より出土した縄文土器片70点である。発掘調査所見による型式分類では、早期後葉の粕畑式や早期末の入海式、上ノ山式および天神山式などの試料を中心とし、また、前期の北白川下層式や中期の北裏C式とされるものも混在する。

各試料の出土遺構、時期、型式などは、分析結果を呈示した図29に併記する。

2. 分析方法

これまで当社では、胎土に含まれる細砂径の砂分の重鉍物組成を胎土の特徴とする方法を多く用いてきた。これらの結果との比較参照も考慮して、本分析でもこの方法に従う。処理方法は以下の通りである。

土器片をアルミナ製乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm－1/8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉍物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。鉍物の同定粒数は250個を目標とし、その粒数%を算出し、グラフに示す。グラフでは、同定粒数が100個未満の試料については粒数%を求めずに多いと判断される鉍物を呈示するにとどめる。

3. 結果

分析結果を表14、図29に示す。70点の試料のうち、同定粒数100個を数えられなかった試料は24点ある。これらの試料の分量（重さ）は、いずれも少なく、数g程度のものがほとんどであった。したがって、今回の分析における同定粒数100個未満の試料の胎土は、特性として重鉍物の含量が少ないのか、あるいは処理可能量が少なかったために重鉍物が得られなかったのか、いずれであるかは現時点では判断することはできない。ここでは同定粒数100個未満の試料の重鉍物組成をグラフにはしないが、その組成の傾向から後述す

る胎土の分類も行った。ただし、100 個以上同定できた試料よりも分類の確実性に欠けるという意味で括弧を付けた。

今回の分析では、大きく分けて斜方輝石を主体とする組成と角閃石を主体とする組成および不透明鉱物の多い組成とが認められる。これらの状況から、ここでは a ～ h 類までの分類を設定した。以下に各分類について述べる。

- a 類：斜方輝石が最も多く、少量の角閃石と少量または中量の不透明鉱物を伴う。これに分類される試料は今回の中では最も多く、20 点を数える。
- b 類：斜方輝石と不透明鉱物がほぼ同量程度に多い組成であり、これに少量の角閃石を伴う。本類に分類される試料は 5 点である。
- c 類：角閃石が多く、少量の不透明鉱物と少量または微量のジルコン・ザクロ石を伴う。本類に分類される試料は 6 点であり、a 類に次いで多い試料数である。
- d 類：角閃石と不透明鉱物がほぼ同量程度に多い組成であり、微量のジルコンや微量または少量のザクロ石を伴う。本類に分類される試料は 5 点である。
- e 類：不透明鉱物の多い組成であり、これに少量または微量の斜方輝石・角閃石・ジルコンなどを伴う。本類に分類される試料は 5 点である。
- f 類：角閃石の多い組成であるが、少量の角閃石族を伴うことから c 類とは区別した。これに分類される試料は、試料番号 3 と 44 の 2 点のみである。
- g 類：黒雲母を比較的多く含む組成である。これに分類される試料は、試料番号 52 と 68 の 2 点のみである。
- h 類：角閃石の多い組成であるが、少量の黒雲母を伴うことから c 類とは区別した。これに分類される試料は、試料番号 1 の 1 点のみである。

以上、各試料の分類については図 1 に示す。なお、試料番号 38 と 45 については、重鉱物量が非常に少ないために傾向も読み取れず、胎土の分類は不明とした。次に試料の型式と胎土分類との対応関係を見ると以下のような状況である。

1) 早期

柏畑式：今回の試料の中では最も点数が多く、17 点を数える。胎土分類の内訳は、a 類が 7 点と最も多く、次いで c 類の 5 点であり、他に d 類、e 類が 2 点ずつ、f 類が 1 点認められる。

入海式 (I 式、II 式含む)：12 点ある試料のうち、c 類が 7 点あり最も多く、他に a 類が 3 点、e 類が 2 点という構成である。

上ノ山式：試料は 3 点のみであるが、いずれも a 類である。

天神山式：3 点の試料のうち、a 類が 2 点、c 類が 1 点である。

茅山下層式および野島式：ともに 1 点ずつであるので、傾向はつかめないが、今回の結果ではともに d 類であった。

2) 前期

北白川下層式：5 点ある試料のうち、a 類が 2 点、c 類と e 類が 1 点ずつ、1 点は不明である。

3) 中期

北裏C式：試料は2点のみであるが、いずれもb類である。

4. 考察

これまでに当社で行った愛知県下の遺跡から出土した弥生土器および古墳時代～古代に至る土師器の胎土分析から、輝石を多く含む重鉱物組成の胎土は、尾張低地およびその周縁に産地が求められ、角閃石を主体とし、ジルコンやザクロ石を伴う重鉱物組成の胎土は、西三河地域あるいは伊勢平野地域に産地が求められる可能性が高いと考えている。今回認められた胎土のうち、a類およびb類が前者に相当し、c～f類は後者に相当するとみることができる。なお、今回の場合のc～f類の産地は、地理的にみて西三河地域であろう。残るg類およびh類は、これまでの分析例ではあまり認められたことはない。八王子遺跡の立地している場所の地質学的背景を考えると、周囲の山地は、いわゆる領家帯を構成する花崗岩類から構成されており、その花崗岩類は苗木花崗岩と呼ばれる黒雲母を多く含む岩質である（日本の地質「中部地方Ⅱ」編集委員会，1988）。このことから、黒雲母を特徴とするg類とh類は遺跡の所在する瀬戸市周辺に産地を求められる可能性がある。

以上の各胎土の地域性を今回の結果に当てはめると、八王子遺跡出土の縄文土器の多くは、尾張低地と西三河からの搬入品であり、瀬戸市周辺で作られた土器は非常に少ないということになる。もちろん、愛知県下における縄文土器の分析例は比較的少なく、弥生土器や土師器から得られた胎土重鉱物組成の地域性を単純に当てはめることが適当かどうか検討の余地はある。しかし、少なくとも八王子遺跡出土の縄文土器には多様な胎土が存在することは明らかであり、それは、この遺跡における縄文土器の製作と供給に関わる事情が単純ではなかったことを示唆すると考えられる。なお、今回の結果のみからみれば、土器型式と胎土分類との間の相関関係は、それほど明瞭ではない。しかし、前項の記載にあるように、例えば、粕畑式と入海式では、胎土の種類構成が明らかに異なっている。すなわち、各型式の背後にある生産・供給事情にも、それぞれの事情があった可能性がある。

愛知県下における縄文土器の分析例の中で、これまでにまとまった点数の分析例としては、幸田町深溝に所在する東光寺遺跡での例がある（愛知県埋蔵文化財センター，1993）。今回とは、遺跡の地理的位置も、試料の時期（縄文晩期の稲荷山式）も異なるため、分析結果も今回の結果とは大きく異なっている。東光寺遺跡の例では、角閃石を主体とし、ジルコン・ザクロ石を含む組成と黒雲母を主体とし、ジルコン・ザクロ石を含む組成の両者からなり、輝石を多く含むような胎土は認められない。また、角閃石を主体とする胎土は、やはり西三河産と考え、黒雲母を主体とする胎土を深溝周辺の在地産とも考えた。この点で、搬入品と在地産が混在する状況は、今回の例との共通点になるかも知れない。

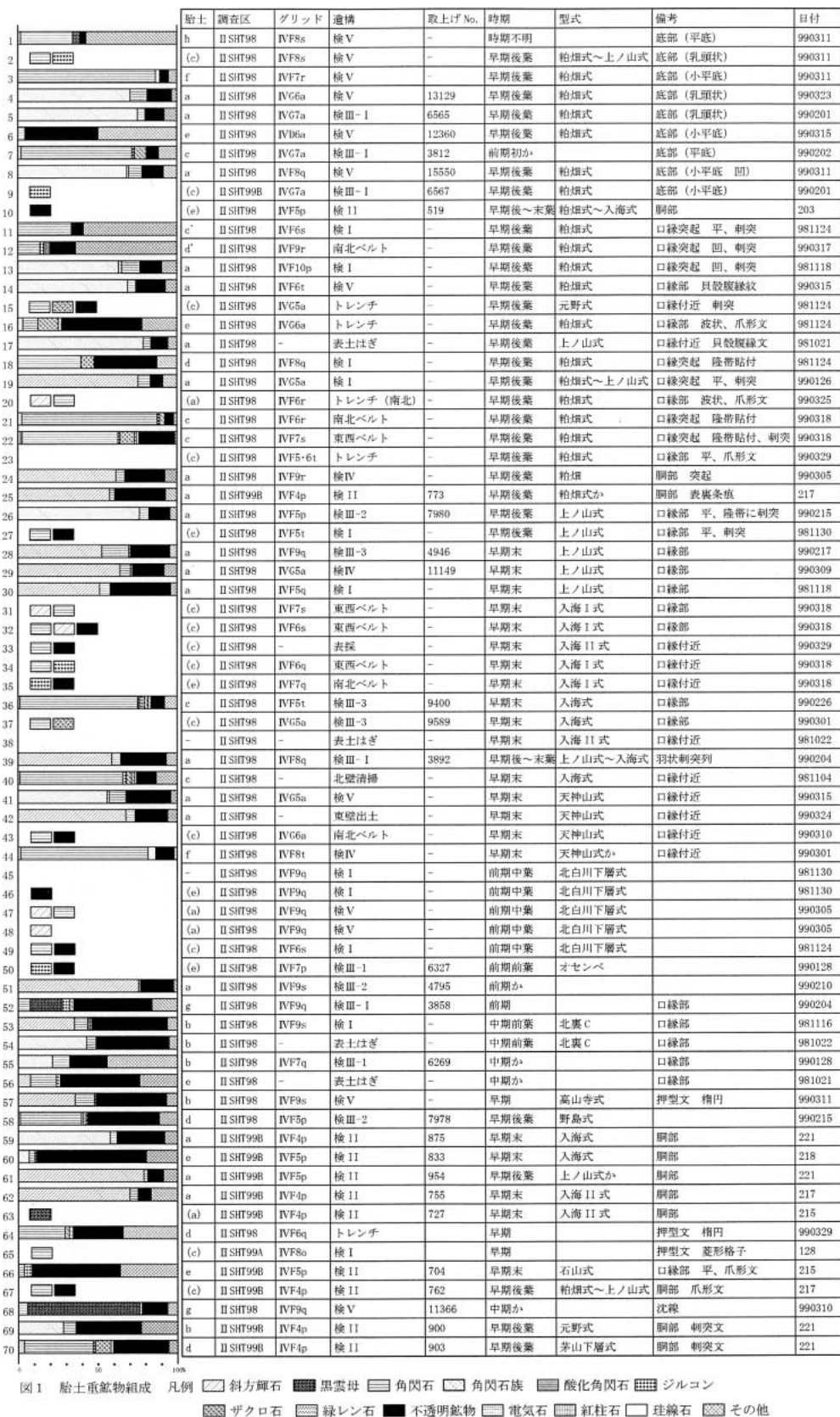
今後も瀬戸市周辺域における縄文土器の分析例を蓄積するとともに周辺地域における自然堆積物の分析例も得ることができれば、今回確認された各胎土の地域性をより絞ることも可能である。特に今回最も点数の多かったa類の地域性を尾張低地に特定することの妥当性を検討する必要がある。これには瀬戸市と尾張低地との中間地域での分析例も必要であろう。

引用文献

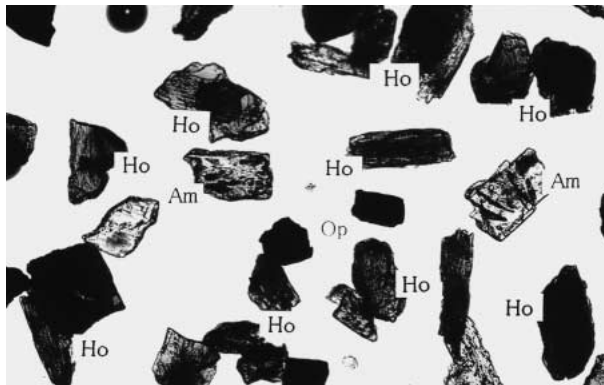
愛知県埋蔵文化財センター（1993）愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第42集 東光寺遺跡。
日本の地質「中部地方Ⅱ」編集委員会（1988）日本の地質5 中部地方Ⅱ. 310p., 共立出版。

表 14 試料重鉱物

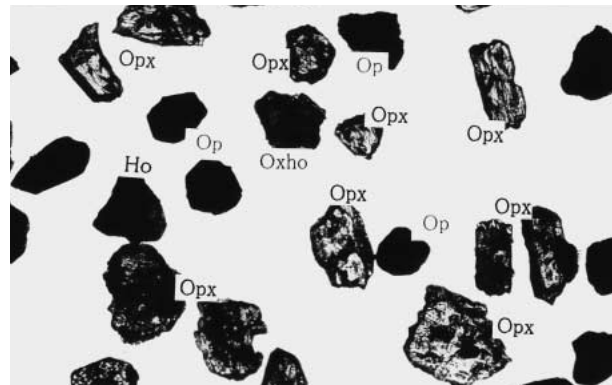
試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	角閃石族	黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	紅柱石	珪線石	不透明鉱物	その他	合計
1	4	0	82	1	0	11	1	0	0	0	0	0	10	141	250
2	0	0	4	0	0	0	2	0	0	0	0	0	3	5	14
3	2	1	216	0	7	0	1	2	0	0	1	0	14	6	250
4	176	2	27	1	0	0	0	0	1	0	0	0	39	4	250
5	188	2	12	1	0	0	2	0	0	0	0	0	30	15	250
6	2	0	11	1	0	1	2	0	0	0	0	0	115	118	250
7	5	2	174	0	1	0	4	19	2	0	0	0	19	24	250
8	171	3	21	0	0	0	0	0	1	0	0	0	34	20	250
9	1	0	0	0	0	1	2	1	0	0	0	0	1	2	8
10	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	9
11	1	1	84	0	0	0	1	1	0	1	0	0	19	142	250
12	2	0	35	0	0	0	6	3	0	3	3	0	41	157	250
13	158	5	29	2	0	0	0	1	1	0	0	0	34	20	250
14	172	1	13	0	0	0	0	0	1	0	1	0	47	15	250
15	2	0	30	0	0	1	1	3	0	1	1	0	17	12	68
16	4	0	12	0	0	0	2	16	0	1	3	2	64	23	127
17	197	1	12	1	0	0	0	1	1	0	0	0	27	10	250
18	1	0	44	0	0	0	1	9	1	0	1	0	44	10	111
19	189	2	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	20	250
20	12	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	8	28
21	6	0	213	0	0	0	4	8	0	1	1	0	14	3	250
22	4	3	150	0	0	0	3	23	3	0	1	4	57	2	250
23	2	0	8	0	0	0	0	3	1	0	1	0	6	5	26
24	154	0	14	1	0	0	2	0	0	0	0	1	63	15	250
25	144	2	8	0	0	0	0	1	0	0	0	0	80	15	250
26	191	0	15	1	0	0	0	0	0	0	0	0	33	10	250
27	1	0	4	0	0	0	1	1	0	1	0	0	5	3	16
28	132	1	42	0	0	0	2	0	3	0	0	0	62	8	250
29	160	2	17	0	0	0	3	0	0	0	0	0	50	18	250
30	128	0	17	1	0	0	2	0	0	0	0	0	95	7	250
31	5	0	26	0	0	0	1	2	0	1	0	0	3	5	43
32	14	0	41	0	0	0	5	1	1	1	1	0	19	6	89
33	2	0	9	0	0	0	10	0	0	0	0	0	18	4	43
34	1	0	2	0	0	0	4	0	0	0	0	0	1	3	11
35	3	0	6	0	0	2	10	0	0	0	0	0	37	36	94
36	3	0	185	0	0	3	7	6	5	0	0	0	21	20	250
37	3	0	39	0	0	0	4	5	0	0	1	0	8	11	71
38	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	5	7
39	147	1	14	1	0	0	0	0	0	0	0	0	72	15	250
40	3	0	161	0	0	0	6	8	5	0	2	3	31	31	250
41	140	3	26	0	0	0	2	0	1	0	1	0	71	6	250
42	169	0	15	2	0	0	2	2	0	0	0	1	51	8	250
43	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	5
44	4	0	200	0	12	0	0	1	2	0	0	0	29	2	250
45	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	4
46	1	0	4	0	0	0	1	8	0	0	0	0	17	9	40
47	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4
48	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
49	1	0	31	0	0	1	2	1	0	0	0	0	13	16	65
50	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	25	45	75
51	189	0	3	0	0	0	0	1	1	0	0	0	52	4	250
52	0	0	11	0	0	30	7	4	0	0	0	0	73	24	149
53	88	1	21	3	0	0	0	0	3	0	0	0	119	15	250
54	107	0	15	1	0	0	0	0	0	0	0	0	115	12	250
55	30	0	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33	62	140
56	9	1	19	0	0	0	3	0	0	0	0	0	59	27	118
57	89	1	30	1	0	0	3	0	2	0	1	0	111	12	250
58	3	0	96	1	3	0	4	3	0	1	0	0	112	27	250
59	144	1	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	75	19	250
60	17	0	9	0	0	0	3	1	2	0	2	0	172	44	250
61	197	1	6	0	0	0	1	0	1	0	0	0	25	19	250
62	175	0	13	2	0	1	0	0	0	0	0	0	20	39	250
63	1	0	5	0	0	18	4	0	0	0	0	0	4	50	82
64	1	0	45	1	0	1	2	4	4	0	0	0	48	48	154
65	1	0	12	0	0	0	0	1	1	0	0	0	3	26	44
66	1	0	4	0	0	0	5	0	0	0	0	0	60	38	108
67	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	2	7
68	0	0	14	1	0	176	4	1	2	0	0	0	40	12	250
69	43	0	12	0	0	0	0	1	1	0	1	0	63	32	153
70	7	0	84	0	0	0	3	19	0	2	0	3	68	9	195



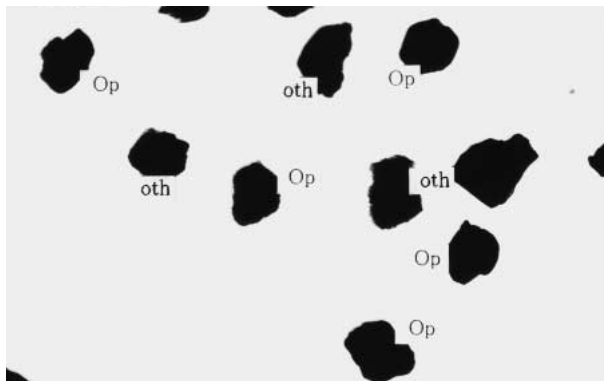
第 29 図 試料の重鉱物組成ダイアグラム



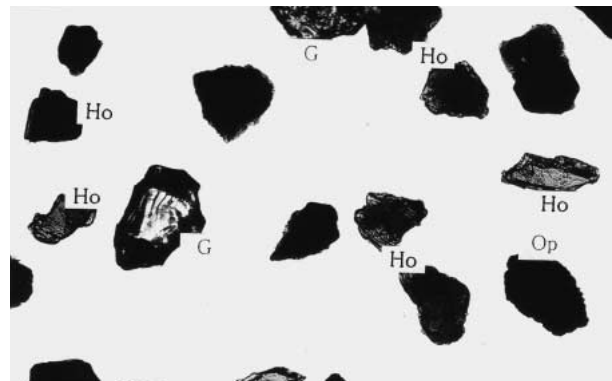
1. 資料 No.3



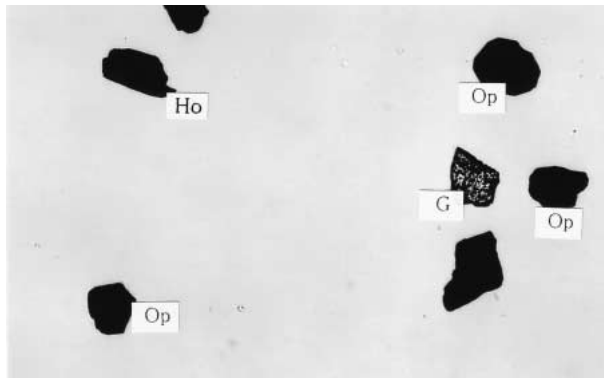
2. 資料 No.5



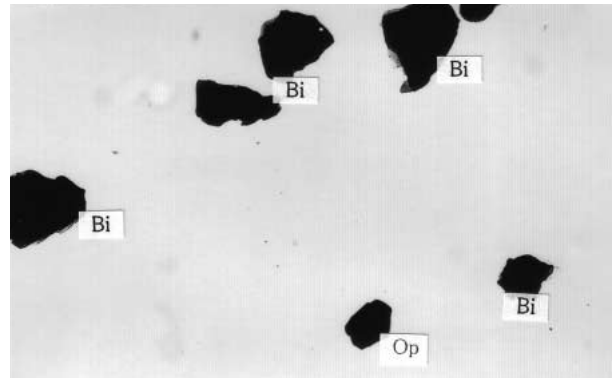
3. 資料 No.6



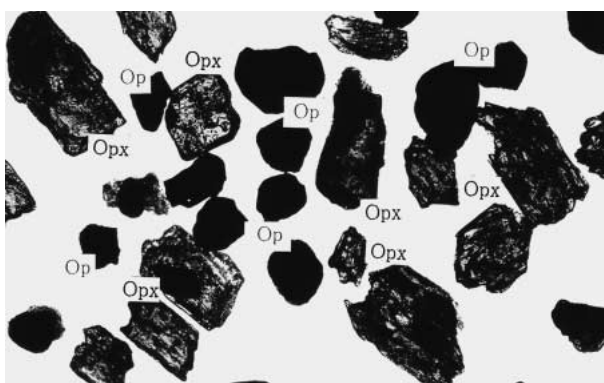
4. 資料 No.7



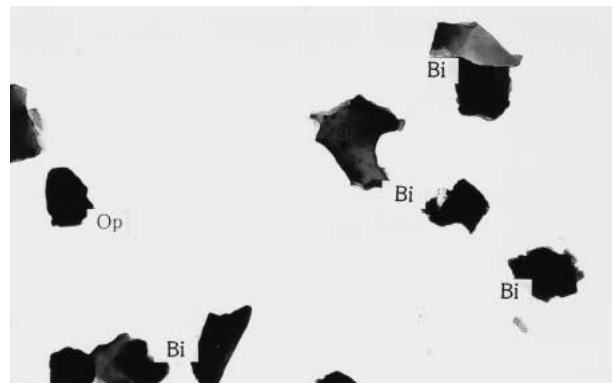
5. 資料 No.18



6. 資料 No.52



7. 資料 No.54



8. 資料 No.68

Opx:斜方輝石． Bi:黒雲母． Ho:角閃石． Am:角閃石族． Oxho:酸化角閃石．
G:ザクロ石． Op:不透明鉱物． Oth:その他．

0.5mm

第 30 図 胎土中の重鉱物

第3節 八王子遺跡出土縄文土器付着物の放射性炭素年代測定

(株式会社パレオ・ラボ)

1. はじめに

瀬戸市八王子遺跡より検出された縄文土器付着物の加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、SX03 から出土した土器より採取した付着物 2 点である。

これら試料は、酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

3. 結果

表 15 に、各試料の同位体分別効果の補正值(基準値 -25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値(yrBP)の算出は、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が 68%であることを意味する。なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正し、より正確な年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3(CALIB 3.0 のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10% 未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

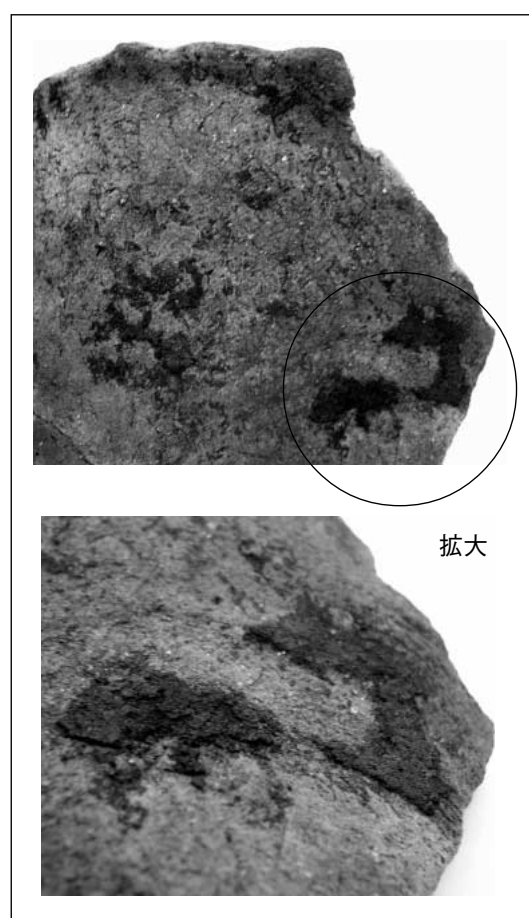
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎 . 日本先史時代の 14C 年代、 p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

表 15 放射性炭素年代測定結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	C年代 14 を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-1692 (AMS)	土器付着物 IISHT99A IVF12j SX03 No.1	-25.4	6845 $\pm$ 35	cal BC 5725	cal BC 5745 - 5705 (60.4%) cal BC 5695 - 5665 (34.3%)
PLD-1693 (AMS)	土器付着物 IISHT99A IVF12j SX03 No.2	-24.7	6800 $\pm$ 35	cal BC 5710 cal BC 5680 cal BC 5675	cal BC 5715 - 5665 (96.8%)



左列上下 サンプル N0.1 E-59

右 サンプル N0.2 E-57

まとめ

1. 縄文早期資料について

1. 出土遺物の時期別分布状況

時期別の土器破片数（接合前）を表16に示す。有文の土器片による分類では、爪形文の刺突列を特徴とする元野式、八ッ崎I式、粕畑式が約26%と最も多く、胎土に繊維を含む無文胴部片の多くがこれらに相当すると思われ、少量の繊維を含む無文土器片は全体の9割を超える高い数値を示す。

第31図～39図に示すように石器・土器の分布が集中する範囲は大きく5つ（A～E）に分けられる。最も高い密度で分布がみられたのはAであり、高低差の少ない平坦面で一定の厚みをもって遺物が含まれている。これは中世以降の耕作等によって破碎された土器小片をそれぞれ採取したためと思われるが、実は「台石・磨石」や「剥片石器」の集中域も一致している。99A区南西端のBはSX03に相当しこれは一括性が高く、土器に伴う石器類の時期比定に有効な情報を付加するものである。CおよびDは段丘の縁付近で耕作による削平を免れた一群で、A側から投棄または流出したものと思われる。Eは木下川方向へ続く斜面であり、標高の高い00B区では全く見られず、大幅に削平を受けて滅失したものと思われる。

2. 八王子遺跡資料の特徴について

土器では押型文終末期段階で中部高地系とされる相木式が出土している。海岸部の早期貝塚遺跡はもとより、これまで県内でみられなかった資料である。早期後葉では粕畑式・上ノ山式を中心に充実した資料が得られた。特に粕畑式特有とされる装飾把手・突起の盛行は明らかであり、施文方法の変化に対応する器面調整の簡略化という方向性はみえ細分は可能と考えられるものの、粕畑式から上ノ山式に至る過程はここでも不明瞭であった。

3. 居住域の推定範囲

00B区の状況から旧地形は調査範囲中央を分断するように東側から丘陵末端が張出していたと思われる。住居跡と推定した竪穴状遺構、台石・磨石、赤変した小礫群の分布状況を積極的に採用すれば、粕畑式段階にはほぼ継続して98区周辺から調査区外北東部にかけ主要な居住域が広がっていたと考えられる。また、木下川を隔てた対岸の長谷口遺跡に

表 16 時期別破片数

土器型式		点数	比率 (%)
押型文		30	0.24
野島式・不明縄文		15	0.12
繊維土器 11864	茅山下層式	35	0.29
	元野・八ッ崎I式・粕畑式	287	2.36
	上ノ山式	104	0.86
	入海式	371	3.05
	無文胴部・底部	11067	91.0
石山式		71	0.58
塩屋中層B・天神山・塩屋式		21	0.17
前期・中期		160	1.32
合計（*出土地点計測破片数）		12161	

においても早期では続く入海Ⅰ・Ⅱ式を主とした資料が分布しており、周辺には瀬戸市域でも早期後葉の中心的な集落の一つが存在したと思われる。

2. 中世集落の消長について

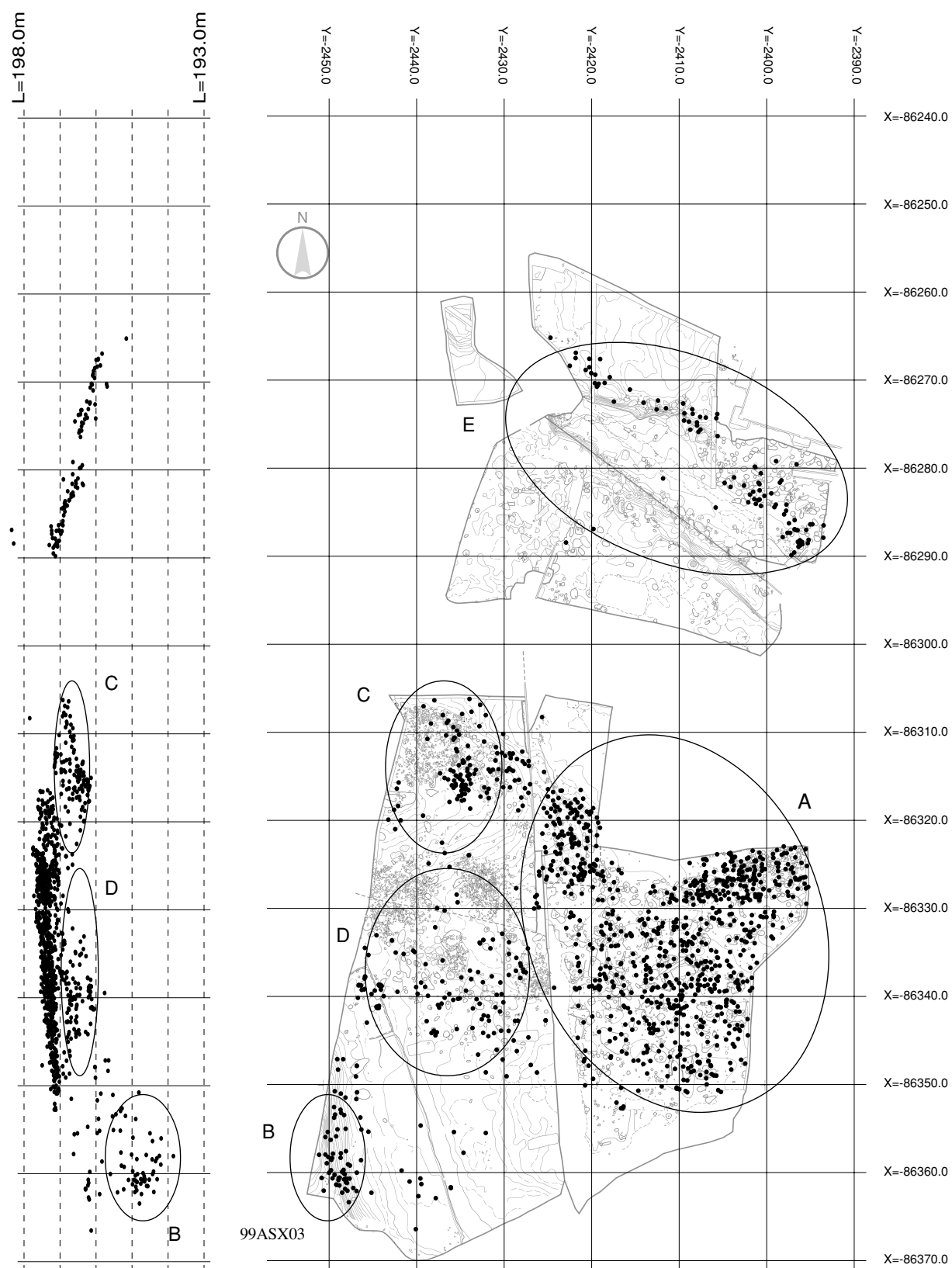
中世における八王子集落の出現は、古瀬戸前期段階の遺物が少量ながら採取されておりこの時期まで遡る。しかし確実な遺構は認められず、集落活動の痕跡は98区の平坦面に遺構群が展開する古瀬戸中期後葉～後期初頭の段階（中世Ⅰ期）と、古瀬戸後期後葉～大窯初頭（中世Ⅱ期）の大きく2時期に分けられる。そして以降の大窯期資料はほとんどみられなくなる。以下に時期別遺構群の特徴を示してまとめとしたい。

まず、中世Ⅰ期の遺構群は径1～2m規模の円形または隅丸方形プランの土坑群が多くなり、98区北東寄り調査区中央付近南北方向にまとまりがみられる。これらは基本的に重複せず、同時に掘削されたとは考え難いため、ある規則性をもって配置されたと考えられる。特徴的な出土遺物では98区SK17で土坑内に大型礫を配置してその中心に頸部を打ち欠いた灰釉瓶子が納められており、蔵骨器としての利用がまず推定される。このような遺物の埋納状況はこの一例に限定されるものの、土坑群の規格・配列等を重視すれば、周辺が墓域であった可能性は高いと考えられる。また、この中世Ⅰ期と後述するⅡ期の土坑群は、分布範囲が比較的明確に分かれている。これはⅠ期遺構群が展開する範囲が長期に亘って意識されていたことを示すものであり、やはりここに限定された特殊な空間を想定せざるを得ない。仮に埋土の特徴より中世の遺構とした一群の中で同様な規模、形状の土坑群をこの時期に含めるとすると、調査区北寄りでは自然地形の丘陵の縁に沿って、調査区中央では南北方向のラインで連続する土坑の配列を抽出することができる。

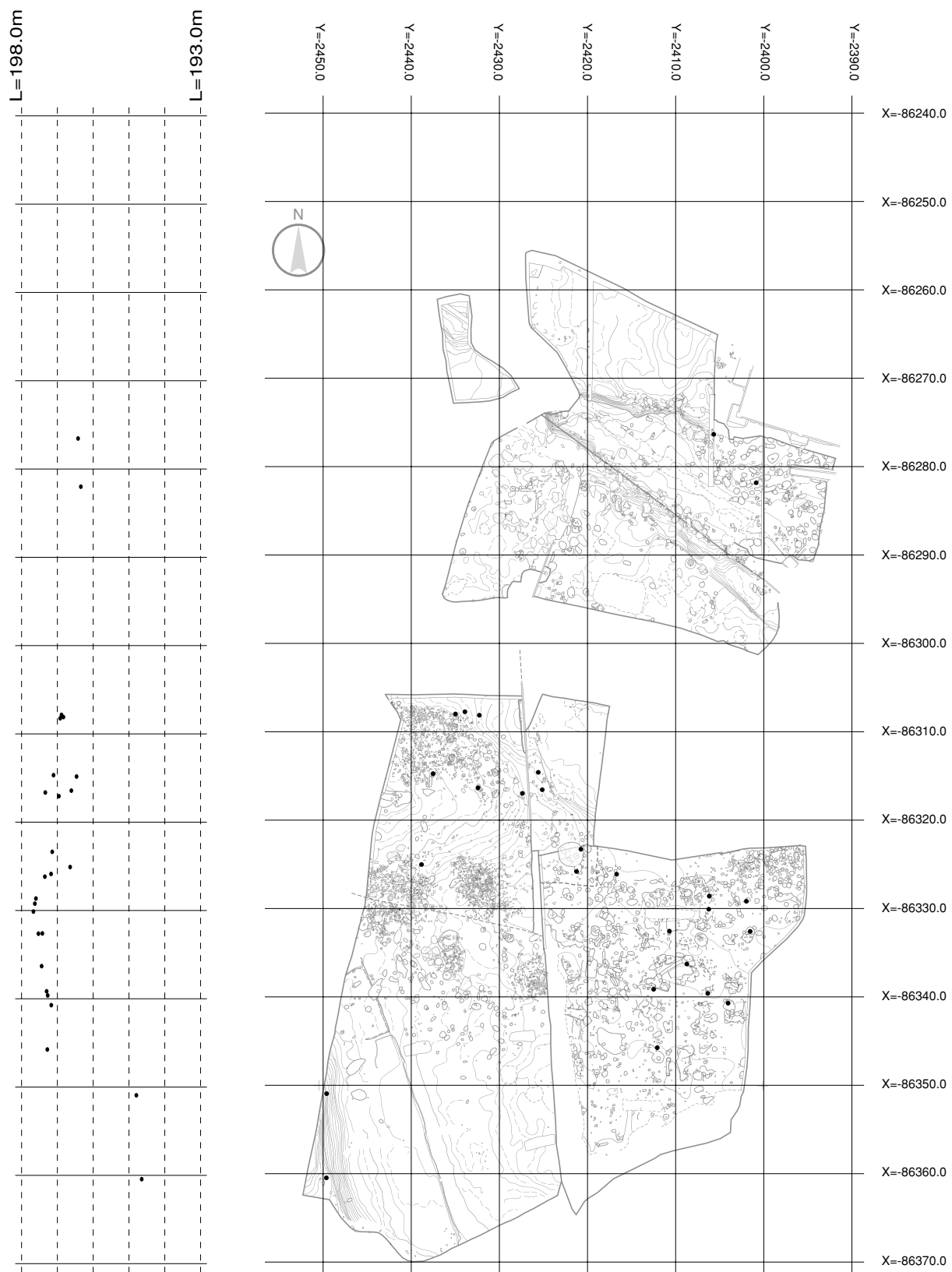
中世Ⅱ期は径約80cm～3m規模の中世Ⅰ期より大規模となった土坑とピット群からなり、主に98区中央～南西に展開する。土坑群は98区南西部分で南北方向に連続して掘削されており、同軸線上北側に伸びるSD05も実は溝ではなく、連続した土坑群であった可能性が高い。遺物を含む遺構が少なく時期の決定が困難ではあるが、周辺には多数の小ピットが重複して広がり、確実なものとして掘立柱建物4棟が復元できた。建物はほぼ東西方向に長軸をとり、建物に隣接して南側には廃棄土坑と思われるやや大型の不定形土坑が点在するなど、前段階に比べ明らかに生活感が窺われるが、出土陶器類に使用痕がみとめられず、陶製あるいは土師質の鍋・釜類といった煮炊具もほとんどみられないなど（表12）、恒常的に居住した痕跡とするにはやや疑問が残る。さらに出土陶器には匣鉢や窯道具が多数混在し、施釉陶器の製品は釉薬の発色の悪いもの、焼成不良など焼損・破損品も目立って多いことなどから、ここが常時住むような一般の居住域ではなく窯業生産に関わる工房か、または周辺を通る街道も推定されることから、窯跡近くに設けられた第1次の製品選別を行う作業スペースであった可能性を指摘しておきたい。

なお、周辺は古瀬戸段階の窯跡が集中する一帯であり、この時期に操業した近接する具体的な窯跡を挙げるとすれば、八王子遺跡の北東方向へ約1km、木下川が開析した谷の北側丘陵中位には神事池古窯があり、また赤津川沿いの丘陵部では、神田東窯跡、神田西窯跡、白坂A～C窯跡があり白坂雲興寺東方約500mには呉窯跡の存在が知られている。

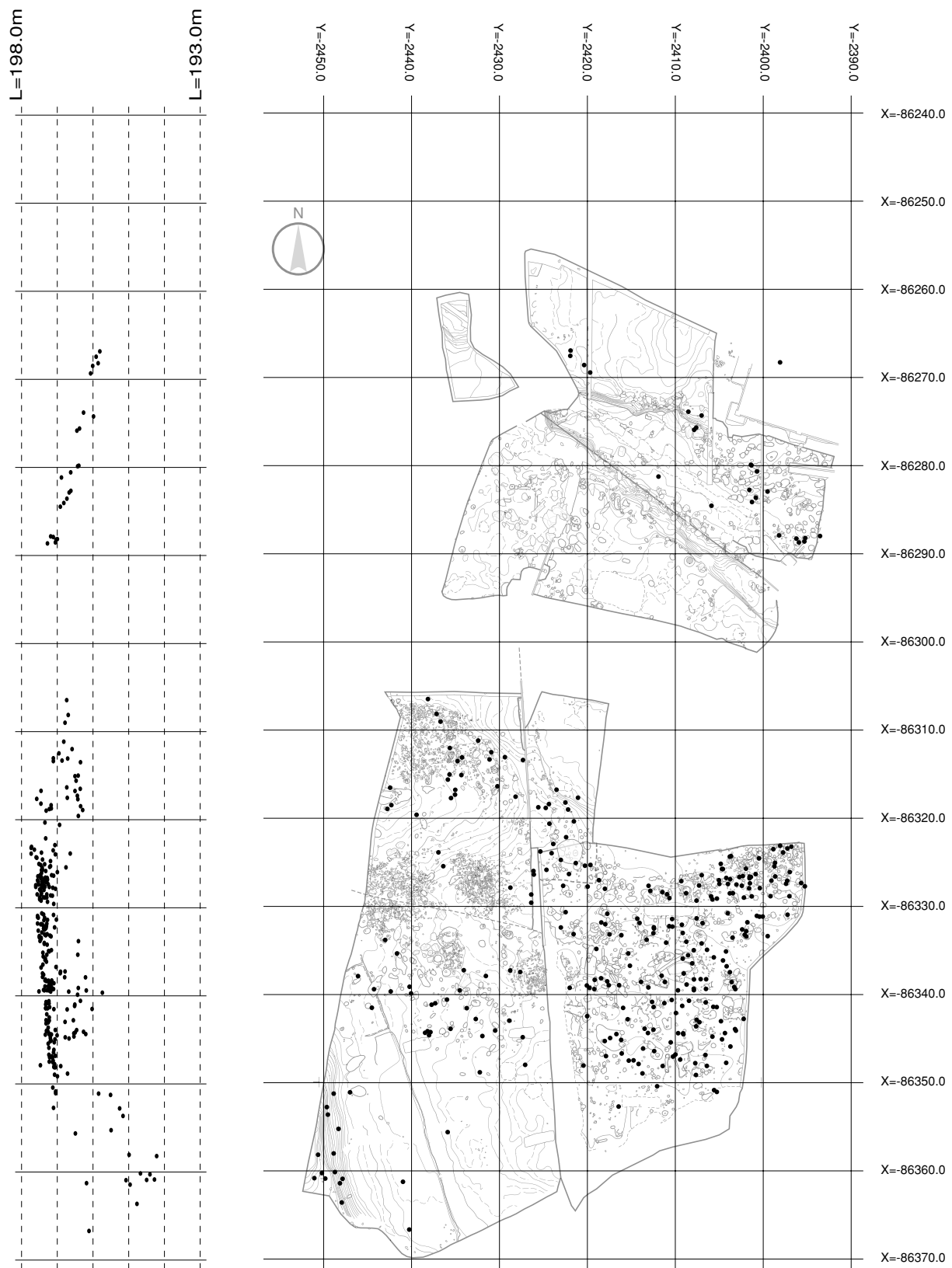
どの窯の製品が持ち込まれているのか、その特定など今後の課題としたい。



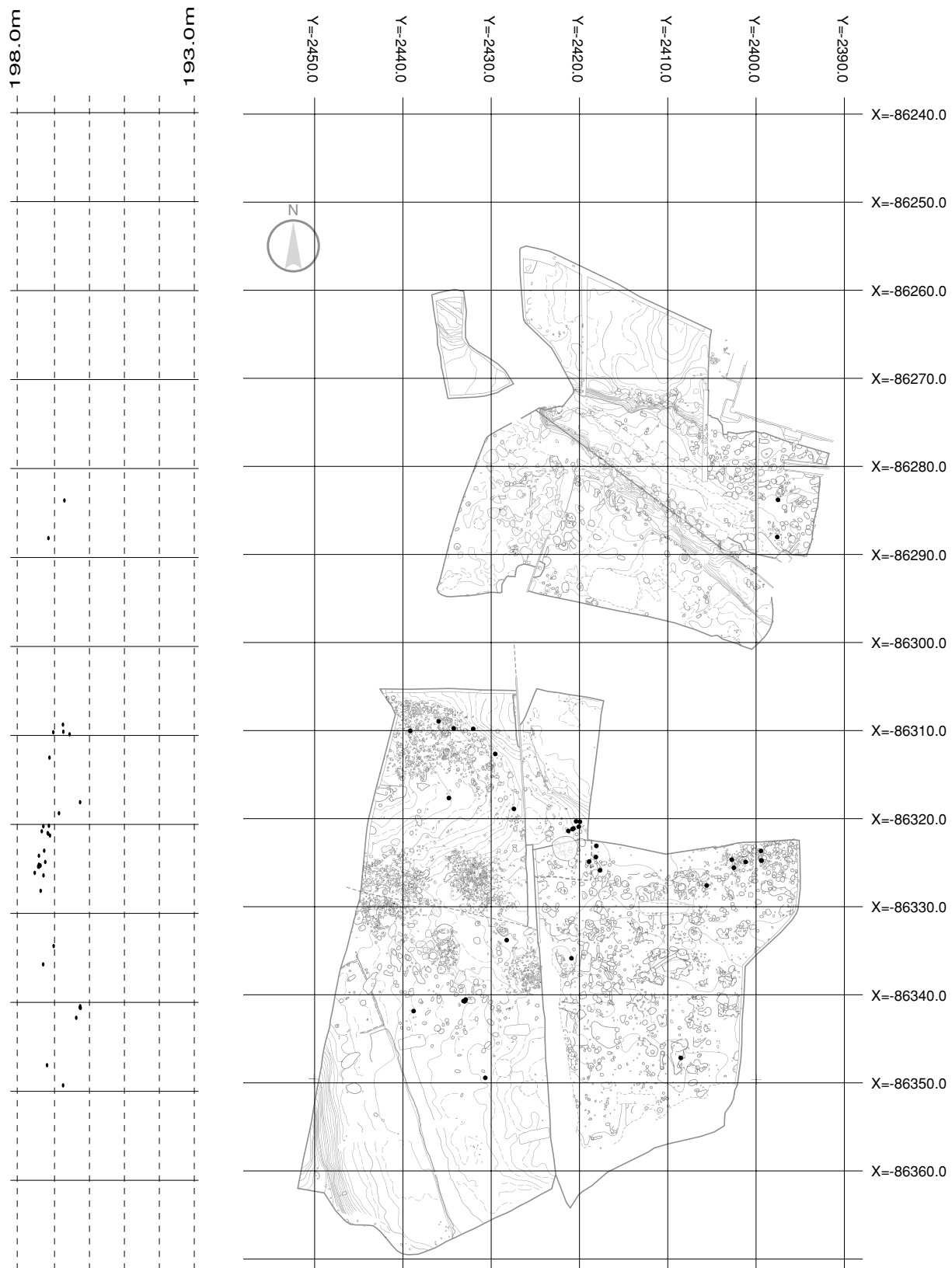
第31図 出土石器の平面・垂直分布（全体）



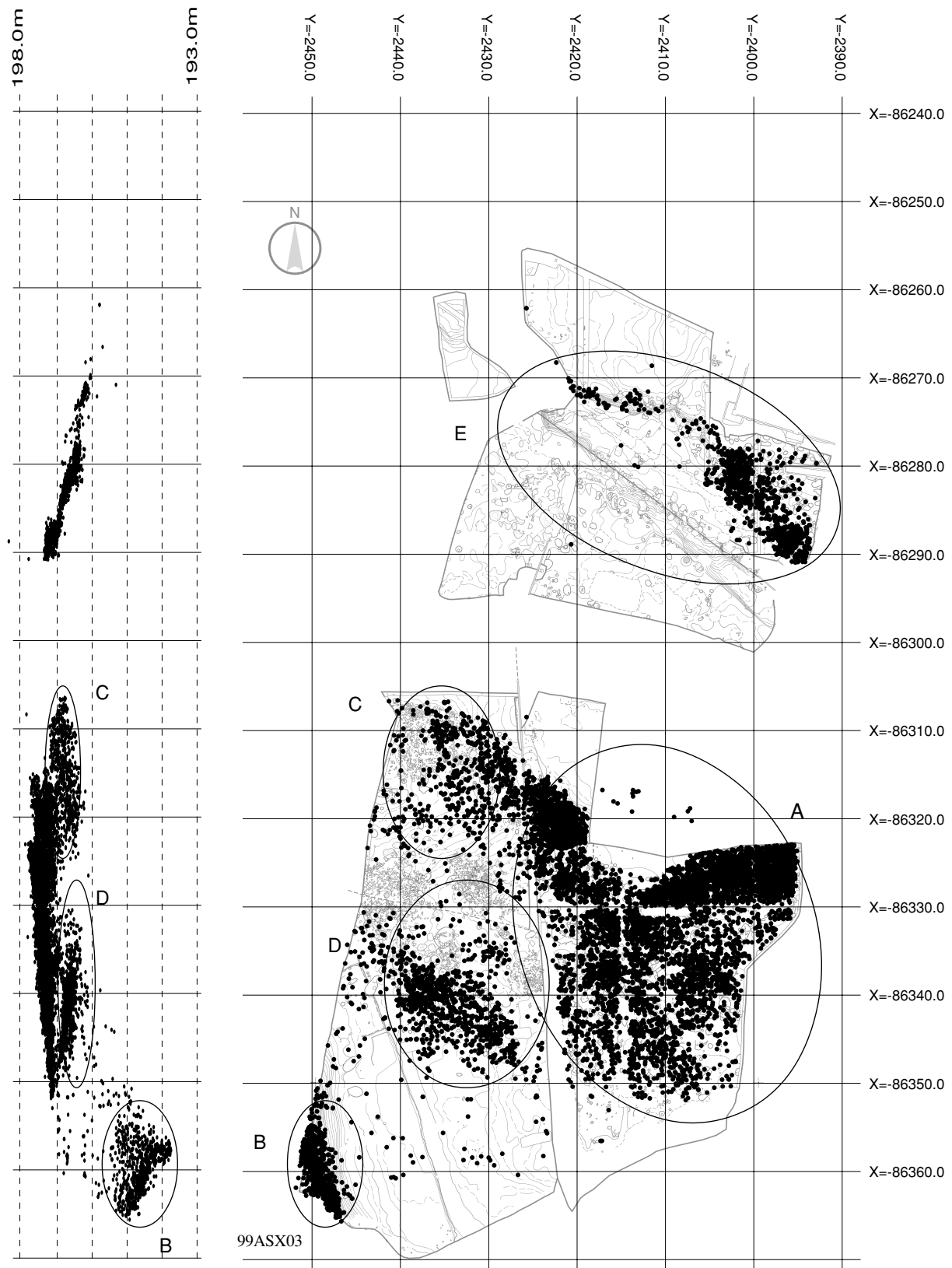
第 32 図 出土石器の平面・垂直分布（打斧・磨斧）



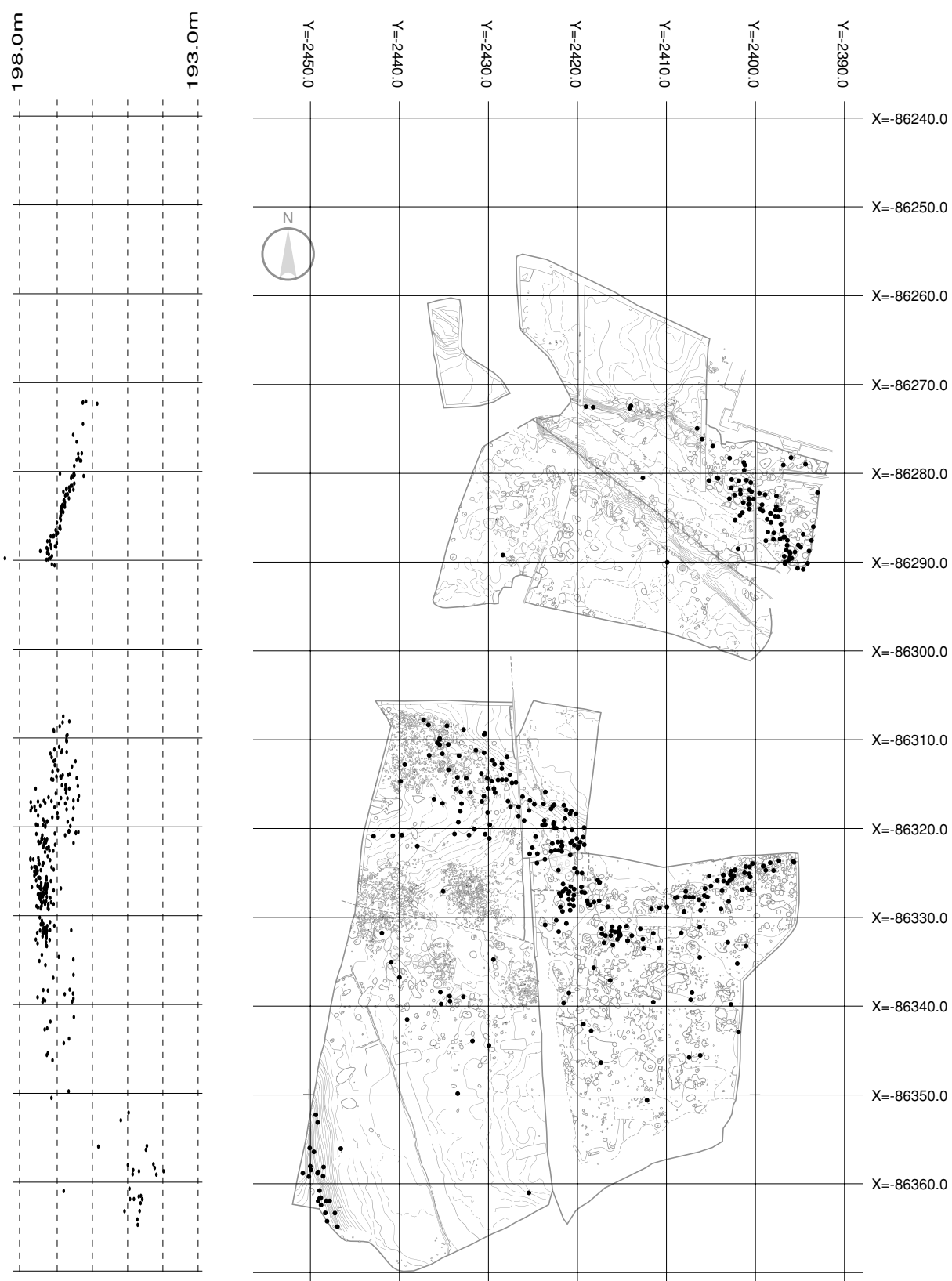
第34図 出土石器の平面・垂直分布（剥片石器）



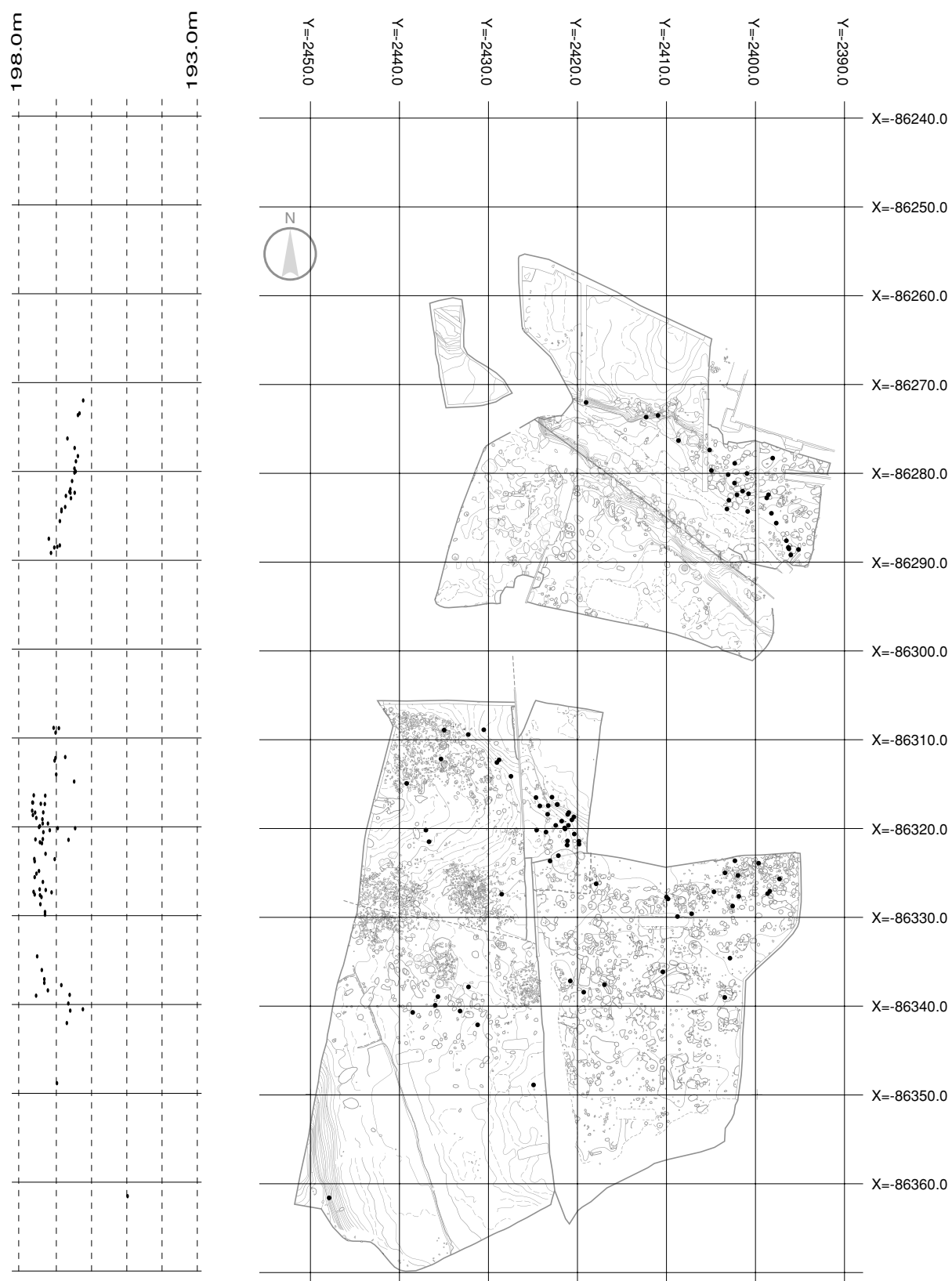
第 35 図 出土土器の平面・垂直分布（押型文・野島式）



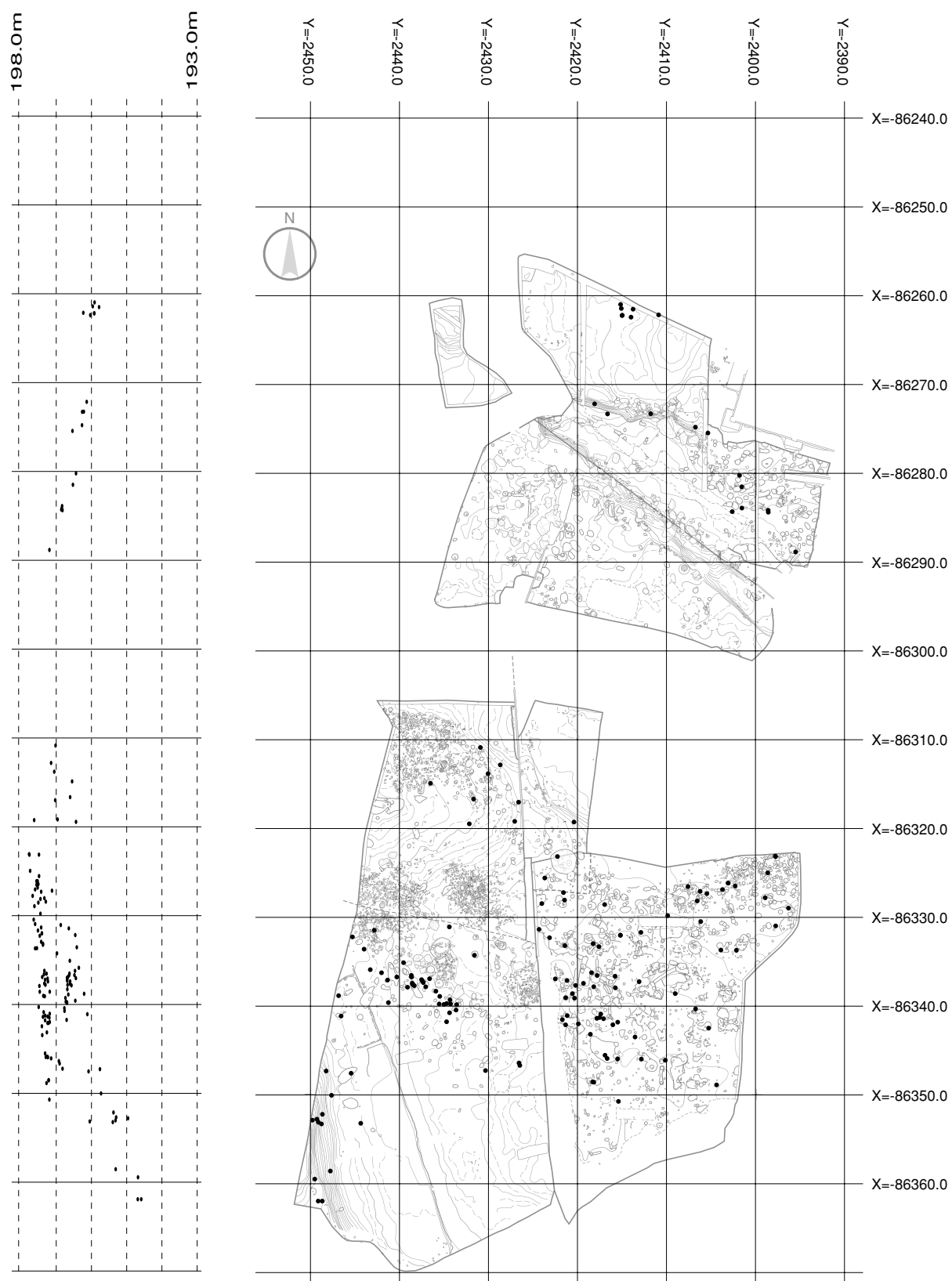
第 36 図 出土土器の平面・垂直分布（含多繊維）



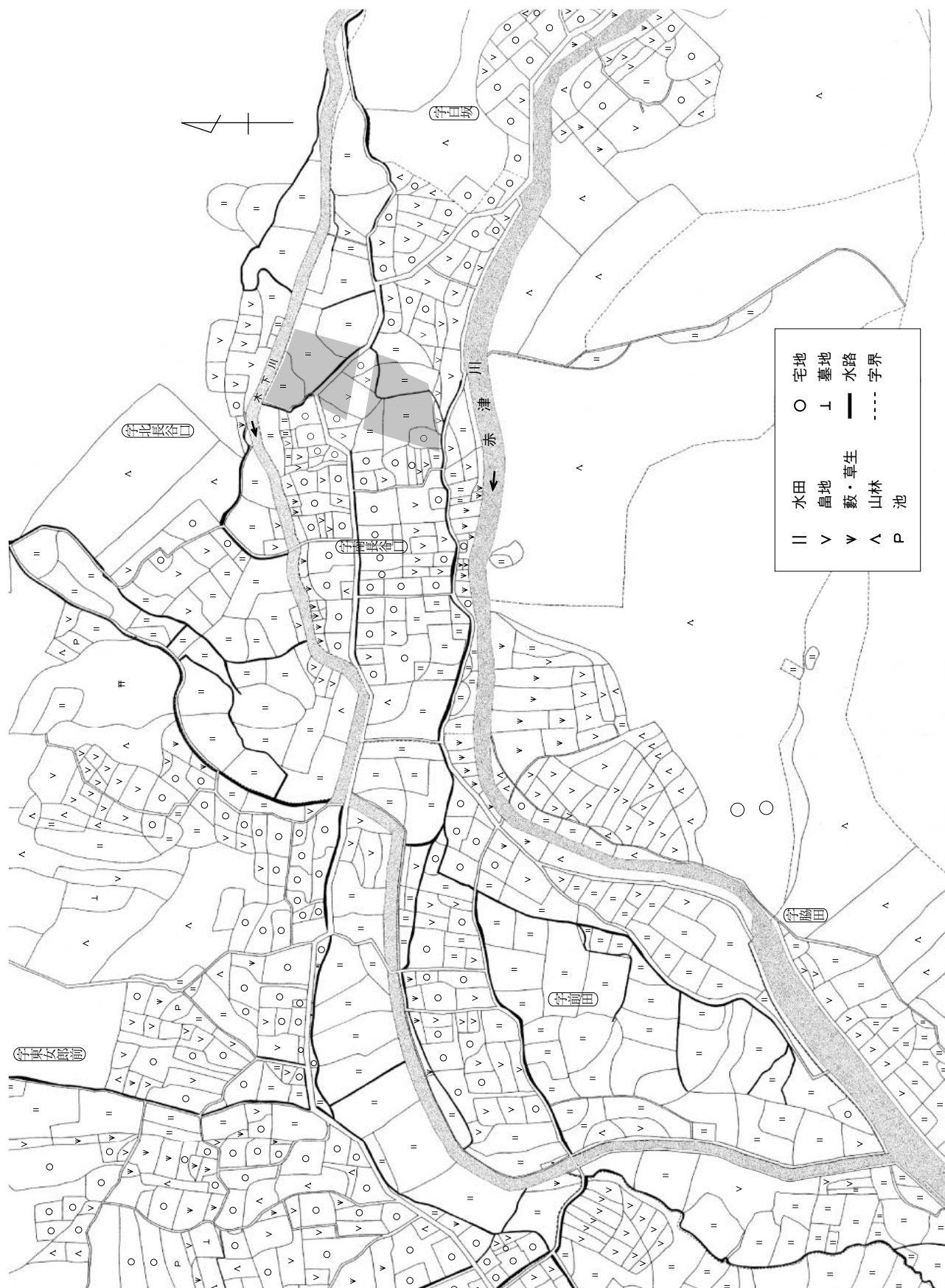
第 37 図 出土土器の平面・垂直分布（入海Ⅰ・Ⅱ式）



第 38 図 出土土器の平面・垂直分布（石山～塩屋式）



第 39 図 出土土器の平面・垂直分布（前期～）

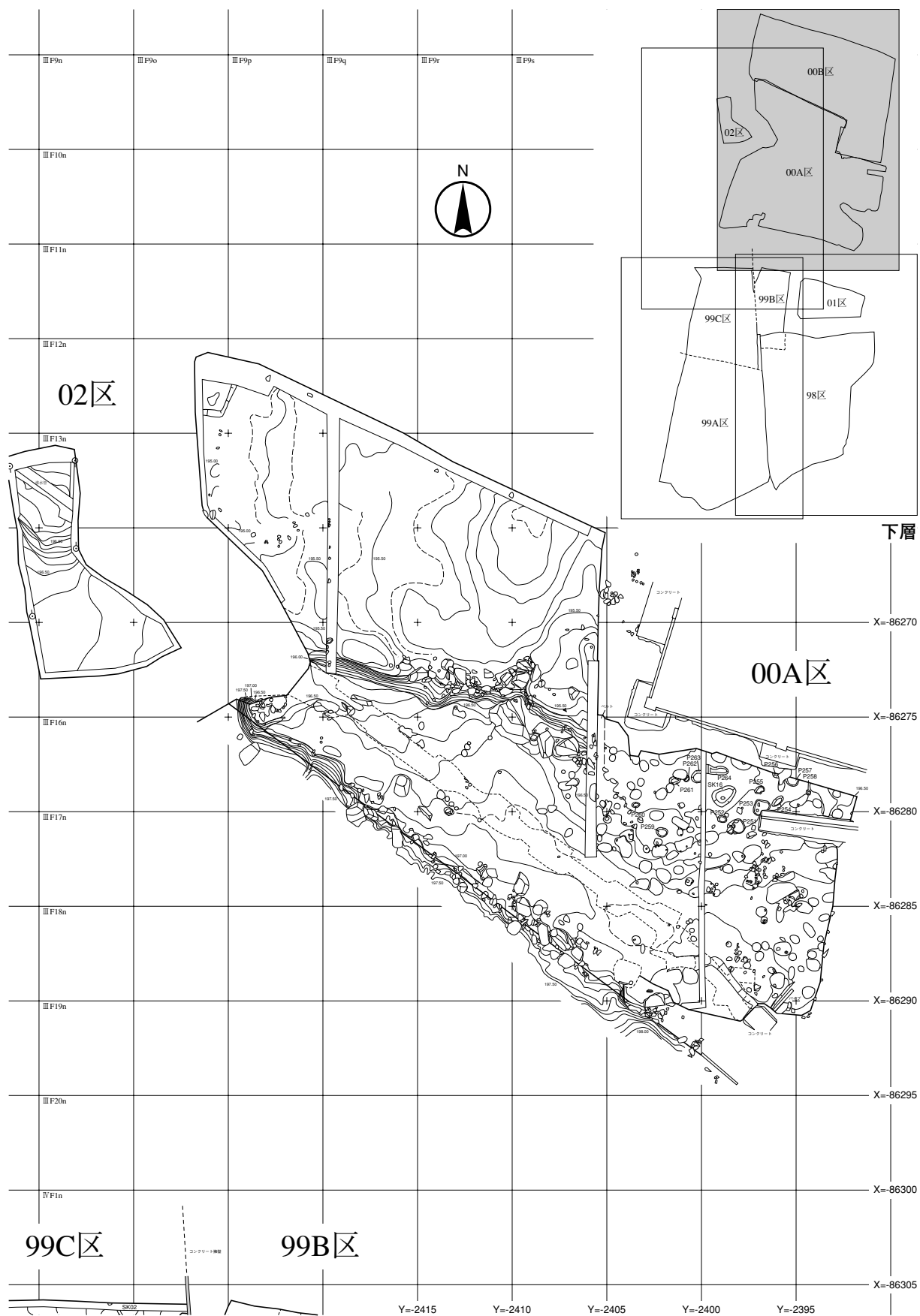


第40図 八王子遺跡周辺地籍図 (S ≒ 1/4,000)

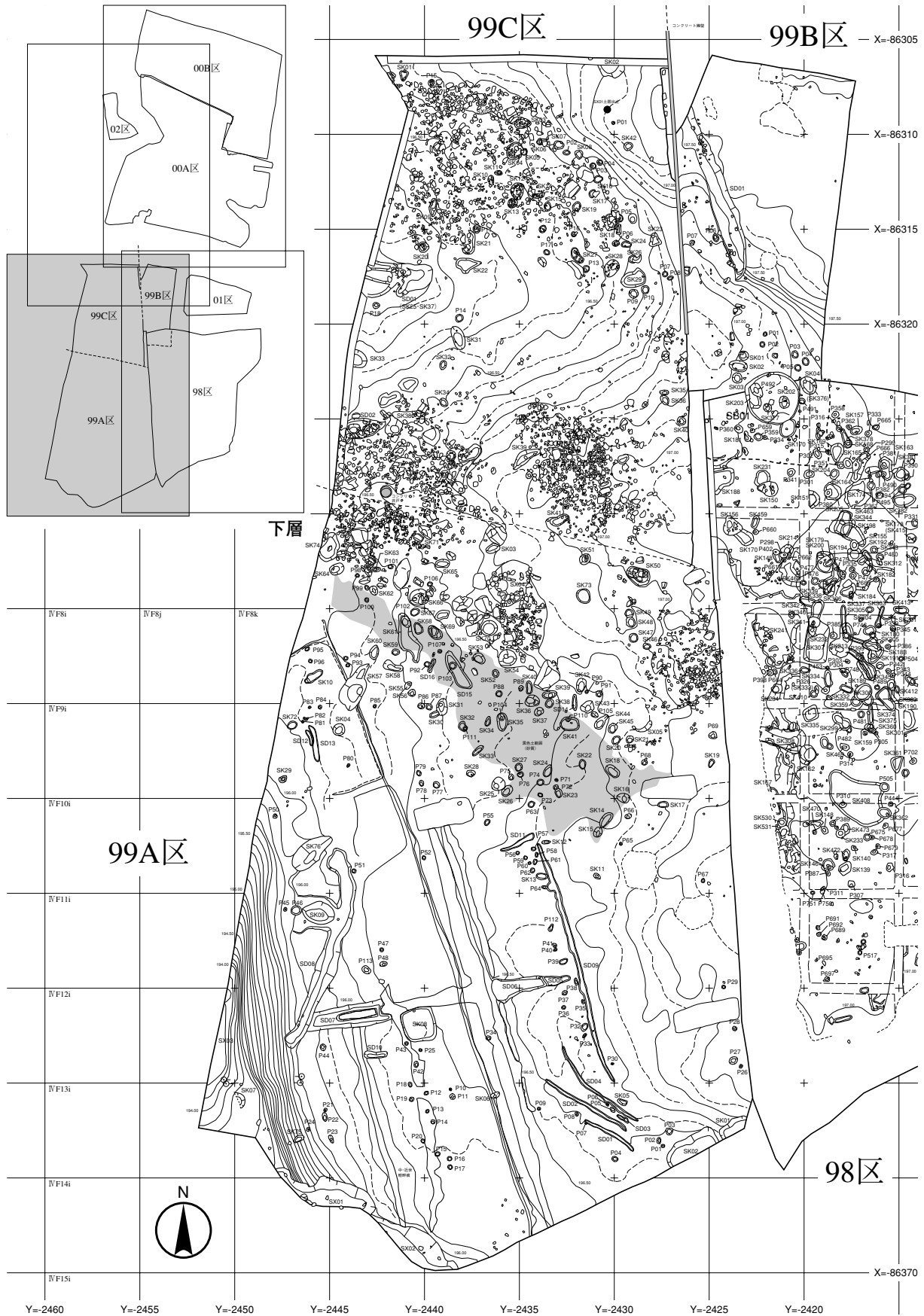
図 版

- ・ 遺構基本平面図 (S=1/300)
- ・ 遺物図版 (縄文土器・石器・古代・中世)
- ・ 写真図版 (遺構・遺物)

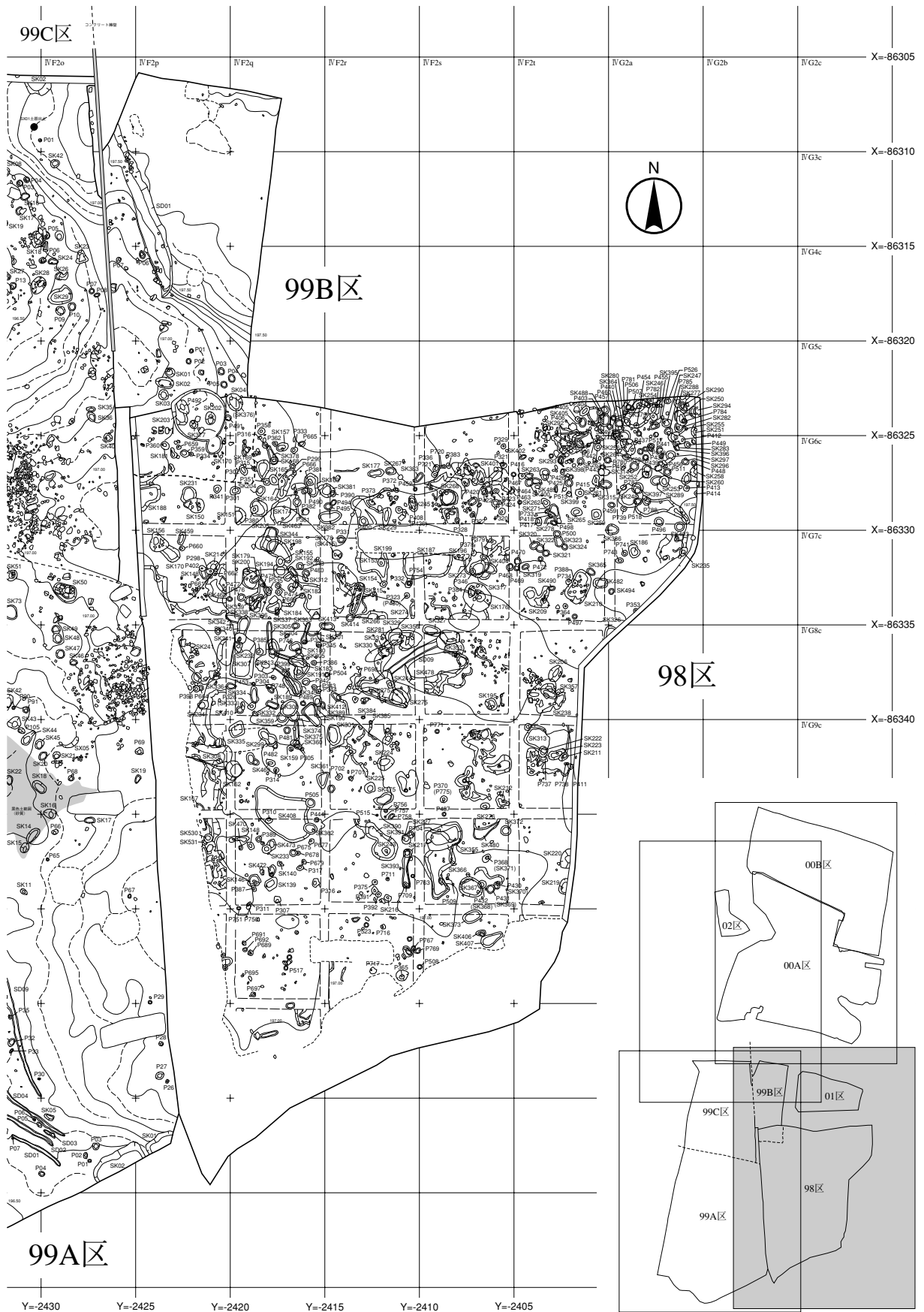
図版 2



図版 3

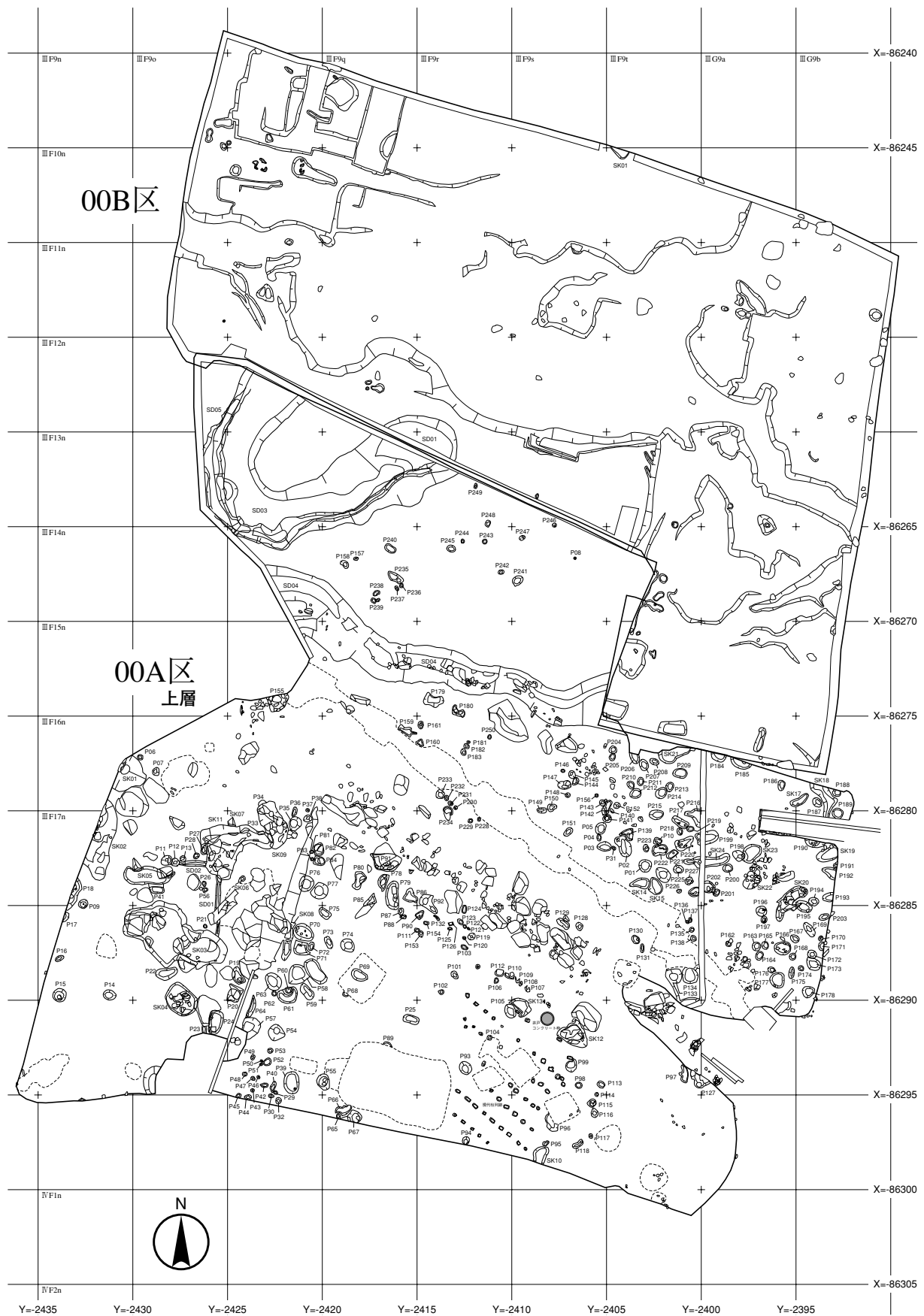


図版 4



下層

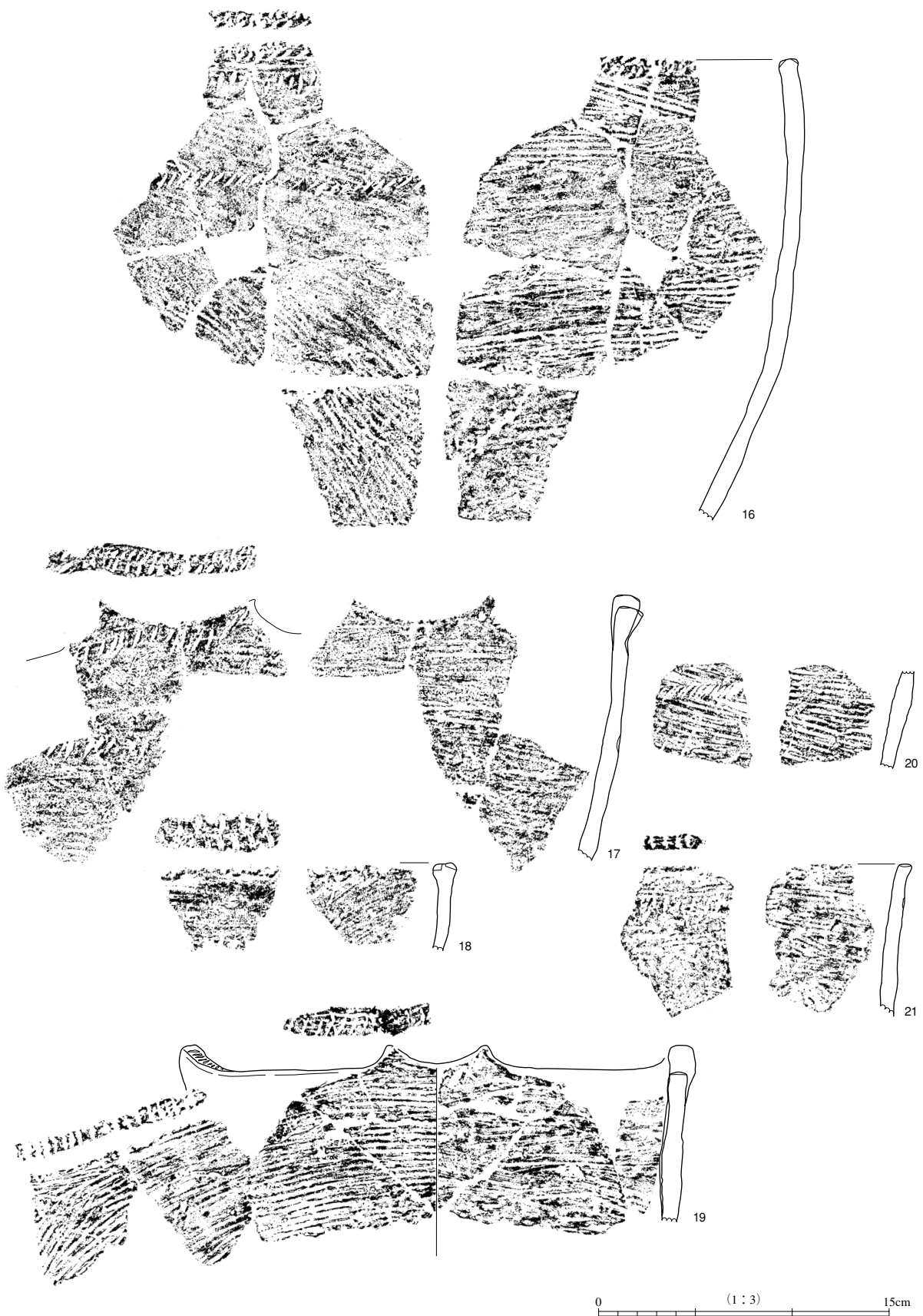
図版 5



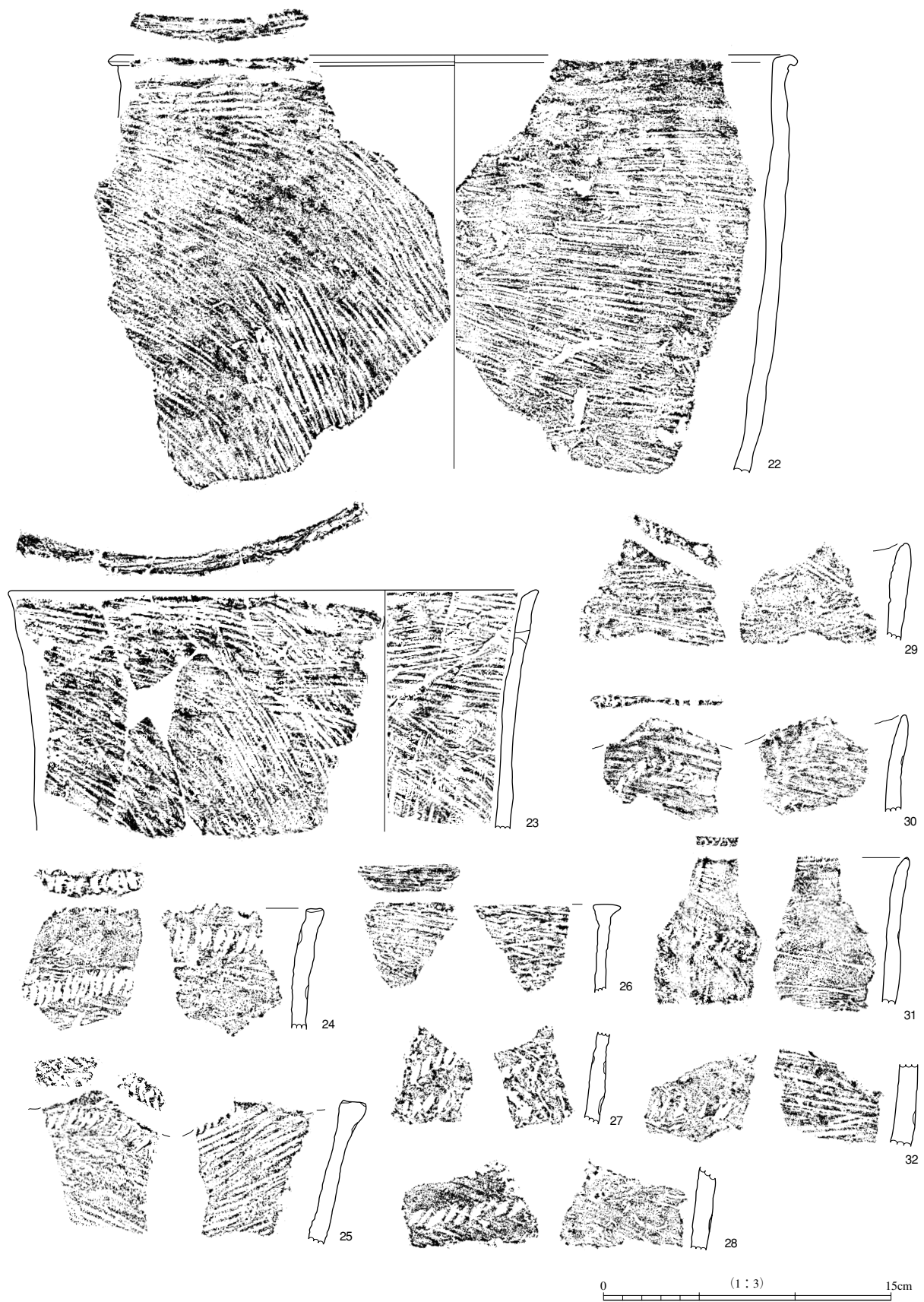
図版 7



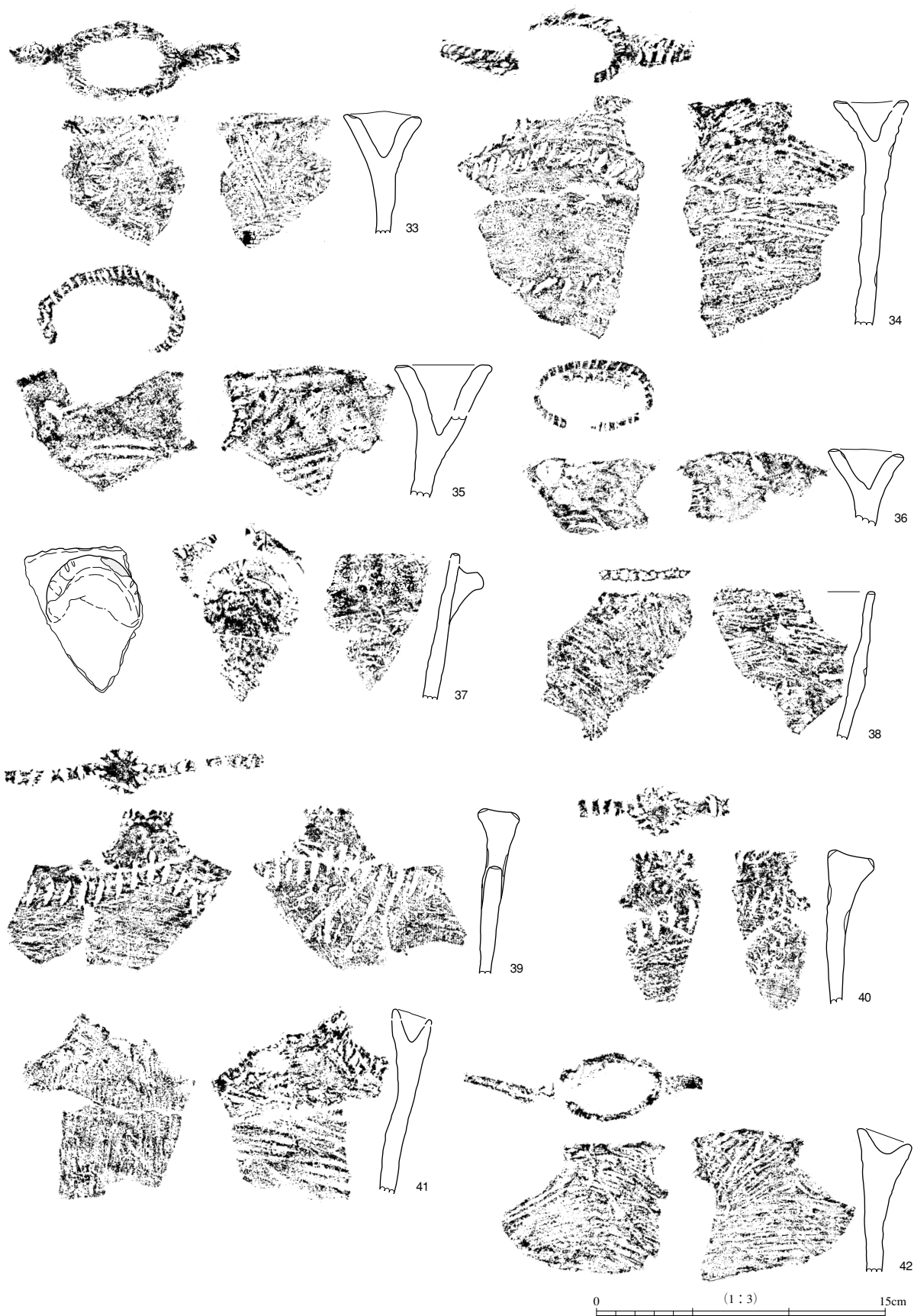
図版 8



図版 9



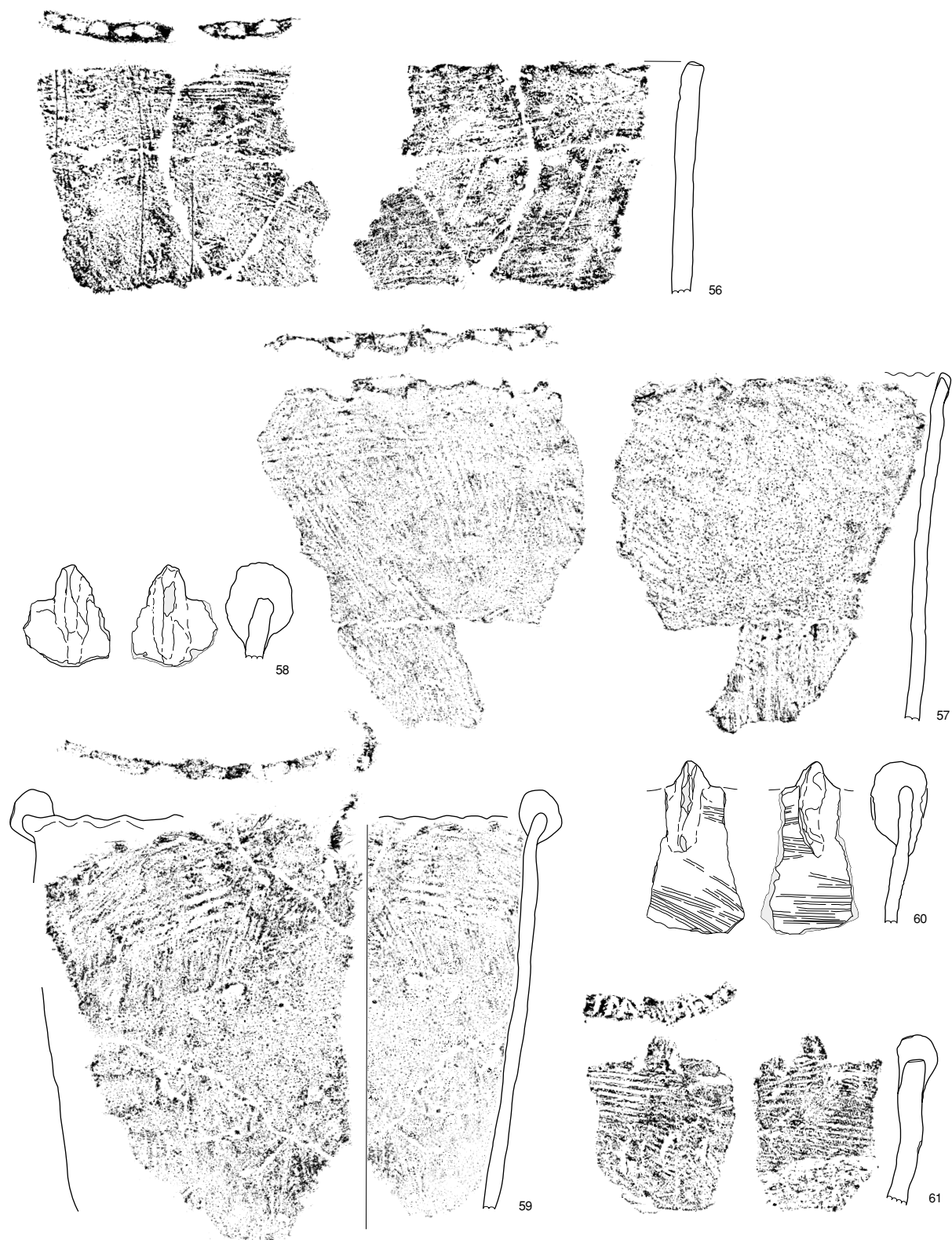
図版 10



図版 11



図版 12

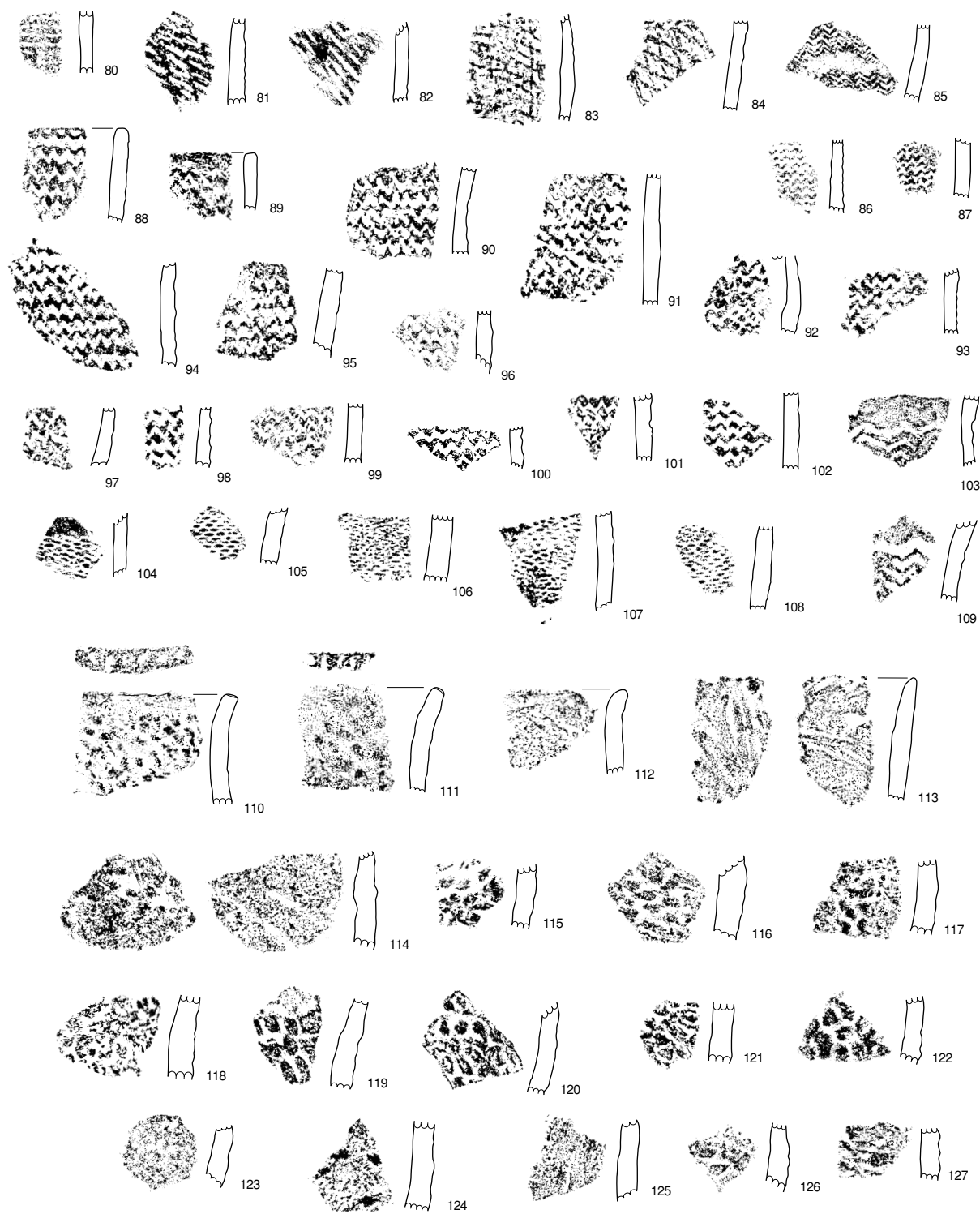


図版 13



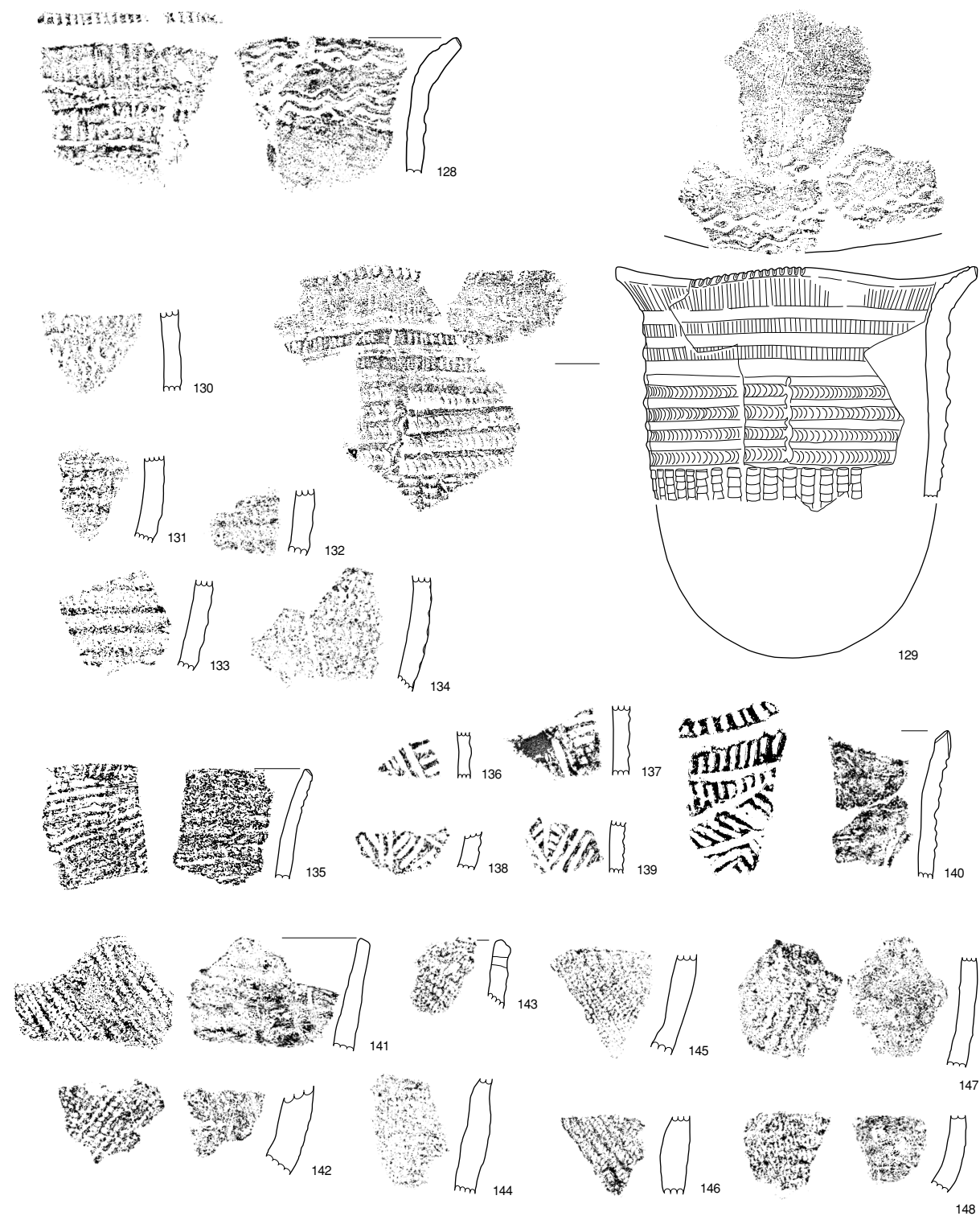
0 (1:3) 15cm

図版 14



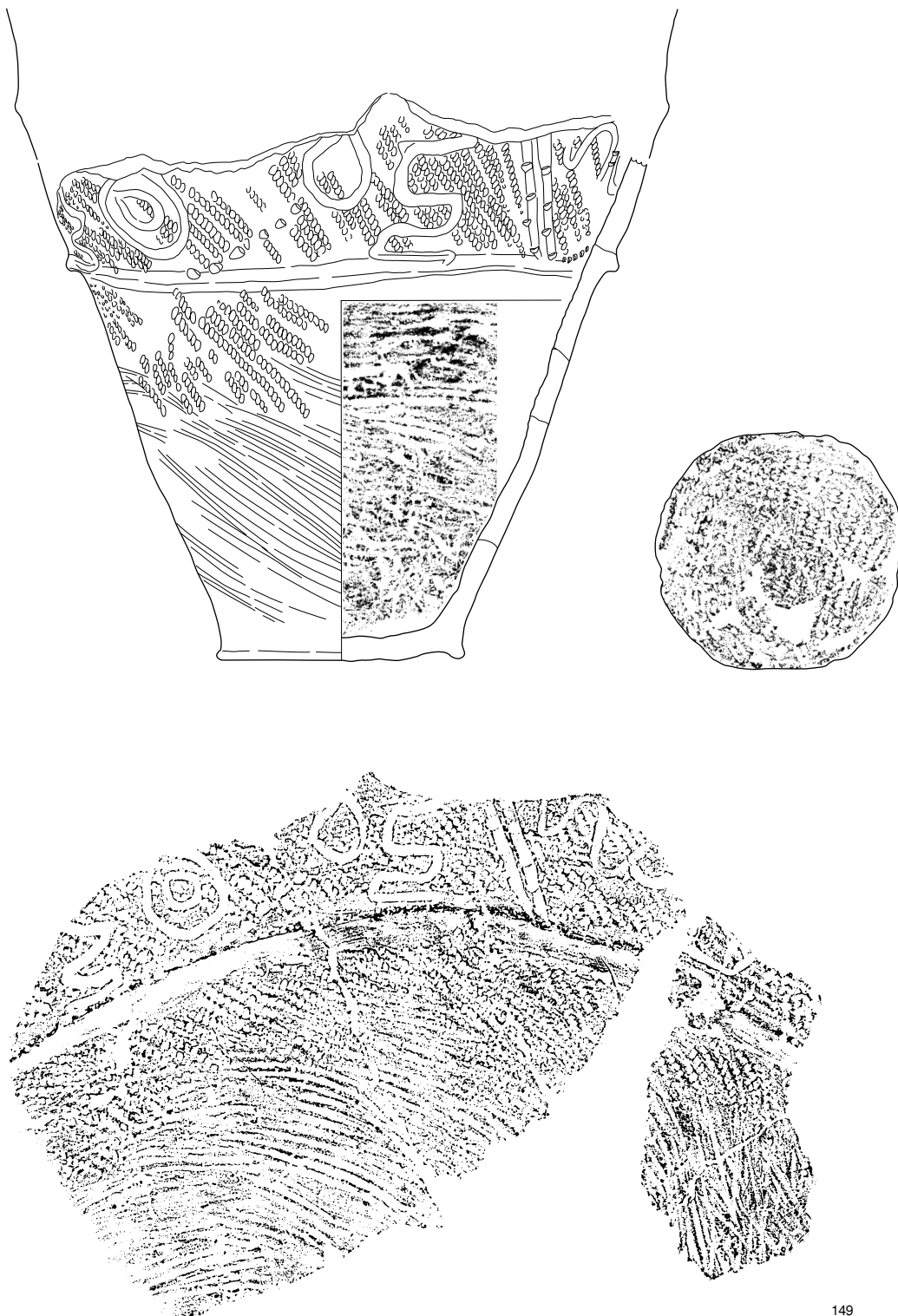
0 (1 : 3) 15cm

図版 15



0 (1 : 3) 15cm

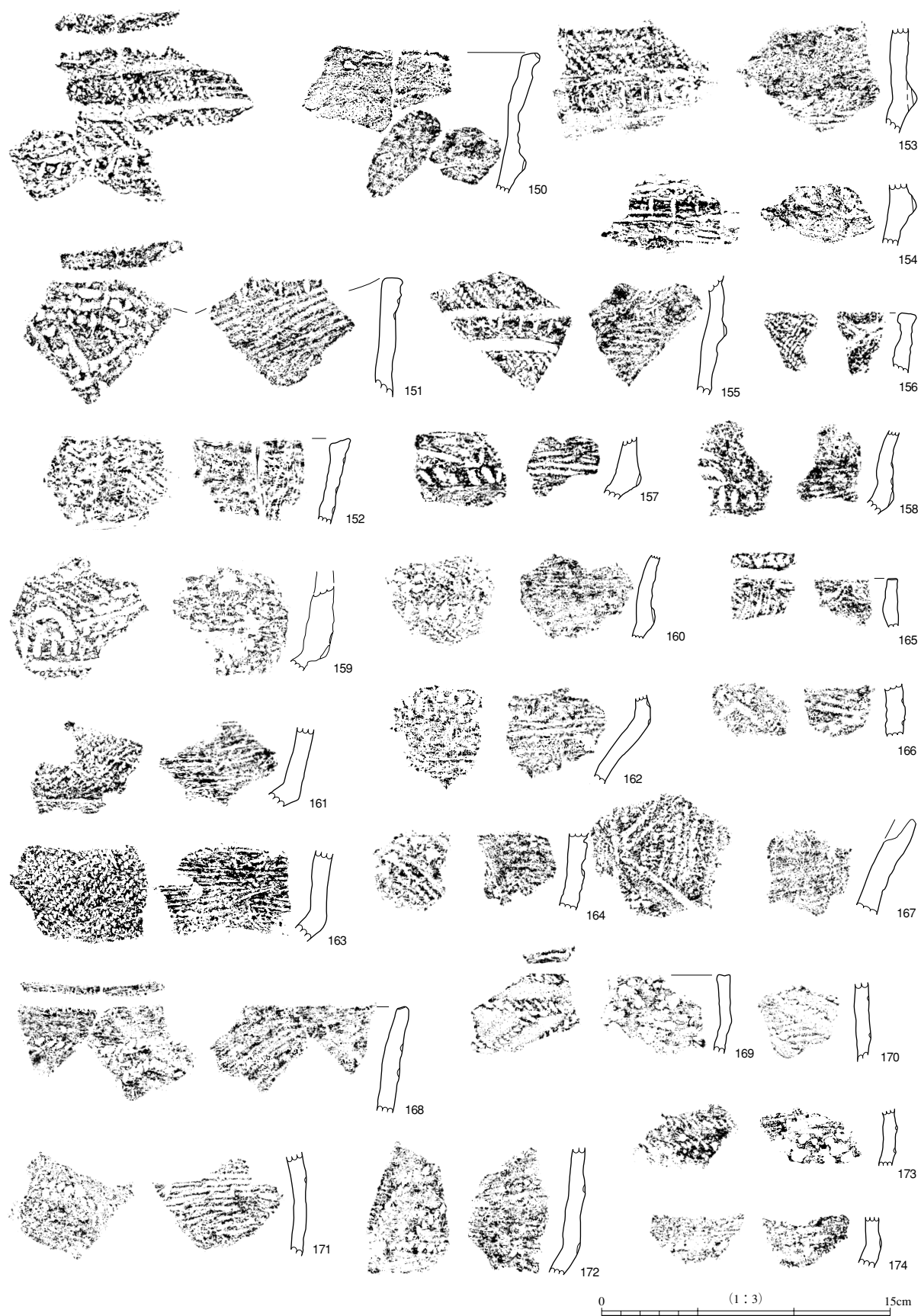
図版 16



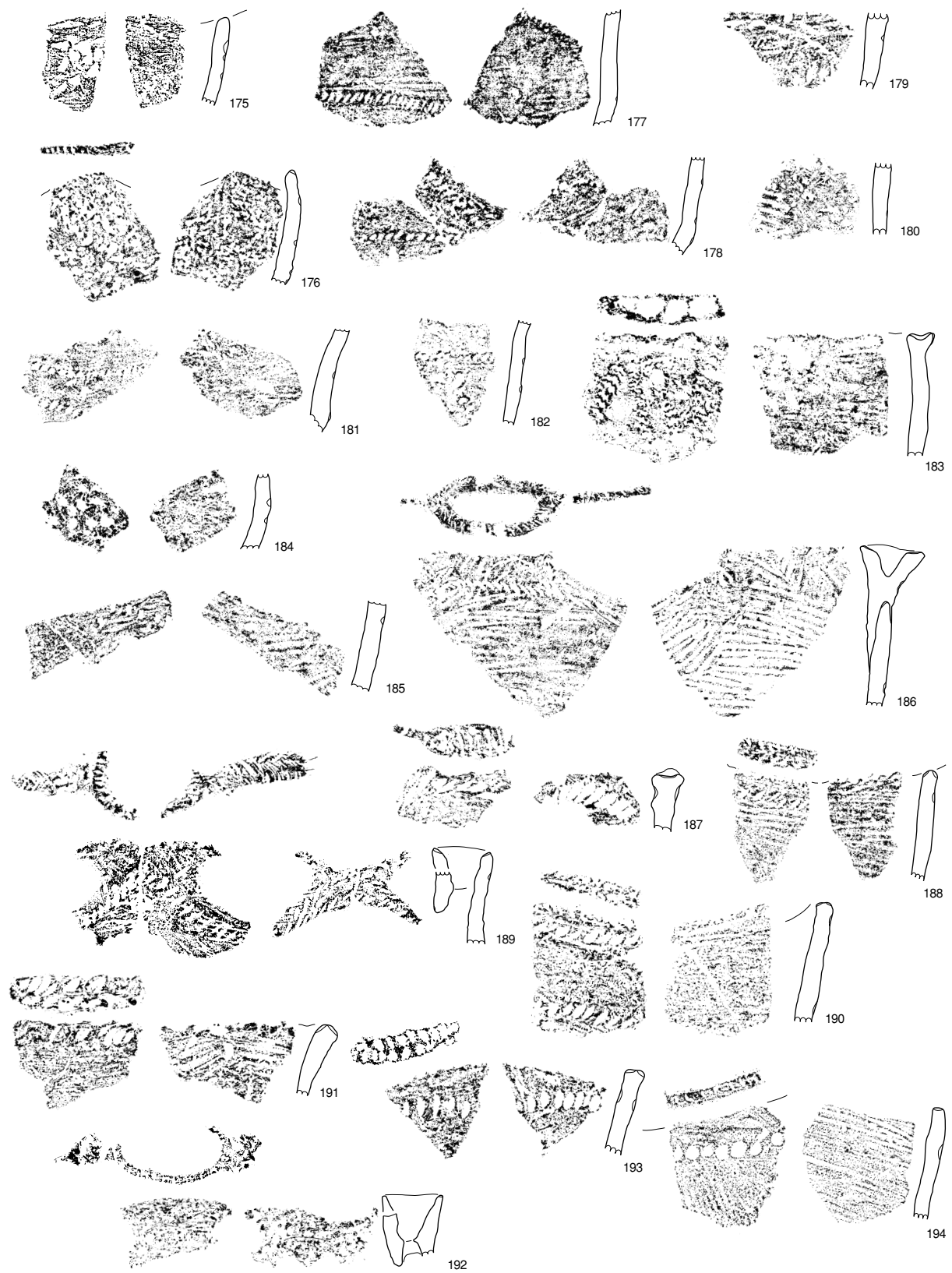
149

0 (1 : 3) 15cm

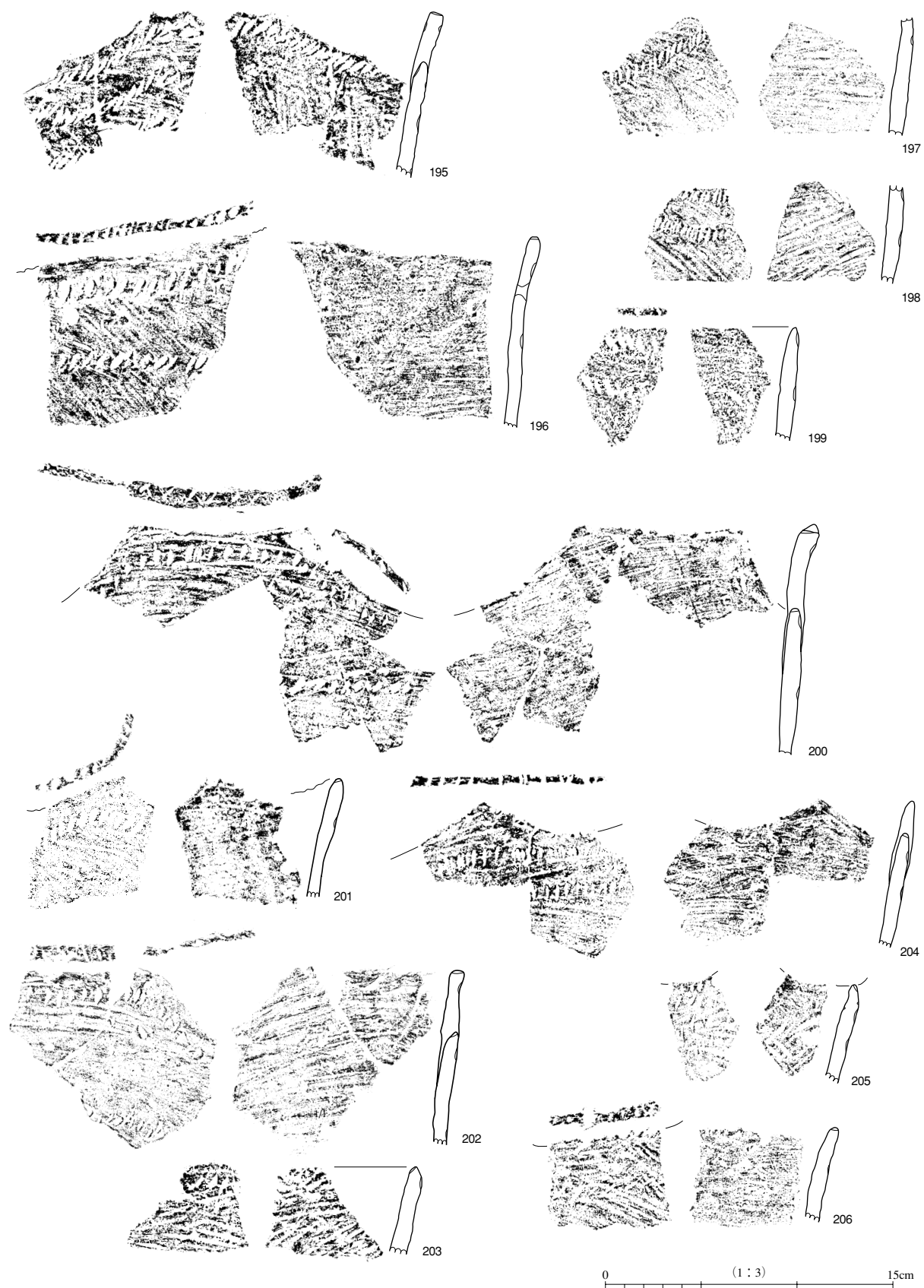
図版 17



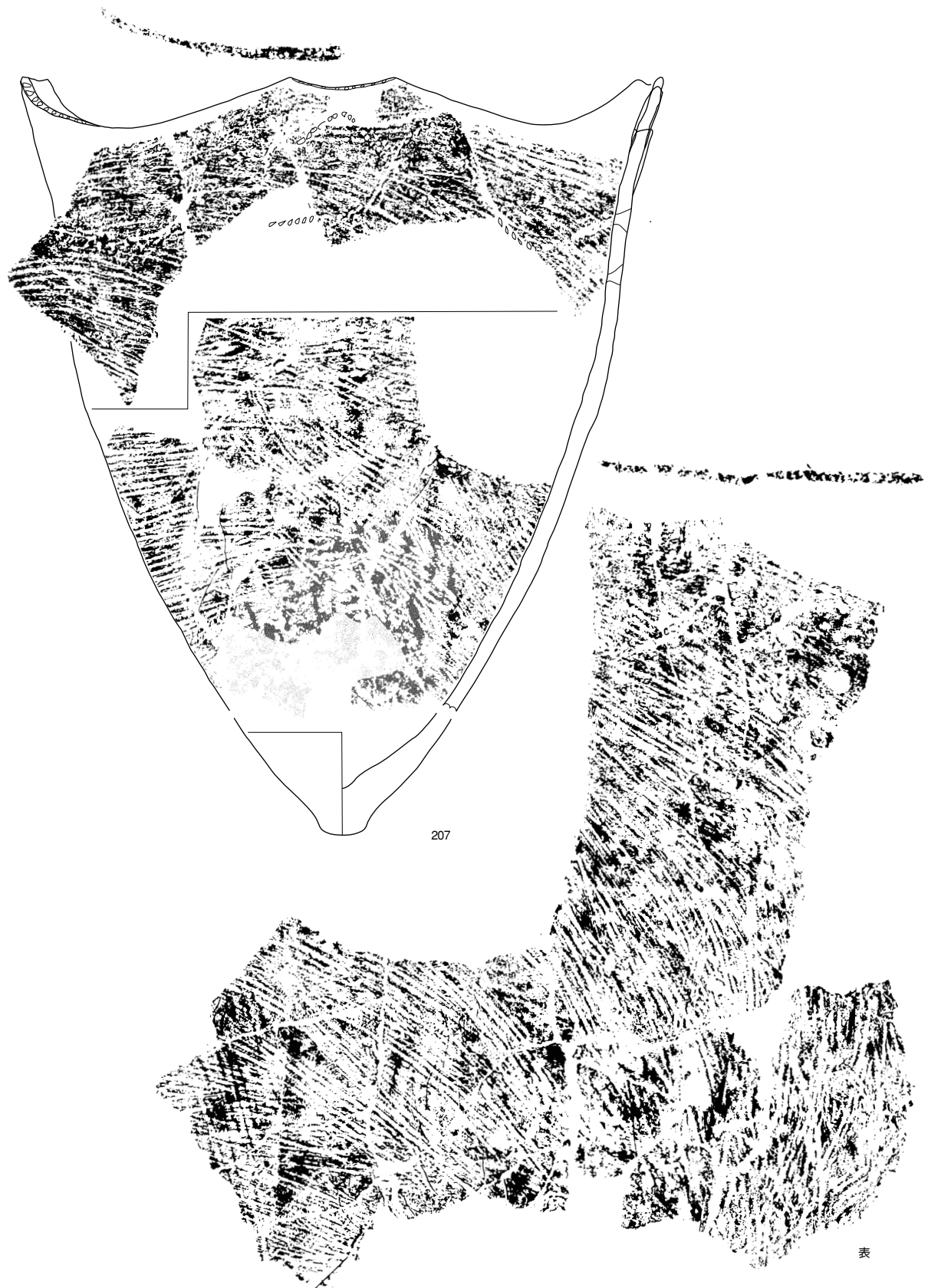
図版 18



図版 19

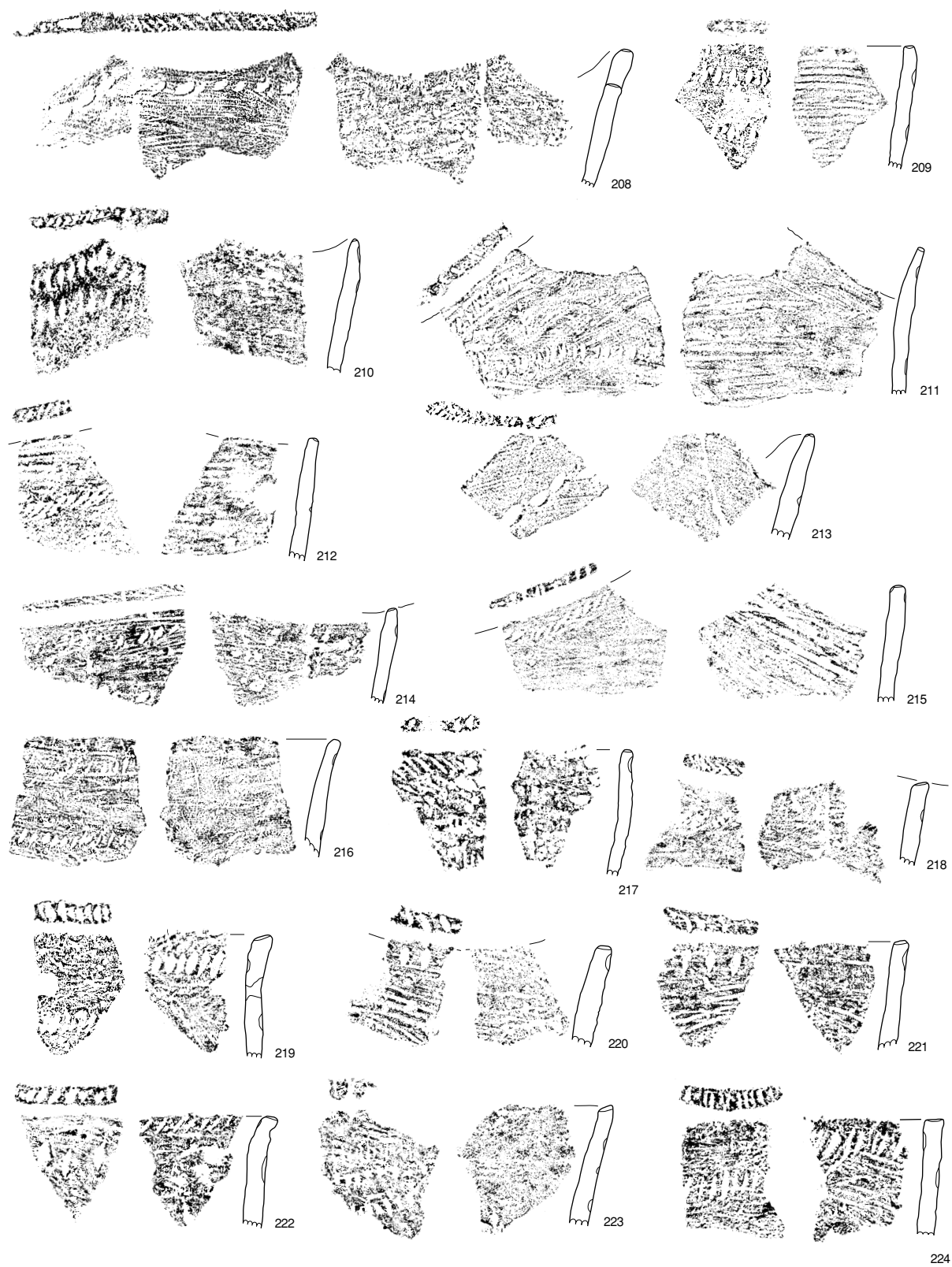


図版 20



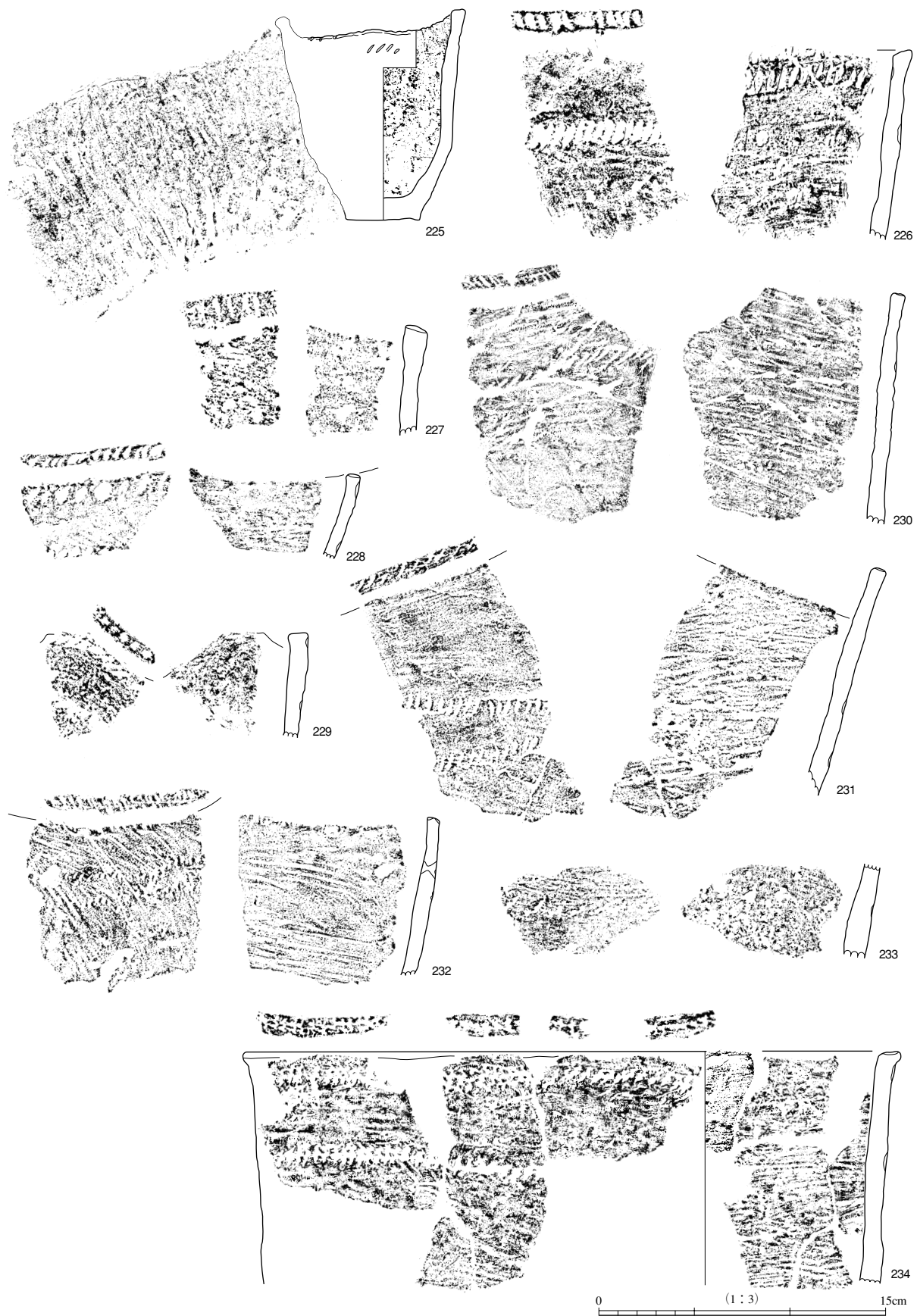
0 (1 : 3) 15cm

図版 21

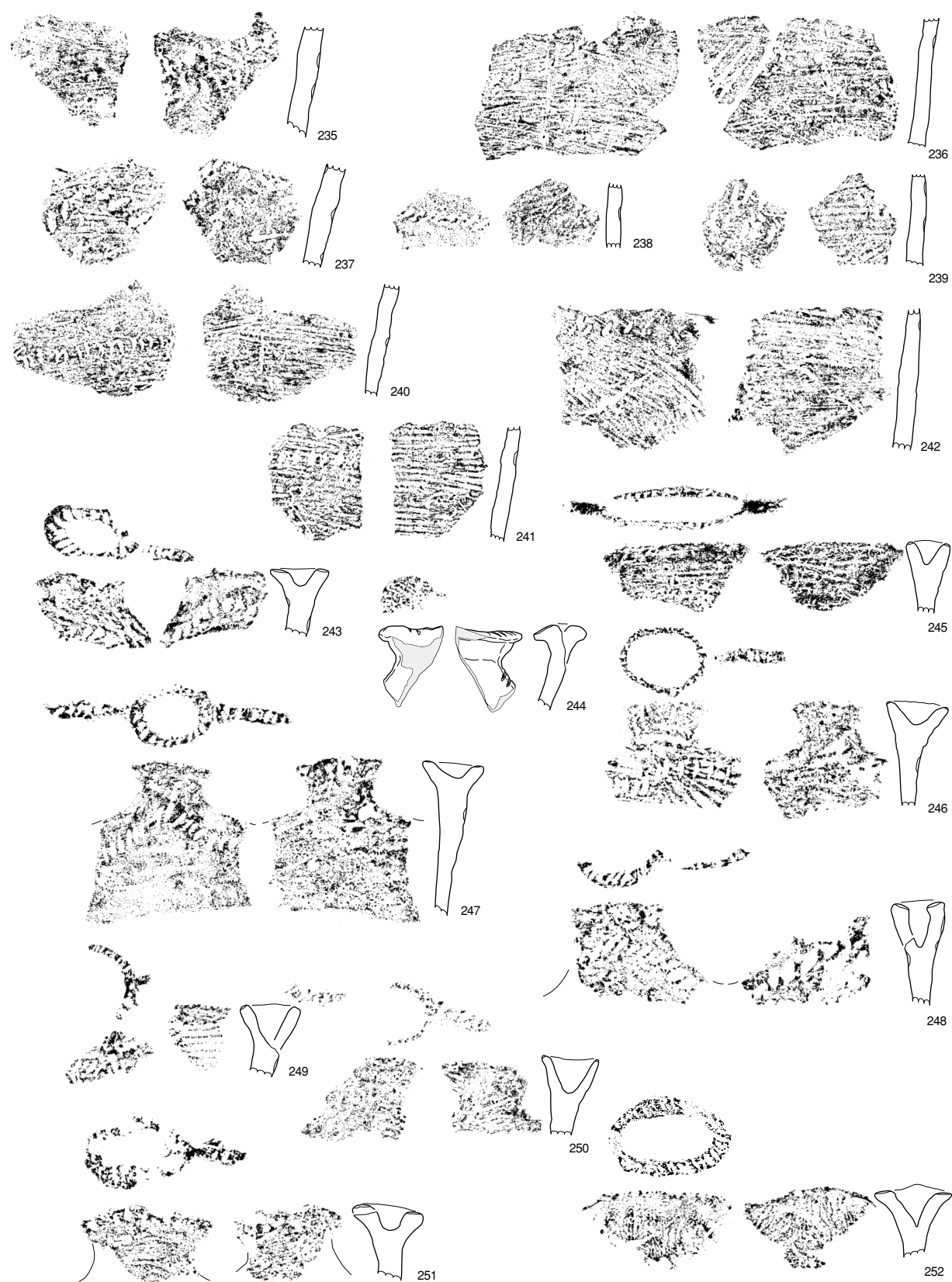


0 (1 : 3) 15cm

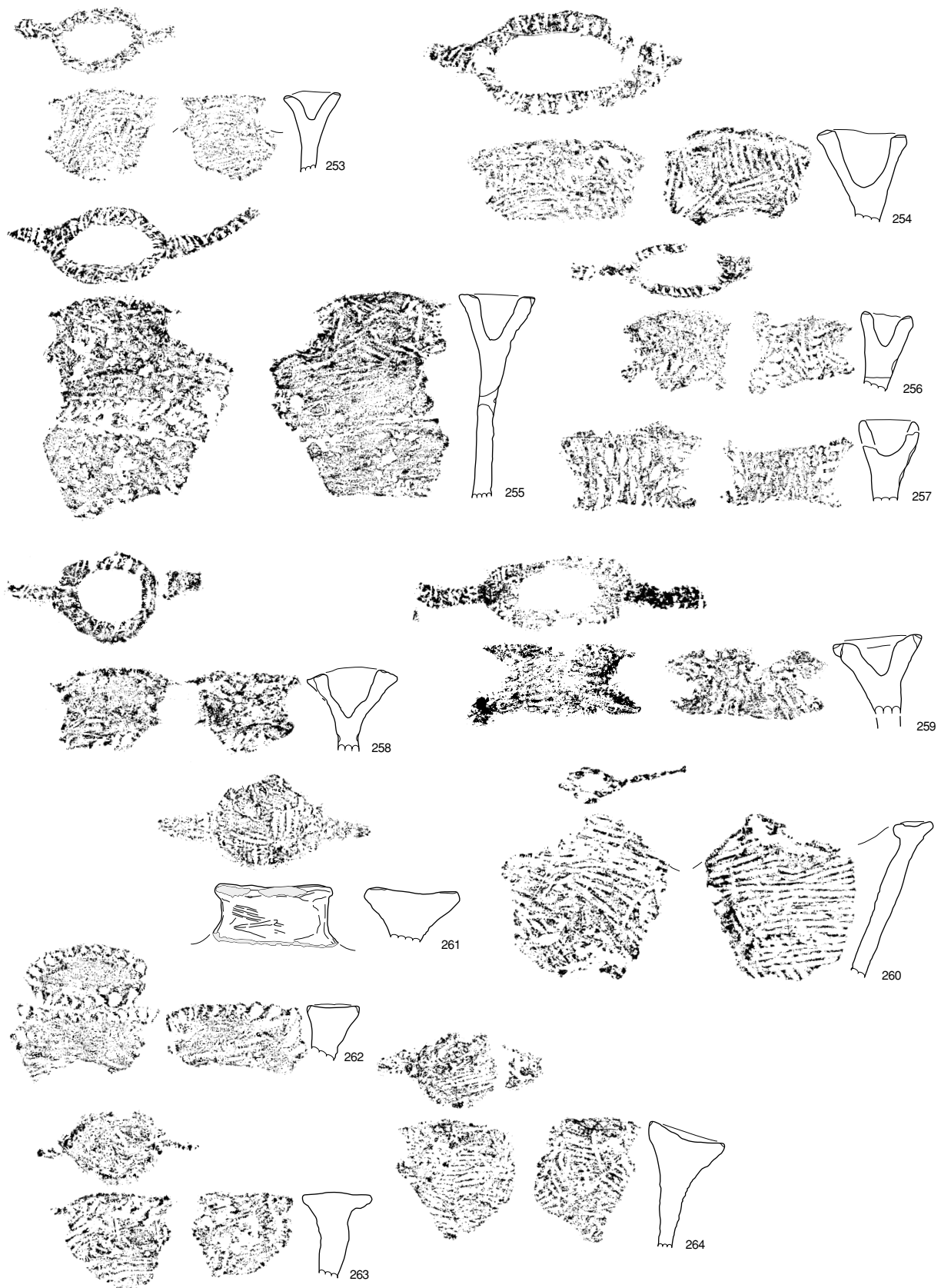
図版 22



図版 23

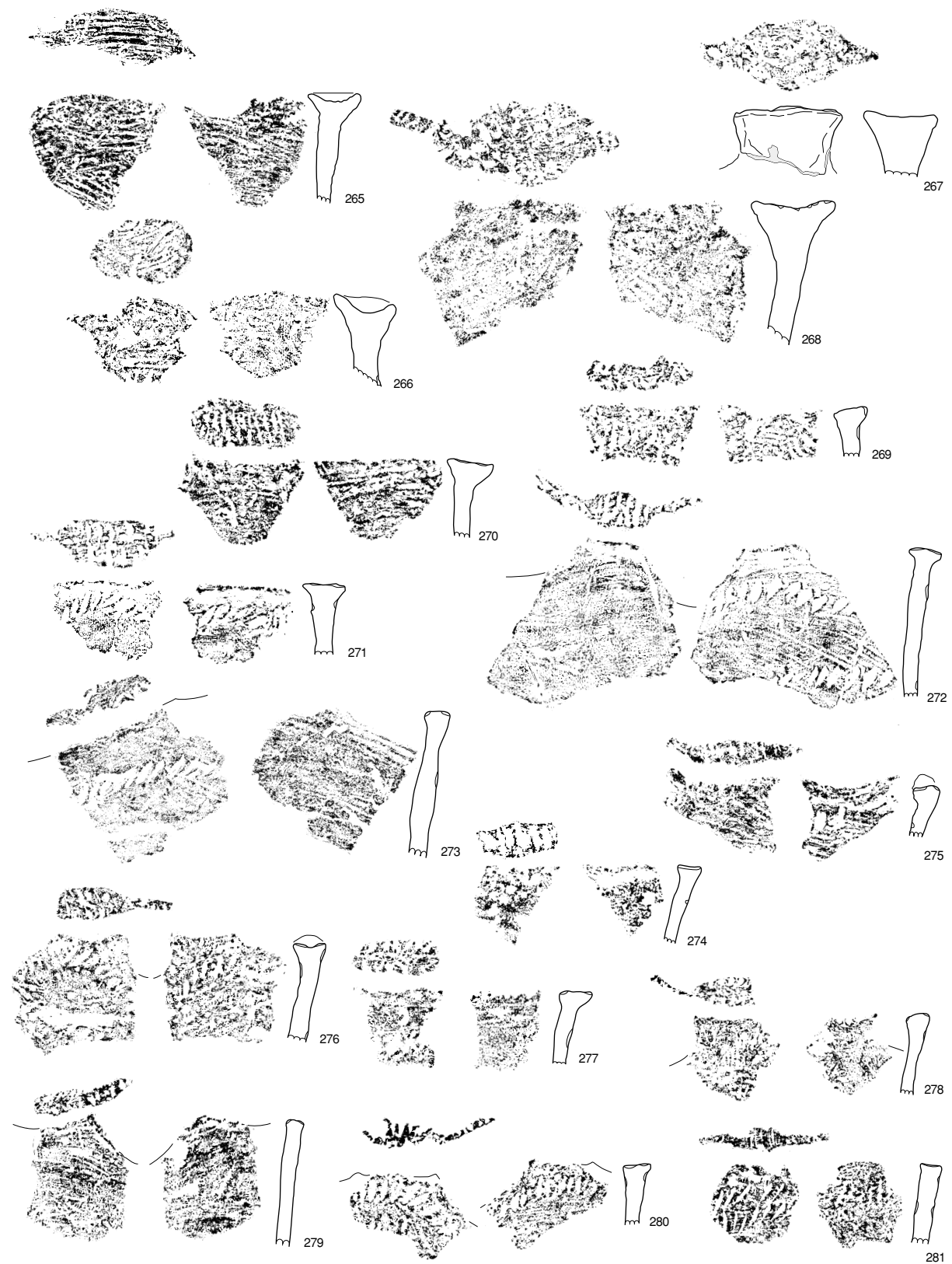


図版 24



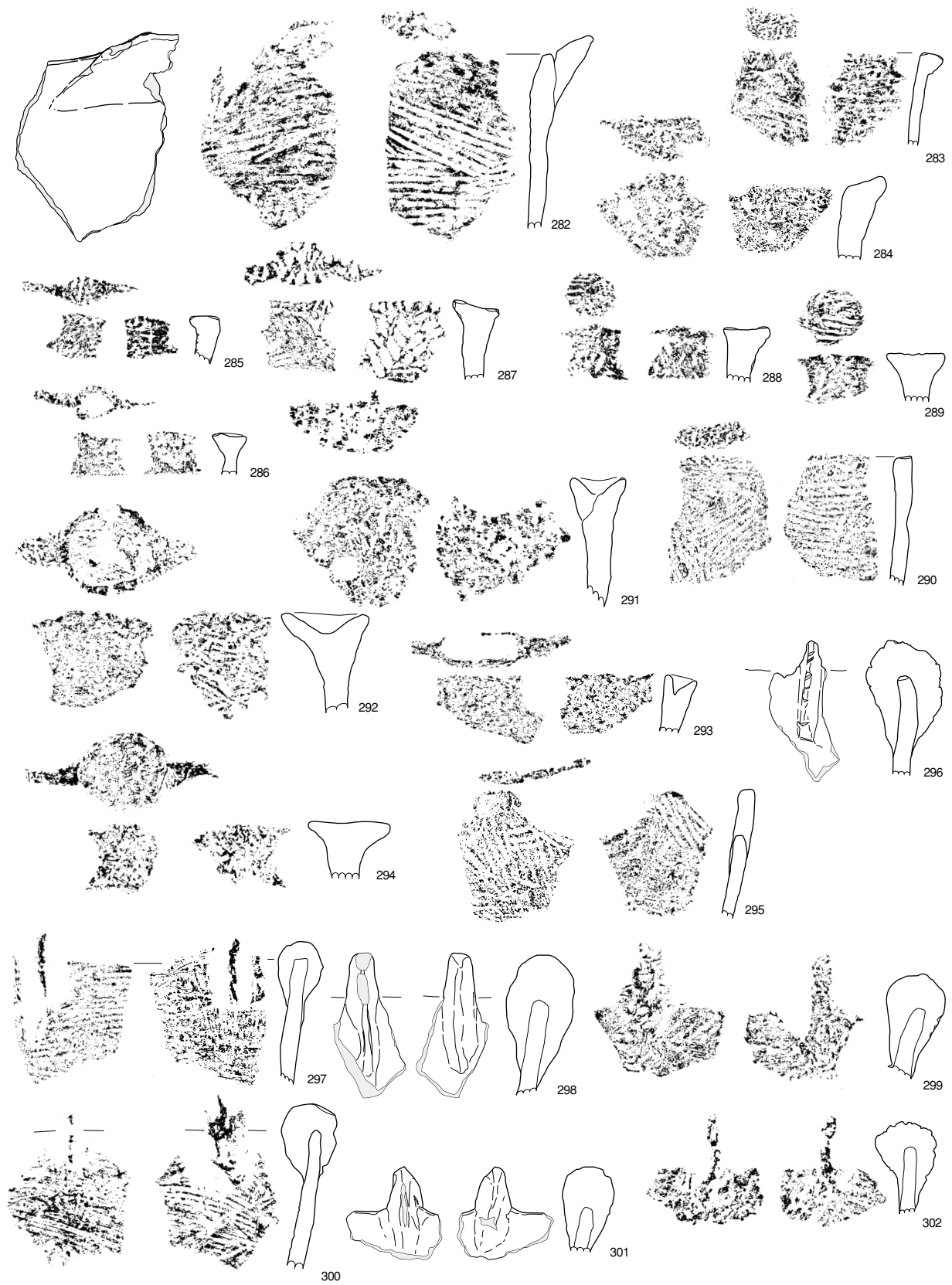
0 (1 : 3) 15cm

図版 25



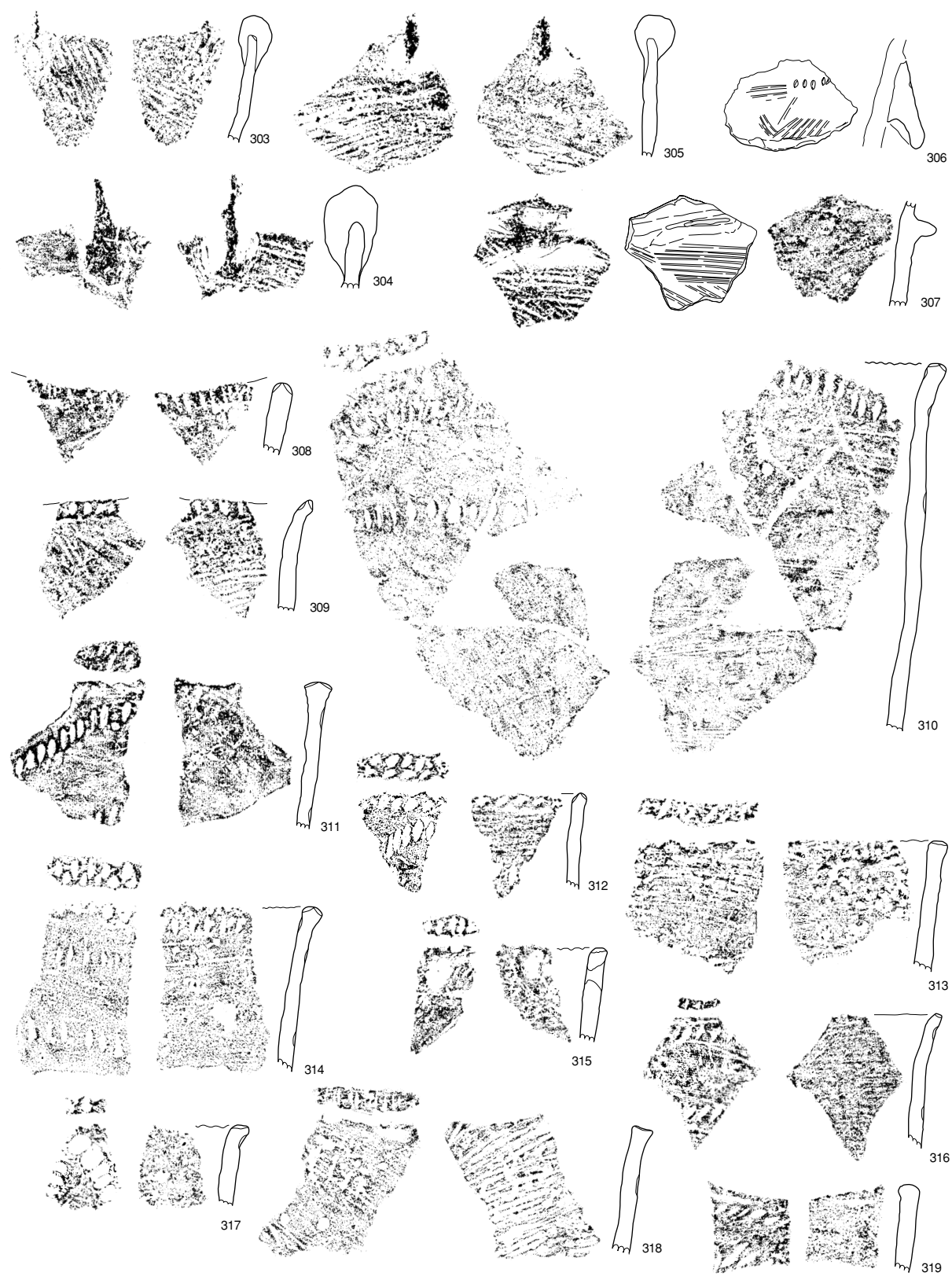
0 (1:3) 15cm

図版 26



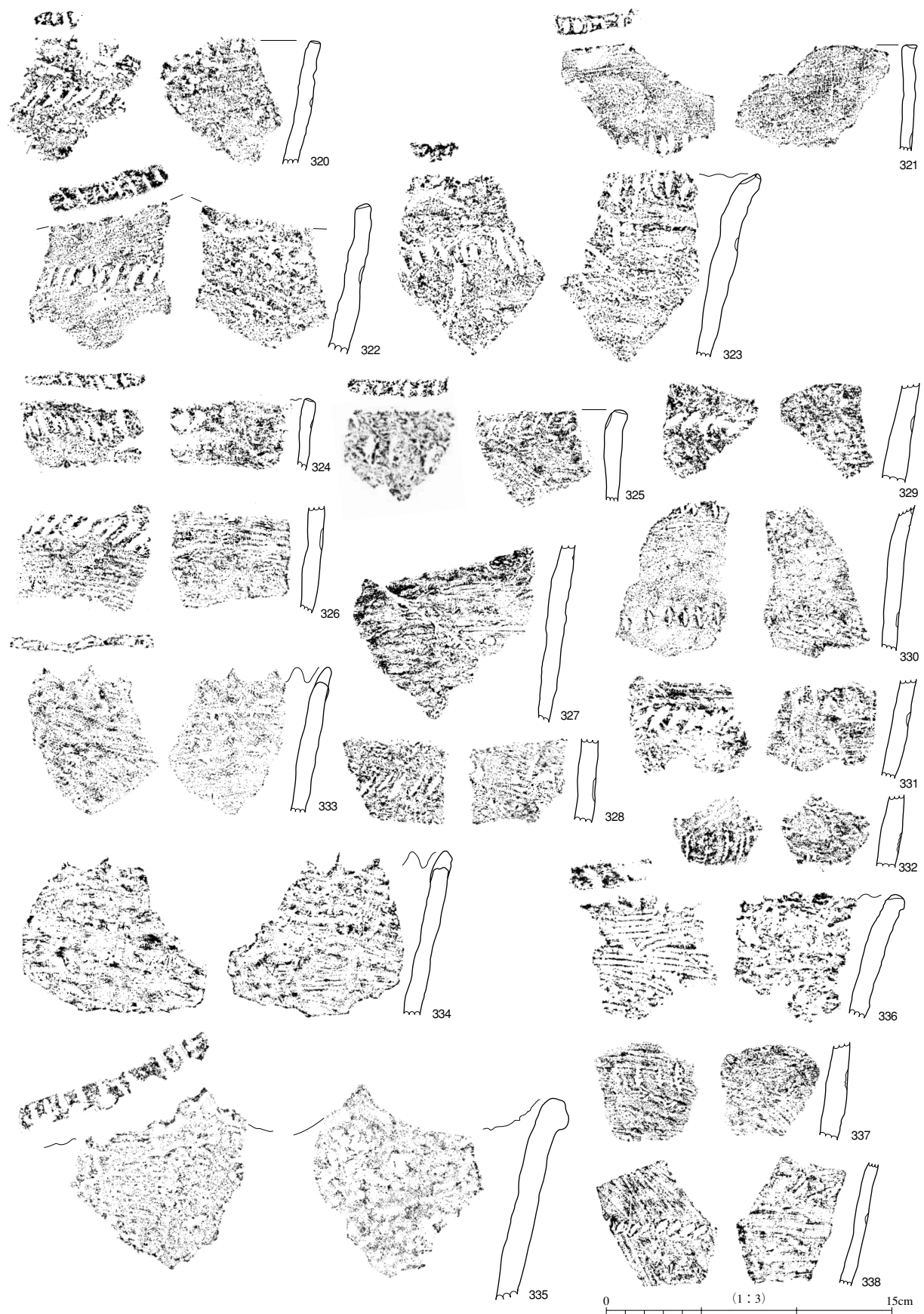
0 (1 : 3) 15cm

図版 27

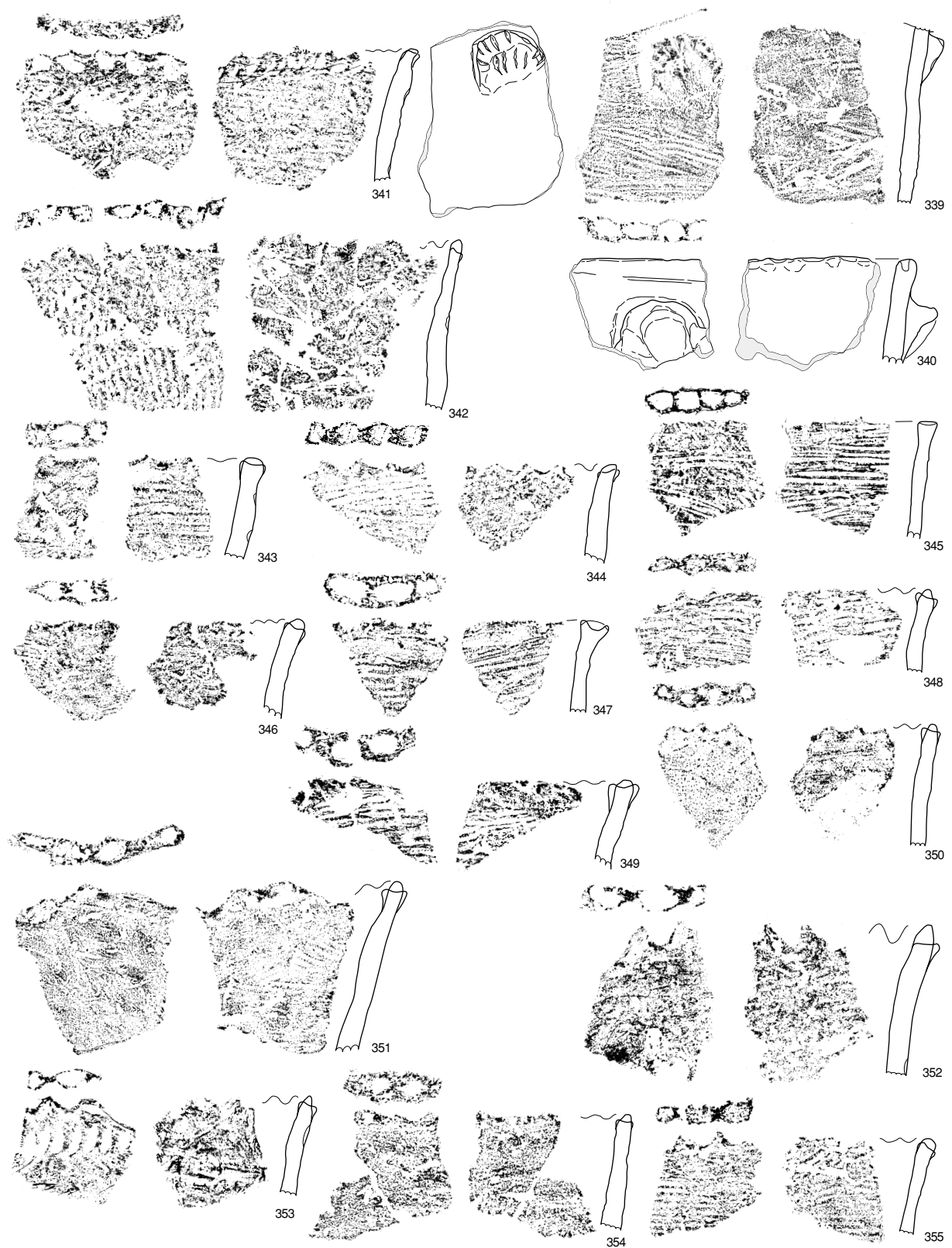


0 (1 : 3) 15cm

図版 28



図版 29



0 (1:3) 15cm

図版 30



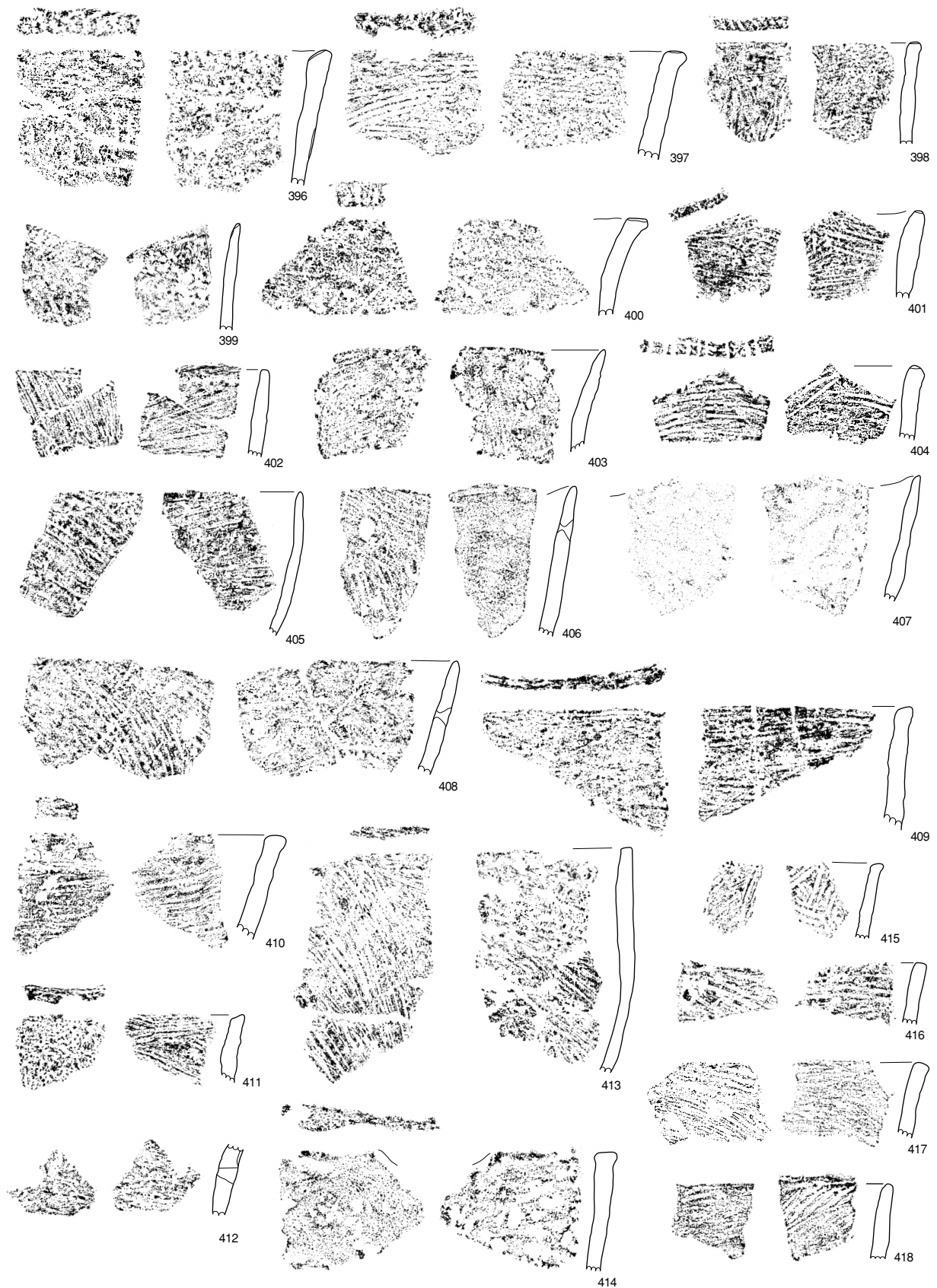
0 (1 : 3) 15cm

図版 31



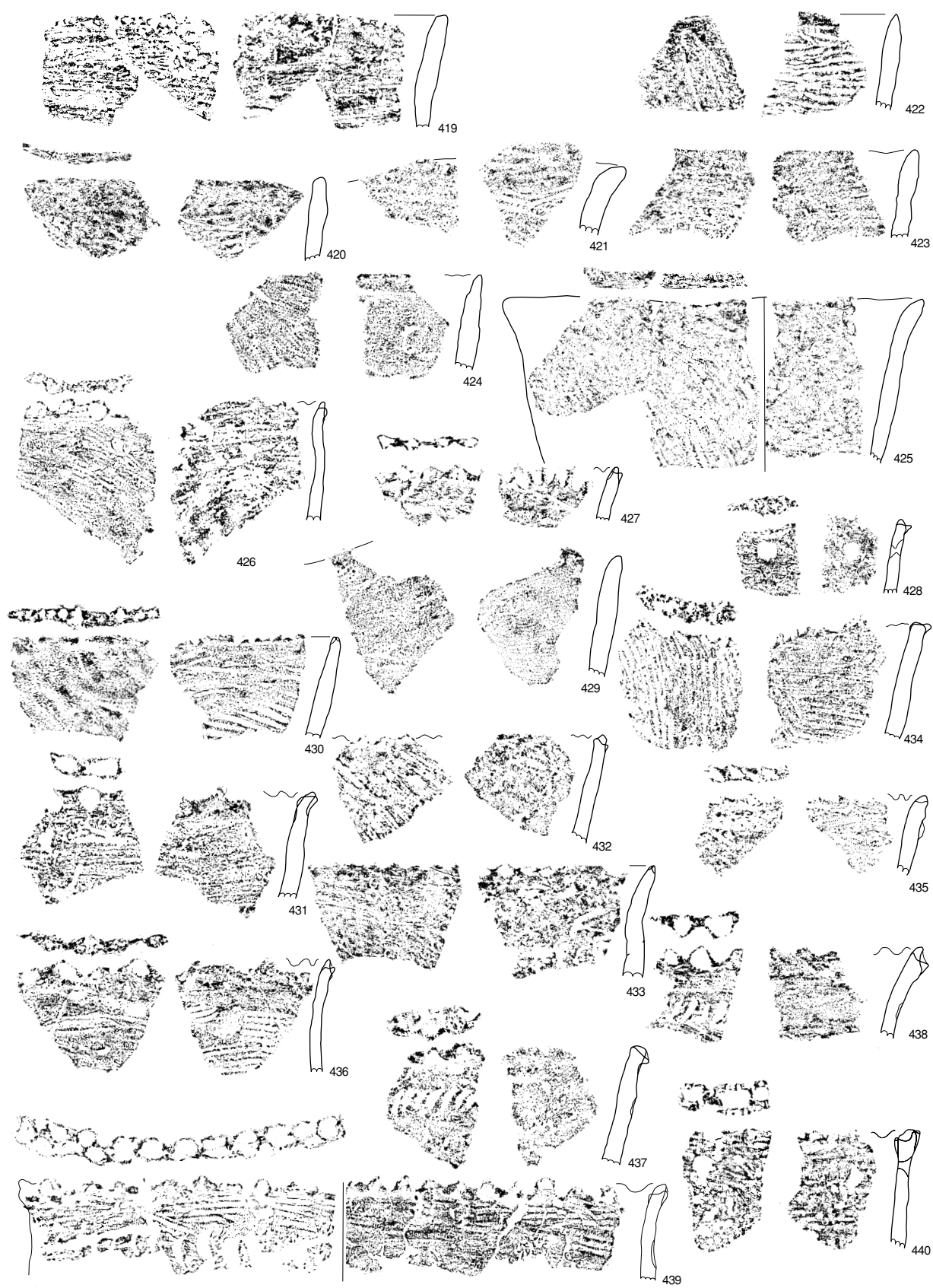
0 (1:3) 15cm

図版 32



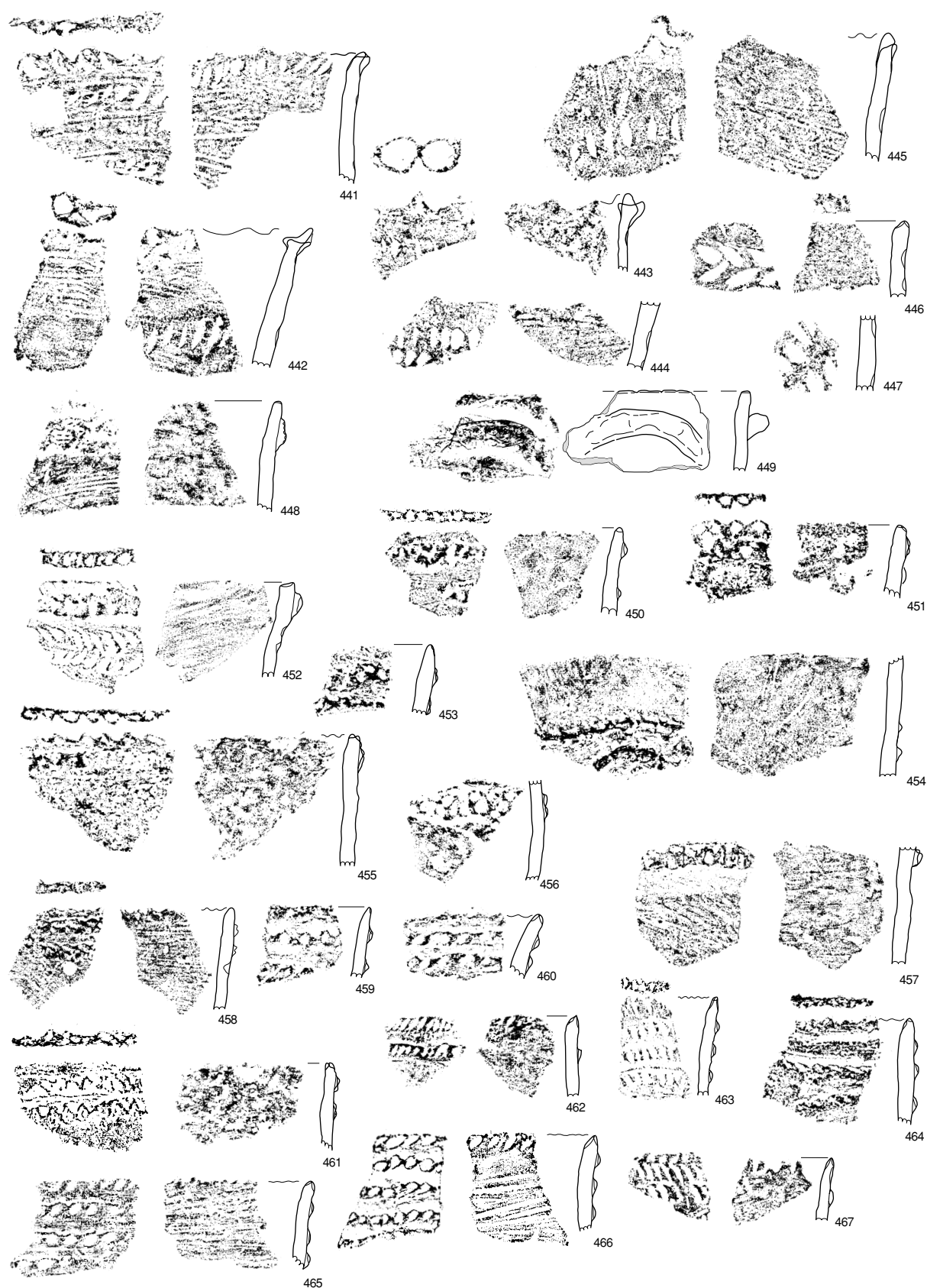
0 (1 : 3) 15cm

図版 33



0 (1 : 3) 15cm

図版 34



0 (1 : 3) 15cm

図版 35



0 (1:3) 15cm

図版 36



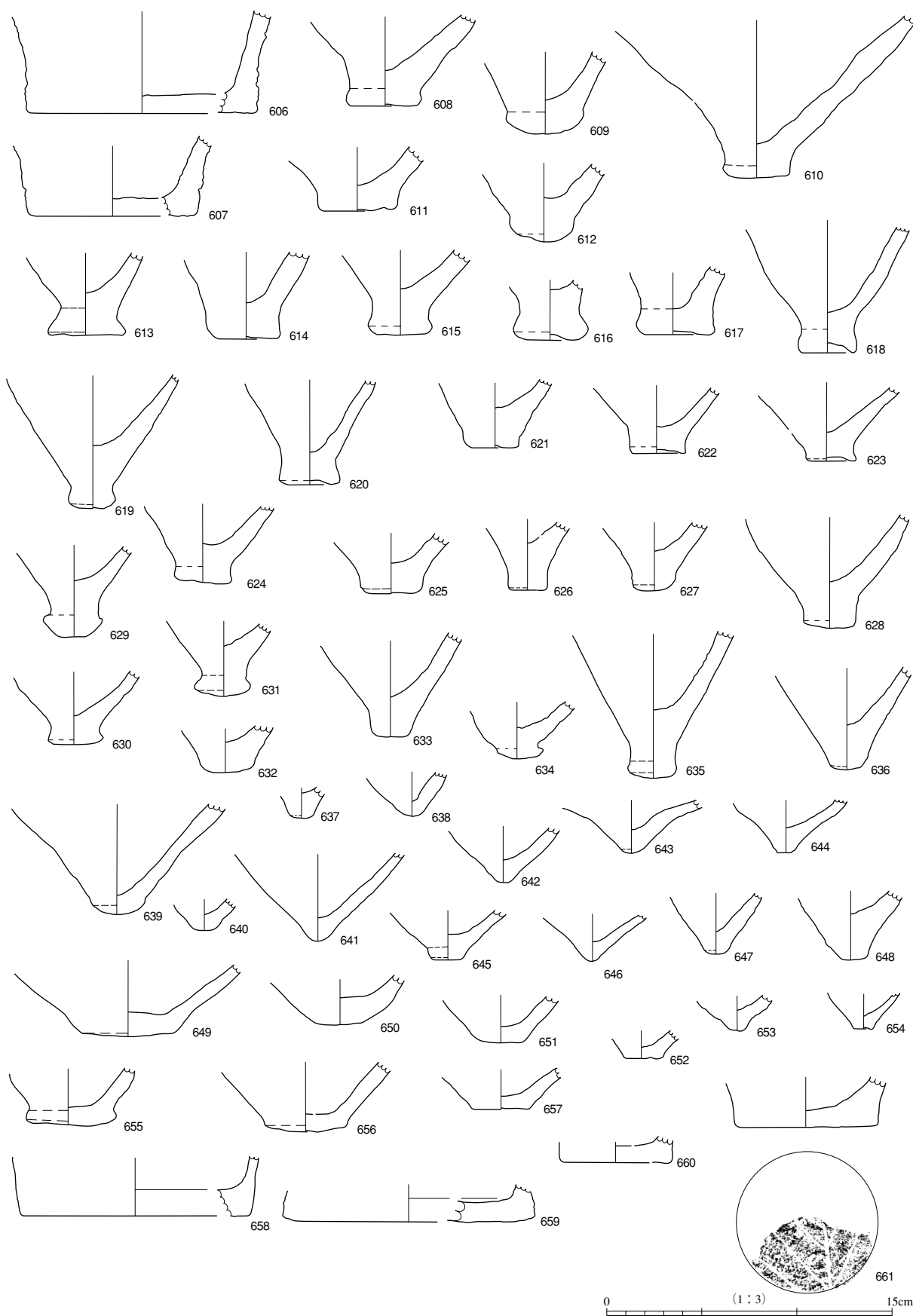
0 (1:3) 15cm

図版 37

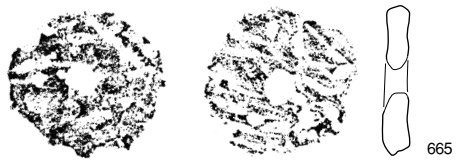
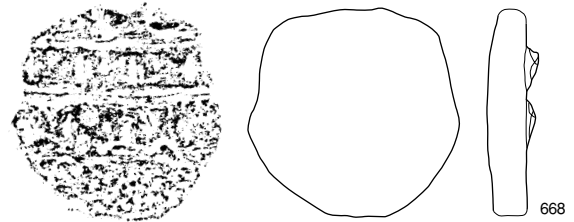
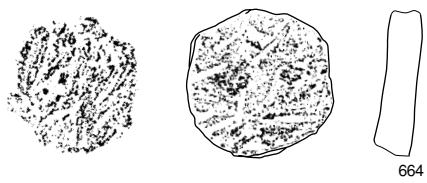
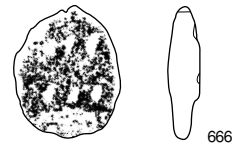
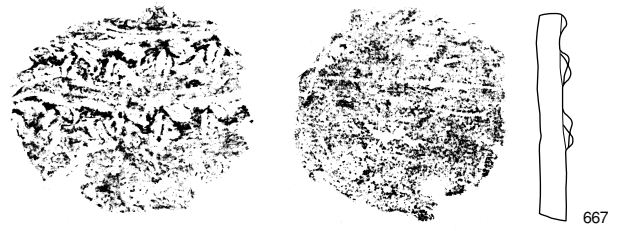
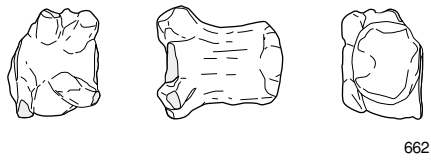


0 (1 : 3) 15cm

図版 38

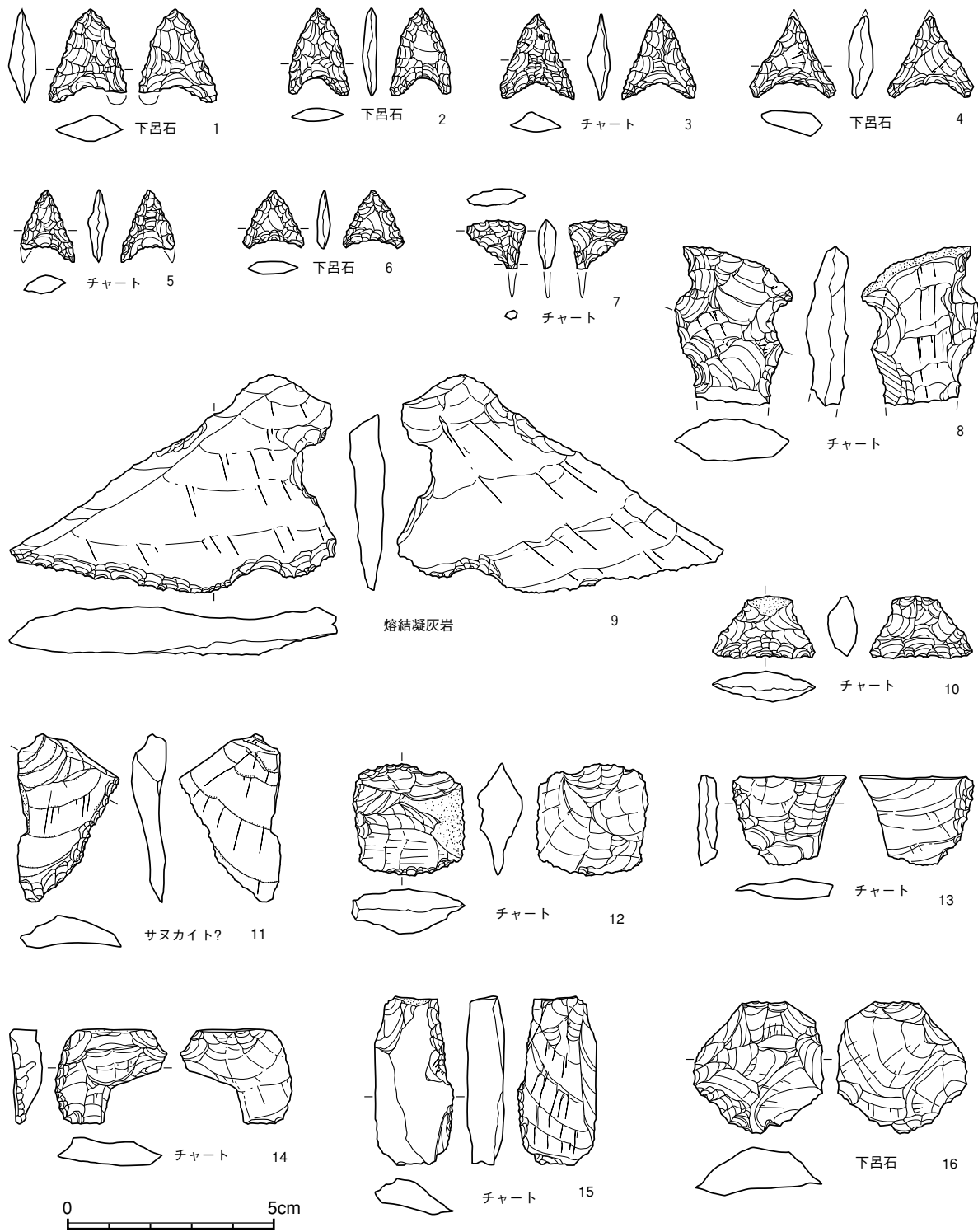


図版 39

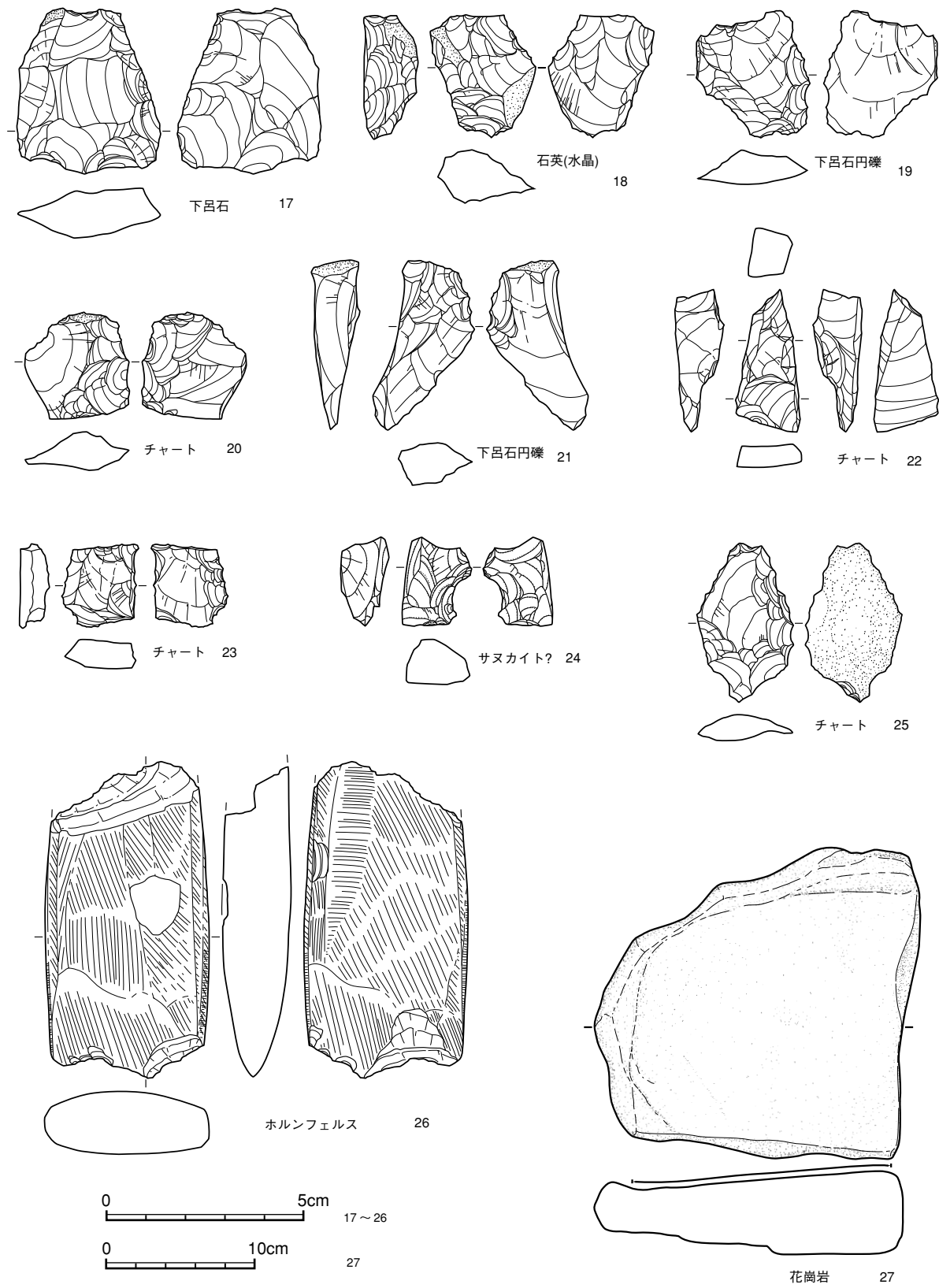


0 (1 : 2) 10cm

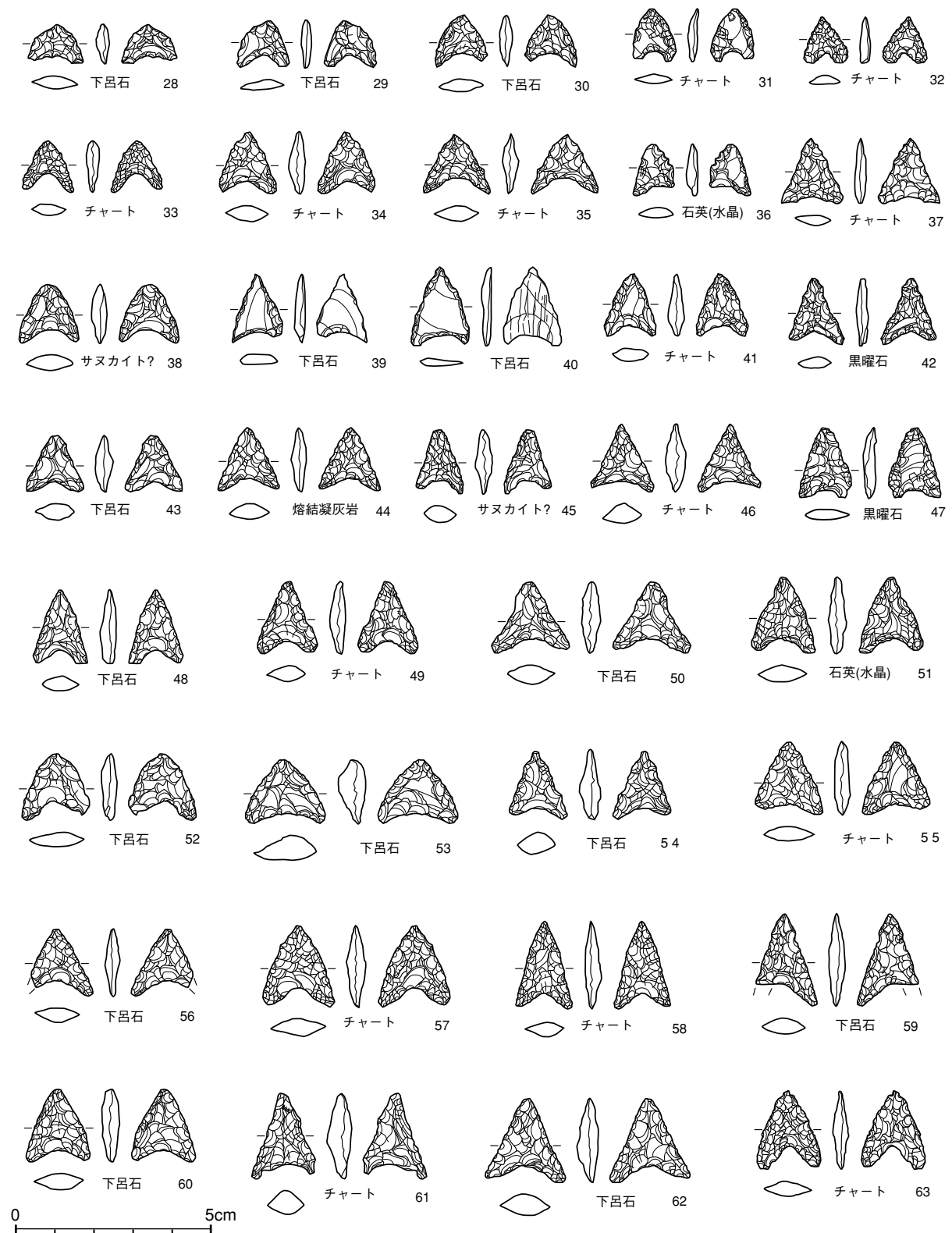
図版 40



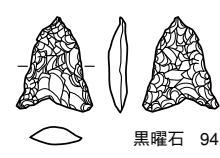
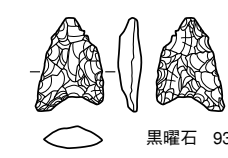
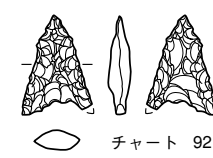
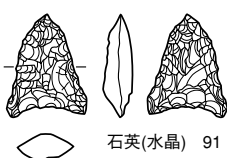
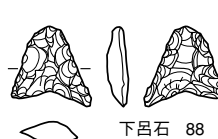
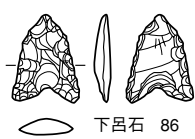
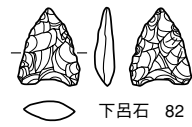
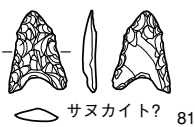
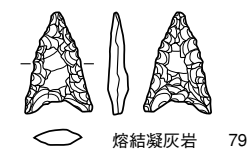
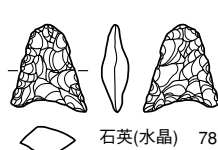
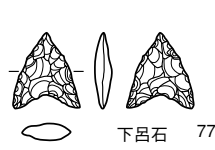
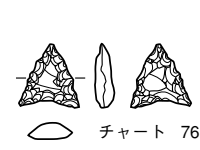
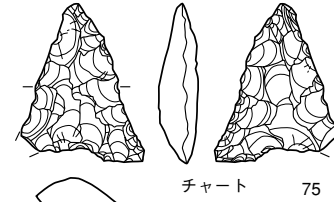
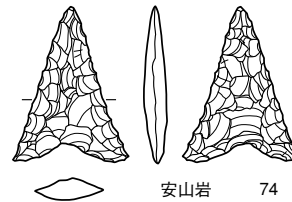
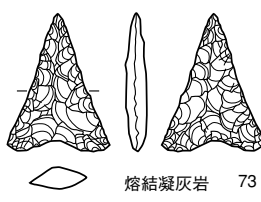
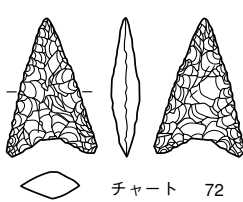
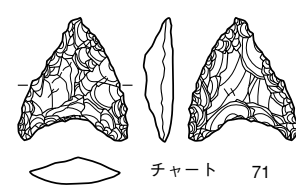
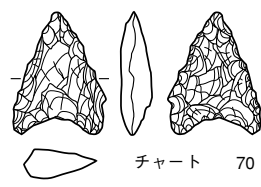
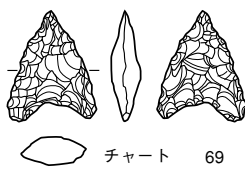
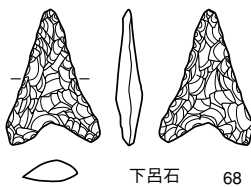
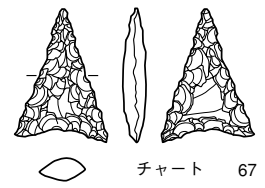
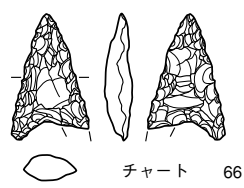
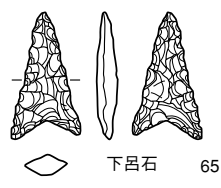
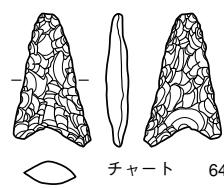
図版 41



図版 42

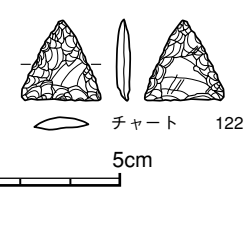
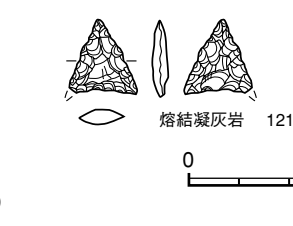
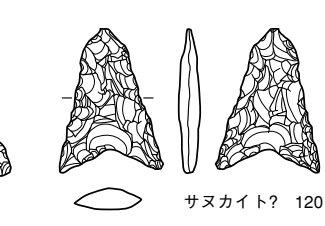
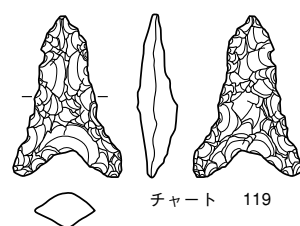
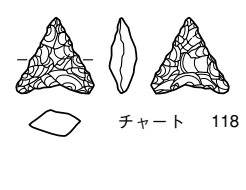
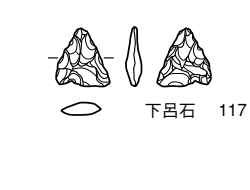
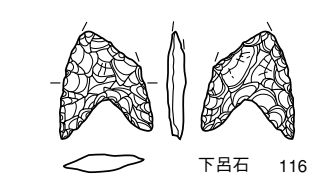
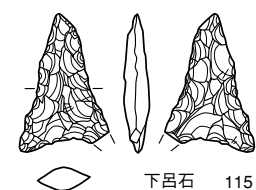
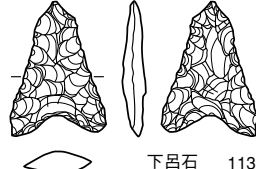
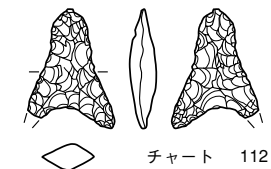
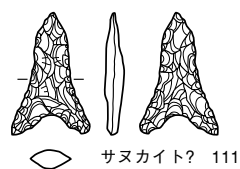
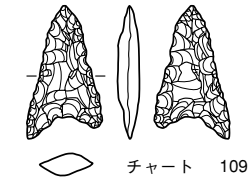
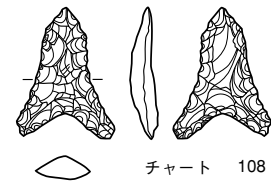
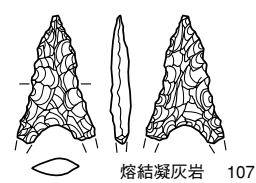
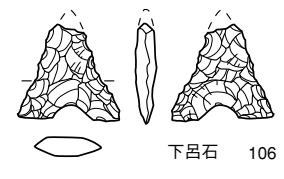
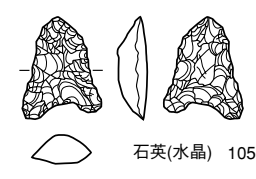
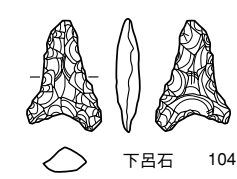
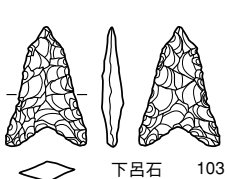
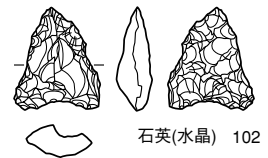
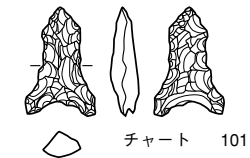
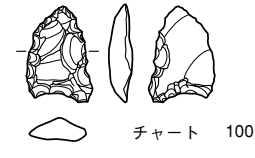
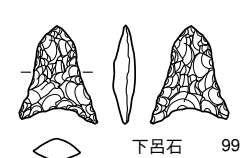
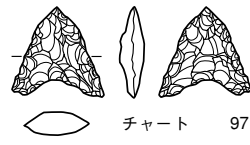
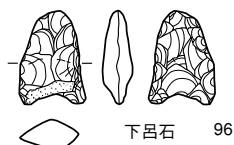
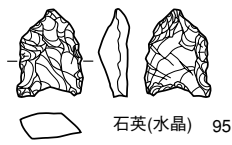


図版 43



0 5cm

図版 44

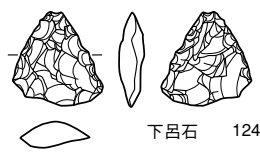


0 5cm

図版 45



チャート 123



下呂石 124

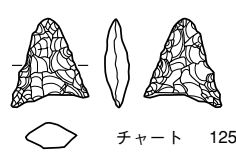


チャート 125

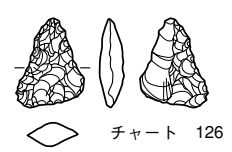


チャート 126

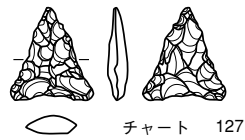
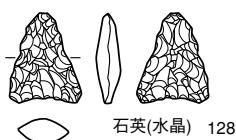
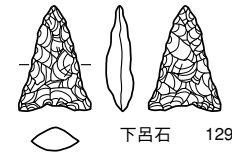


チャート 127



石英(水晶) 128



下呂石 129



チャート 130

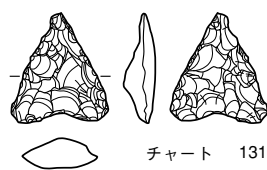
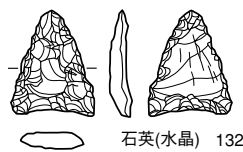


チャート 131



石英(水晶) 132

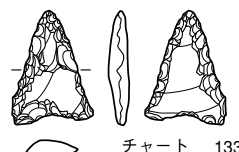
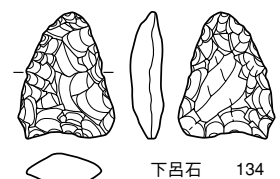
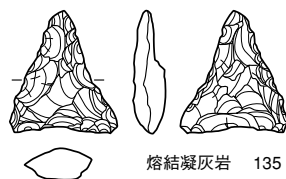


チャート 133



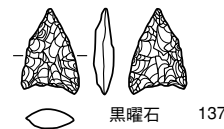
下呂石 134



熔結凝灰岩 135



チャート 136



黒曜石 137

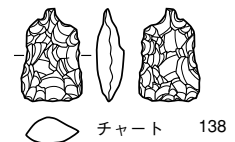


チャート 138

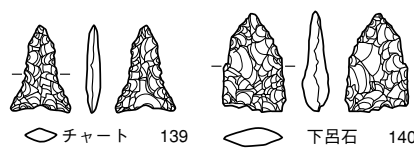
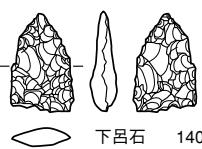
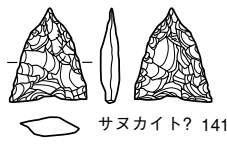


チャート 139



下呂石 140



サヌカイト? 141

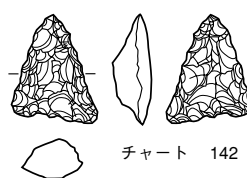


チャート 142

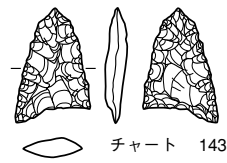


チャート 143

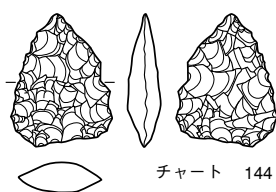


チャート 144

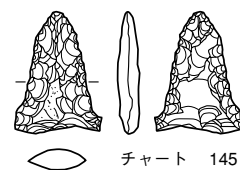
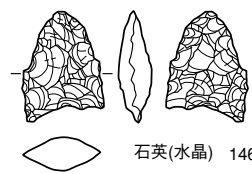
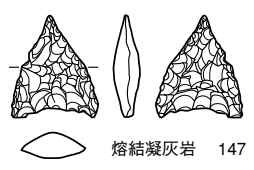


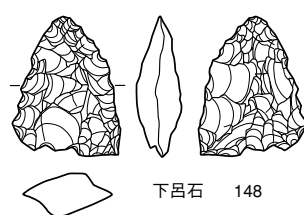
チャート 145



石英(水晶) 146



熔結凝灰岩 147



下呂石 148

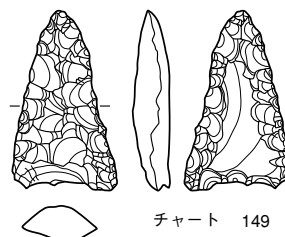


チャート 149

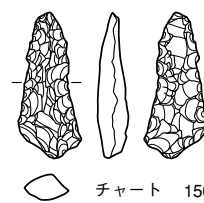
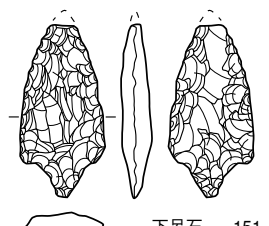


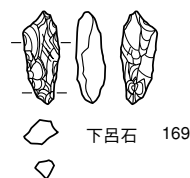
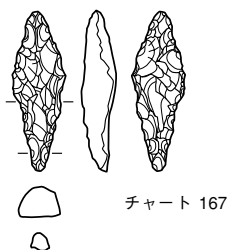
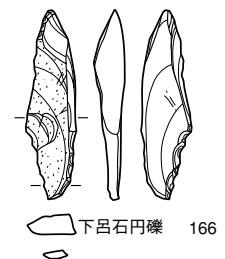
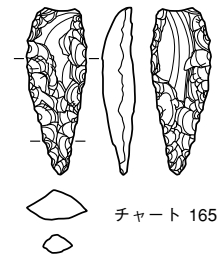
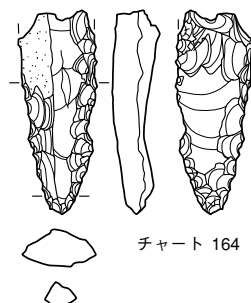
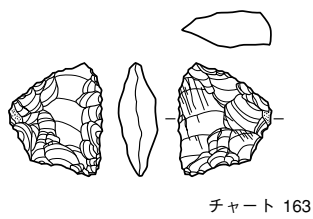
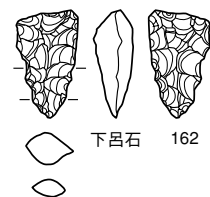
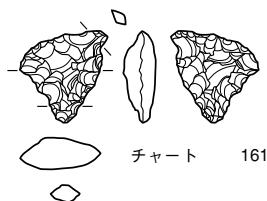
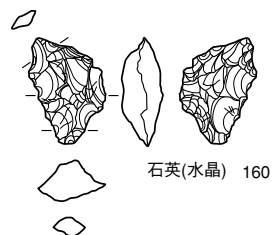
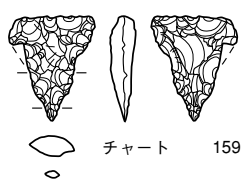
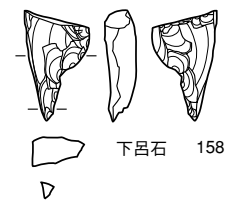
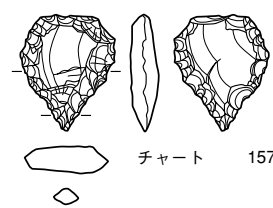
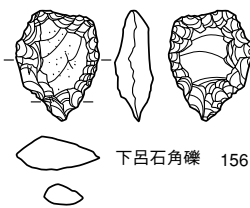
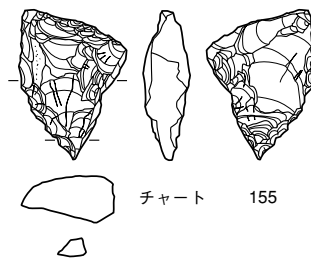
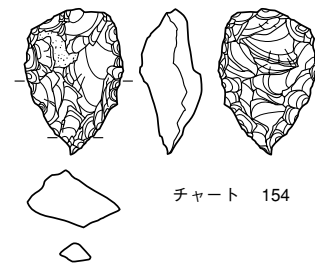
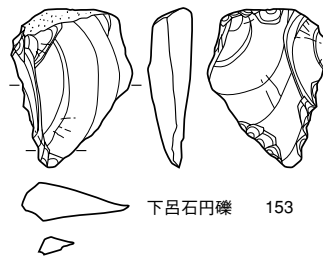
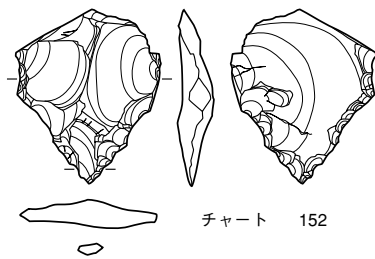
チャート 150



下呂石 151

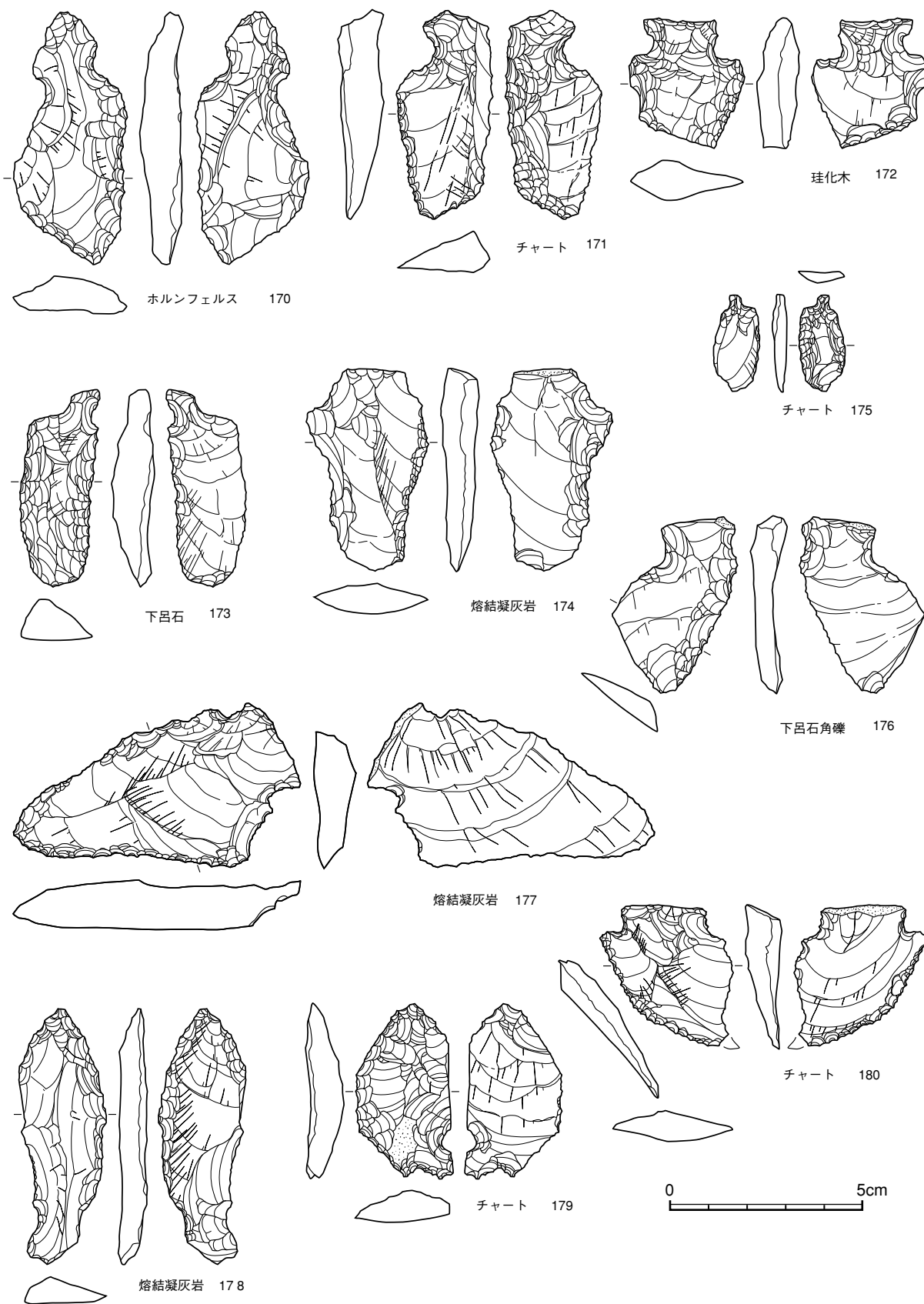
0 5cm

図版 46



0 5cm

図版 47



図版 48

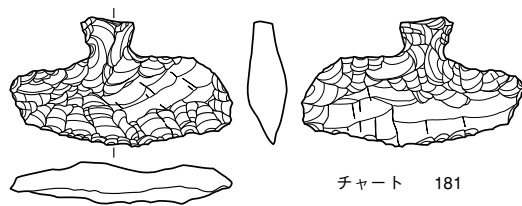


チャート 181

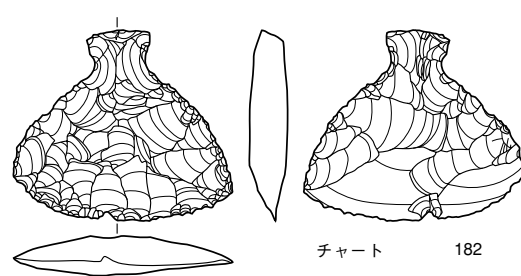
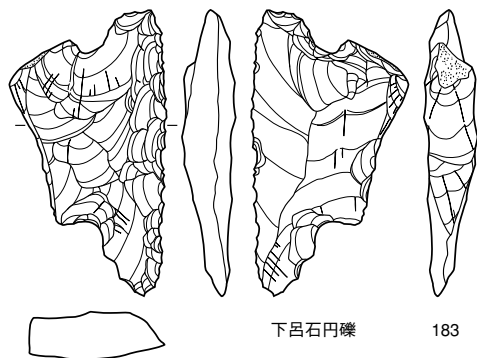
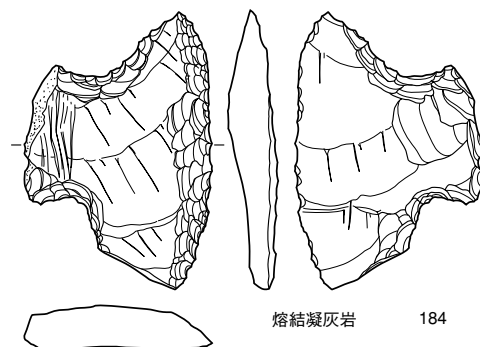


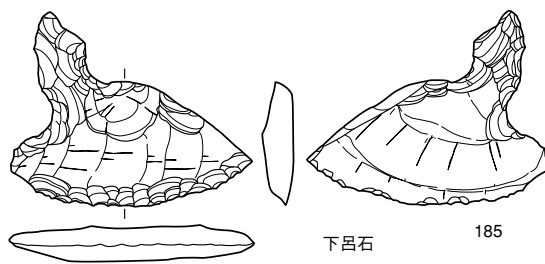
チャート 182



下呂石円礫 183



熔結凝灰岩 184



下呂石 185

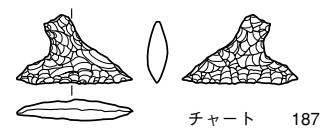


チャート 187

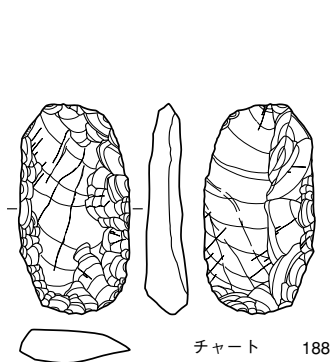


チャート 188

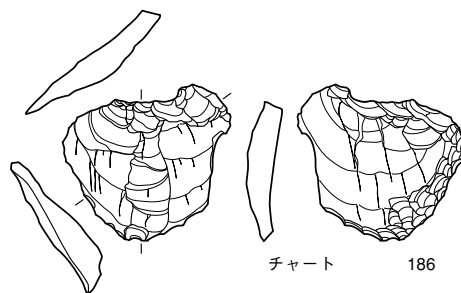


チャート 186

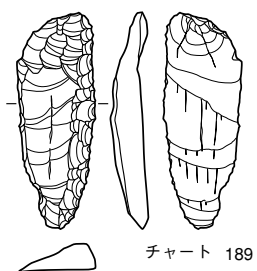
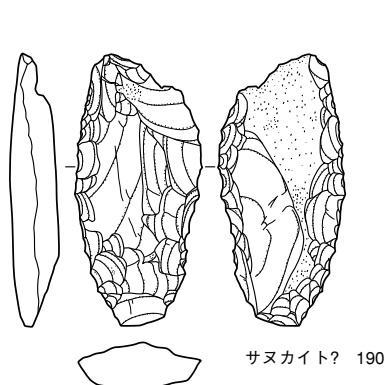


チャート 189



サヌカイト? 190

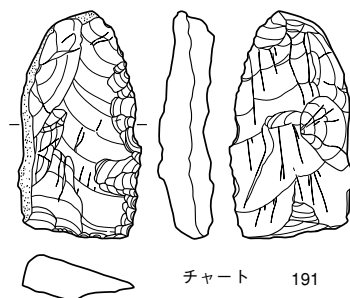


チャート 191

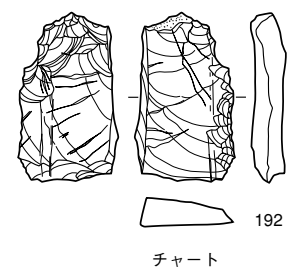
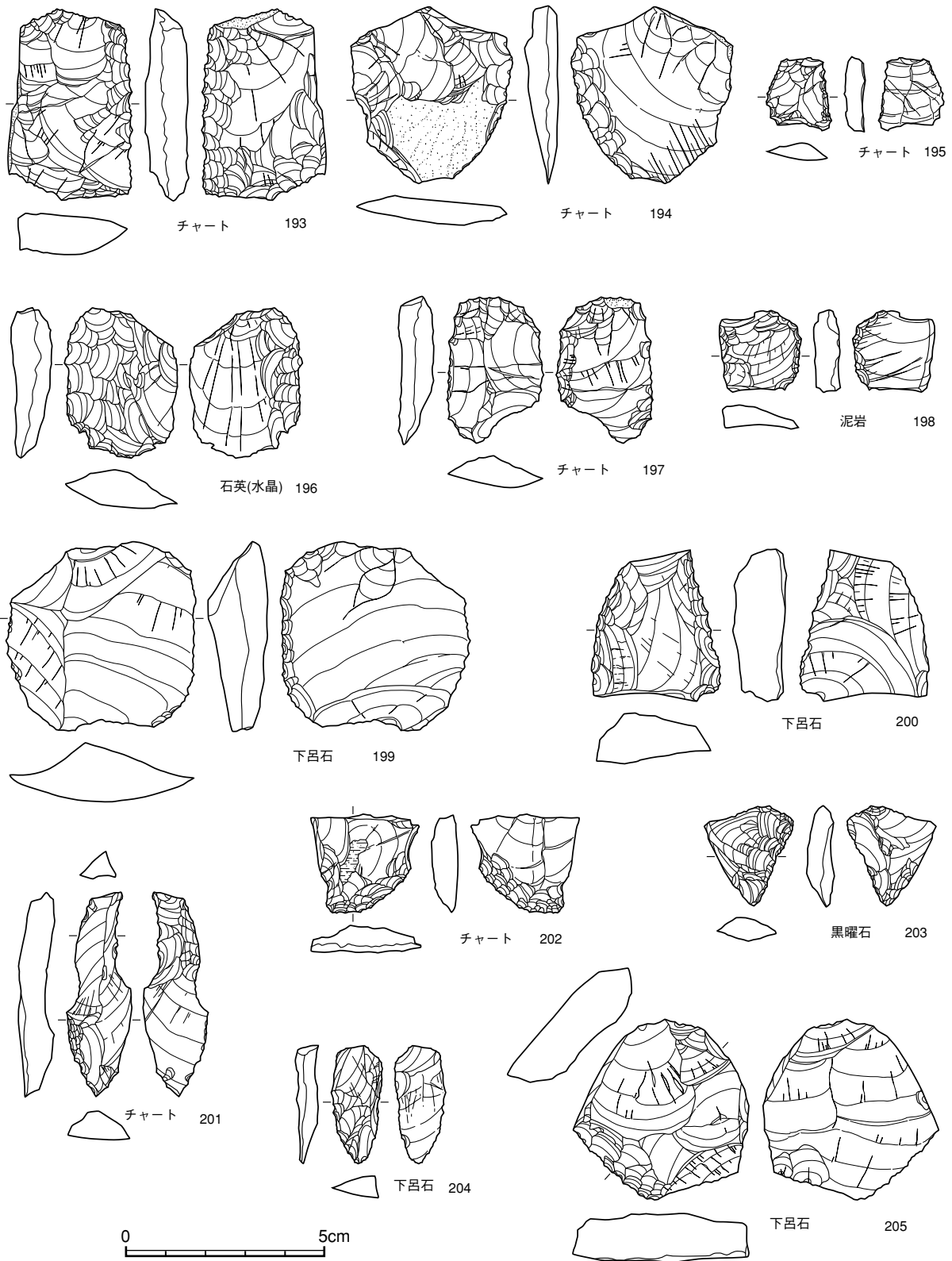


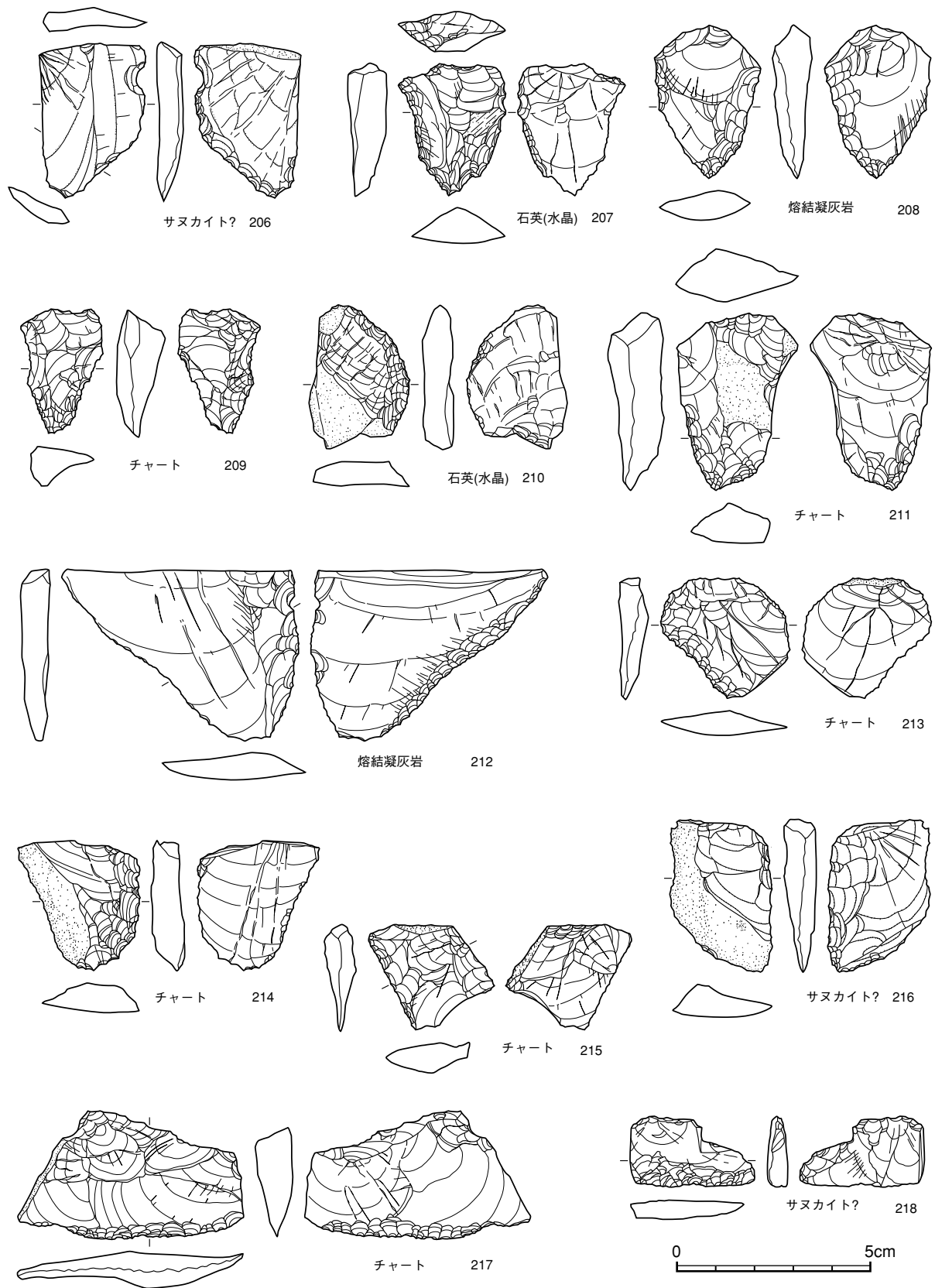
チャート 192

0 5cm

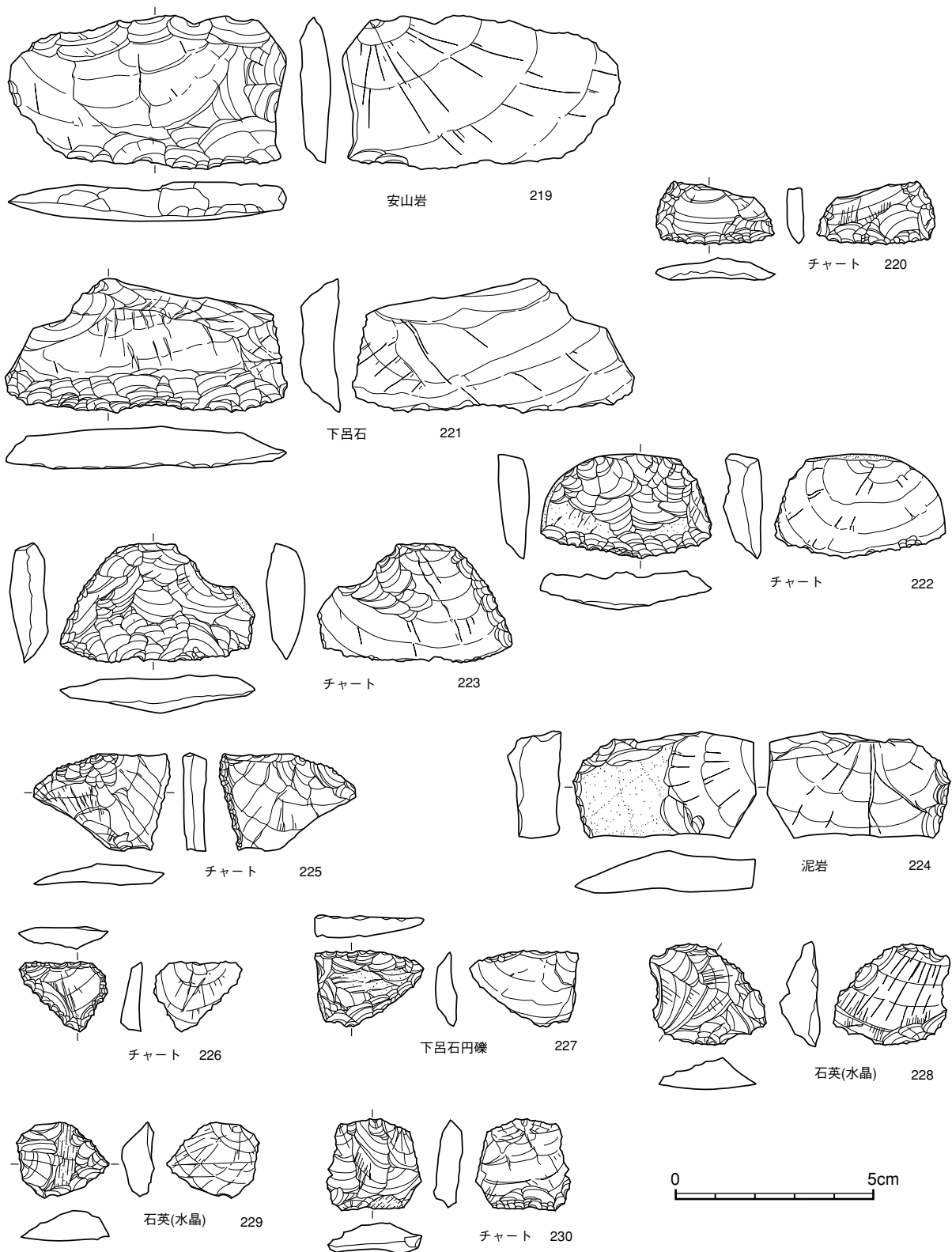
図版 49



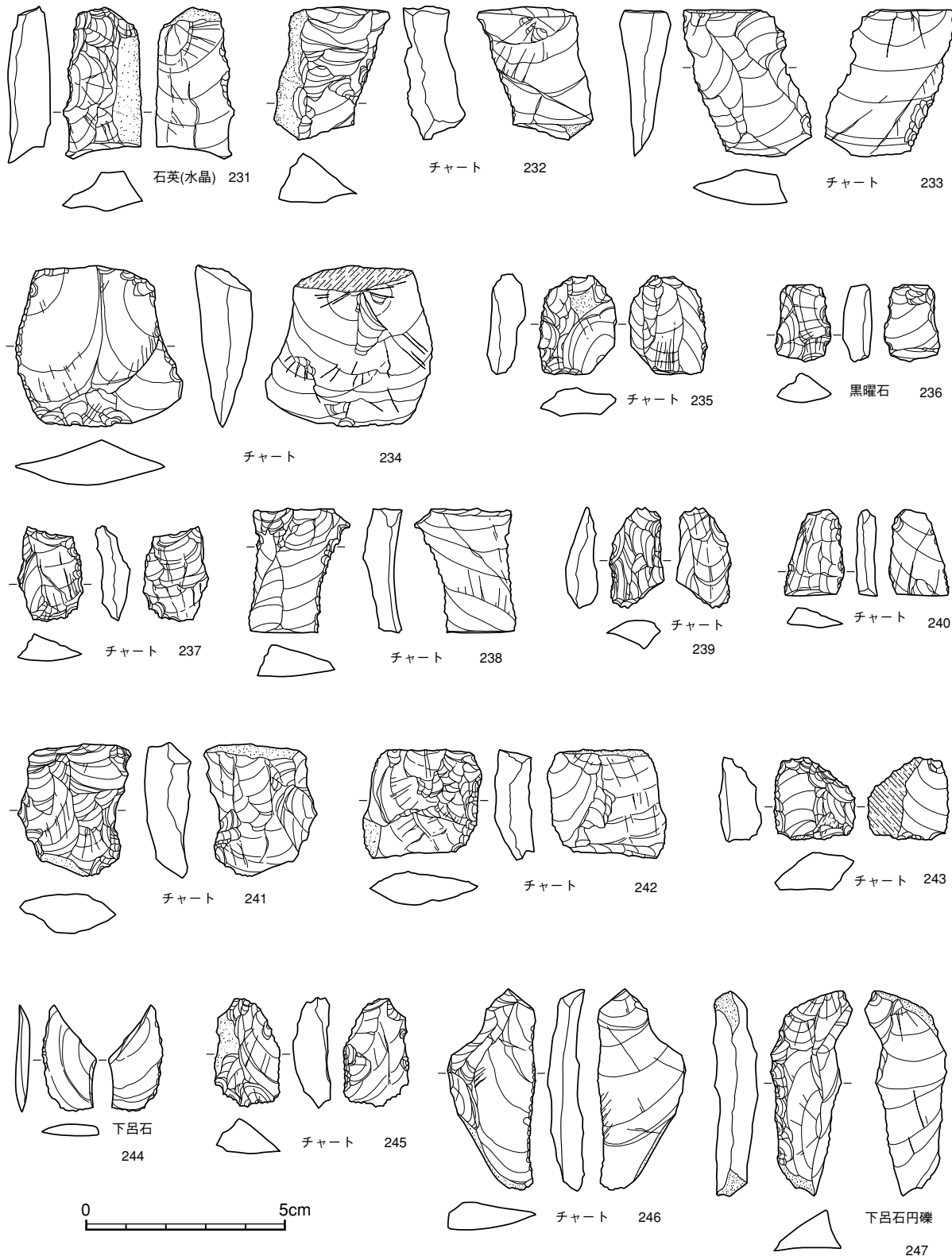
図版 50



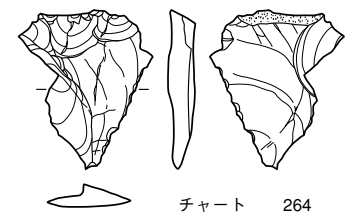
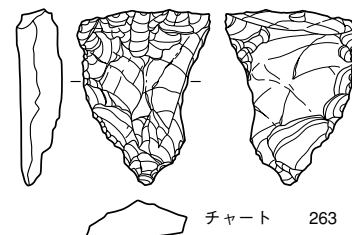
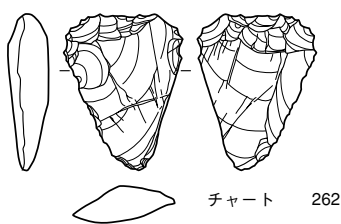
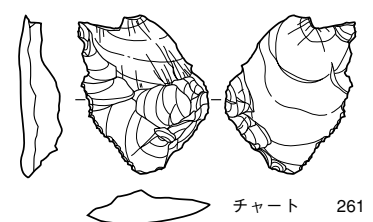
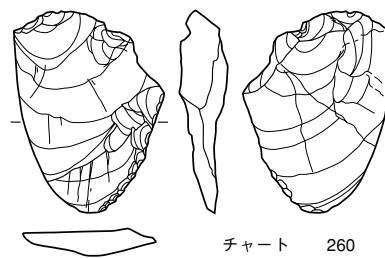
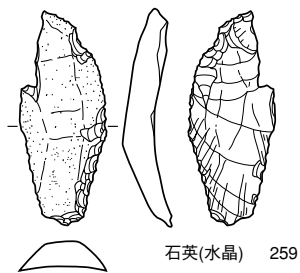
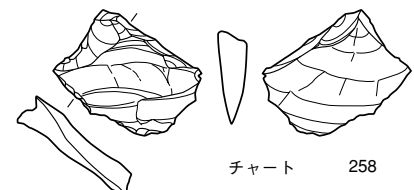
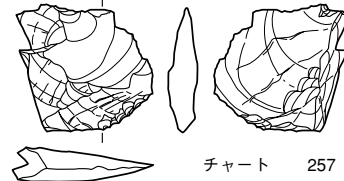
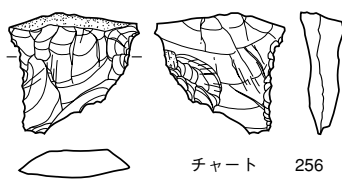
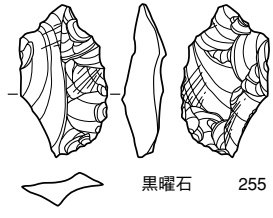
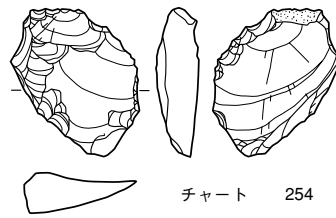
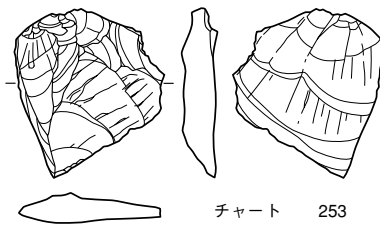
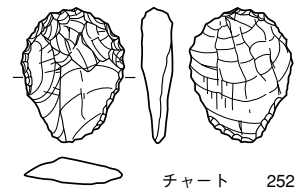
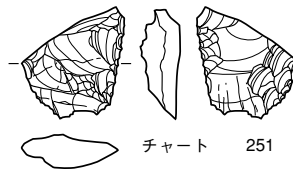
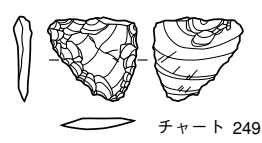
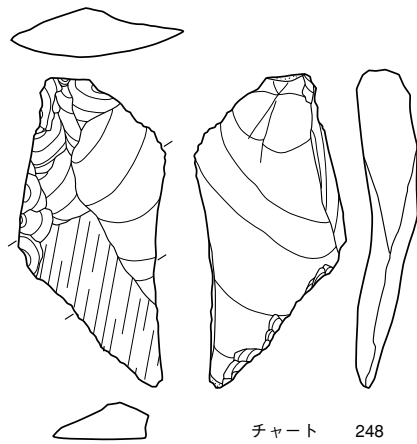
図版 51



図版 52

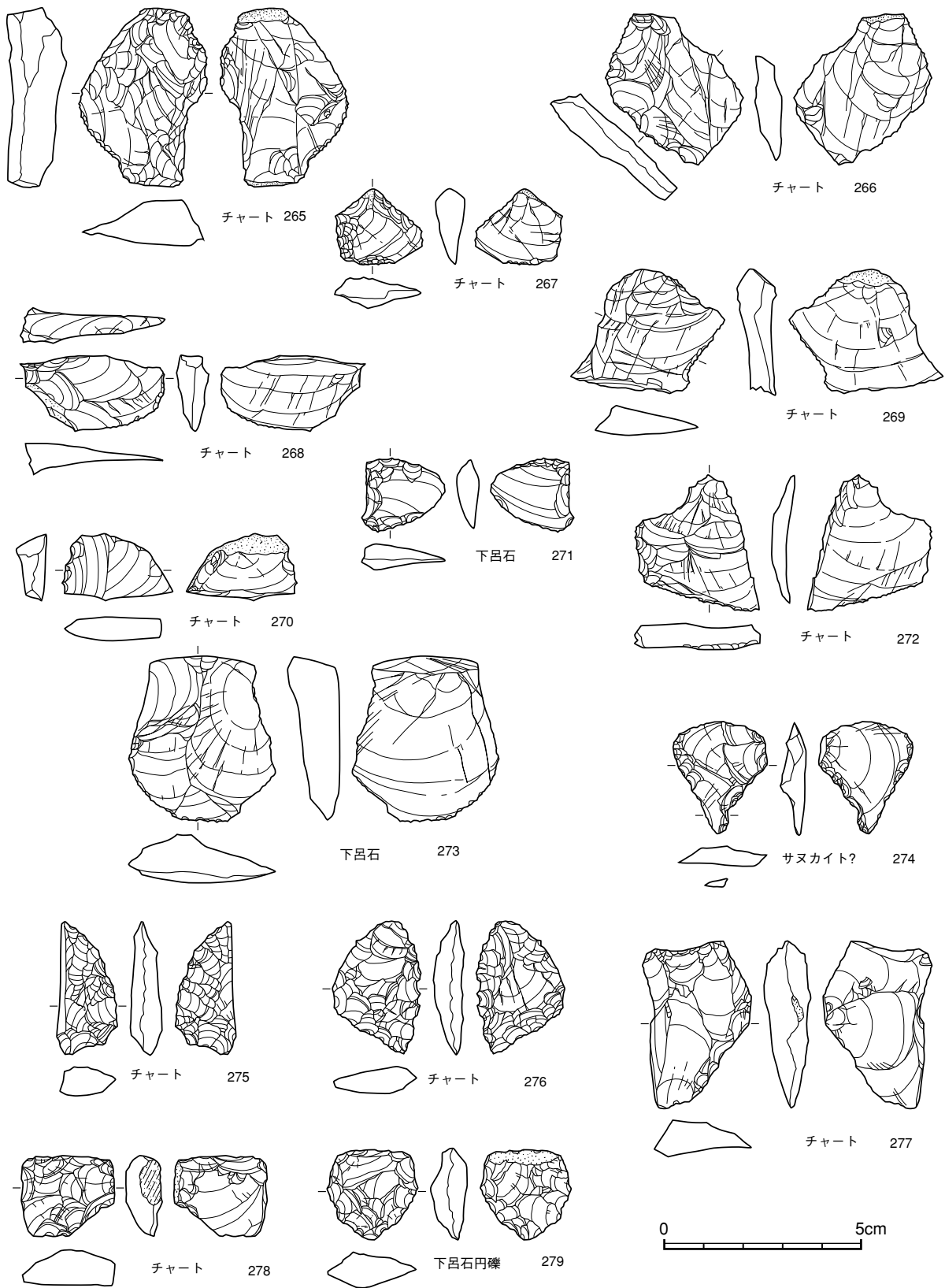


図版 53

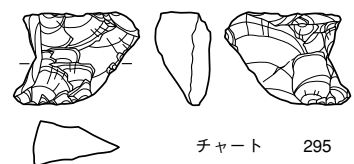
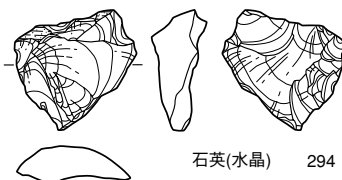
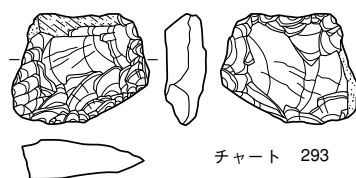
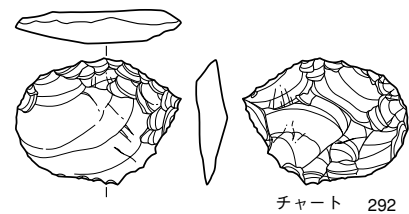
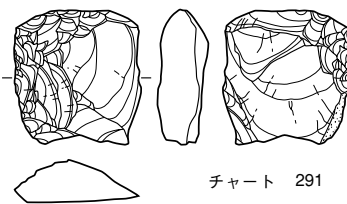
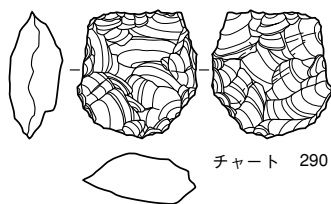
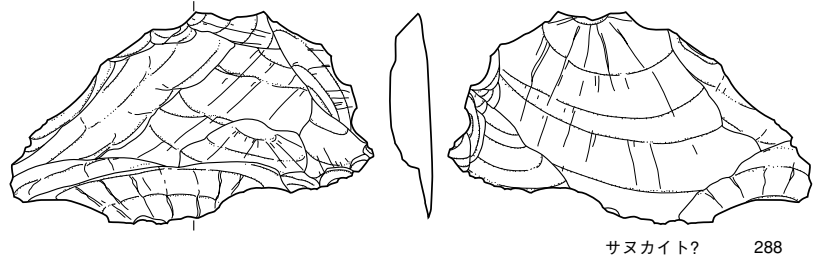
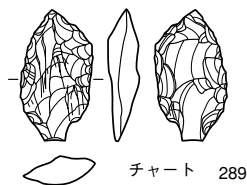
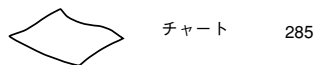
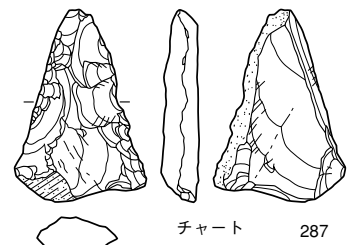
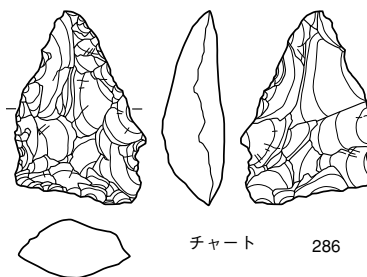
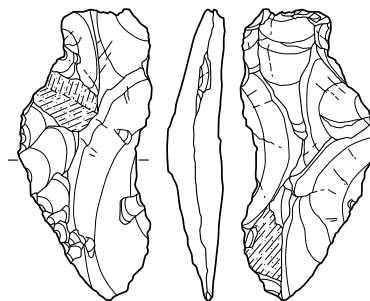
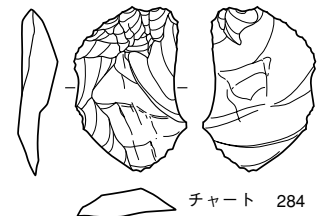
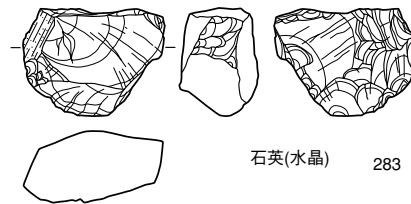
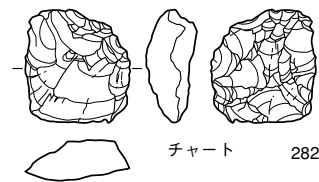
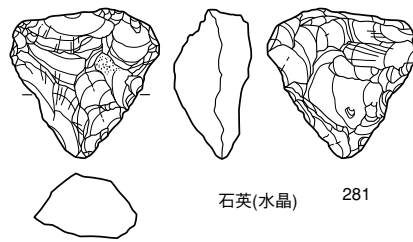
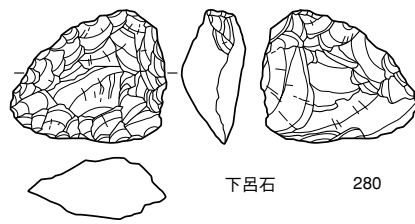


0 5cm

図版 54

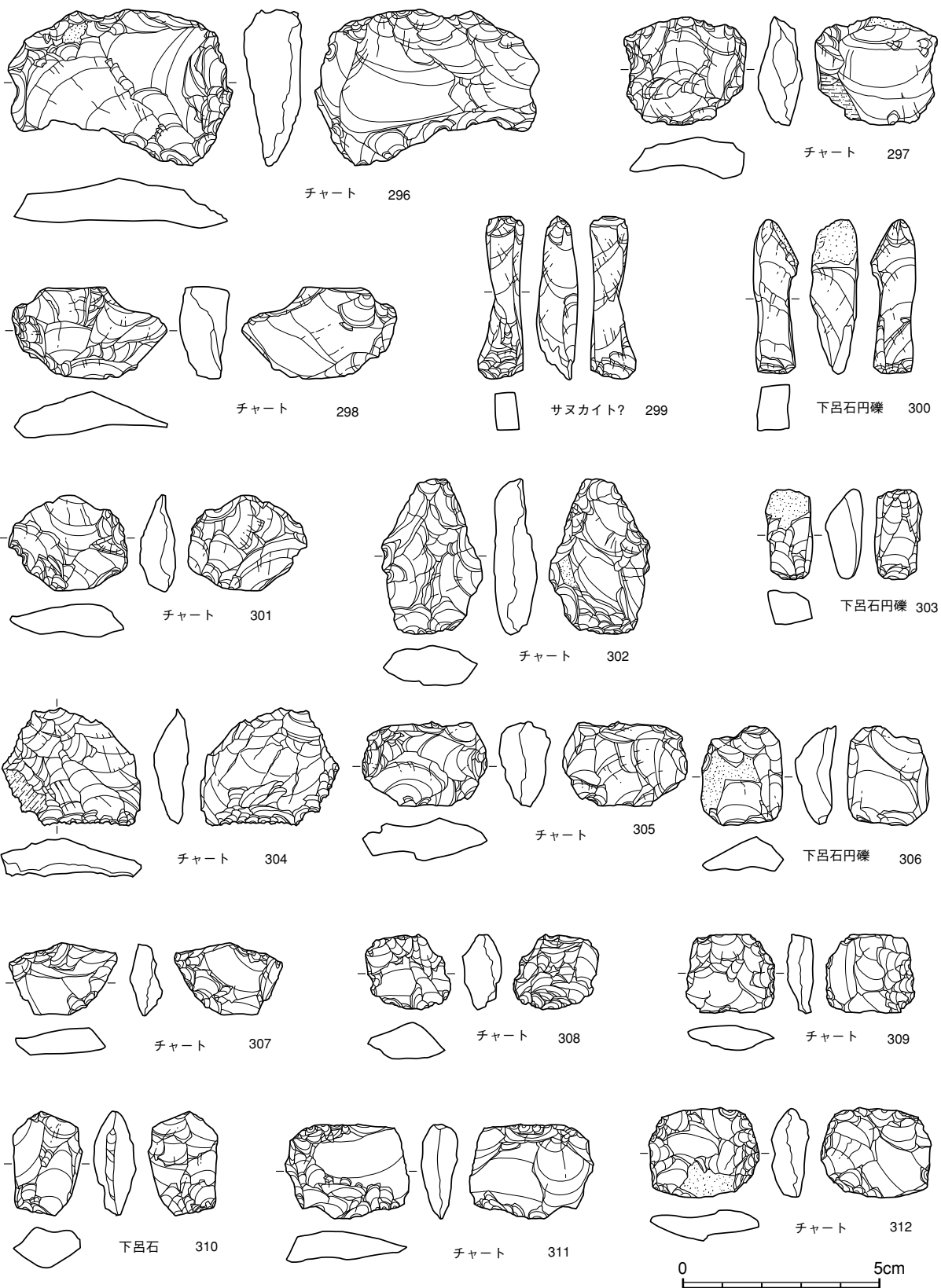


図版 55

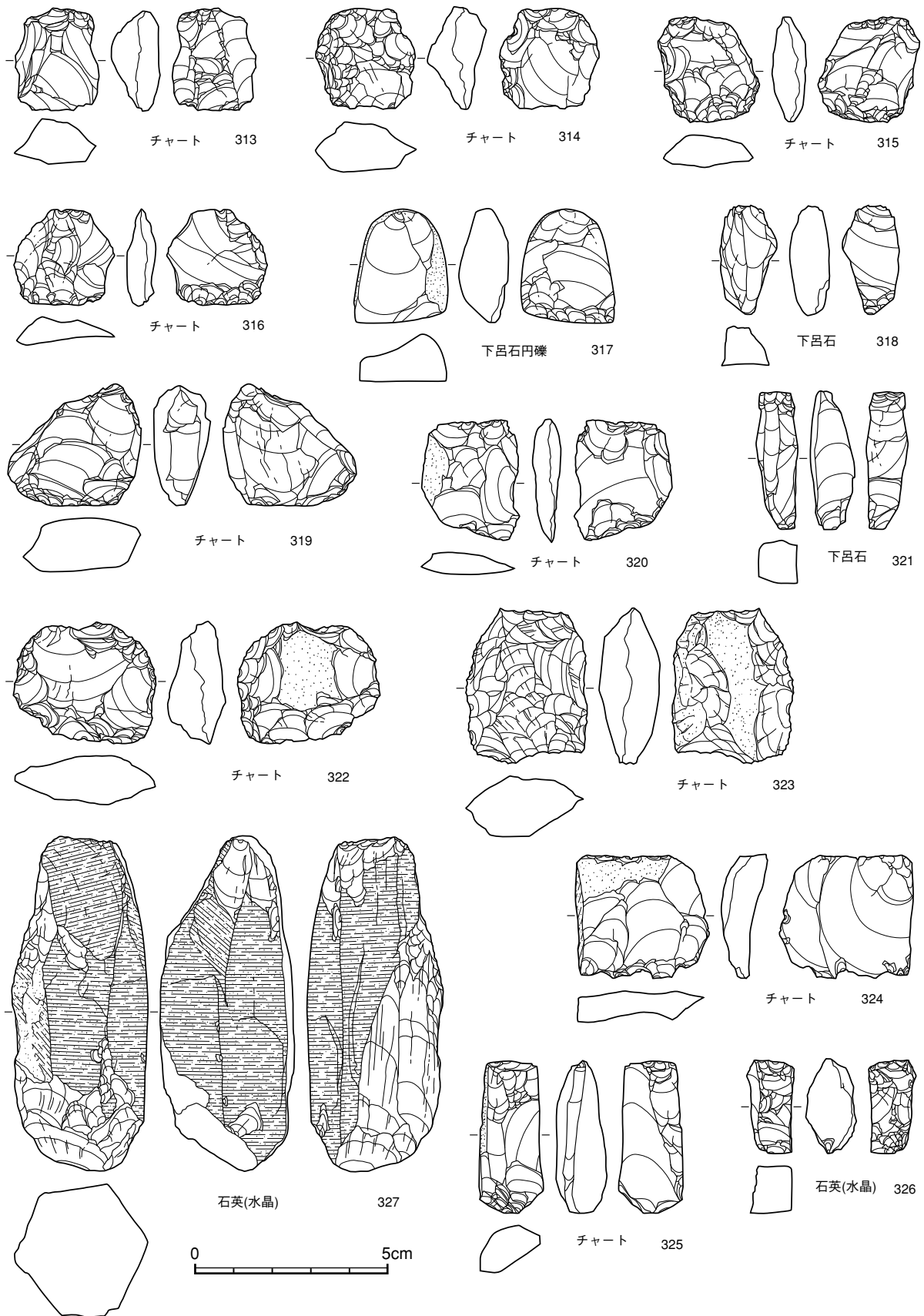


0 5cm

図版 56



図版 57



図版 58

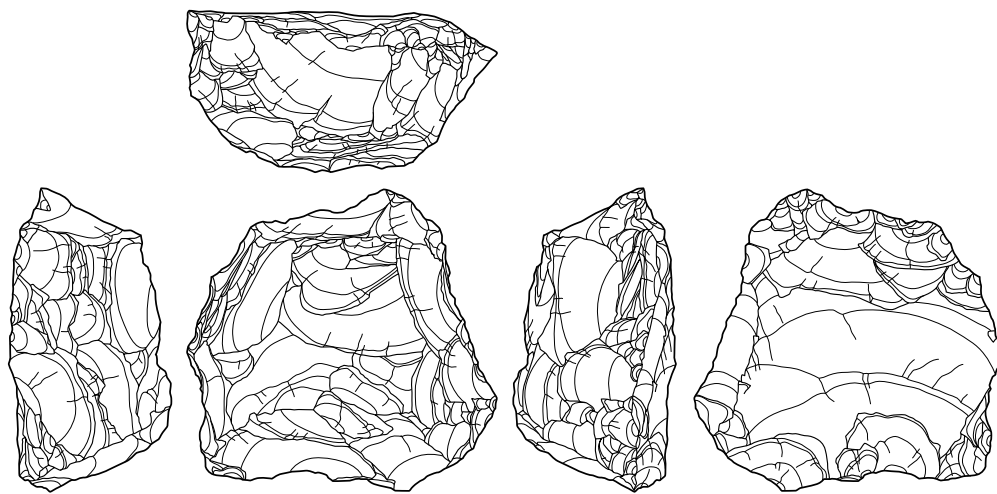


チャート 328

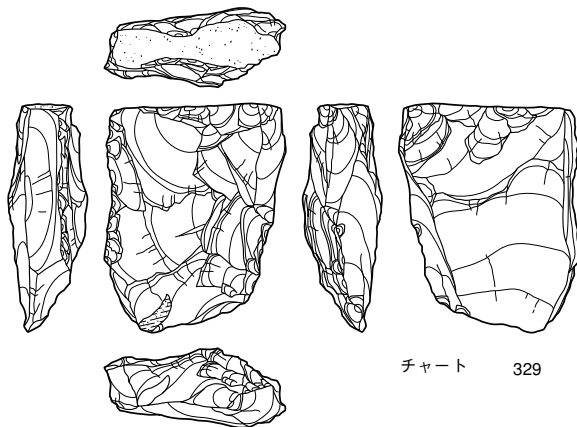


チャート 329

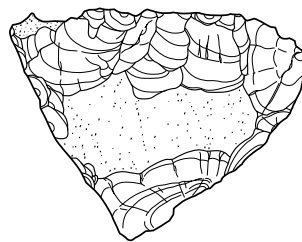
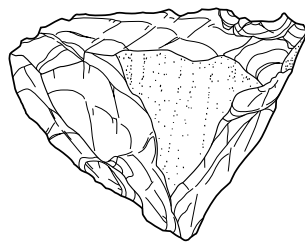
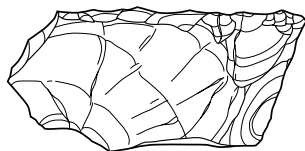
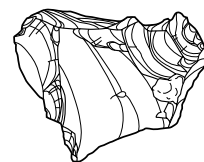
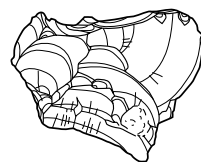
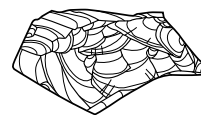
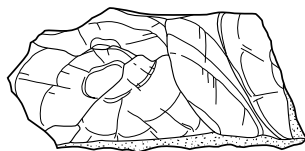


チャート 330

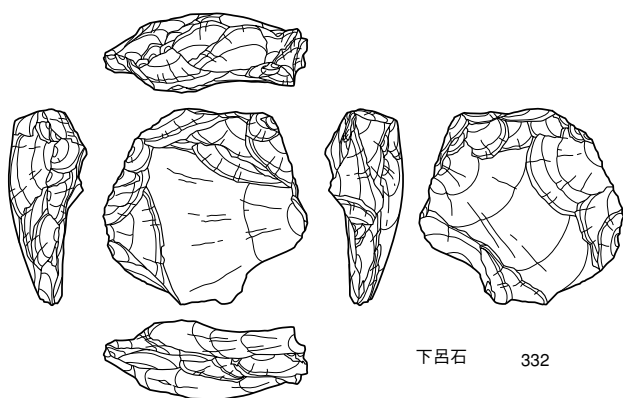


黒曜石 331



0 5cm

図版 59



下呂石 332

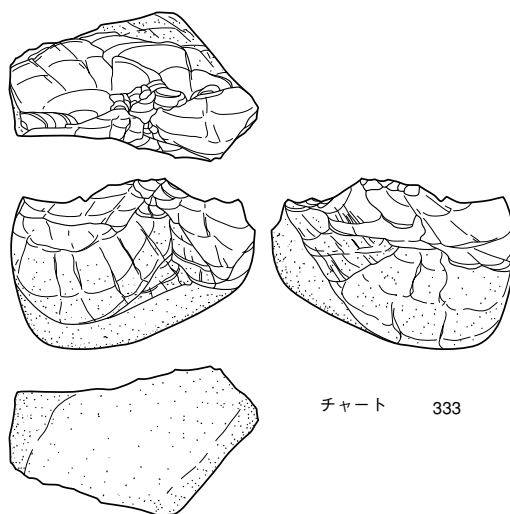
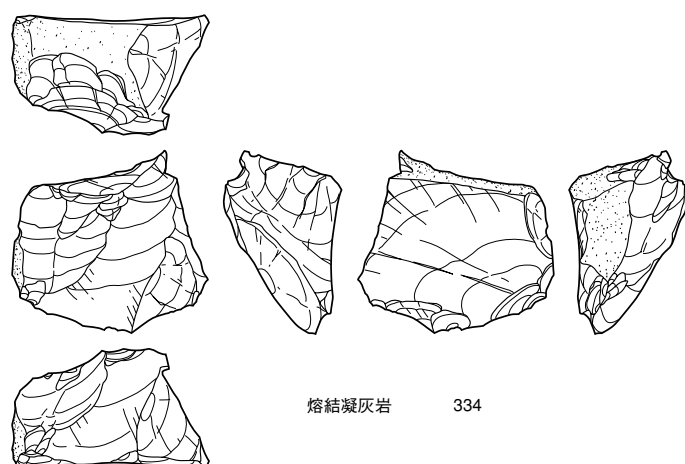
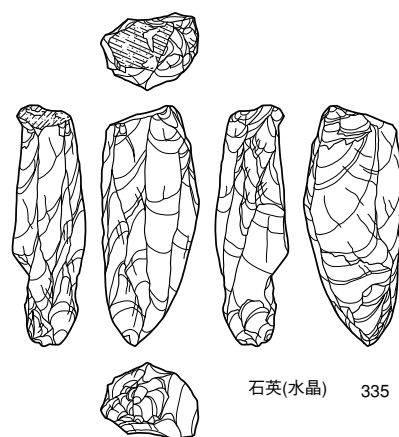


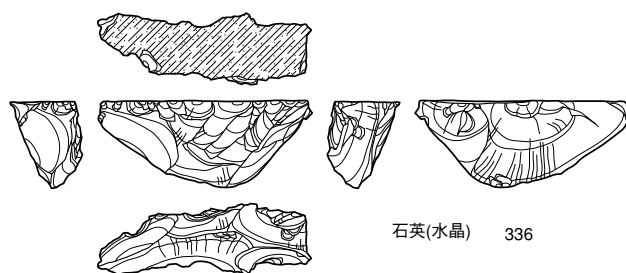
チャート 333



熔結凝灰岩 334



石英(水晶) 335



石英(水晶) 336

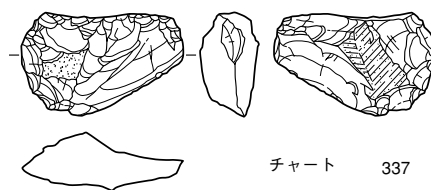
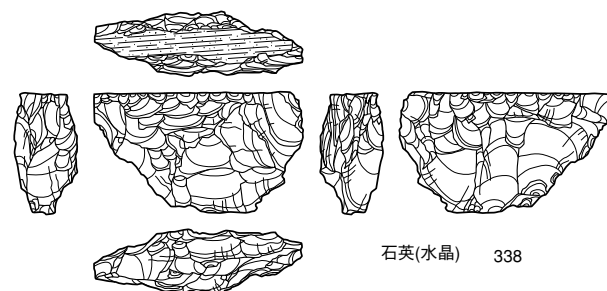


チャート 337



石英(水晶) 338

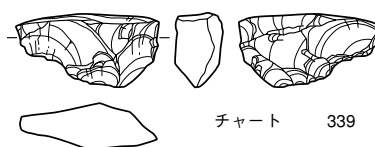
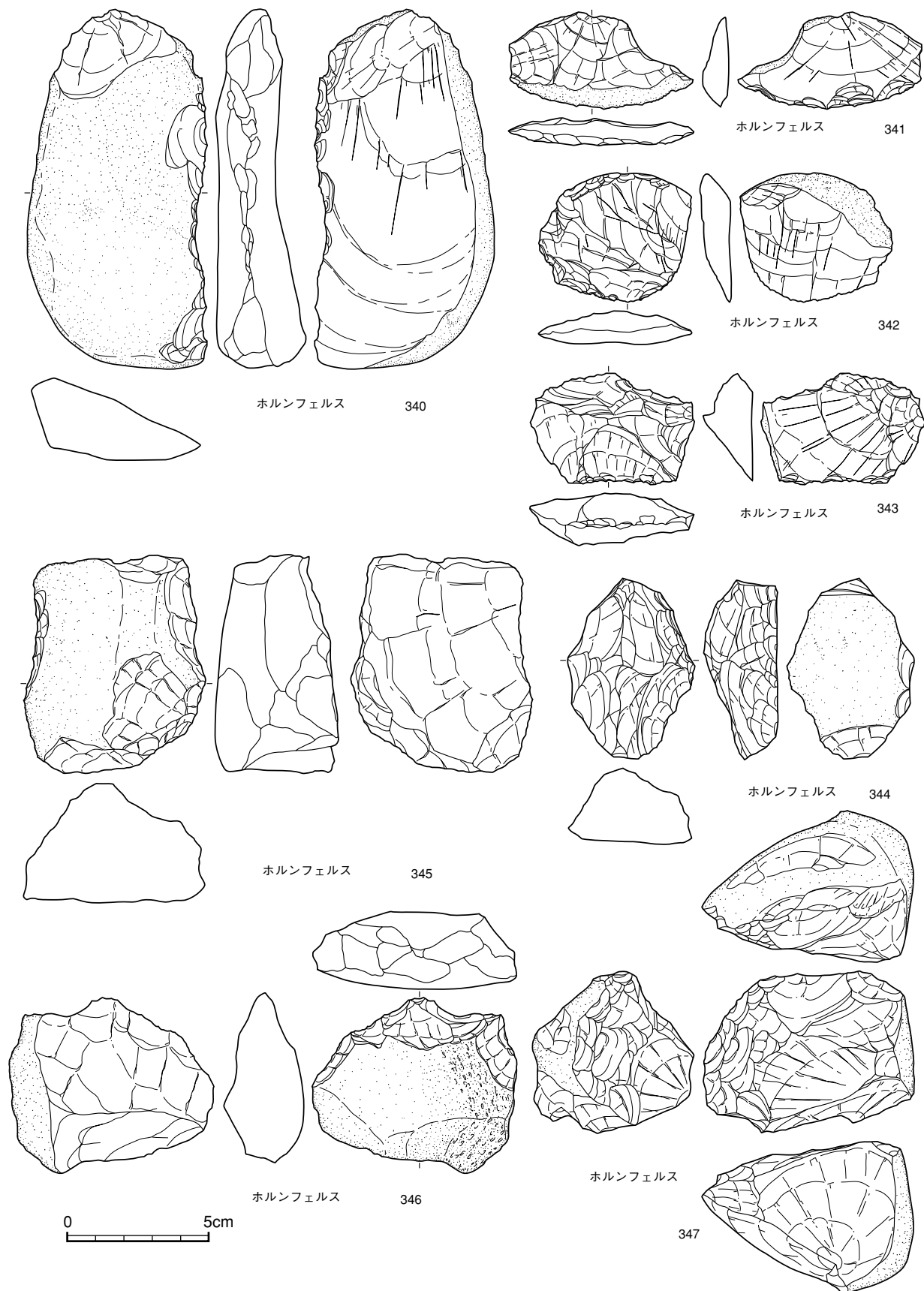


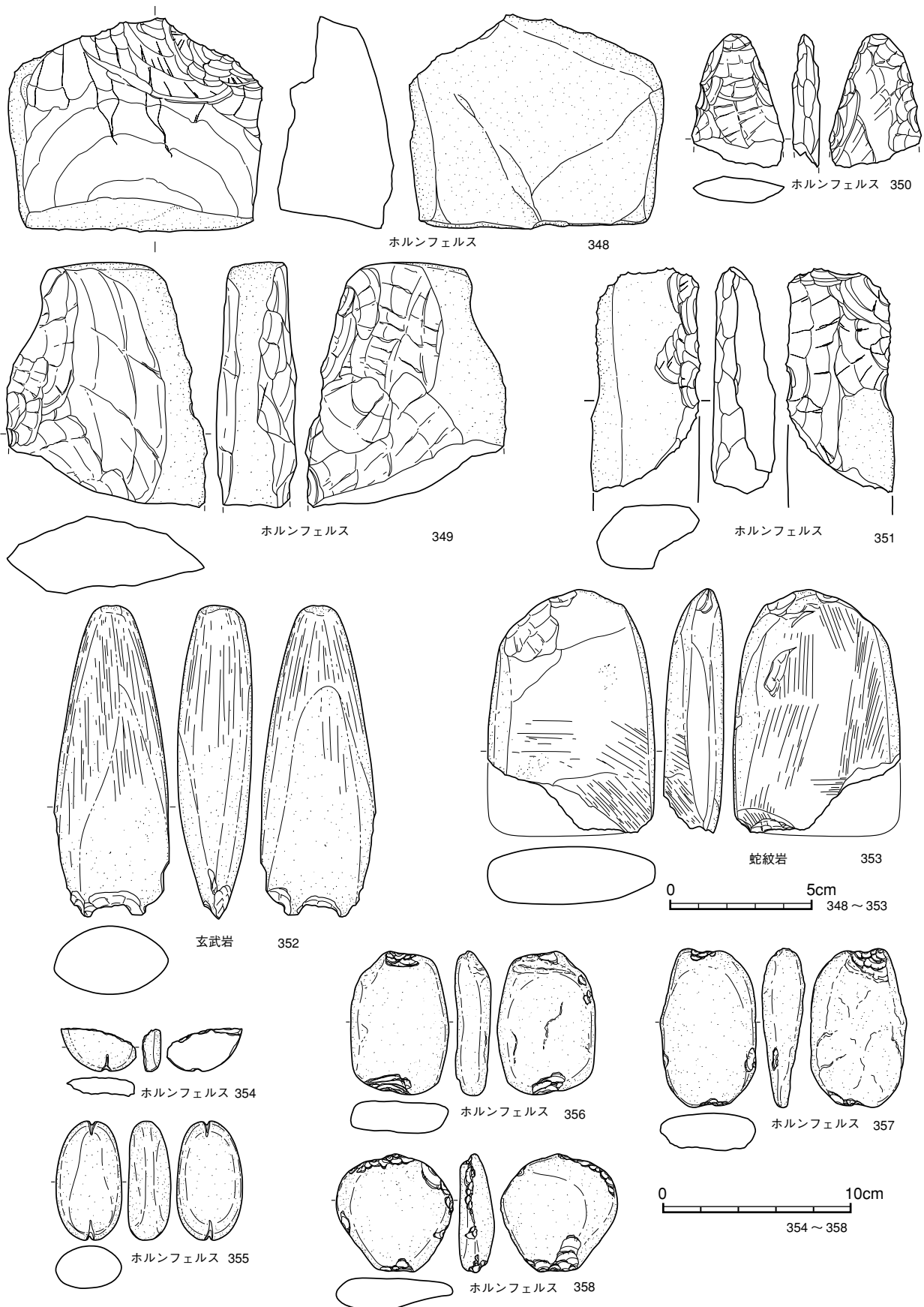
チャート 339

0 5cm

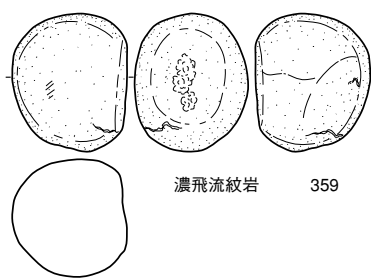
図版 60



図版 61



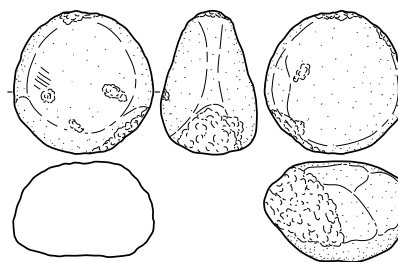
図版 62



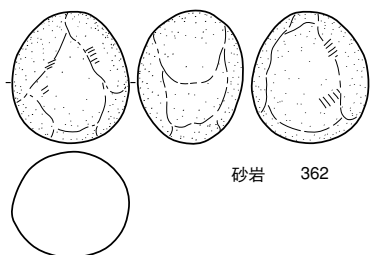
濃飛流紋岩 359



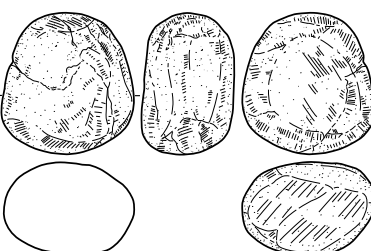
花崗岩 360



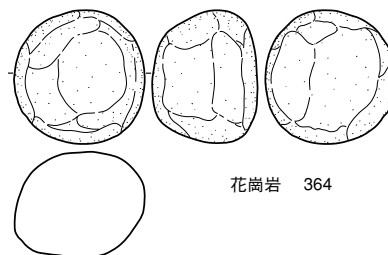
花崗岩 361



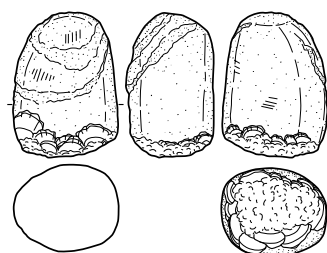
砂岩 362



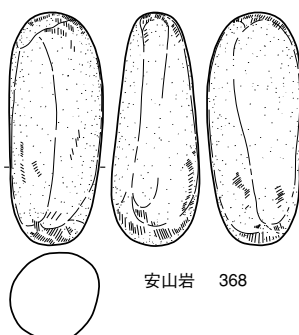
花崗岩 363



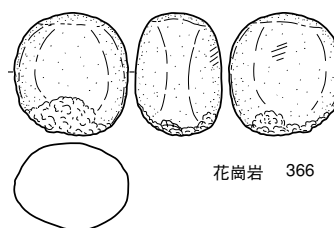
花崗岩 364



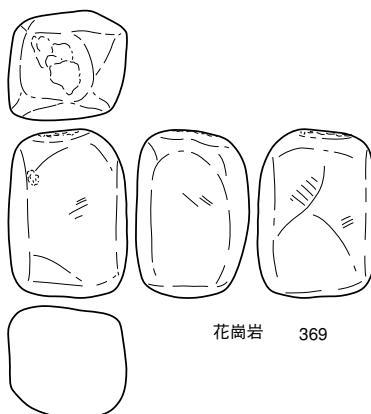
花崗岩 365



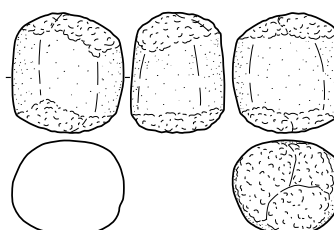
安山岩 368



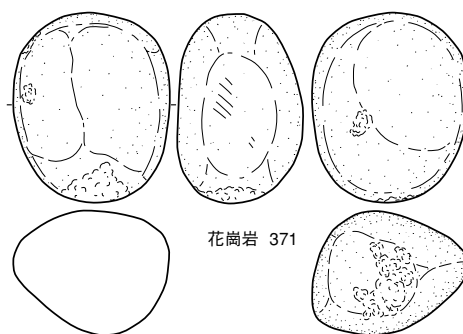
花崗岩 366



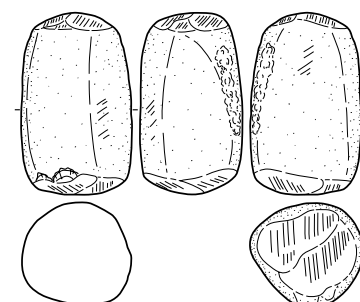
花崗岩 369



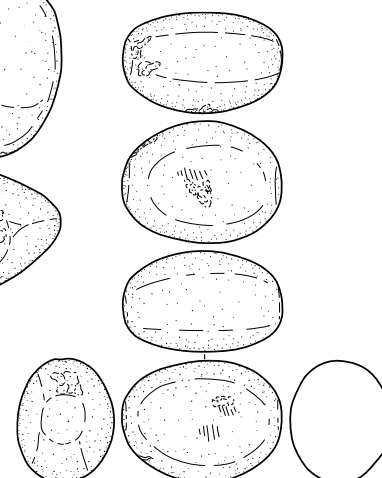
安山岩 367



花崗岩 371



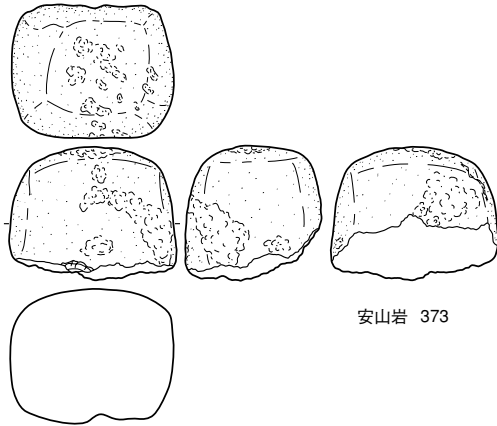
花崗岩 370



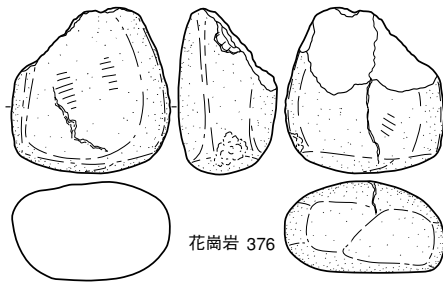
砂岩 372

0 10cm

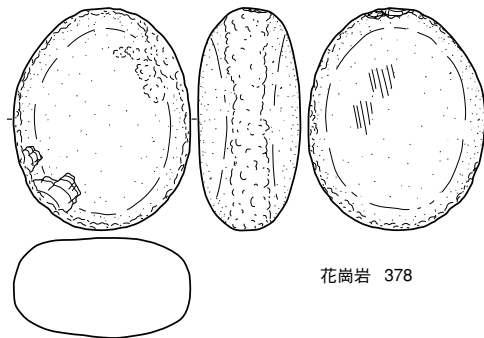
図版 63



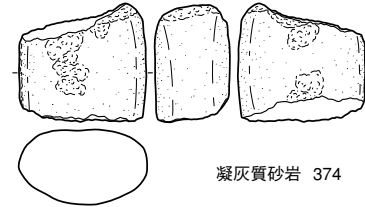
安山岩 373



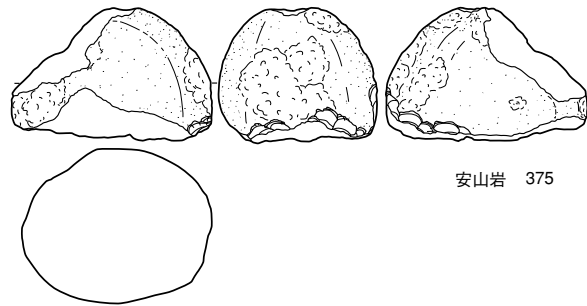
花崗岩 376



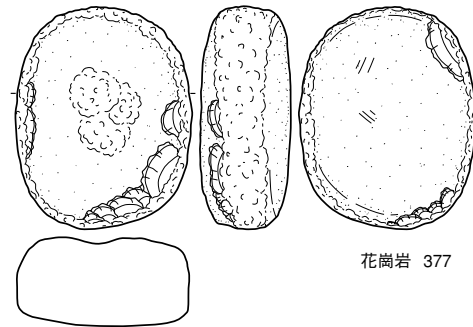
花崗岩 378



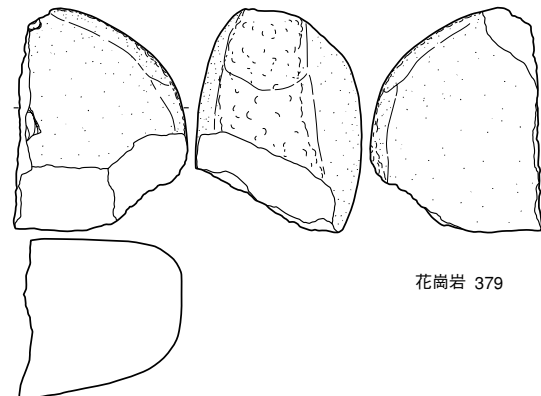
凝灰質砂岩 374



安山岩 375



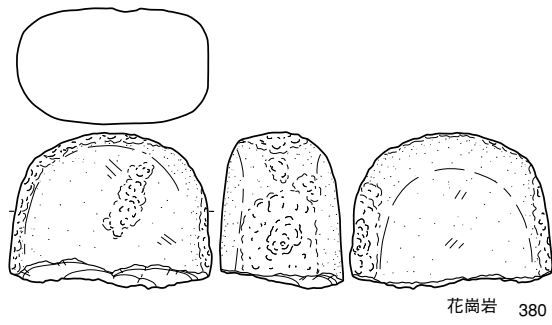
花崗岩 377



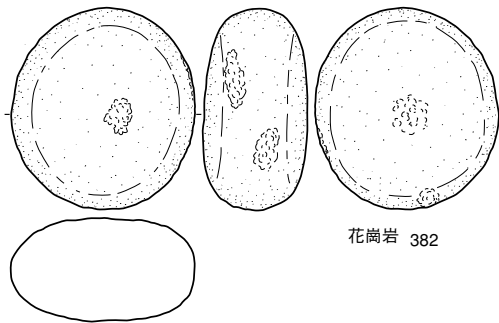
花崗岩 379

0 10cm

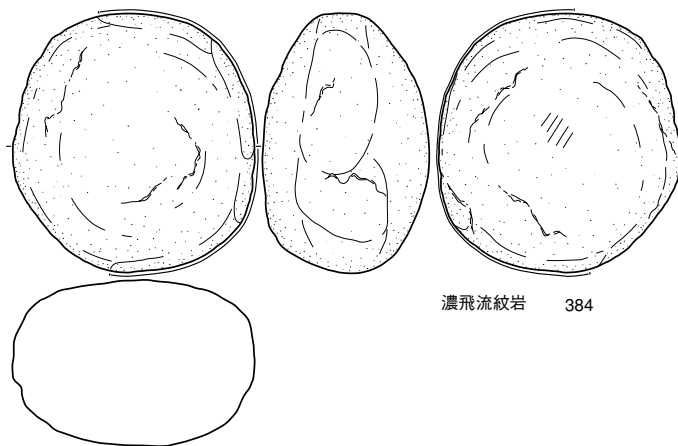
図版 64



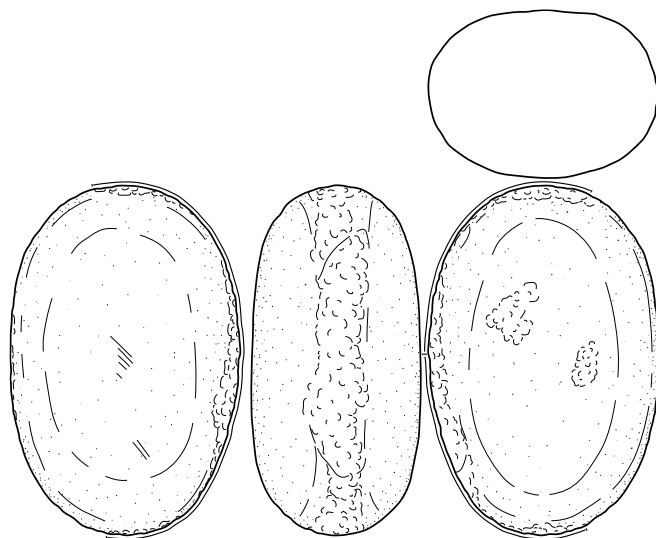
花崗岩 380



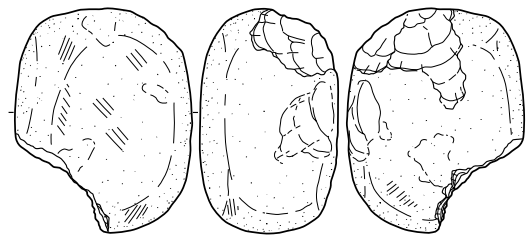
花崗岩 382



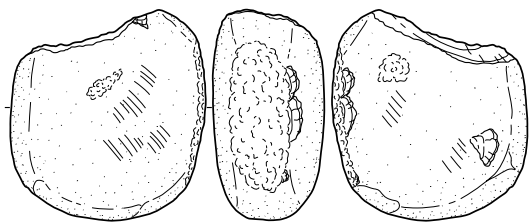
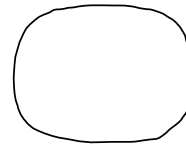
濃飛流紋岩 384



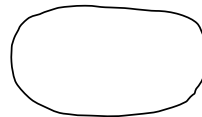
花崗岩 385



安山岩 381

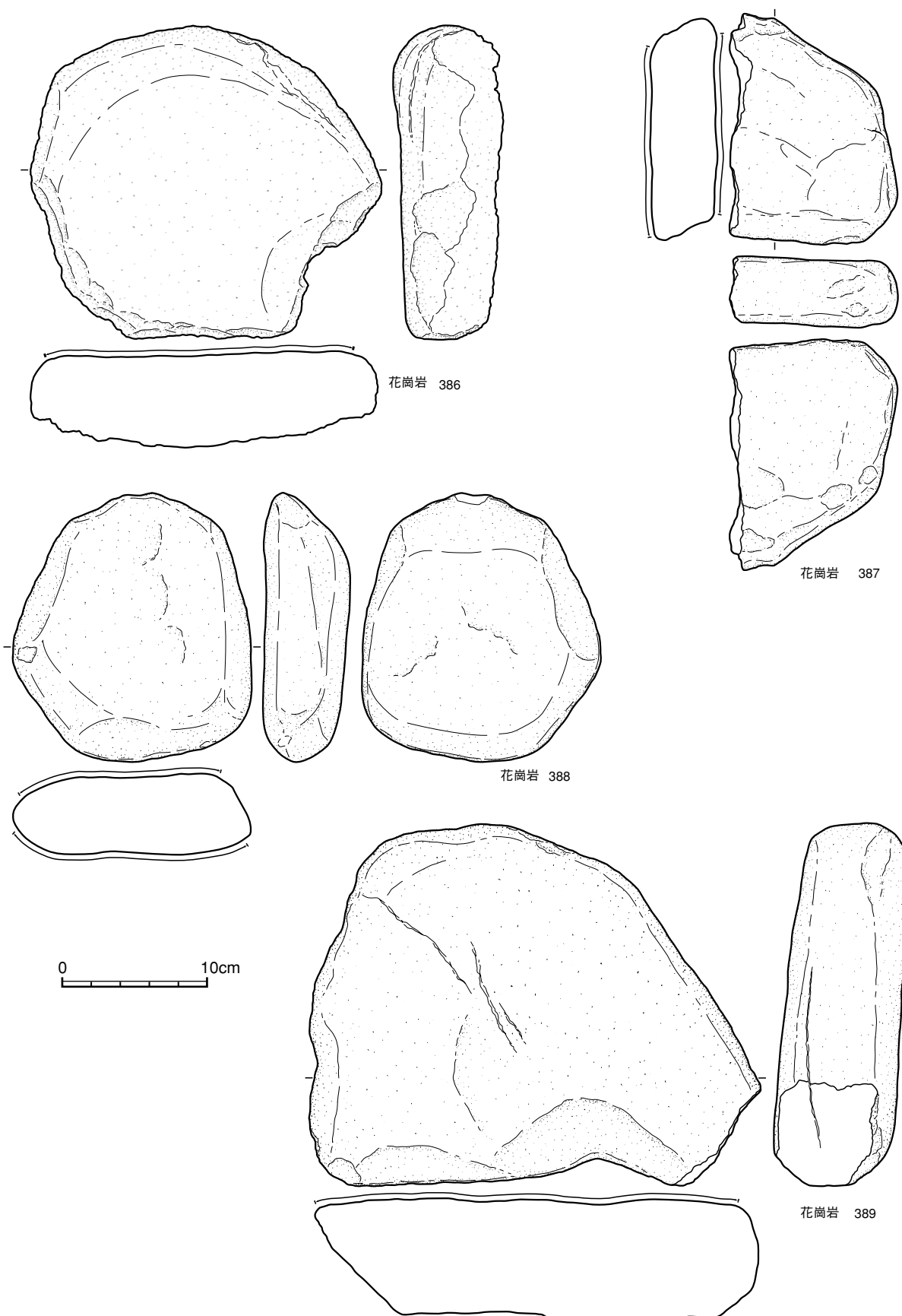


濃飛流紋岩 383

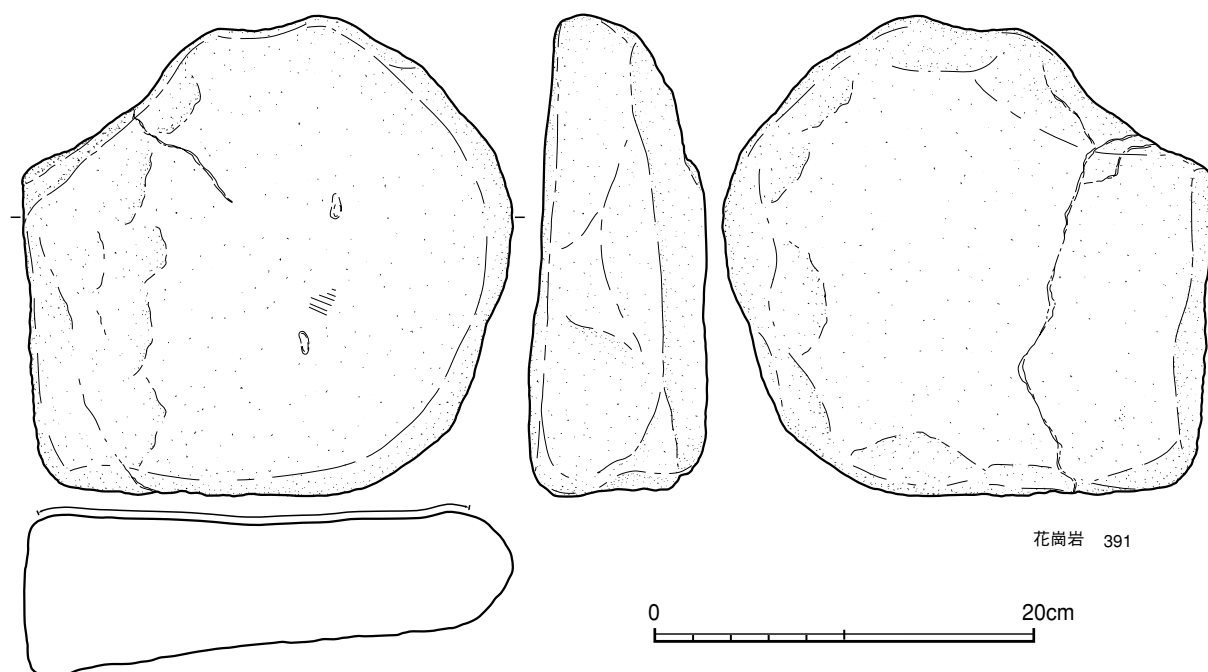
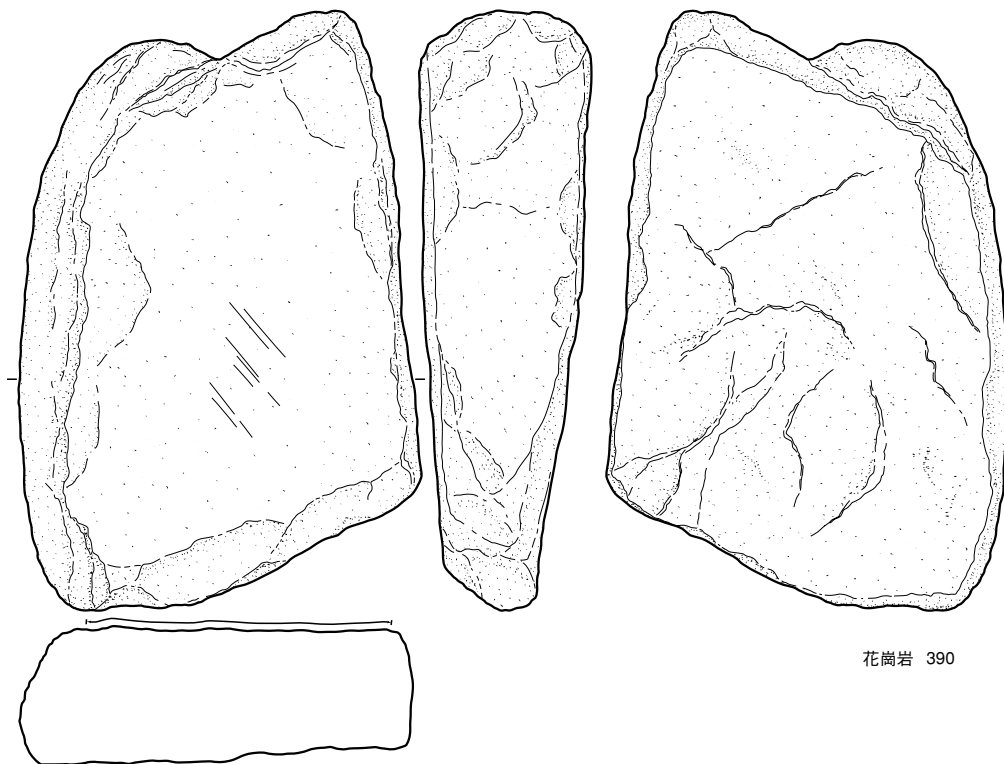


0 10cm

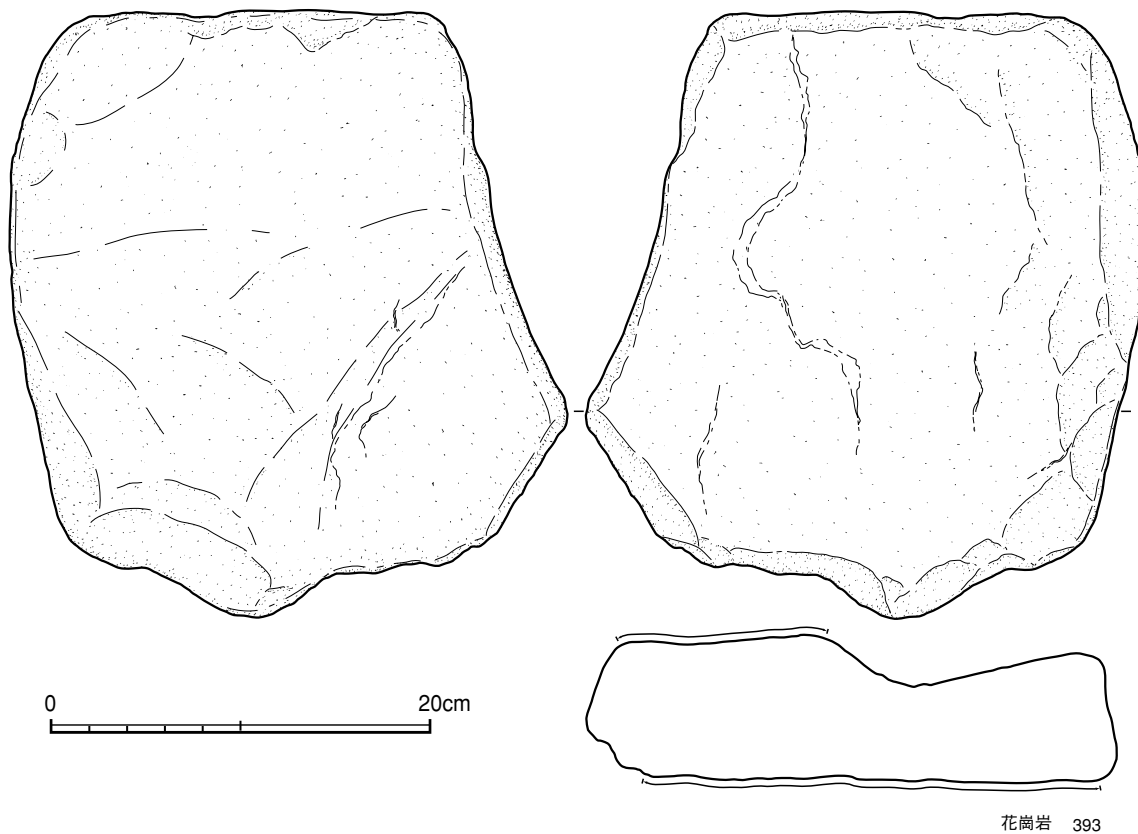
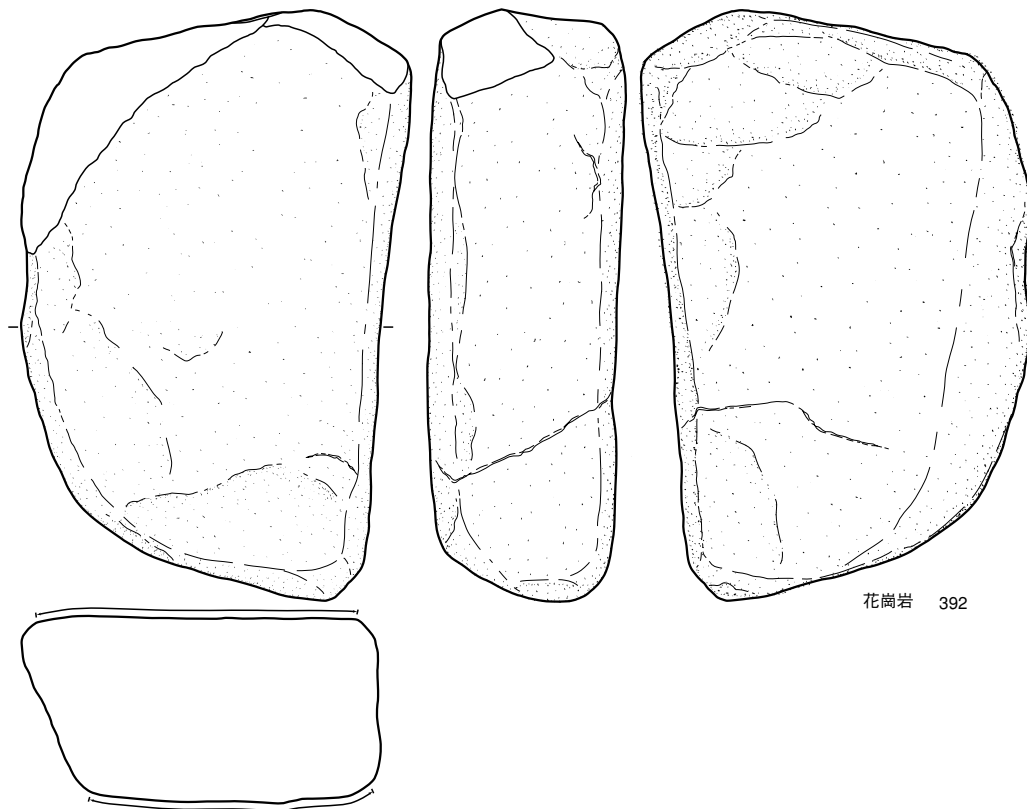
図版 65



図版 66

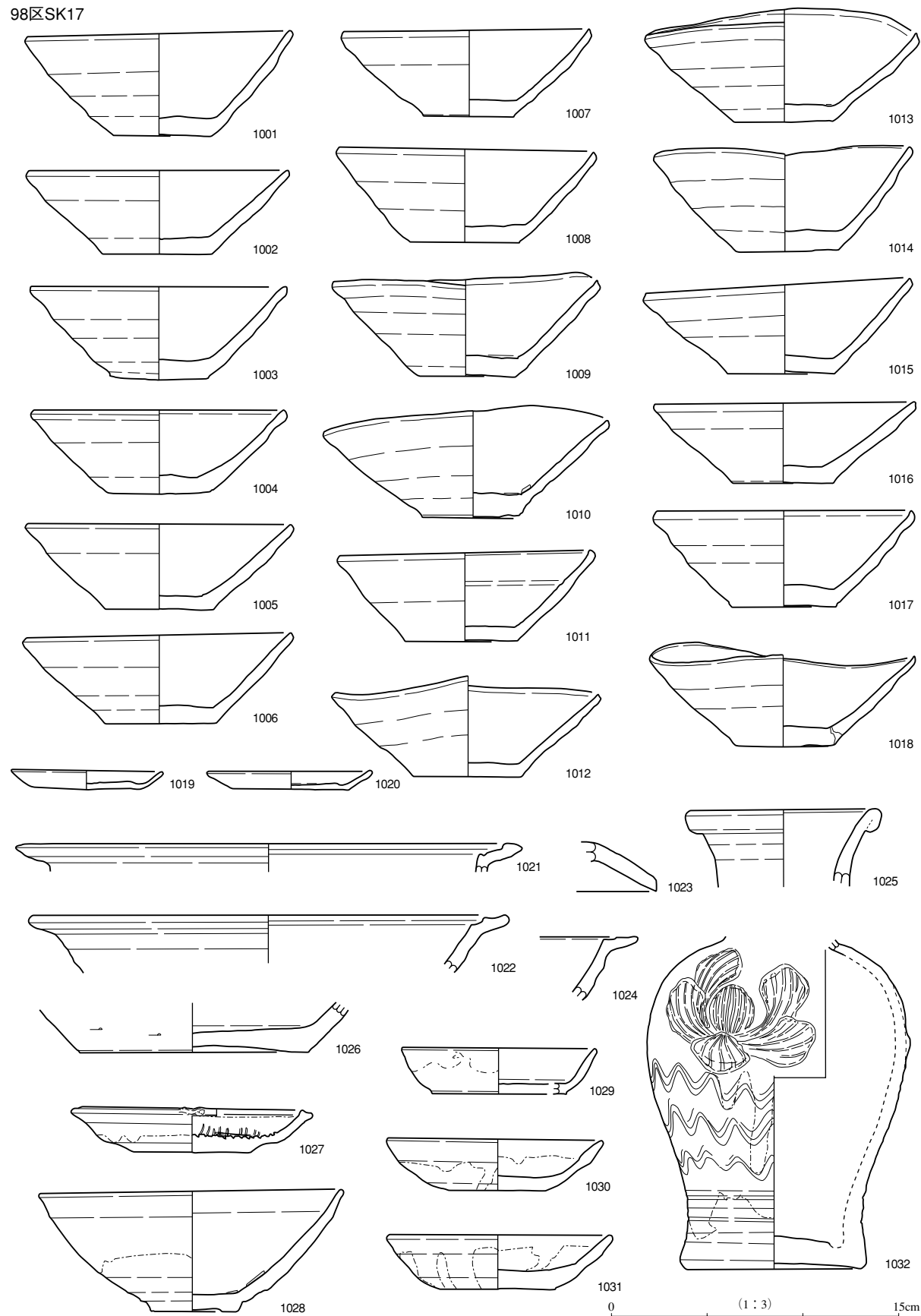


図版 67



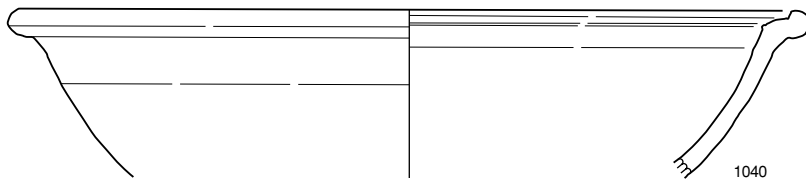
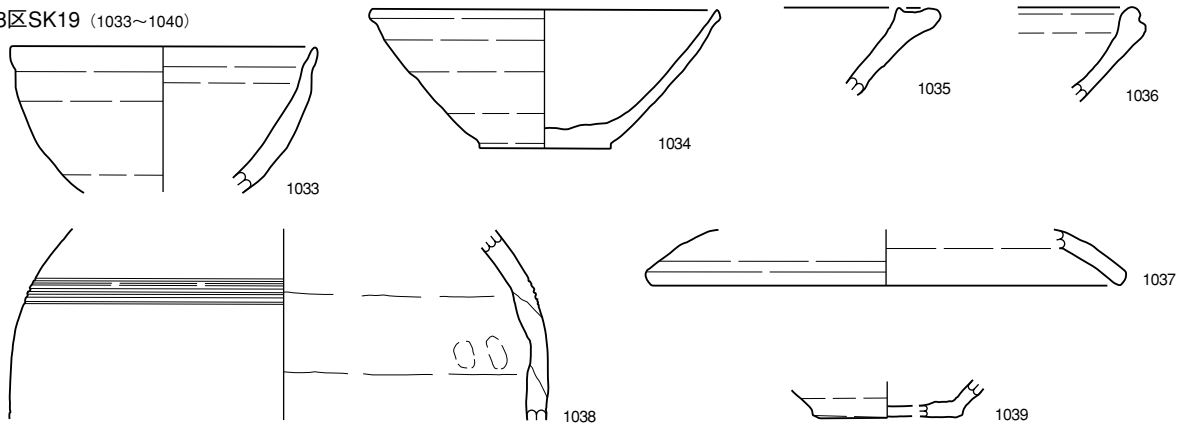
図版 68

98区SK17

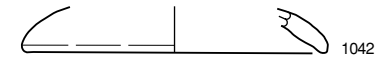


図版 69

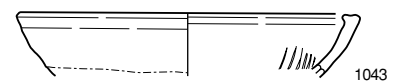
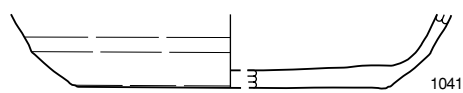
98区SK19 (1033~1040)



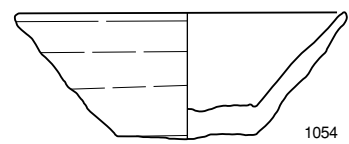
98区SK152 (1042, 1043)



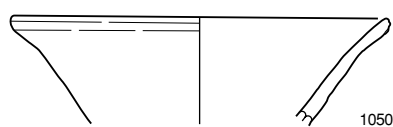
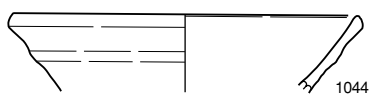
98区SK18



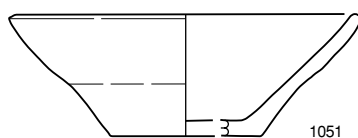
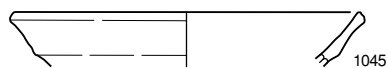
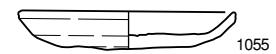
98区SK242



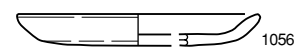
98区SK40 (1044~1053)



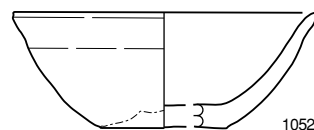
98区SK172



98区SK50



1046

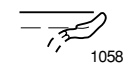


1052

98区SK79



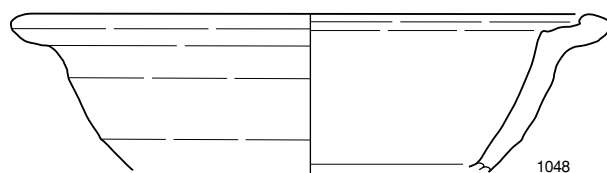
98区SK85



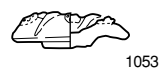
1058



1047

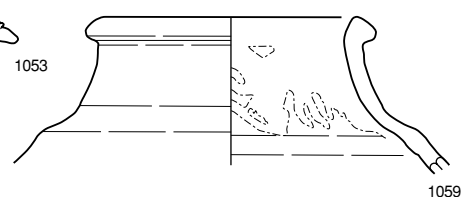


1048

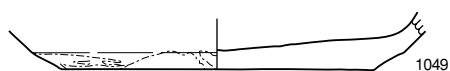


1053

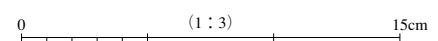
98区SK44



1059

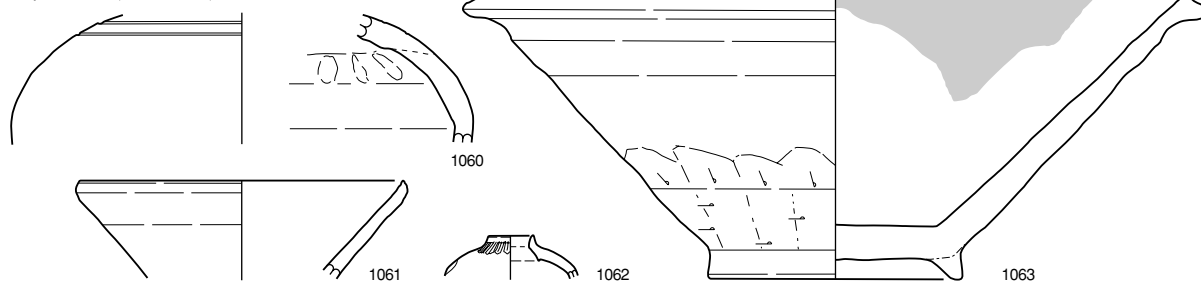


1049

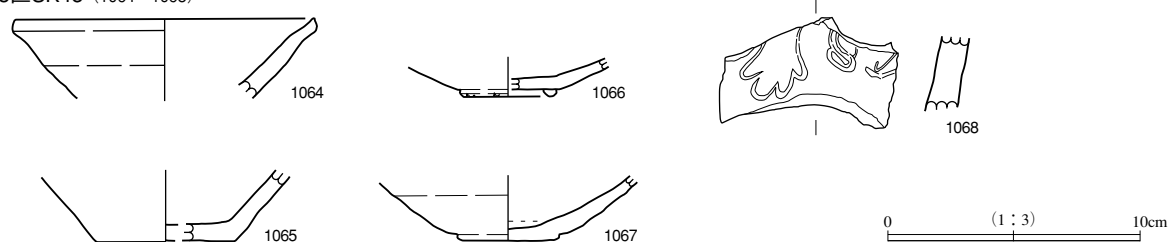


図版 70

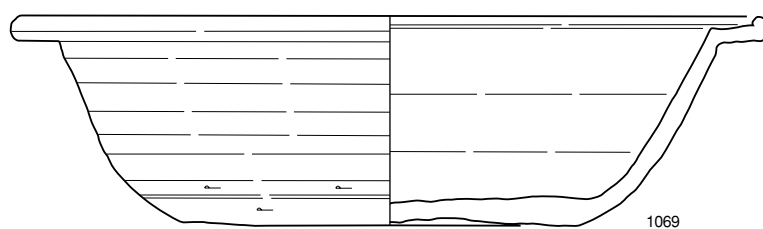
98区SK43 (1060~1063)



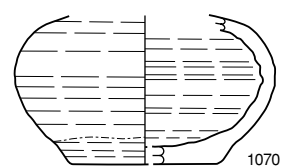
98区SK45 (1064~1068)



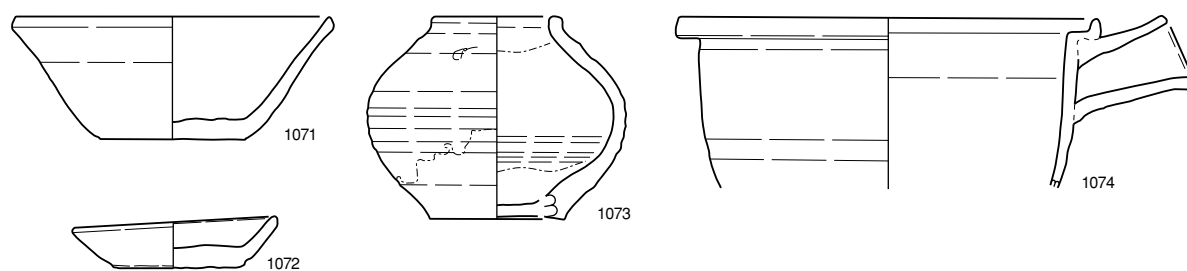
98区SK237



98区Pit09

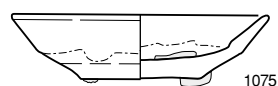


99C区SK29 (1071~1074)

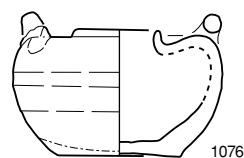


98区SK29

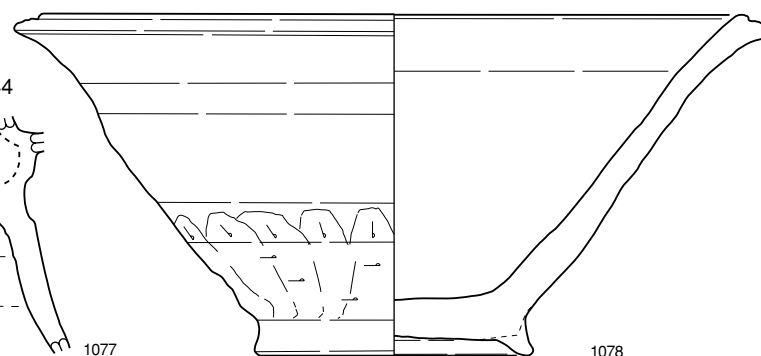
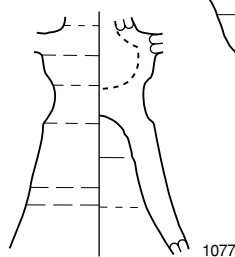
98区Pit18



98区Pit195

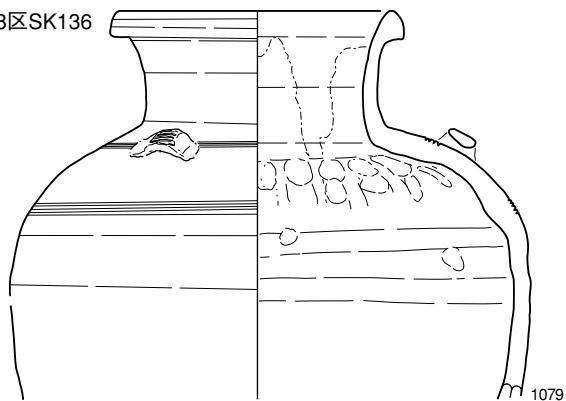


98区SK44

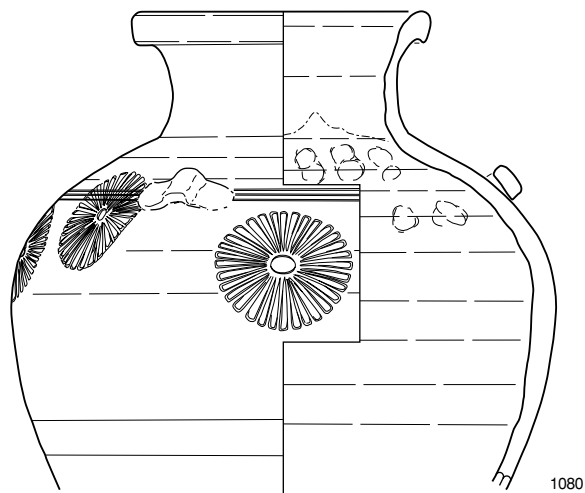


図版 71

98区SK136

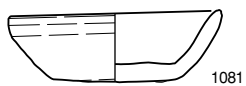


1079

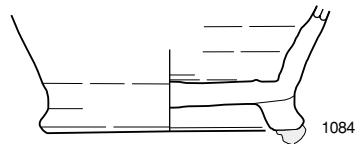


1080

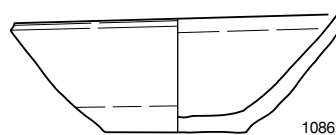
98区SK56 (1081~1085)



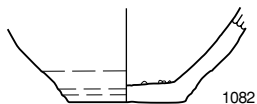
1081



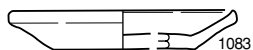
1084



1086



1082

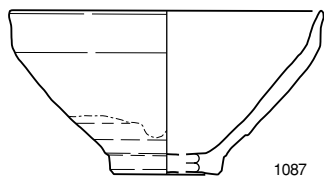


1083



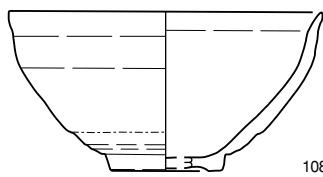
1085

98区SK15 (1087,1088)

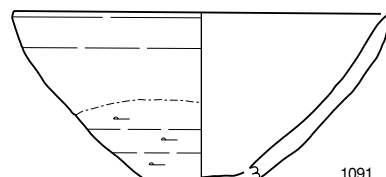


1087

98区SK49 (1089~1092)



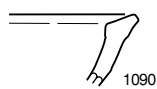
1089



1091



1088

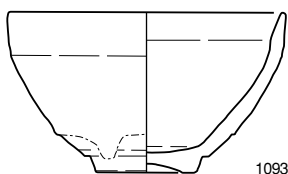


1090



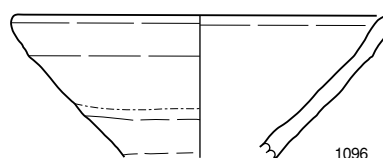
1092

98区SK160



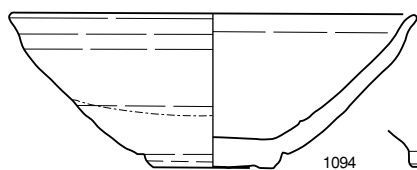
1093

98区SK112 (1096,1097)



1096

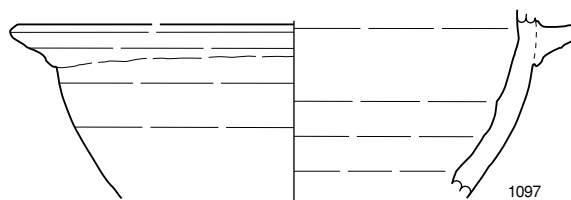
98区SK27 (1094,1095)



1094



1095

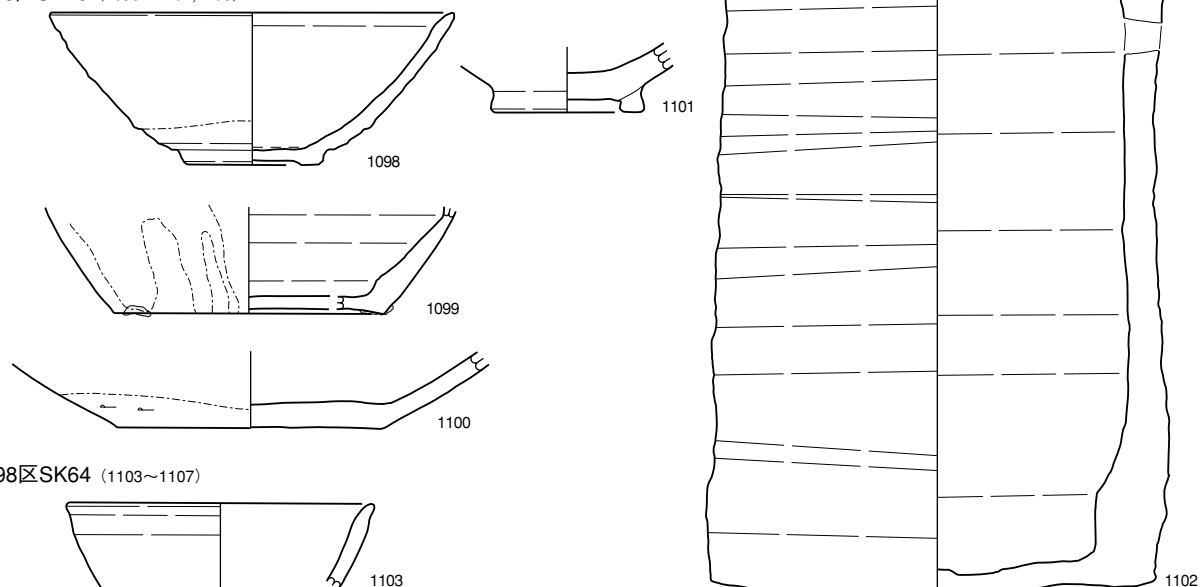


1097

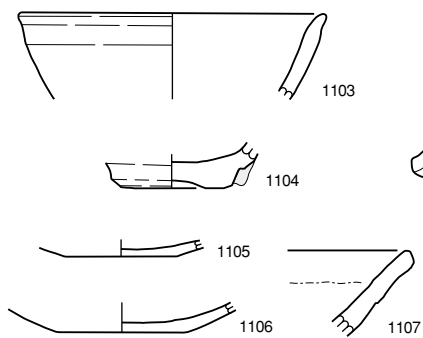
0 (1:3) 15cm

図版 72

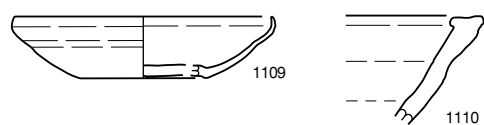
98区SK10 (1098~1102,1108)



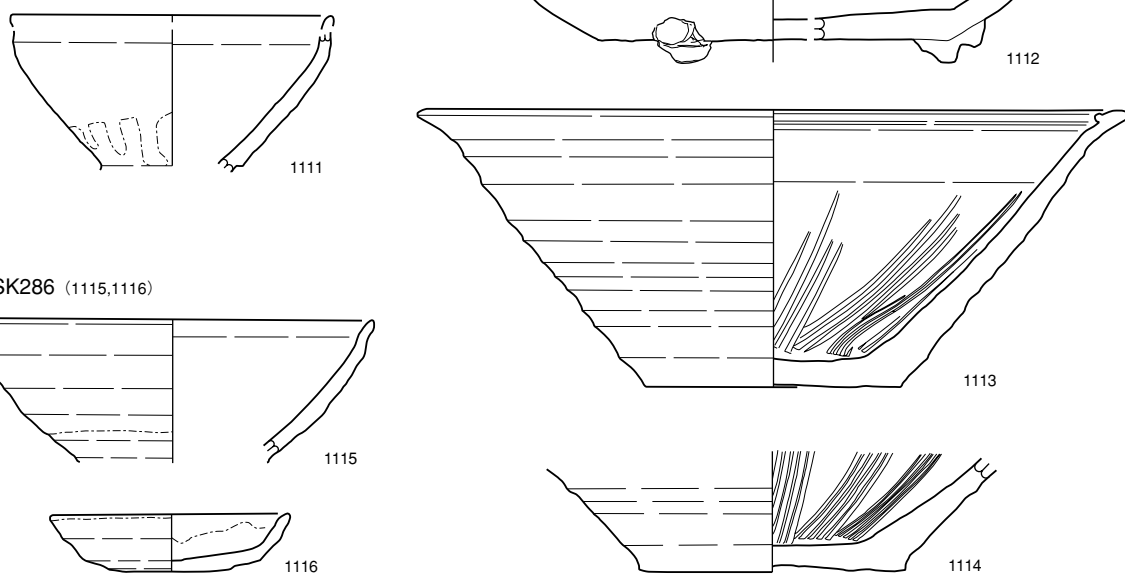
98区SK64 (1103~1107)



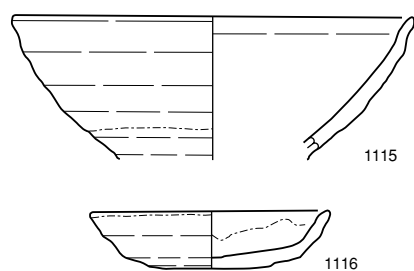
98区SK14 (1109,1110)



98区SK74 (1111~1114)

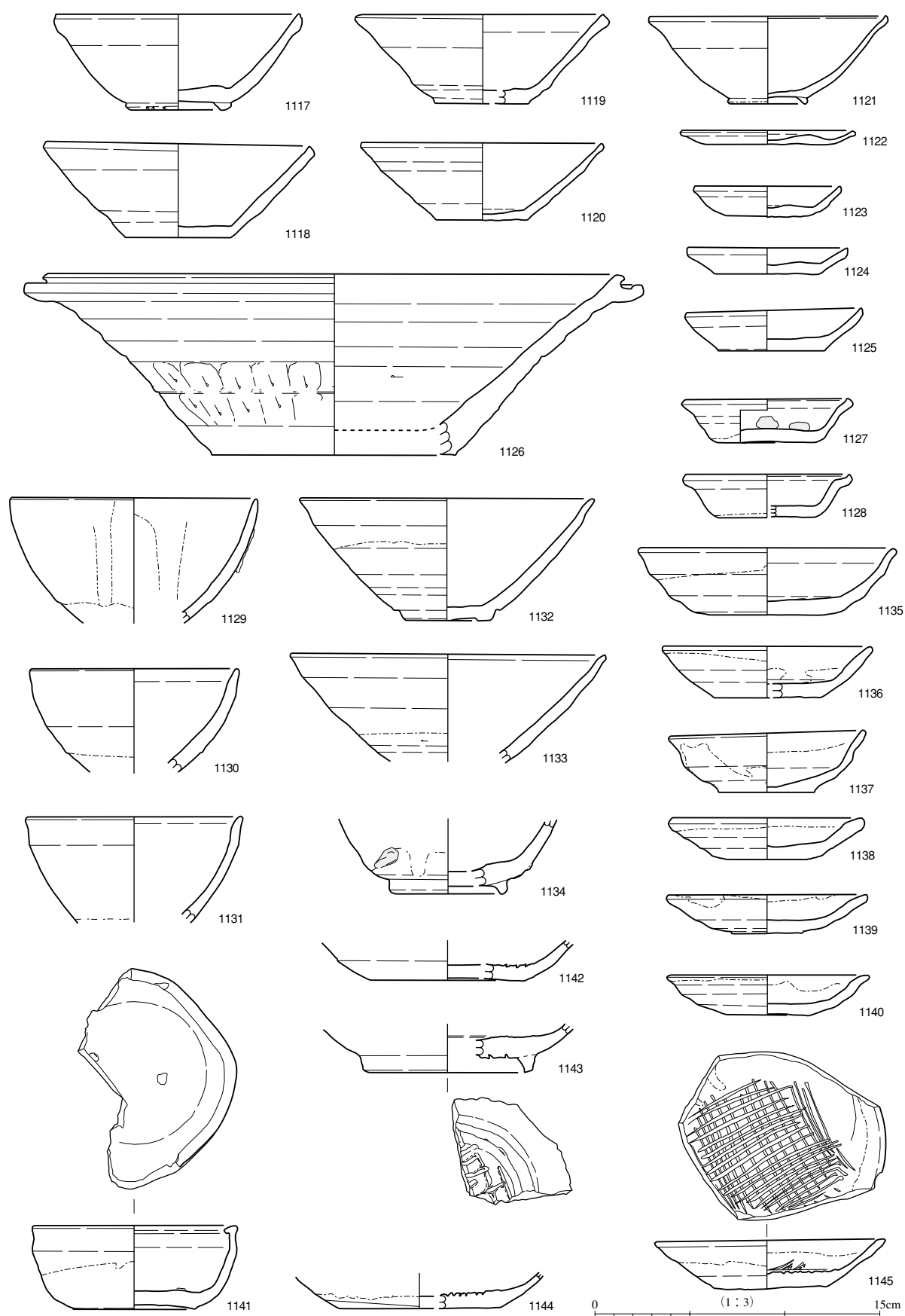


98区SK286 (1115,1116)

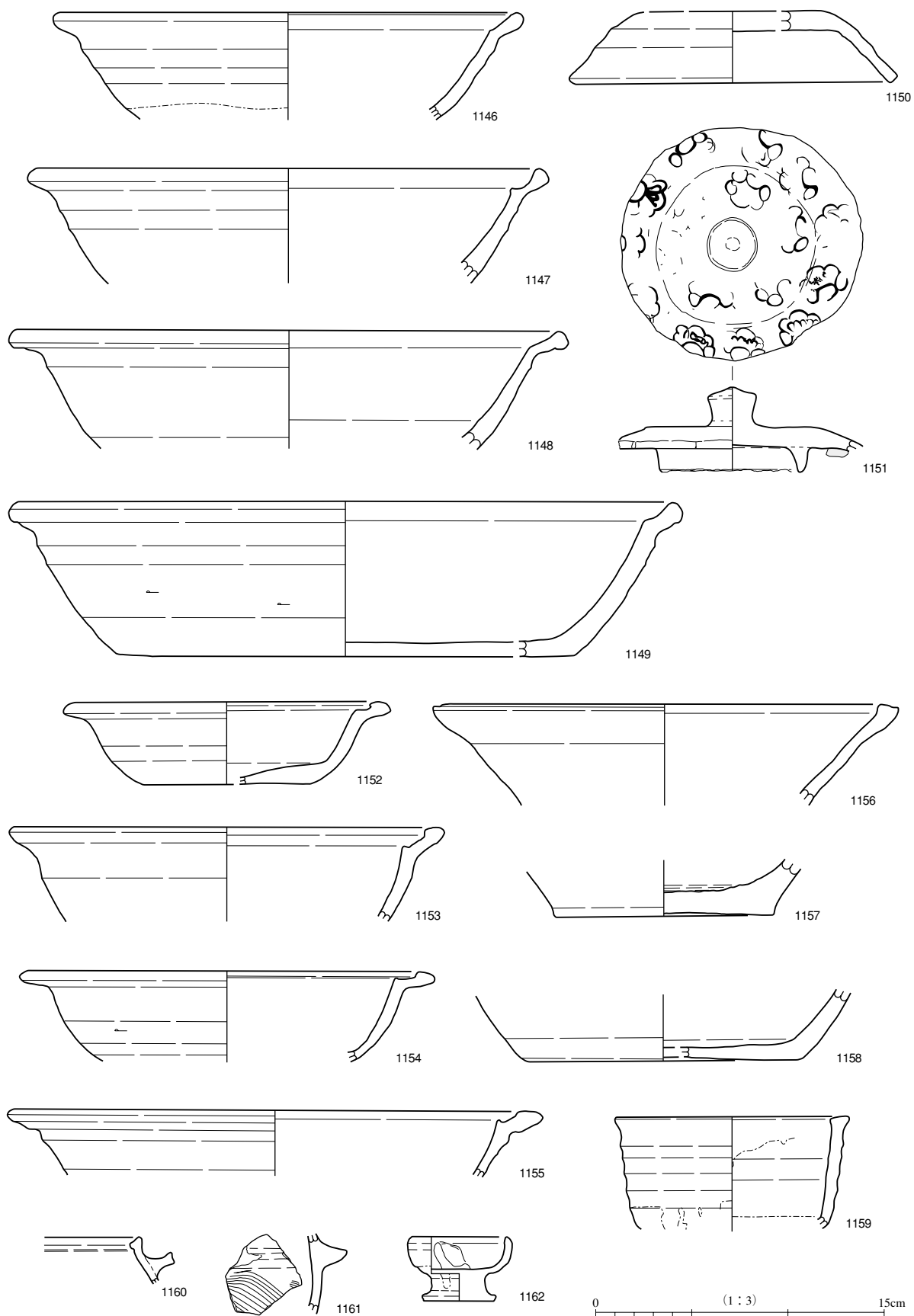


0 (1 : 3) 15cm

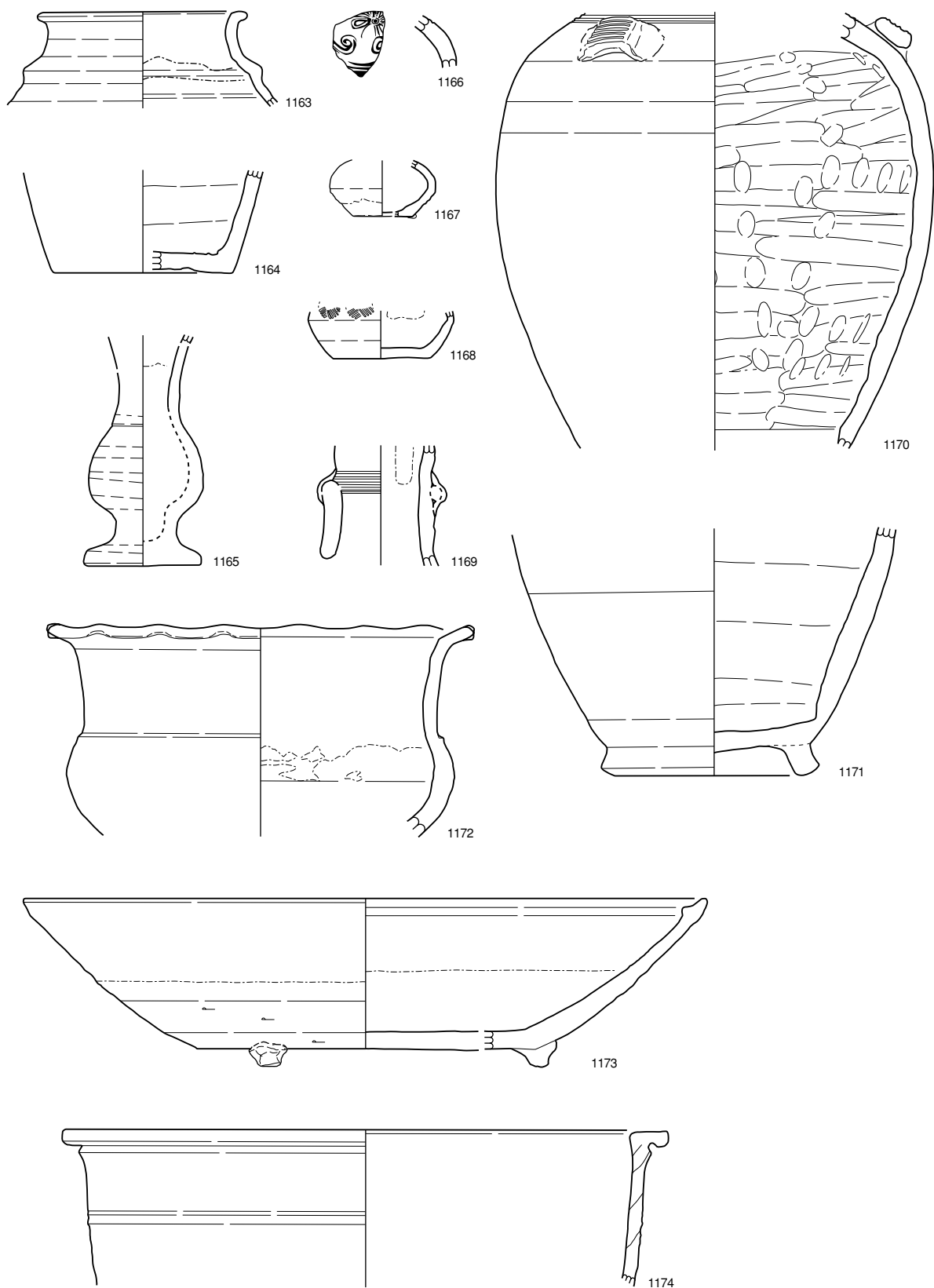
図版 73



図版 74



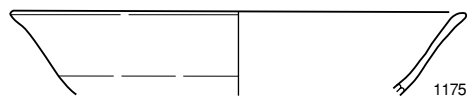
図版 75



0 (1 : 3) 15cm

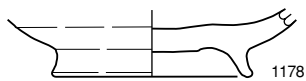
図版 76

00A区SD03 (1175,1177)



1175

00A区SD04 (1178~1180)

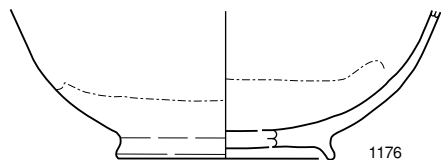


1178

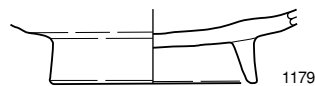


1180

包含層

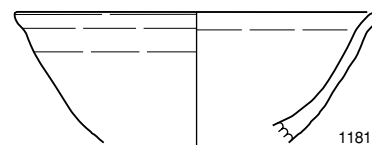


1176



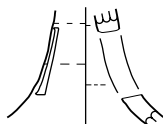
1179

98区SK19



1181

98区SK45



包含層



1183



1184

1185

1186

1187

1188

1189

1190

1191



1192

1193

1194

1195

1196

1197

1198

1199

0 (1:3) 15cm

写真図版 1



上 調査区遠景（北より 99A 区を望む）

中 調査区遠景（南より 99C 区を望む）



上 遺跡遠景（北から 画面奥は建設中の東海環状自動車道）

中 遺跡遠景（西から雲興寺方面を望む）

下 99C 区作業風景

左 99A 区作業風景（南から）

写真図版 2



上 00A区全景（東から）

左中 00A区全景（南から）

右中 00A区北西部（南東から）

左下 00区調査前風景（南から）

写真図版 3



左上 00B区旧流路付近
(東から)

右上 00A区 SD04
(東から)

中 00A区旧流路部分
中央ベルト

下 00A区完掘状況
(北西から)



写真図版 4



左上 99C 区北部（東から）
左中 99C 区北壁セクション
右上 99B 区（南から）
下 99C 区全景（南から）



写真図版 5



左上 SB01 掘削途中段階

右上 SB01 完掘状況（東から）

中 99B 全景（西から）

下 98区全景（西から）



写真図版 6



写真図版 7



前ページ 写真図版 6

左上中 00A 区東壁セクション（西から）

右上 00B 区完掘状況（北東から）

右中 99A 区 SK10 弥生時代配石炉跡（東から）

下 99A 区完掘状況（北から）

左上 99A 区南西端

右上 99A 区 SX03 完掘状況

左中 99A 区 SX05 土器検出状況（北から）

右中 99A 区 SX03 ベルト付近（南から）

左右下 99A 区 SU01 茅山下層式土器出土状態

写真図版 8



左上 98区 SK17 遺物出土状況

右上 98区 SK17 灰釉瓶子検出状況



左中 98区 SK10 遺物出土状況

右中 98区 SK17 下層遺物出土状況

左下 98区 SK43

右下 98区 SK38



写真図版 9



左上 98区北東壁セクション



右上 98区上面検出状況



右中 98区SB11 掘立柱建物跡



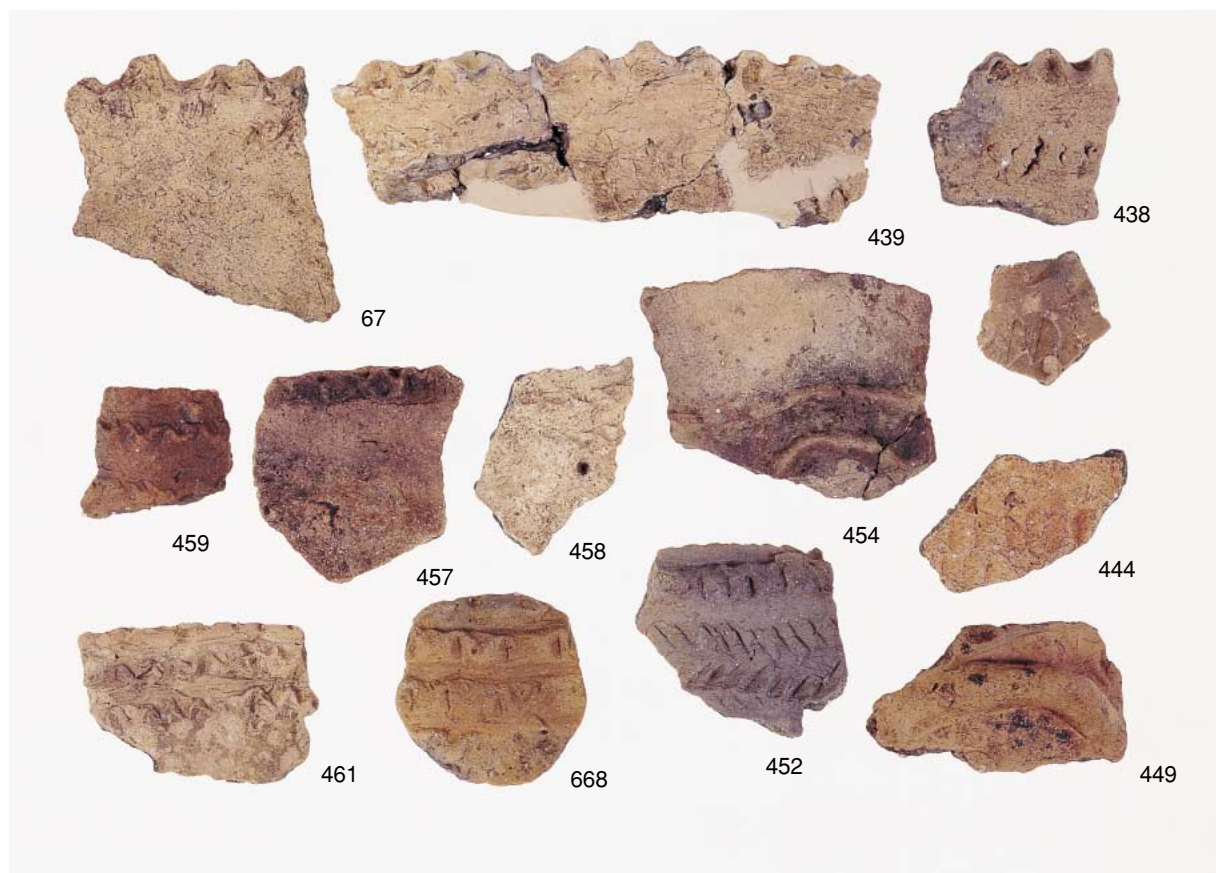
左中 02区完掘状況（南から）

右下 02区東壁セクション

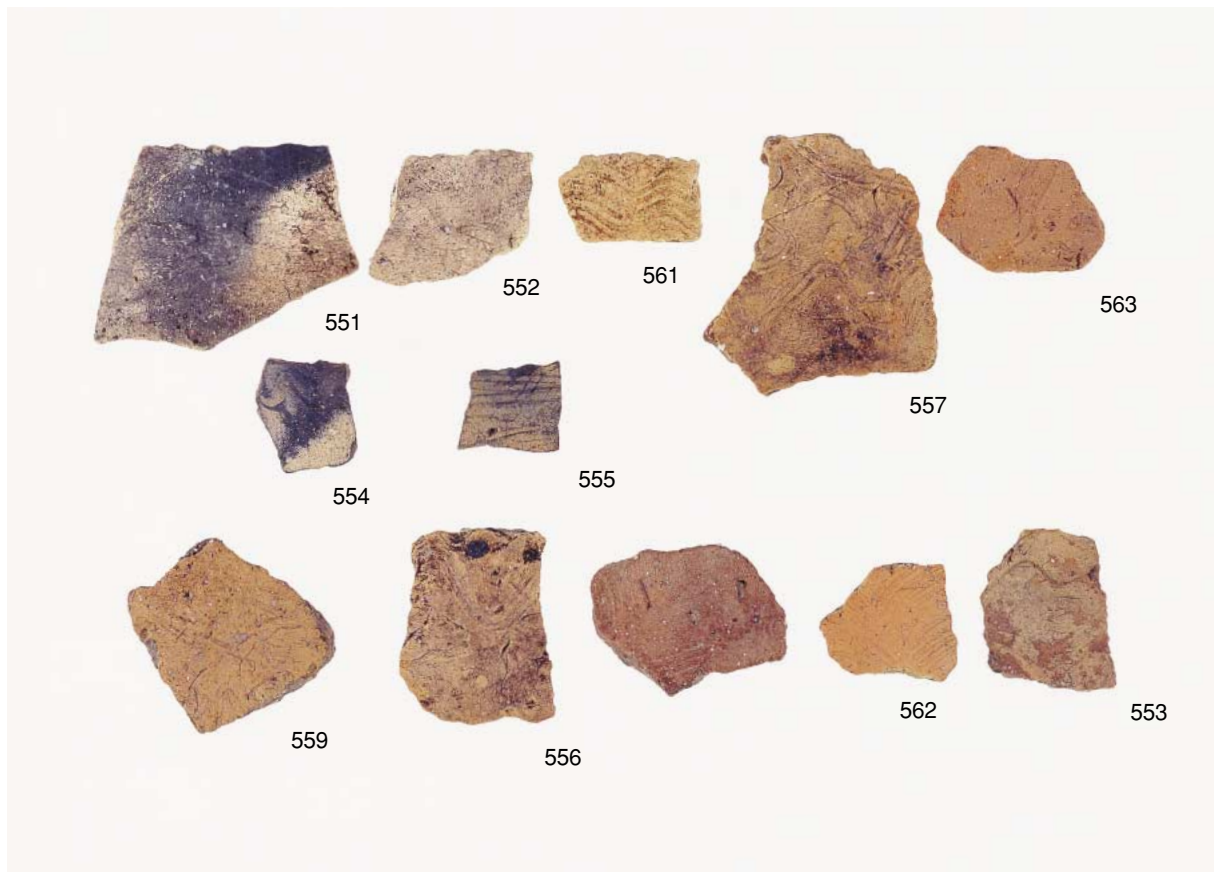
左下 01区完掘状況（南西から）



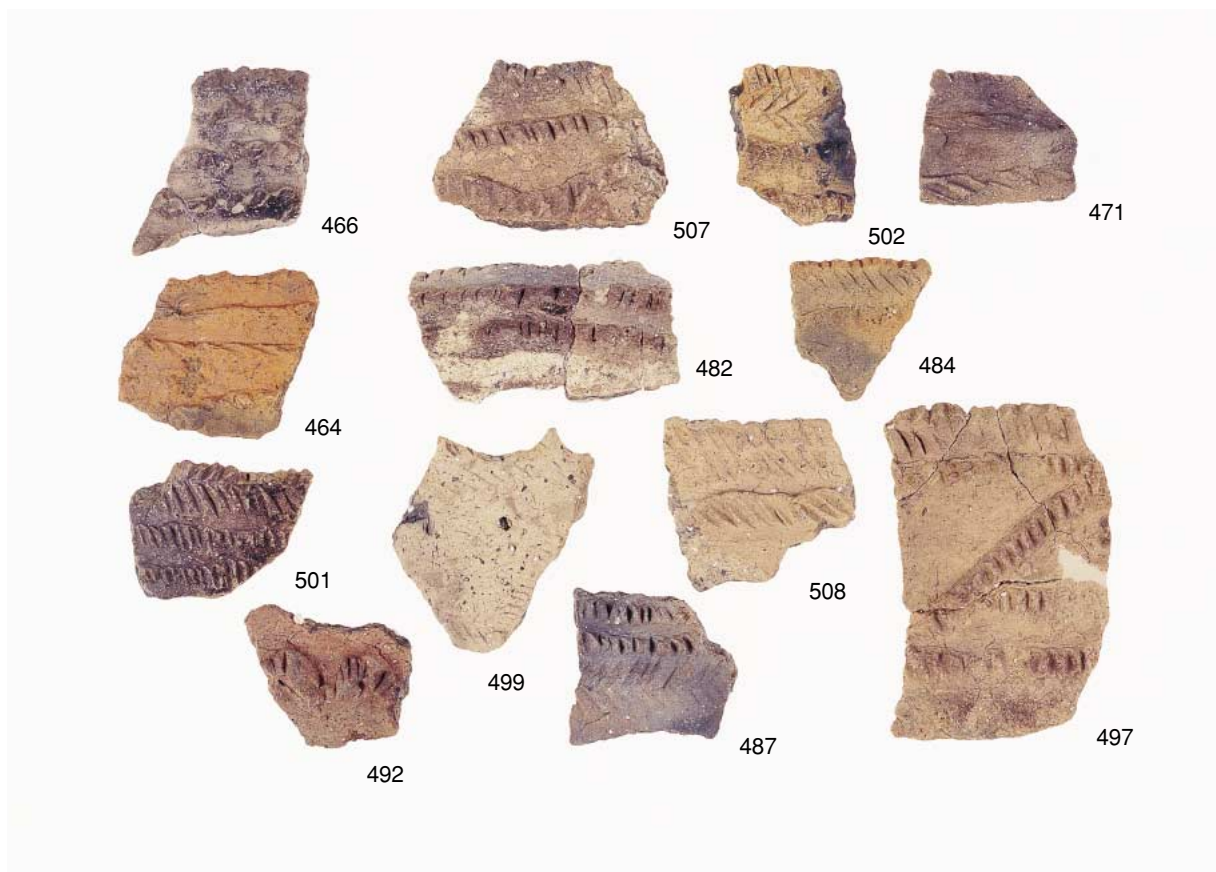
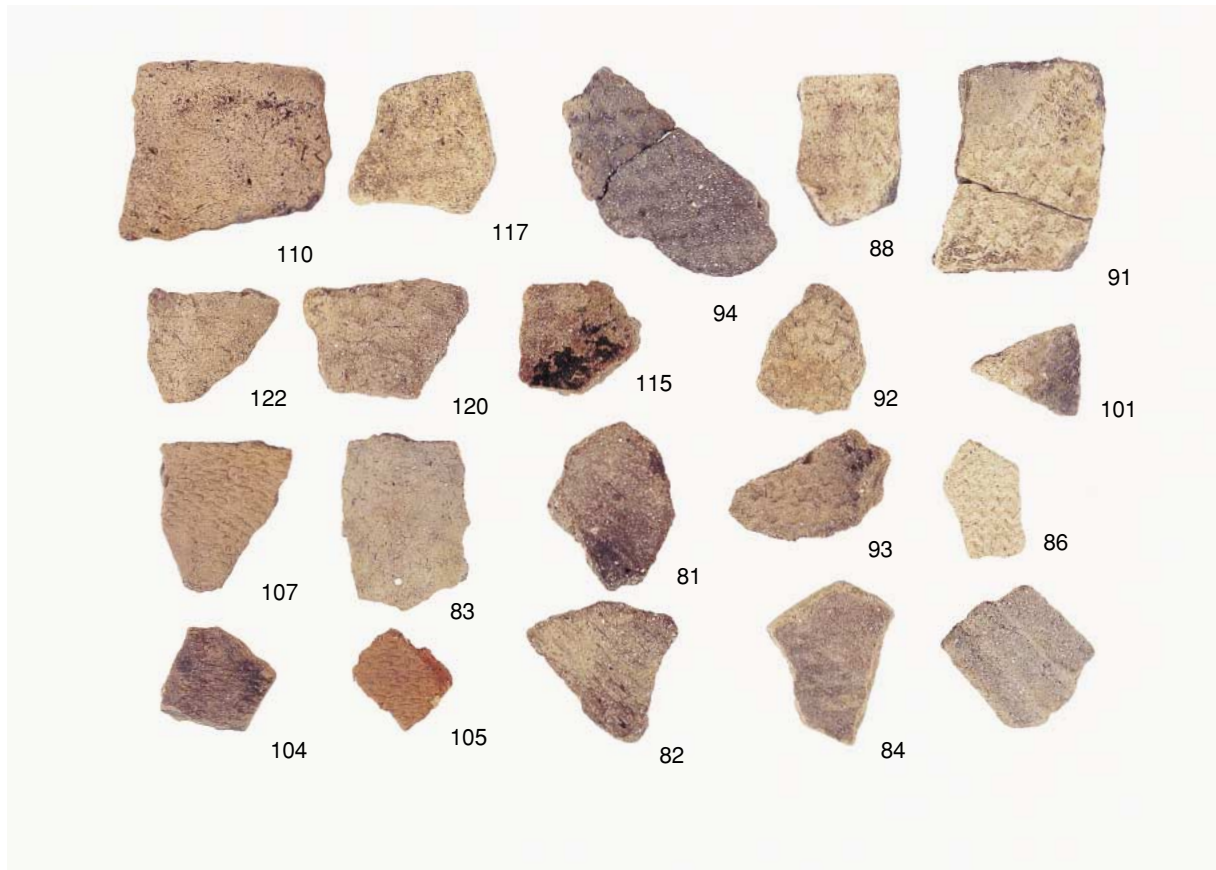
写真図版 10



写真図版 11



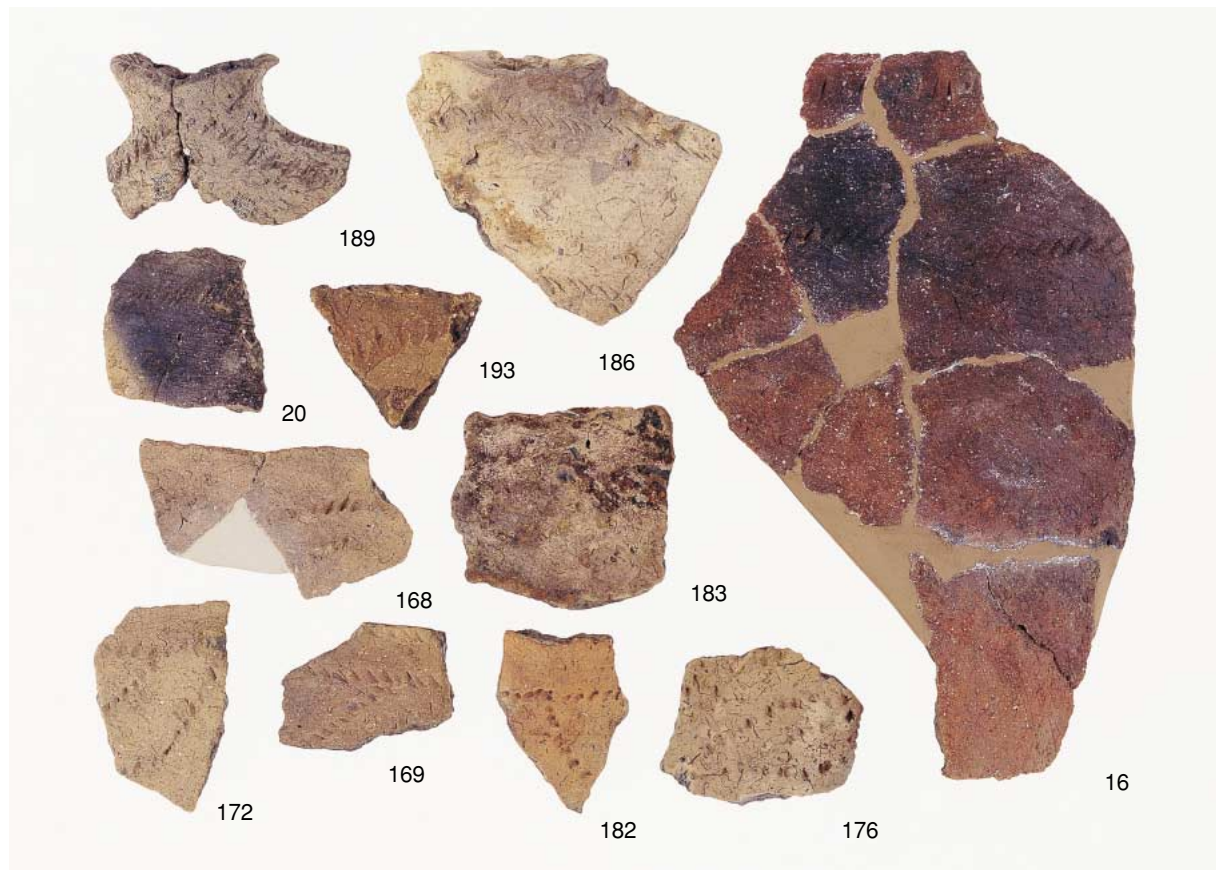
写真図版 12



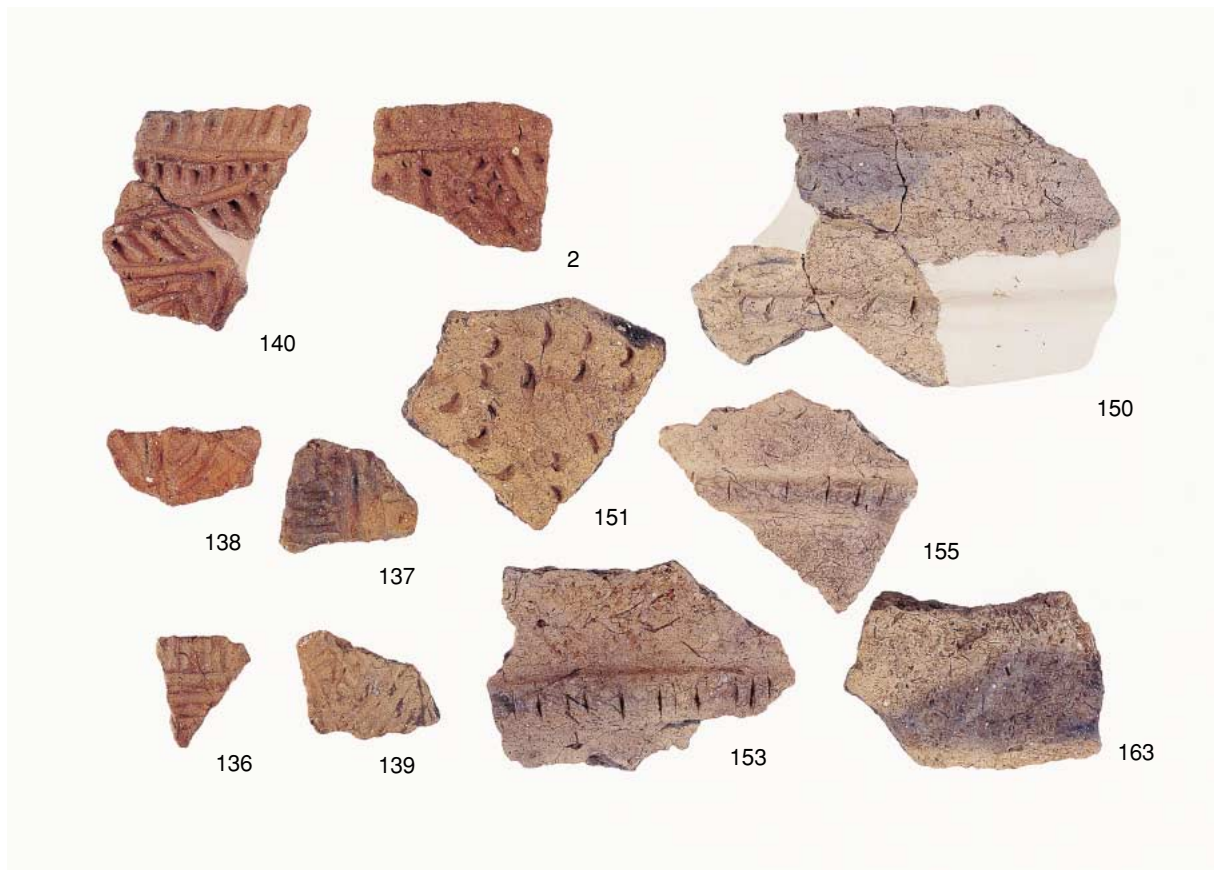
写真図版 13



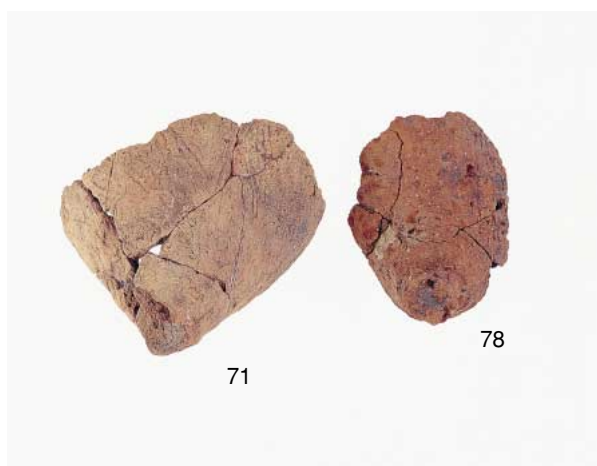
写真図版 14



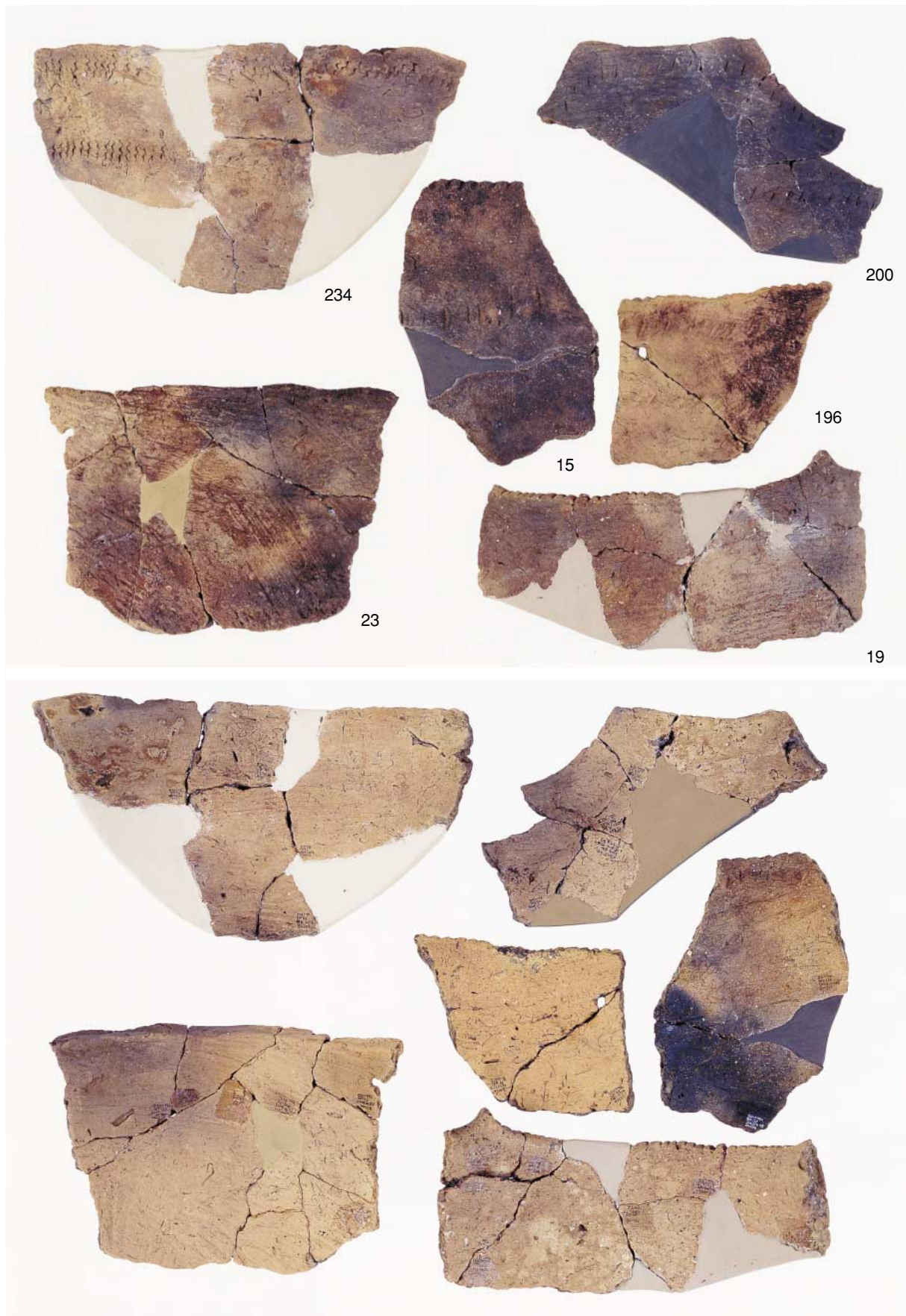
写真図版 15



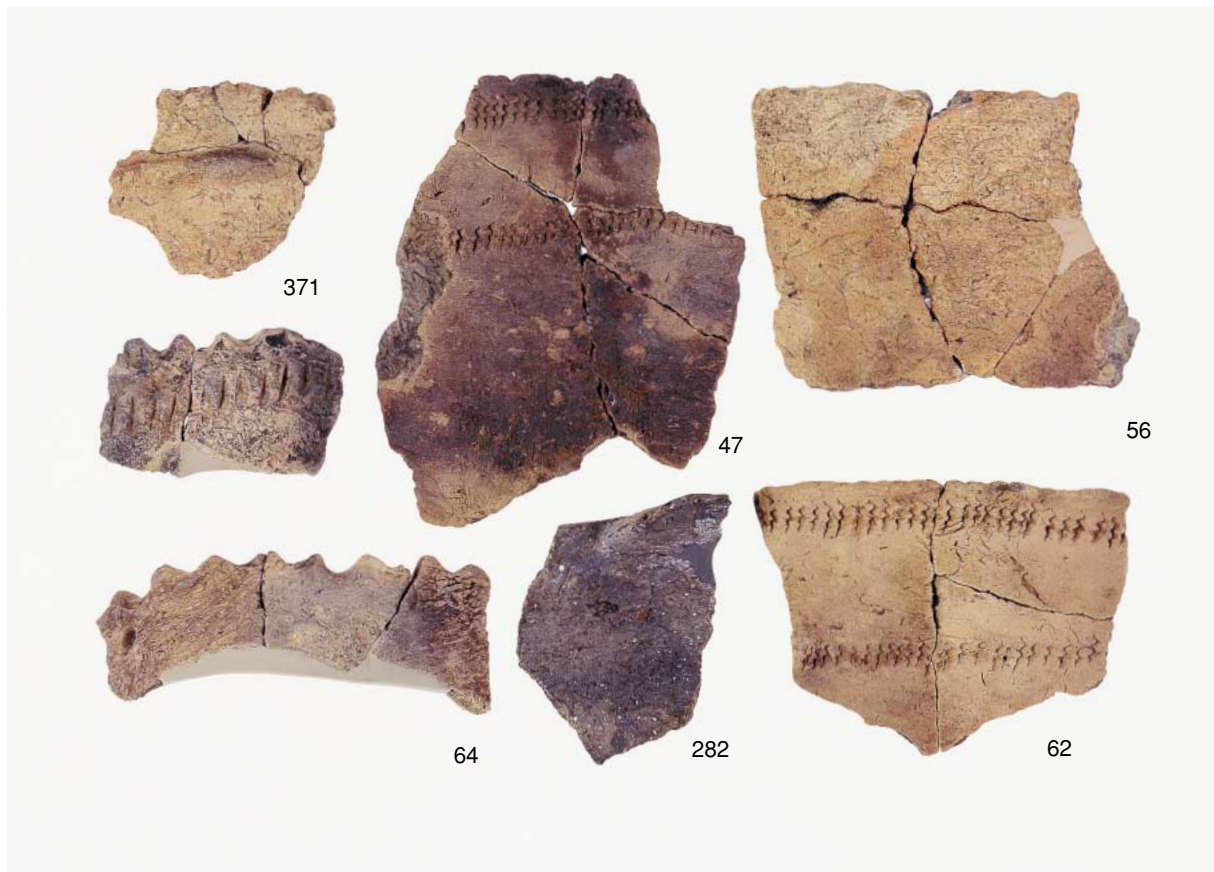
写真図版 16



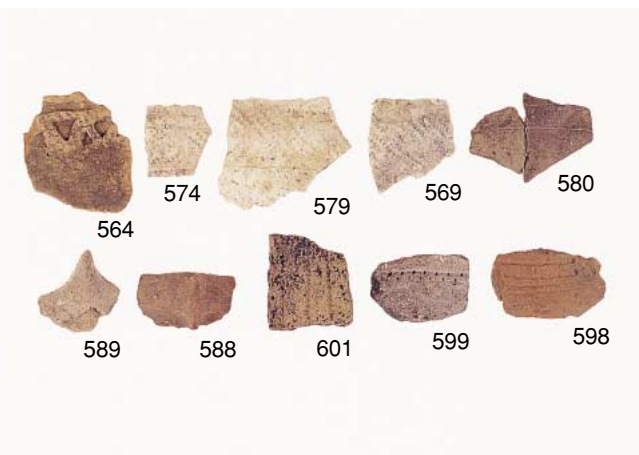
写真図版 17



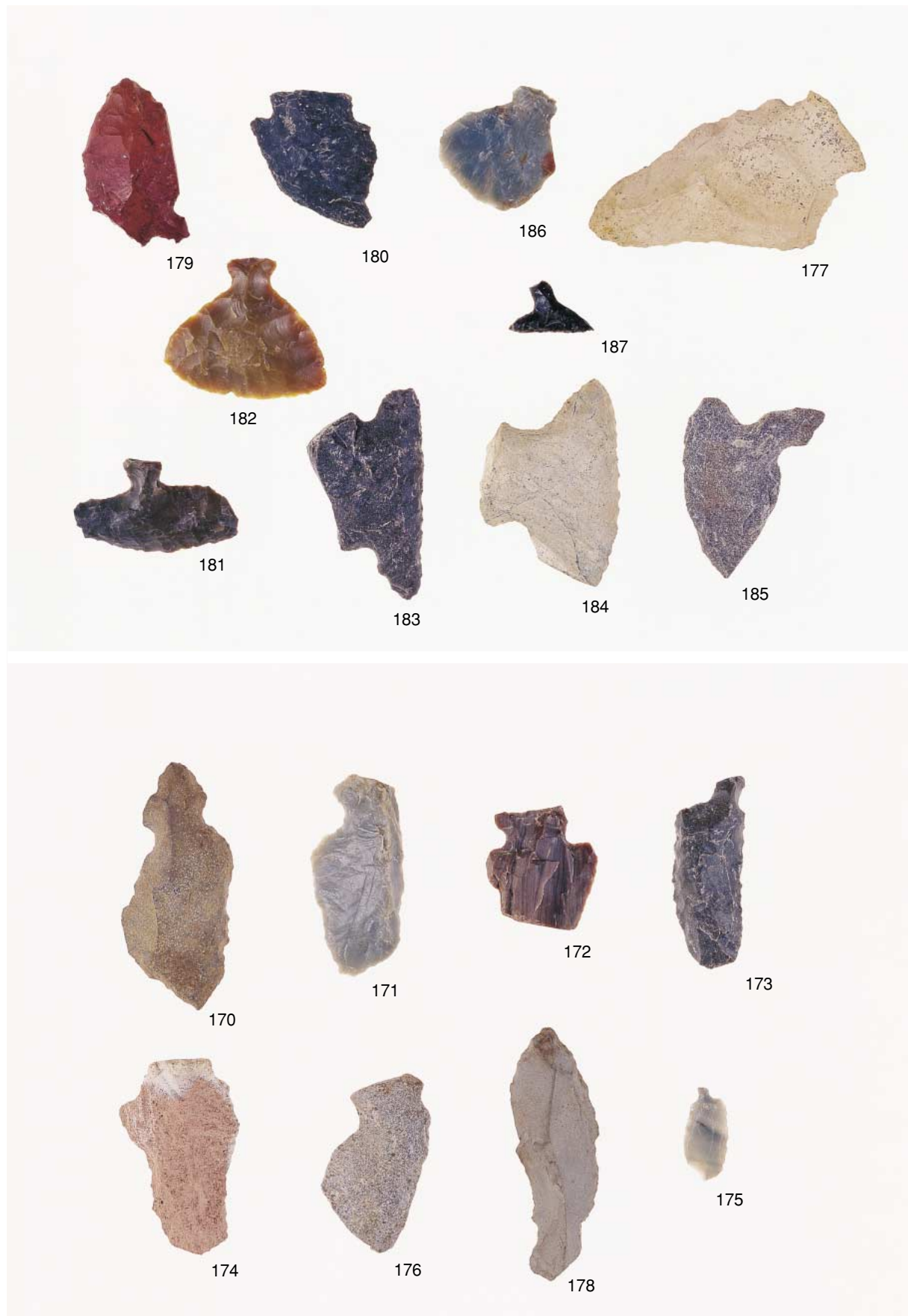
写真図版 18



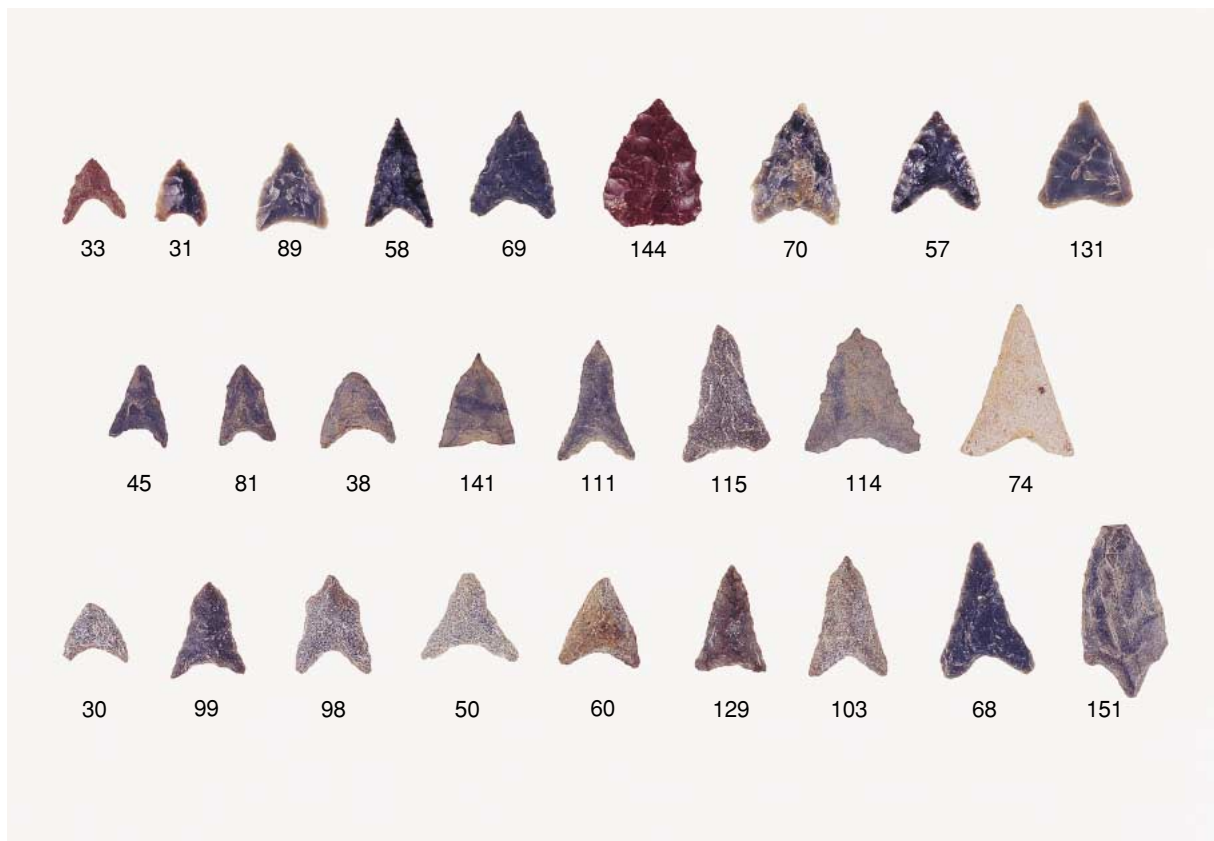
写真図版 19



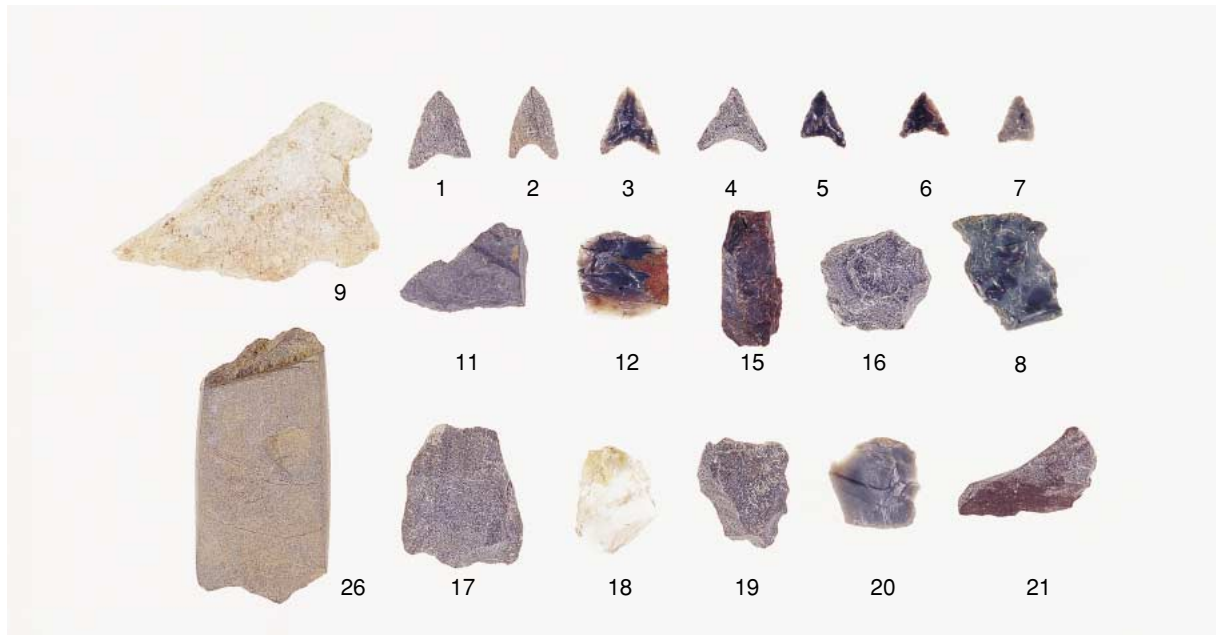
写真図版 20



写真図版 21



写真図版 22



写真図版 23



写真図版 24



写真図版 25



写真図版 26



写真図版 27



98区SK17出土遺物



写真図版 28



写真図版 29



写真図版 30



写真図版 31



報告書抄録

ふりがな	はちおうじいせき
書名	八王子遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第112集
編著者名	武部真木（編集）・鬼頭 剛・川添和暁
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦 2003年

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はちおうじいせき 八王子遺跡	せとしはちおうじちょう 瀬戸市八王子町	23204	30951	35度13分29秒*	137度08分15秒*	1998.10～1999.3 2000.1～3 2001.8 2002.8	5,700㎡	東海環状自動車道建設に伴う事前調査
					*世界測地系による			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八王子遺跡	集落	縄文早期	土坑・ピット	縄文土器・石器	
	集落	鎌倉・室町時代	土坑・ピット・溝	灰釉系陶器・瀬戸美濃産陶器・近世陶磁器・鉄滓	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第112集

八王子遺跡

2003年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

印 刷 サンメッセ株式会社